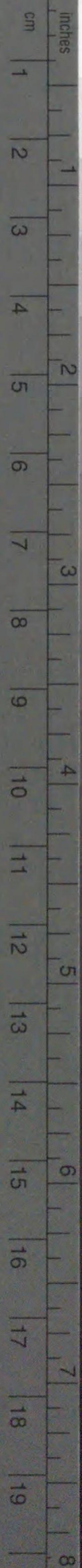


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

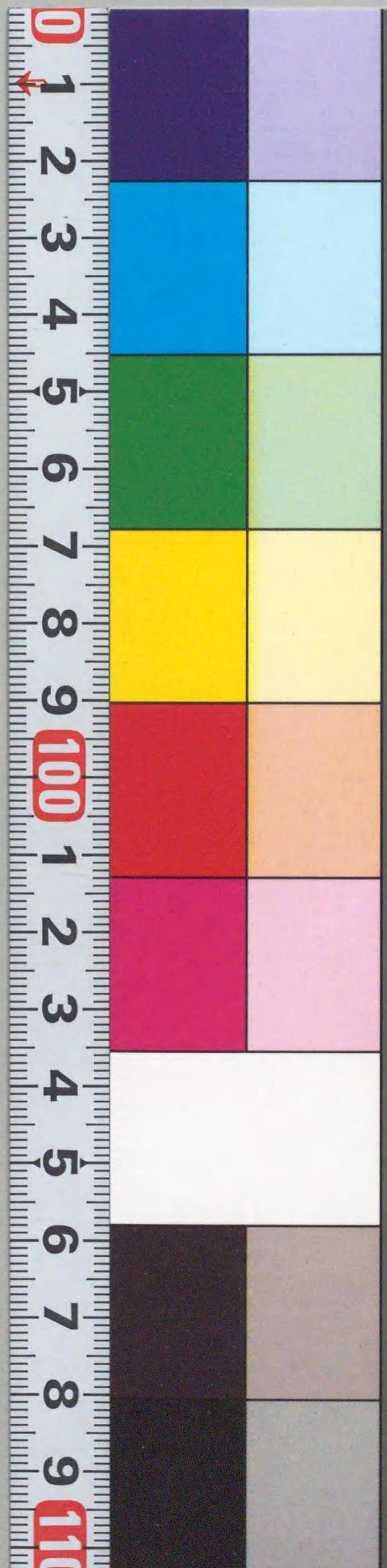
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



GB554

1571



83W28855

X 複写

公安調査資料 (昭和三十三年八月十九日号)

外蒙歸還者の手記 (後篇)

公安調査庁

(10)	第五アリテリ鉄工班	一三七
(11)	バルトンシヤムソの宿舍	一四五
(12)	ホーチン・ザハ(古い市場)	一五一
(13)	古い市場における公営消費組合その他の状況	一六一
(14)	シン・ザハ(新市場)	一七一
(15)	パスポルト発給	一七七
(16)	カシヤのデブテル(住民登録簿)	一七八
(17)	中央病院で歯をぬく	一八三
(1)	アリテリ(手工業協同組合)	一八九
(2)	アリテリの概要	一九三
(3)	第五アリテリ鉄工部	二〇四
(4)	鉄工部の新聞講読	二〇八
(5)	レークツ(社会教育)	二一一
(6)	決議会議、組合長選出会議、年度計画予算会議	二一五
(7)	第五アリテリ準組合員に正式採用	二一九
(8)	鉄屑捨場	二二二
(9)	鉄工部時計修理部第九アルテリに統合	二二三
(10)	第九アリテリの状況	二三四
(11)	第九アリテリの学習	二四二
(12)	植樹苗の採取	二四四
(13)	ウランバートル市内外の清掃	二四五
(1)	木材運搬に勤勞奉仕	二四八
(2)	市民生活の種々相	二五三
(3)	部落とサーカス劇場	二五八
(4)	ウランバートル国立劇場	二六三

二

三

(3)	バルトンの甥	二五八
(4)	第五アルテリ鉄工部宿舍に転住	二六〇
(5)	私が住んでいたカシヤ	二六四
(6)	ラーヌルン黨員	二六六
(7)	日本からの放送	二七一
(8)	朝鮮人イイミンホウ	二七四
(9)	性病衛生検査	二七九
(10)	日本人に差し入れ	二八一
(11)	チヨイバルサン名称の博物館	二八九
(12)	中央アプテーク(薬局)	二九〇
(13)	便所の堀り出し	二九二
(14)	薪づくり	二九三
(15)	蒙古人の肉食	二九四
(16)	牛乳売り	二九六
(17)	或る遊牧民	二九七
(18)	ホリン(行政区画の最下单位名称)	二九九
(19)	家庭娯楽	三〇二
(20)	ゴリン・ツエンゲル	三〇六
(21)	夏のトーレン河	三〇七
(22)	ウランバートル市の夜	三〇九
(23)	自転車	三一〇
(24)	見聞した色々の出来事	三一七
(25)	ウランバートル市の女	三二二
(26)	クリスマス	三二七
(27)	ラマ廟	三二七

(28)	手工業協同組合立病院	三二八
(29)	国营図書館	三二九
(30)	ダンビルシヤムソの蒙古包	三三〇
(31)	一カ月の生活費	三三四
(32)	私を訪ねる人々	三三八
(33)	スターリン死亡、引き続いてチエコ首相死亡	三四二
(34)	革命記念日	三四四
(35)	日本からの手紙	三五五
(36)	外蒙人民共和国大会議議長ボンツエンドの国葬	三六一
中共に移管さる		
———		
ゴビ砂漠横断		
(1)	警察官に連行される	三六三
(2)	或るカンヤ内に軟禁状態となる	三六三
(3)	ウランバートルよバヤルタイ(さようなら)	三七七
(4)	ゴビ砂漠横断	三七三
(5)	サイジャンダー飛行場からウデと前哨線まで	三七九
(6)	前哨線で三晩四日の宿営	三八四
(7)	中共に移管	三八六
(8)	中共から祖国へ	三九〇

註

本編は公安調査資料(昭和三十三年七月八日号)「外蒙帰還者の手記」(前編)の完結編である。ここで著者は、外蒙の強制労働収容所を釈放され、ウランバートル市での市民生活の内に見聞した、ウランバートル市およびその市民の情況。ついで中共に移管される道程のゴビ砂漠越え、移管されてからの緩遠監獄の生活、遂に許されて帰国するまでの各様の体験を事細かに書き綴っている。

(昭和三十三年八月十七日記)

第四部 外蒙の市民生活

第一章 強制労働から自由市民へ

二

一、仮釈放の理由と経過

後になつてわかつたが、私は外蒙古国内法に依つて処刑された為、同法の減刑釈放が適用された。私が仮釈放の通知を受ける迄、常に疑問であつたのは、日本人にも国内法が適用されるかと言う事であつた。それは何時も外蒙古政府の欺瞞的政策に依り翻弄され、裏切られた経験から押して、日本人だけはいくら刑期が満了しても、そう簡単に仮釈放する筈が無い、若し仮釈放しても、何処かの指定地域か、或は特定の場所におかれ、限定された自由が与えられるかも知れないぐらいに考えていた。

たまたま外国系が釈放されるに當つて、ソ蒙国境線に近いボルガン・アイマツク・に指定居住させられる事実を私は何回となく見聞していた。その為私自身は勿論、同囚達迄が、自分のように心配してくれた。それは多分ギルガンアイマツクか又はウランバートルに指定された場所に居住させられ、監視付きの自由が与えられるだろうと憶測するのだつた。

この憶測が案に反し、別に地域を指定することなく、ウランバートル市内居住許可の仮釈放の通知を受けたのであつた。私は一面ガツカリすると共に、反面胸をなで下した。私は、最高法院で裁判を受け、判決十五年と言ひ渡された時は、日本に帰れるという望みも消え失せ、極度に悲觀したものだつた。又一九四七年十月日本軍捕虜部隊全員引き揚げの際も、われわれも一諸に帰国出来るものと考えていたのに、案に相違して残留させられたが、全く捨て鉢な気持ちに陥つてしまつたのであつた。

吾々残留の日本人五名は申請書を三回も外蒙古人民大会議に提出したが、何等の回答もなく経過してしまつた。当時の外蒙古囚人達有識者は、「お前達日本人はもう日本に帰国出来ない、日本が民主化し相互に国交が回復されなければ、帰れる見込みは全くないから、諦めるより外にない。それよりもアジリンホノクを大いに貰ひ、監獄から早々出る様に働く事が今後の先決問題だ。」と諭す同囚もあつたし、又幹部の一部にも、このような意見を述べる者もあつた。われわれ自身も監獄生活で一生を終りたくなかつた。そしてどうすれば一日も早く監獄から出られるかを考えるのも当然だつた。

早くこの監獄から出る方法としては、アジリンホノクを貰ひ、減刑される以外にない。しかし実際において、このアジリンホノクの条令が日本人のわれわれに適應されるかどうかは大きな疑問であつた。

外蒙古人同囚達は、私のこの疑問についてこう語つてくれた。「日本人も民族の差別なく適應されるのは当然だ。」と。しかしこの言葉には、同囚の間柄として都合の良いように解釈していると考えられたし、余り信頼も出来なかつた。それはすでに何度かのべた通り、蒙古の政治は誠に暗く、必ず裏切られていた事実を忘れることはできないからであつた。我々は慎重にこの問題を究明しようとした。

若し適用される事が確實であるとすれば、大いに働いて早々満刑になり、釈放される事を考えねばならぬ。釈放後は又何とか方法も出て来るだろうし、又万が一日本に連絡の方法がとれないとも限らない。若し万事休した場合に国境を突破して、逃亡する手段も監獄からよりは案に出来ると考えられるのであつた。

その後、生産部長、政治部長、教化部長らに会い、直接、「日本人の私にもアジリンホノクの条令が適用されるかどうか。」と迅して見た。彼等幹部も同囚とおなじく「各民族の差別なく適用される。」との返事であつた。其の後アジリンホノクも、外国系や各民族の差別なく申請され、減刑の言ひ渡しがあり、又減刑の証書迄御丁寧に配布するのだつた。私も僅かながら減刑され、証書ももらう身となつた。

私はこれらの根拠を得たので、一九四九年からアジリンホノクの獲得に全身を粉にして労働に當つたが、病氣上りであつたり、アジリンホノクの一時停止なども有つたので、本格的に打ち込んだのは、一九五一年からであつた。この頃になると、私も鉄工班において、相当な錠前作りの熟練者となり、何時も二〇〇%を下る事はなかつた。

一九五一年末期には、このアジリンホノクと実労働期間を加算すると十一年八月月となつていた。残つた三年四月月を一九五二年内に片付けるには、どうしても三〇〇%以上やらねばならなかつた。私にはこれを成しとげる事は少し無理のようだつた。体力の点からも、食料補給の点からも、確乎たる自信が持てなかつた。しかし私はこのような計画は有るが自信が無い。」と、鉄工班のマーシチルに相談して見た。マーシチルも「出来るからやつて見る、何かと援助はするから。」と心よく引き受けてくれた。

その後、マーシチルも喜んで、積極的に便宜を与えて呉れた。特にノルムが安易で、高い%のものを与えてくれた。又時々食料も補給してくれた。私は朝は人より早く就業し、夜は二時間も遅れて終業するようにした。私は全く労働の外、何も目的とせず、働く事のみ精根を打ちこんだ。その為三〇〇%を上廻る事五〇%にもなかつた。

この際最も困つたことは、食糧であつた。マインシルヤ、掃除夫ダンビニマから、時々食糧補給があつても、それは僅かなものであつた。それを知つた炊事班長のS顧問の好意により、食糧の補給を受けたので、専心頑張る事が出来たのだつた。そのお蔭で私の成績も頭角を現わし、四〇〇%にも上昇する事もあり、平均して三五〇%を上廻るのであつた。何時も毎月のアジリンホノクの表彰式には真先に呼び出され、アジリンホノクの証書を買つと共に、賞品として口付巻煙草二十本入りや、ハブラシ、ハミガキ粉、少量の菓子などが与えられた。囚人達に取つてはこれ等の僅かな品物でも貴重なものであつた。私はこんな僅かな賞品を買つのが目的でなく、アジリンホノクの証書を買つのが最大目的であつた。それが計画通りに進行し、残つた三年四ヶ月も九月の第三期迄に実に六ヶ月以上も超過することとなつた。この超過の事実も、外蒙古人の事務的能力の低い幹部達はいかに満刑になつていても自分の手落ちをたなにあげ、満刑ではないというかも知れない。それで万全を期し、マインシルに頼み、ラーゲル事務所の総務部刑期取扱者に確かめてもらつた処、第三期アジリンホノクを入れると確実に超過する事が判明した。

十月一日から十一月十五日迄の第三期アジリンホノクが発表になる間、労働を放棄すると、加刑があるかもしれないことを心配し、ノルマー一〇〇%をやつては、一日一日を過すのであつた。十月一日からは大分暇も出来て来たので、よく日本人同志が集まり、色々雑談に耽る事が多くなつた。日本人同志もやはり私の釈放問題については、政府の出口がどうなるかと、一つの疑問を持つて見ていた。若し前にもいつた通り、ソ蒙国境のボルガン・アイマツクに流刑になつた際は、殆んど生き別れとなるだろうし、ウランバートル市内とすれば、連絡も出来るし、差し入れも出来る。それらの方法も打ち合せておいた。又万が一、二年以上連絡がなかつた場合は、国境に向つて、予定通り逃亡したと考える事、若しわれわれの中一人でも日本に帰り得た者はこの状況を政府に報告する事などこまごました事迄打合せ、なお記念品などのやり取り迄やつておいた。

アジリンホノクが発表になつたのは、十一月十五日頃であつた。発表と同時に内国系の満刑者達は、即時釈放されて獄門を出て行つた。私共外国系に対しては、何等の音沙汰もない。私は早速マインシルに調査を依頼して待つた。マインシルも、どうも何か事情でもあるかも知れんと独言を言ひながら、宿舎を出て行つた。暫くして彼はラーゲル事務所から帰つて来た。総務部長に会つた処、「只今協議中だから、暫くの間待つようにと言われた。」とのことだつた。

マインシルの臆測に依ると、多分内防処等において、日本人釈放についての善後処置が協議されているらしいから、暫くの間待つのが良いだろうという事であつた。その後四・五日たつても何の音沙汰もない。この分なら当分の間、監獄生活という処かも知れない。若しかしたらボルガン、アイマツク行きの自動車を待つているためかも知れないと心配になる。そこへ総務部長のアヨルザナがやつて来た。私は良く錠前を作つてやつていたので、顔見知りであり、話もしていた。

早速私の釈放の件に付いて聞いて見た。

「俺の刑期は完全に終つてゐるのだが、どうして釈放しないのか。」「二、三日中に解決する。それより一体何処に落ち付くつもりだ。」「何処とは決めてゐないが、それは貴方の方がはつきり分つてゐるのではないか。」「それはそうだ。若しウランバートルとしたら何処へ行つて住むつもりだ。」「ウランバートル市内には沢山知人もあるが、それが何処に住んでゐるか、皆目分らない。今の処未定であるが、どうしようかと心配してゐる処だ。」「それは困つた事だ。お前は監視長のツエリ中尉を知つてゐるだろう。」「よく知つてゐます。イカダ揚げに行つた年から、よい知り合となりました。」「あゝそうか、それでは暫くの間そこに居住して、仕事でも見つかつたら別に住むようにしたらどうか。」「出来ればそうして貰い度いものだ。」「まあ心配しないで、二、三日待つが良い。」と。それから彼はマインシルと銀細工の事で話し合つてゐた。この総務部長はよく蒙古碗に銀細工をして貰つたり、私から錠前を作つて貰い、それに銀細工を取りつけて貰う事が度々あつた。それだから、この鉄工班のマインシルとは懇意の間柄であつた。私はその儘去ろうと思つたが、もう一つ重大な問題を忘れてゐたことに気がついた。二人の話しが終つたのを見計らつて又質問して見た。「俺をウランバートルに釈放して居住させた後、日本に帰して呉れるのか。」「釈放するのは事実だが、何処に住むか俺にはわからない。多分ウランバートルと思ふが、お前は判決の際裁判官から釈放後の指定地を指示されたか。」「私は裁判の際、何が何だかわからず、只刑十五年と言ひ渡された事だけ確実に再三聞き返し、確かめたのではつきり覚えてゐるが、そのほかのことは余り覚えてゐない。多分指定地の指示は無かつたように思われる。」「若し指定地がはつきりしていれば、そこに行かねばならぬが、はつきりしない処を見るとウランバートルかも知れない。」

「釈放した後、日本に帰すという事が出来ないのか。我々日本人は自分の意志で外蒙へ来たのではなし、戦争の結果逮捕されて刑を受けた者であるから、当然外蒙政府としても、刑の終了した日本人は日本に帰してくれらるだろう。それにはどういう方法があるか御教示頼みたいものだ。」「この中央ラーゲルは、民族のいかんと問はず、平等に教化服役せしめ、完全に服役完了した者から釈放するのが立てまえてあつて、釈放後の将来に付いては全々権限外である。それであるから日本に帰す、帰さぬはラーゲルの仕事ではない。吾々には少しもわからない。」それは内防処の何処で取扱つて

いるのか、申請する場所等は何処にあるか教えて貰い度い。「俺にはそれは言えない。お前が釈放されて見れば、明瞭にわかる。」「それですか有難う。何分早く釈放するようお願いします。」「あゝよく分つた。もうお前は社会人だから何にも心配することはない。社会に出て今迄監獄で働いたように、生産向上を計つたら日本にも早く帰れるだろうと思ふ。実際よく働いたものだ。刑十五年を受けた者の中で、お前が一番最初だからね。早く釈放するように努力するから、暫くの間待つがよい。」「と言ひ残してマーシチルの部屋を出て行つた。私とマーシチル二人だけになつてみると、何だか日本には帰れそぞもない気がする。外に出たら何とか日本と連絡が出来そうなきがする。「確実に釈放される事はわかつたが、日本には帰れそぞもない。」「とマーシチルに話しかけた。「そうかも知れない。日本人を釈放するといふ事は外蒙においては開ビヤク以来のことだから、政府も慎重に考へている事だろう。まあ釈放されるという事だけでも大きな喜びだ。外にいればその中に何とか日本に帰れる方法もわかつて来る。その間俺の家に住んだらどうか。」「マーシチル、それは大きな問題だ。特に貴方は日本に關係があつて、二十五年の刑を受けた政治犯だ。その政治犯の、貴方の家に日本人が厄介になるという事は、貴方を初め貴方の家族に対し、疑惑を拘かせる結果となる事は確實である。俺にはそんな事はとても出来ない。有難い御親切を、あだとして返したくない。」「うん、尤もだ。一寸間違つたらえらい事になる。直ぐ日本とまだ關係性が抜け切れないものと見做す事はわかり切つてゐる。」「今更そんな事をしたくないから、何にも關係のない人に厄介になりたくないものだ。」「そうだなあ、誰に厄介になつたら良いだらうか。さつき総務部長が言つていたように、監視長ガルソオ・ツエリンの家に厄介になつたらどうか。そうすれば政府としてもお前を監視しながらいられるというので安心していられる。又ツエリンは革命軍の最初からの軍人だから政府も信頼している。一番好都合だ。その上お前はガルソオ・ツエリンとはイカダ揚げ以来の知人でもあるから、ツエリンだつて、お前を密告するような事はしないだろう。とりあえずそう決めるんだなあ。」「まあ一時そこにい、仕事でも見つけたら、別になつても良いから、そうしよう。」「外に出たらお前、口を割らんよう充分注意しろよ。今こゝで話しているような事を、減多に話してはいけない。外に出たら絶えず情報者が随行している事を毛頭忘れてはいけないぞ。この点充分注意しておく。」「御親切に有難う。充分注意しますよ。」「外に出たら早くパスポート（居住証明書）を買つて仕事につく事だ、仕事も監獄で修得した錠前作りをやる事が一番生活の基礎となるから、その方面に入る事が最も必要だ。」「俺も修得した技術を生かす事が最も安心出来ると思ふ。」「若し鉄工として働くとなれば、国立鉄工場、建設省の鉄工場、第五手工業協同組合などがあるから、その中の一つを選ぶがよい、外に出ても鉄工具を手に入れる事は誠に困難

だから、今使つてゐる工具を纏めて俺の所に持つて来て置け、俺が何とかして俺の家に運んでおいてやるから。」「それは有難い、何分頼む、後で纏めて持つて来るから。」「積立金は俺が交渉して早く出る様に取り計らつてやる、それ迄当座の小使として、三十トコロゴここにある。外に出たら、何でも金が必要だ、外に出て五トコロゴの食事をすれば腹一ぱいになる。普通だと三トコロゴで充分だ、少いけれど小遣にするがよい。」「と懐から残幣を出してくれた。十トコロゴ紙幣一枚、五トコロゴ紙幣一枚、三トコロゴ紙幣三枚、一トコロゴ紙幣六枚出してくれた。」「これは申し訳ない社会人となる私が、監獄の人から金を借用するなんて、とんでもない事だ。」「なあに心配することはない、お前は日本人だから知人も少ない、見ず知らずの者から、物を貰う事はとても出来ない。遠慮する事はいらぬから持つて行くがよい。」「はあ、有難う、何から何迄心配して頂いて御礼の仕様がな、では暫くの間借用する事にして、積立金を貰つたら直ぐ返す。」「いやそんな事なくいい、お前にやるんだよ。」「それじゃ尚更心苦しい。」「大丈夫だ。又少しバクチでもやれば二、三十トコロゴ手に入るよ余計な心配はするな。」「では甘えて暫時借用という事にして預つて置きましょう。」「飯館子へでも行つて、外の食事を腹一ぱい食べて、自由な味わいを味わつて見ろ。」「あ、そうしよう。誠に有難う。」「そこえ掃除夫ダンビニマが入つて来た。「総務部長がいたようだが、お前何か話をして見たか、日本に帰れるか、それとも何処へ流刑になるのか。」「日本に帰すかと聞いてみたが、わからないと言つていた。多分ウランパートに住むようになるらしい口ぶりだつた。」「あ、そうか、日本に帰れないか、しかしウランパートという、特別監視がつきまとうからなあ、特に馴れ馴れしく近づくに氣をつけろ。皆なこれにひつかかつてゐるのだからなあ。」「今マーシチルともその話しをしてゐた処だ、人を見たら密告者と思えだらう。」「それ程でもないが、余りシヤベラない事だ必要以外は無駄話をしない事さ。そして共産主義者のいう通りになつていけば良いのだ、これに反抗したら駄目だぞ。」「あ、良くわかつた、充分氣を付ける。」「それよりもお前現金を持つてゐるか。」「今マーシチルから三十トコロゴお借りした処だ。」「何にも知らない処にいと金が必要だよ、監獄にゐる時とは全々違ふ、外はとてめセチ辛いなあ、必要なものは総べて金で買うのだから、相当金があるよ。」「と言ひながら二十トコロゴ出して呉れた。私は今マーシチルから借りた金が有るから大丈夫だと言つて断つても、無理押しに、私の手に二十トコロゴ握らせるのだつた。

私は釈放される間際になつても、現金は一文も持つてゐなかつた、それだけに彼等二人の好意で五十トコロゴという、

今迄持った事もない大金を懐にする事が出来、懐も、心も温かくなるのであつた。この五十トコロゴあれば、何にも心配せず、十日間位は、生活が出来る。その間に積立金の支払いも受けられるだろう。

ダンビニマは政治犯であり、外蒙古から内蒙察哈爾監獄に逃亡し居住していた。彼は外蒙革命以来、活仏（ポビルハン）であつた為、常に厳しい肅清の弾圧の網を逃げ廻つていたが、それも出来なくなり遂に国境を越え内蒙に逃亡したのだつた。彼は廟白旗に居住している時、私が隣の明安旗の顧問であり、後、私は女子中学校の副校長をしていた関係から、時たま、私達の貨物自動車で五台山に行くと言つて便乗した事もあつたし、又興学女子中学校に彼の知人の娘を入学させるため、学校に来た事もあつた。その為監獄生活中私とダンビニマの関係は親密な間柄であつた。特に彼は共産主義の反対論者であり、親日家であつた。

彼も私が釈放されるに當つて、常に心配してくれ、何処に行くかわからない私に、蔭になり日向になり援助してくれ、それだけに彼の実家に行くことを私は嫌つた。彼等二人は私の落ちつく住家を慎重に検討してくれた。結局前記の通り、中央監獄監視長がルツオ・ツエリンの家に身を寄せ、就職してから次の手段を選ぶ事が、一番安全であるという事であつた。

次の日ガルツオ・ツエリンがやつて来たが、色々事情があるらしく、良い返事をしてくれない、それは彼の身分が監視長であり、一応政府の職員である以上、日本人を宿泊させたという事で、迷惑が彼自身に及ぶかも知れないことが原因の一つであつた。

もう一つは、彼の宿舍が、ラーガル幹部の宿舍内にあり、又彼の妻はウランバートル市中央病院の雑役婦として勤めていた為、昼は全々留守となり、又監視長が夜勤中は妻が一人留守番となる、そこに私が一諸に住むという事は、彼等に取つて大きな問題であつたらしい。彼等に子供が一人でもあつたらまだしも、若い妻を持つ監視長として心配するのは無理もないと思われるのであつた。私はこれは駄目だと諦めるより外に道はなかつたが、兎に角一時身を寄せる処が確定しない事に大きな不安があつた。

ウランバートル市内に知人は二、三人あつても、その住処が何処に有るか全々わからない、探せば何とか見つかる。しかし釈放された日に探し出す事は絶対出来ない。又この知人も私を宿泊させるような環境にあるか、どうかという事も大きな未知数であつた。

十一月二十日過ぎの寒さは例年に比べ厳しかつた。零下を降る三十有余度となつていた。この寒さの中どうやつて、

身を寄せる処を探し出すか、誰か外蒙古人でも一人付いて探せば見つかるかも知れない。そんな事を考えている中に冬の日にはトツプリ暮れて終い、私は宿舍のペイチカの側にボツネンと暖を取つていた。その頃、午後八時頃であらう、ラーガル事務所からデチュルがやつて来て、私を事務所へ連れて行つた、これが私の監獄生活の最後のEとなつたのである。私は転々としてラーガル事務所の中を廻り、最後にラーガル・トロロウロクチ（代表）から釈放証明書にサインして貰つた。これが長い監獄生活で、苦しめられた労働の結晶であるかと思つたと、貰う手も僅かに震えるのを覚えるのだつた。ラーガル代表も細部にわたつて注意事項を述べてくれた。そして明朝出獄する事に話がつけられた。

私はその儘事務所を出ると、日本人の同因に会いに行つた、誰も沈黙の中に釈放証明書を手に取つて読んでくれた。喜びと沈痛な別れの悲しみとが、ごつちやになつて………残る者も、出獄する自分も、万感胸に迫つて語ることもばも無く、只身体丈は注意しているように、互に励まし合ふのだつた。

私は日本に帰れる方法を得る為、除々に工作するつもりだ、もしこれが露見しゲ・ペ・ウ・に引つかかつたら再び監獄に戻つて来るようになるかも知れん、と言ひ残して別れた。宿舍に帰ると、蒙古人同因達も日本人の釈放の現実をこの釈放証明書で、実証され何か心に決する処を得たようだつた。

マーシチルとも会い、釈放証明書を提出して見せた、それをよく読む事が出来ないが、一字一字捨い読みし乍ら、「よかつた、よかつた」と言つては眺めていた、ダンビニマも傍にいた、私は色々厄介になつた事を、何回も何回も礼を述べるのだつた。

宿舍に帰つて寝具をのべ、横になつたが中々興奮して眠れなかつた、明朝未知の社会に飛び込む事を考えると、色々と思案にくれ、益々頭がさえて眠れない、朝方になつてウトウトと眠りに落ちた。

三、ホリフ附の小医者バルトンの家

私はバルトンに連れられ、長い七年四ヶ月という辛酸を嘗めつくした生き地獄の監獄生活から、一日本人の自由の身として、未知の外蒙社会主義首都ウランバートルに門出し、市民生活に入つた。バルトンはシユウパーを着て、長靴を穿き、防毛帽を冠っているが頭に乘せているのである、手には皮の手袋をはめ、シユウパーのポケットに両手を突込んで吹雪の中を北に向つて進んで行く。私はその後から毛皮の蒙古服を着た上、毛皮付きの長靴を穿き、毛皮の帽子を深く冠り、手にはラクダの毛であんだ手袋をはめ、寝具を背にして、ついて行つた、出会うものは二、三人で、誰も彼も忙しそうに吹雪の中を歩き違ふのだつた、外の社会人達は、監獄人より元氣そうである事はその歩き方でわかつた。

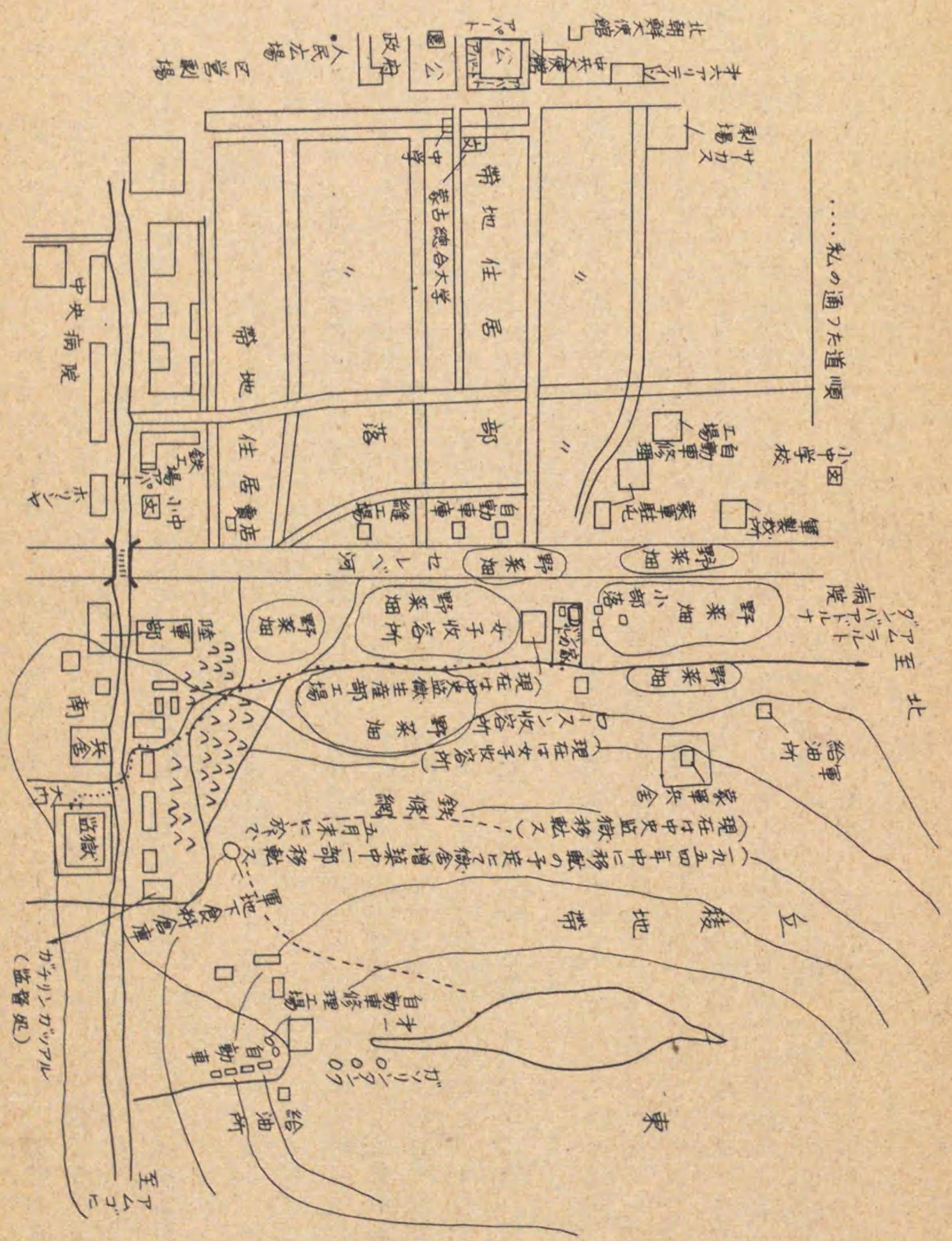
ラーガル事務所を出てから十五分位して、女子収容所前を通った。女子収容所は吹雪の中に埋れていたが、二人の女囚が材木を大きなノコ切りで切断し、採暖用の薪を作っていた、この吹雪の中を囚人は男女を問わず働かされている姿を、自由な身となつた今見ると、その苦しさは身にしみ、監視塔には銃剣付きの蒙古兵が、総身毛皮にくるまつて、目まぎロット、光らして監視しているのがわかる、それを見ていやに恐しい気持ちに襲われるのだつた。

女子収容所の北側に野菜畑があり、積雪三十糎である、その野菜畑の中をバルトンは入つて行く、私もその中をザクザク雪を踏み分けながら附いて行く、壊れた柵をまたいで越した。その柵の中がバルトンの住居であつた。案の定彼の部屋には錠が下りていた。バルトンは隣の草庵の家主の処に錠を取りに行つてドアを開けてくれた、この部屋は支那式で、泥屋根であり、窓は一重で障子紙張りであつた。バルトンの部屋だけは窓の下方に一枚並べに硝子をはめてある、他の家主の方は一部は硝子になり一部は障子紙である。昔はこれでも立派な家だつたらうが、今は相当占びて壁の落ちている処も見受けられる。

私は寝具を外に置いて部屋に入つて見た。修理したばかりらしく、中は雑然としていた。天井や、壁紙は新しく張つたらしく、部屋を大分明るくしていた。そこに入つて驚ろいた裏には、非常な寒気である、骨に沁み込むような痛さを覚える。私は道中寝具を背にして来たので暖かつたが、それをおろしたせいか、寒さを感じることもすごい。

この小医者バルトンの妻はロシア人であつたが、ソ聯から引揚げ(移動)命令を受け、彼との間に出来た二人の混血児を連れて、モスコフ近在に転勤して行つた。後に残つたバルトンは、前の宿舎は余り大き過ぎ一人で住むには、経済的にも、家財道具の保管にも盗難の恐れが多分にあつたので、現在地に間借りをする事になつた、この部屋は草庵の持ち物であるが、部屋代は無料で、内部の修理を彼がしたものだつた。

これも棚外労働因を使用して、部屋の壁紙張り、ペイチ方直し、天井張りをやり、部屋を二つに区切つて、一部屋は炊事兼居間兼寝室とし、一部屋は倉庫としてあつた。構造は南側に扉と窓があり、この窓は上部は障子紙張り、下部に二枚の硝子をはめてある。窓下に大きな鉄製の水桶が二つ置いてあり、その側に箱を重ね、中に炊事道具やら食事道具を雑多に入れてあつた。その側に寝台が一つ置いてある、これも万年床らしく、敷きはなしである、北側は、新しく造つた紙張りだけで境とし、向うは倉庫になつている。その前に本が乱雑に積み重ねてあり、その上に彼の衣服が置いてある、西側はペイチ方で、カマドが附いている、一つには大きな支那釜がかけられ一つには鉄製の蓋がしてある、焚口は南向きになつていて、その前に洗面用器が置いてある、まさに足の踏み場もない位である。私はあつげに取られてボ



ウゼンと其処に立つていた。

バルトンは寒いから火を焚こうと提唱した。私は彼の後について行く、この家の柵は西側に大門があつて、この大門の入口に彼の木材が置いてある、大門の内北側には犬小屋があつて小さな犬が繋がれていた。私とバルトンは大きな丸太をたゞき割らねばならなかつた、直径一尺長さ二米もある大木に取り組み、割り出した、処がそれが誠によく割れるのに驚いた、何しろ零下三十度を下る寒さであるから、丸太の心まで、すっかり凍つてしまつてゐる、その為に大きな斧で割ると簡単に割れるのであつた、そこには乾いたのと、生のものと取り混ぜて十本位の丸太が転がつていた。私達はその乾いたのと、生のものを一本づつ割つて、部屋の前に運んだ。

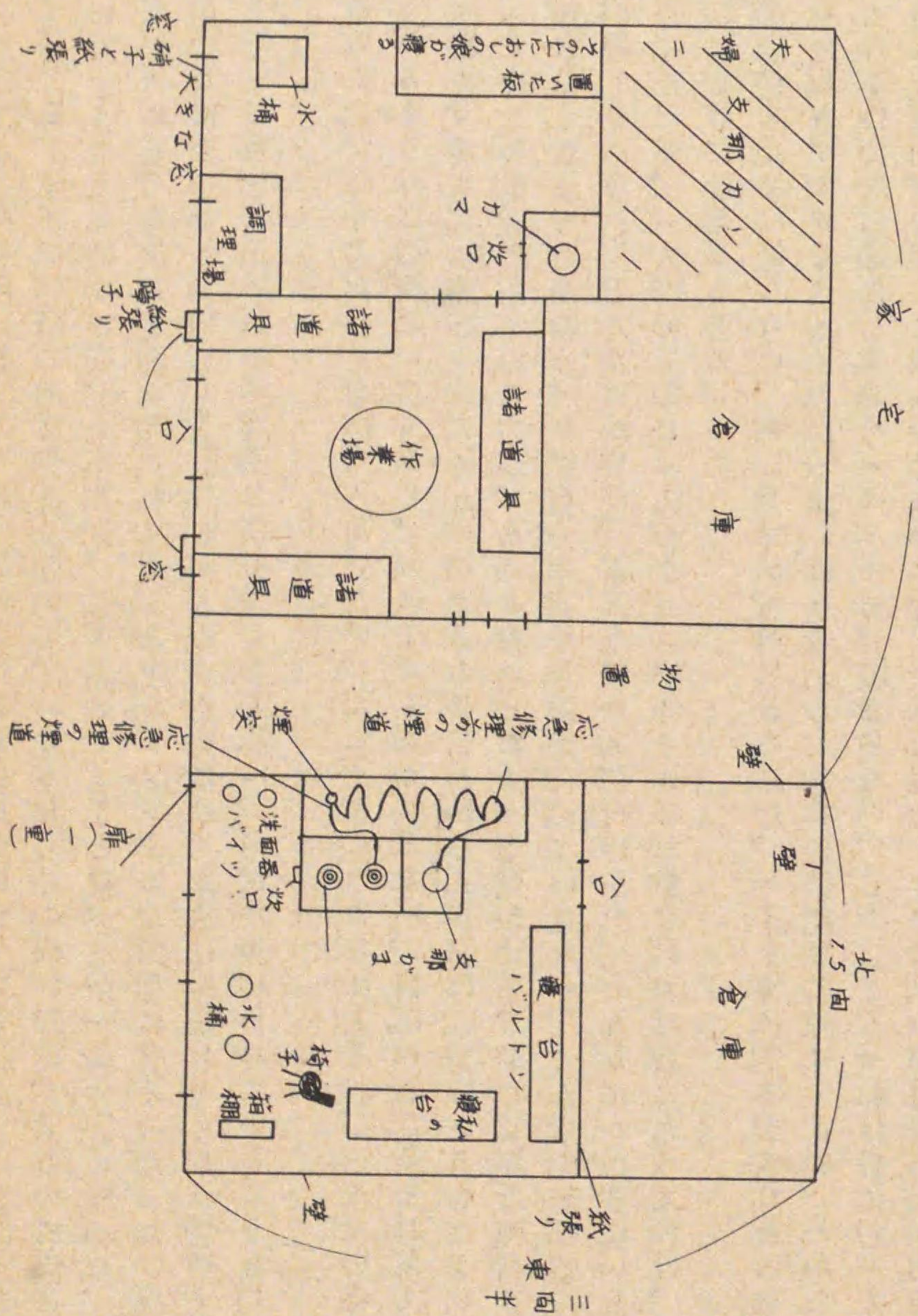
私はその割木の乾いたのを焚口に入れて、火をつけたが、どうした事か、さつぱり火がつかない、ペイチカの蓋を取ると、濛々煙が出てよく燃えるが、部屋中煙となつて終う、扉を開ければ寒気が入り込んで居ても立つてもいられない、閉めるに閉められず、開けるに開けられず、全々処置なしてあつた。致し方ないからこのペイチカを修理する事にした、煙つてゐる割木を外側の雪の中へほうり出し、煙の出るのを防いだ、早速水や土を準備させねばならなかつた、修理用に使つた残りの土をもつて来てペイチカの上に乗せ、凍つた土を溶かすのだつた、水はと思ひ水桶の蓋を取つて見れば、何とまあ氷ではないか、それも真中が二寸位盛り上がつてゐる、よく見るとこの鉄製の水桶が、凍つた圧力で底が丸く外に飛び出している、どうもおかしな水桶だと思つたが、正しく座つていないで傾斜してゐるわけである。もう一つの水桶も同様に底が丸くはみ出して傾斜してゐる。

その大きな方の水桶に私は頭を突込んで固い氷を、大きな蒙古刀で割り出した、そして割れた氷をばけつに入れて、ペイチカの上に置いた。この凍つた土を溶すには、又火を焚かねばならなかつた、煙は再び部屋に充滿した、バルトンは外に立つていたが遂にたまりかね「女子收容所に診断に行つて来る」と言い残して逃げて行つた。

私は煙にむせびながら、ペイチカに横穴を穿ち、直接煙突に煙が入るように直結した。早速とけた土に温湯をませ、洗面器の中で泥にした、それを手でペイチカの穴のあいた処へ、塗り付けた、どうやら応急修理は終つたので火をたいて見た、全々よく燃える、音をたてゝ吸い込んで行く、外を見れば冬の日は暮れ易く、薄ぼんやり暗くなつて来ていた。生の木を入れてもよく燃えた、それでも部屋は一向に温まらない、呼吸する度に吐く息は白く凍りつく。硝子は殆ど白くあつく凍り付いて外の模様が見えるどころではない。

バルトンは私に言つたように、部屋へ寝台をもう一つ入れる事にした、それは私がこゝに移転の際バルトンが私に寝

台があり、一つは自分が現在使用し、もう一つは雪の中に投げ捨てゝあるといつていたので、私はその雪に埋れた寝台を入れ、ペイチカの側に置き、温める事にしたのである、部屋の中の不必要な書籍や衣類を倉庫にほうり込み、そこにバルトンの寝台をおき、その後自分の寝る寝台を備へつけた



私は防寒帽を冠つた儘、その寝台の上に横になつた、そして今日の出来事を思い返して見た、走馬燈のように去來する監獄の生活、獄門を出る時の感慨無量な氣持、吹雪の中を寢具を背にしてゐる自分、行き交う蒙古人の忙しそうな姿、自動車の走つて行く姿、女子収容所の前に働く女囚の姿、バルトンのこの寒い部屋、隣りの華僑の家主達、煙、修理、水桶の水、犬の寒そうな元氣のない姿、丸木割り、見るものすること総べてが一瞬間の間に變つた、みんな物珍しい、そして恐怖だ、こんな時こそ家族達が迎えて呉れたならとセンチノタルな回想に耽るのだつた。監獄から釈放される時、同囚たちは自由の身となつたと祝福してくれた。しかし今の自分には、本当に祝福してくれた言葉であらうかとさえ疑われる、現実にこうして苦患に遭い行末の苛烈さに心おののく私は、何だか裏切られてゐるような絶望感に打たれるのだつた。

特に孤獨の日本人をかばつて呉れる者は一人もない、たとえあつたとしてもそれが出来ない社会においては、冷たい寒風にさらされるより外に道はないのである。バルトンも歸つて来ない、自国の者ならそれでも良い、しかし日本人は何処へ行つて暖を、食を得る事が出来ようか、西も東も皆目わからん自分は、實際どうしてよいかわからなくなつてしまつた。こんな事なら監獄の中にいる方が、もつと良かったような氣がする、若しこんな氣持を外蒙古人に話したら、当然監獄に投監されてしまふであらう。私は自分の妻や子供が待つていたなら、こんな寒い部屋でも、食糧が無くてもどんなにか心が慰ぐさめられ、どんなにか喜び、どんなにか元氣付けられ、どんなにか泣き笑いしてくれるであらうにといたまれなくなつた、一人ぼつちの日本人がウランバートルに釈放された感激と言うものは、こんなに冷いものかとまた思い慄い淋しさに心もふるえる。

しかし、この感傷も長くは続かない、寒い烈風は骨身に沁み込む、ペイチカに割木を入れない事には凍死という事になるだらう、私は起きて割木をペイチカに一ぱいほうり込む、割木の消耗率は誠にすごい、だからと言つてたかぬ訳にはゆかない、これも煙突を直通にした為全々ペイチカが暖まらない、しかしこうせねば煙にむせんで中にいる事が出来ない、割木もあれ程沢山有つたのに残り少なくなつた。又大きな丸太をオノで割らねばならなかつた、お茶を飲むにも水桶の水を割らねばならなかつた。小さなナイフでは手の感覚も全くないようになつてしまつた。小さな氷のかけらをかき集め、手づかみで薬缶に入れ、ペイチカの上のせ、沸くのを待つた、その間団茶(茶葉を圧縮して板にしたもの、長さ一尺二、三寸、巾五寸、厚さ一寸位)を探し出すのに相当苦勞した、木綿を重ねてある棚の奥から漸く団茶の一片を探し得た、それをナイフで削り取り、薬缶に投入して煮沸するのだつた。重ねた木箱の棚から茶碗を探したが、見当

らず、鉄製のグルーシコード、硝子のコップが二、三コ有り、又飯茶碗が五、六コ彼方比方と散らばつて置いて有つた。その中から一個取り出し、沸いたお茶をさして飲んで見た、香りのあるお茶が胸の中を降りて行くのがわかる。ペイチカの側に腰掛を寄せて、暖まりながら、温かいお茶を飲むと、やつと生きた心地がして来た、暗くなつて来たが、電燈が無い、新しく移転して来たばかりなので配電工事がしてない、家主の処迄は電氣が来ているが、この部屋丈工事がしてない、バルトンもこゝに移転してから一月も経過しているのに、どうして配電工事をしないだらう、きつとこの部屋で泊らないで部落を泊り歩いてゐるかも知れないと思ふのだつた。

私はあちこちと、暗がりを探し歩いた、ロソクのかげらでもありはしないかと、しかしどうしても、見つからない。倉庫の部屋を開けて見たが中が真暗でどうにもならない、致し方ないから、僅かな食油をブリキ缶の蓋に入れて溶かし、心を締めて作り、火をつけて見た、辺りが非常に明るくなつて来た、バルトンでも歸つて来たら、食事は何を作るか聞かねばどうしてよいか分らない、いくら待つてもバルトンは歸つて来ない、私は今朝監獄を出る前に、僅か一切れの黒パンを腹に収めたきりである、腹の減るのも無理はなかつた、腹が減つて来ると氣持も益々いらだつてくる。何か食うものは無いかと、木箱の中を探して見たが、見当たらない、有る物は袋に二等麵が二、三匁、家畜の脂肪油が少量、ソ聯製の塩が紙袋の底に少し残つてゐるばかりだ、私はフライパンがあるかと探して見た、そんな氣のきいたものはない、有るものはアルミ鍋が、二、三個片隈に放りばなしになつてゐる。それを取り出して洗うでもなく、その儘ペイチカに掛け、食油を入れて溶かした。一つのアルミ鍋に粉を入れ、それに沸かしたお茶を注いで、ドロドロにし、それを食油をとかした鍋に流し込み、薄焼きを焼いて見た、砂糖でもあれば上等だが、何回木箱の中を探しても、そんな上等なものはない。それでもお茶をすすりながら塩の入つた薄焼きを食べた味は、中々美味しかつた、監獄から社会へ出た、最初の食事が薄焼きとはと思つたが、他になほも無い現在においては、満足せねばならなかつた。バルトンが歸つて来ても何無いと思ひ、薄焼きを作つて鍋の中に入れ、ペイチカの上に暖ためておいてやつた。そうそうしてゐる中に、バルトンが「寒い寒い遅くなつた」と言いながら入つて来た。私は「暖かいお茶があるから飲め、食うものは日本式お菓子だ。」

彼は差し出すお茶をお美味しそうに飲んで、薄焼きに手を触れた、「お美味しそうだ、一つ御馳走になるか、お前も一諸に食べろ。」と言う。私は「いくら待つても来ないので先に食べてしまつた。薄焼きは美味しいが、日本の田舎の農家では子供のおやつにお母さんが作つてくれるんだ、私も今日監獄から釈放されたんで、郷里が恋してなり、お母さん

よく作つてくれた薄焼の事を思い出し、作つて見たんだ、只砂糖が無いので、余りお美味しくないが、砂糖でも有れば上等だよ。」「そうだなあ、砂糖が何処かにあつた筈なんだが？さてな？何処に蔵い込んでしまつたか思い出せない、ある事はあるよ、その木箱の戸棚にないか。」「いやそこら中探したが見当らない、暗くはなるし、分らない、あるとすれば倉庫の中かも知れない。」「倉庫に色々一諸に入れたから、まざつてしまつたかも知れん、明日でも見つけたらよいだろう。」「ローソクは無いのか。」「うん、ローソクは中々手に入らんよ。市街で買うにしてもみんな闇で買うんだ。一本三トコロもするよ、燃え残りがあつた筈なんだがどうしたかなあ。」「電氣をつけよう早く配電工事をして貰わん事には不自由で致し方ない。」「配電工事は只今ラーガル事務所に申請中だから二、三日中につけて貰えると思う。」「このペイチカは修理したら、よく燃える。しかしさつぱり部屋が暖まらない。石炭でも燃やしたら暖かくなると思う。石炭も半屯ほど買つてくれないか。」「石炭を買う事にしよう、ラーガルから配給して貰う、ラーガルでは一袋一〇〇匁入が五、六トコロゴだが闇で買つたら十二、三トコロゴが普通だろうなあ。」「彼は茶をすゝり薄焼を二ツ三ツ食べてやめてしまつた。」

私が彼の服装を見て驚いた。なんとまあ、夏の服の上にシューパーを着ているというだけだ。これじゃ寒い筈だ。後になつてわかつたが、このような服装がウランバートル市街において、尖端を行く服装である事だつた。これでは寒い筈だ、自分だつたらどうする事も出来ない、凍死してしまふだろう。彼は茶を飲みながら、「今晚トヒーテンバース(羊毛・皮革等取扱ふ場所)収容所に行つて来なければならぬ。余り遅くなつたら、途中の部落で泊つたと思つてくれ。」「仲々忙しいですね、そんなに夜遅く迄働かねばならぬのですか。」「それはそうだよ、一般官庁に勤めている者は夜の十一時迄働く事になつているんだ、朝は十時出勤だがね。」「なる程、労働者たちがうんですね。」「ちがう事はない、昼休みと夕食休みとを差引いたら八時間労働になるさ。」「へえ昼休みと夕食休みがそんなに長いんですが。」「時間は、昼休みは二時間、夕食休みは三時間取つてあるが、実際はみんなこの時間を最小限度にして勤めている者が多い、そうせねば仕事が出来ないんだ。」「では貴方は明日はどうしますか、朝食を作つておきませうか。」「朝食はいらぬよ、明朝はラーガルに学科があるから八時に出勤だよ。」「朝学科があるんですか。」「あるよ、一週二回ある。この外水曜日午後中学校がある、俺は中央病院で医学の学科を修めている。」「みんな学科を学習せねばならぬのか。」「それは当然だ、何処の工場でも、官庁でも、区、ホリン(区画の小単位)でも必ず行われている。お前が若し就職出来れば必ず学習があるよ。」「へえ、中々勉強するんですね。」「これも冬期間だけだよ、夏になつたらやらなくなる。」

「就職するにはどうしたら良いだろうか。」「お前、労働技術証明書があるか。」「あります、鉄工として二等級の証明書をラーガルから貰つています。」「それさえあれば、何処でもすぐ採用してくれるよ。」「そんなに簡単に行きますか。」「技術証明書でもなければ、仲々難かしいが、証明書があれば何とかなるよ、それよりも、早く居住証明書を貰う事が要だ、今度当直の次の日も、一諸にホリンネ・ダラガア・ホロネ・ダラガアの処へ行つて署名して貰う事にしよう、これが無い事には採用はしてくれないからなあ。」

ホリンネ・ダラガア 区劃行政単位の長であつて日本の区の下に当る組織の長である。

ホロネ・ダラガア

区劃行政単位の長であつて日本の区長に当る。

ウランバートルでは

ウランバートル・ホテン・ダラガア・市長

ホロネ・ダラガア

ホリンネ・ダラガア

カシヤネ・ダラガアと

四段階の行政区劃の長がある。

「早く就職したいと思うから、居住証明書を貰えるよう、色々と案内して貰い度い。」「いいとも、早く手続を取つて居住証明書を貰わん事には、都合が悪いからなあ、それよりお前、ラーガルから貰つたトクトール(釈放証明書)があるか。」「あります、これです。」と私はズボンの内ポケットから出して見せた。彼はそれを見て丁寧に、私に返してくれた。

私は又水を汲むにどうしたらよいかわからなかつた、生活する上に水程必要なものはない。「一体水は何処から貰つて来るのか。」「あゝ水は向うに中国人の家がある、その側に井戸があるよ、そこから汲んで来るのだ、汲むものは家主の処から借りるんだ、そこにバケツがあるから、それに汲んで来たら一週間位はあるよ。」「えッ、このバケツで一週間ですつて。」と私は驚いた、蒙古人の水に対する節約観念は、彼等の習性であつて、最も貴重なものとして扱われている、私はこの事を知つていながら、今更驚く事もないと悟るのだつた。私が黙つているので彼は他に何か用事は無いかと聞くのだつた。「何か食う物を買わねばならぬが、何処へ行つて買つたらよいか。」「あゝそれはセレベ河橋の側にホリシヤもあるし、中国人の売買家もある、又飯館子もあるよ、そこへ行つて好きな物を買つて来たらよいだろう。」「あゝそうですか、この家の西側に小川があるようだが、これがセレベ河か。」「そうだ、この河の西側に道路がある。それを下つて行けばセレベ河橋にぶつかる、その辺に沢山人がいるから直ぐわかるよ。」「あゝよく分りました、明日行つて少し食う物を買つて来ましょう。」「その木箱の中に袋がある。それに何でも入れて来ればよい。実は俺は今現

金がない。妻がソ聯に引揚げる際、相当経費がかかり、その上この皮シユウパーを買ったので現金の持ち合わせがない。しかし、二、三日の中に俸給を貰うから、その時は肉や野菜をラーガルから配給して貰おう、ラーガルの物は安いからなあ。」と親切に言ってくれるのであった。何だかこの小医者バルトンも信頼出来る人物だと思ふのだつた。

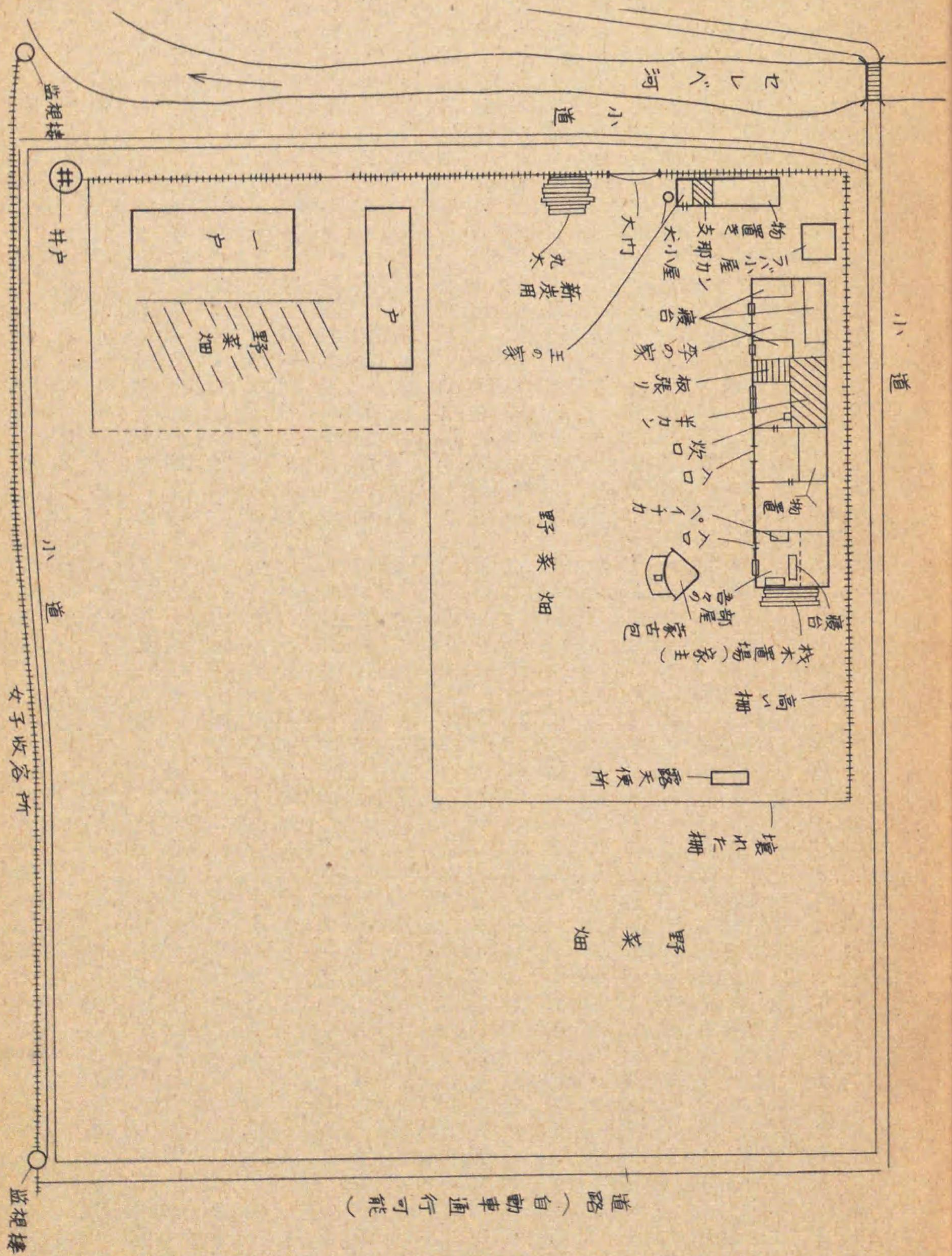
私は、「そうですね、色々御心配して頂いて有難い、私もここに五十トコロゴ持つているから、この金で食糧品を買う事にしましょう。又私の積立金を貰つたら貴方に必要な金額を差し上げ、色々の品物を買つて貰わねばならぬと思つています。」「いやそんな心配しなくてもよい。お互に金を出し合つて必要なものを買う事にしようじゃないか。」

「え、そうしましょう。」「それでは、俺はトヒーテン、バースに出かけるとしよう。」と言いながら腰をあげた。そして錠の鍵は家主の処に預けておくから、お前が家を開ける時は、錠を下ろし、帰つて来たら、隣りから持つて来て開けたらよい、では俺は行つて来る。」と言ひ残して部屋を出て行つた。

一人残された私は、何かが、手持無沙汰となり、燈心を引き起しては明るくするのだつた。水でも汲んで来ようかと思つたが、暗くはあるし、又家主とは未だ挨拶もしていないので、突然未知の者が入つて誤解されるのを恐れ、やめてしまつた。門の側においてある犬が盛に吠えている。誰か来たようだ、大門がギイトとキシル音を立て、閉つたようだ。この一廊は西側に大門がついている、それも殆ど傾斜しかけたもので、長年月を経たものらしい、柵もこれと同じ高さで、前の中国人の家に続いていて、その中国人の家から東へ、高さ二米位の棒柵があつて、四、五〇米続いている、そこから北に向つて壊れた柵が東側に廻つていて、北側は高く家の隆を通つて西側の柵に通じている。

この柵の中に五家族住んでいるが、これらの家は皆家主の個人所有のものであつた。私共の部屋の前に蒙古包が立つている外、すべて、泥屋根の木造支那式家屋である。この蒙古包には家主の妻の姉が一人で住んでいる。家主は家族三人、その西側に姓を李という華僑が蒙古婦人との間にできた女の子一人の親子三人、東向きの西側棟には一人の華僑が住んでいた。この一廊の人員は総べてで中国人三人、蒙古婦人三人、混血児一名、オシの女兒が一人、バルトンと日本人の私という十人である。

家畜は全々なく、姓を李という華僑が運搬用のラバ一頭を持つていた、これらの家屋の外は空地となつてはいるが、春ともなると野菜畑となる、ただ冬期間、この李が凍つた人糞を運搬して来て、この野菜畑にバラ撒くのは全く困却した。



私が暗い部屋の中で、ペイチカに寄つて暖を取っていると、何にも言わずに扉を開けて一人の老人が入つて来た、もう六十才を出たらしく白髪である、華僑である事が直ぐわかつた。

老人は流暢な蒙古語で、「サイハンバイノオー、フイトンバイナー、フイトンバイナー」、(御気嫌は如何、寒い寒いやおら腰掛けた。彼は蒙古語で「俺はこの柵内の家主だ、今仕事から帰つて御飯を食べて来た処だ、仕事が遠いので通うのに大変だ。」)と言ふのだつた、これが家主か、こんなに老年者でありながらまだ働きに行かねばならぬかと思ひ、可愛相な氣もしたし、又こんなに遅く迄働かねばならぬ社会制度を思い、自分も若し日本に帰れないとしたら、こんな風な状態になるんじゃないかと、末恐ろしいような、淋しい様な氣持に襲われる。

私はお茶を出してやり、お茶しかないがよかつたら沢山飲む様にすすめた。彼は中国語で「謝々、謝々」と言いながらお美味そうに飲むのだつた、私は「貴方は中国人か」と聞いて見た、彼は「そうだ、生れは大同で、張家口の売買家で働いていた者だ、二十七才の時入蒙した、それ以来外蒙で転々として売買を行い、張家口にも何回となく通つたものだ、その当時は金儲けが出来たが、革命以来どうもそうは行かなくなつた、実は俺は外蒙に来て以来三十六、七年になる。今の妻とはドロンノール盟で一諸になり現在に到つてゐる、今子供は一人もないが、貰い子をした処オシでどうにもならない、十四才の女子だが本當に困つたものだよ。」と蒙古語で何でもよくしゃべつた、一人でペチャペチャやり出す処はやつぱり中国人だとなすけるのだつた。私は相槌を打つて聞いてやつた。「私は監獄の中でよく華僑の者が中国に帰国すると聞いたが本當か。」「それは本當だよ、しかし再びウランバートルに歸つて来る者も多いよ。」「それはいつたいどういう事か」「中国も革命以来は労働が厳しいらしい、そしてわれわれのような老年者が帰郷しても、使つて呉れる場所が適當でないんだ、重労働させられるからそれが出来ないんだ、その上物価が高いから生活に困るんだ、それで歸つて来る者が多いというおけさ、歸つて来れば、自分のように家もあるし家族もある、又仕事もわれわれのような老人でも、蒙古人より特業においては断然頭角を現わしているから、外蒙古では人手が少いからわれわれを使わざるを得ないんだ、だからわれわれにとつては老人でも働けば何とか食えるという事なのだ。」「外蒙では働けば食えるというわけだね。」「そうも言えないよ、俺は野菜も作れば、又箒木も作るんだ、そうすれば家族があつてもやつて行けるよ。」「へエ、貴老は家で夜業して箒木を作るんですか。」「そうだよ、夜一生懸命やつたら四、五本は出来

る。一本三トコロゴに売つても十トコロゴ以上になるよ、箒木の原料は山に沢山生えているから夏から準備して採取して置くのさ、随分儲かる仕事だよ。」「それじや貴方は生活に困る事はないんじゃないか、昼は働いて金をとる、夜は箒木を作る、夏は野菜を作る、金が貯つて困るんじゃないか。」「それが金というものは貯りそうではない、中々貯らんもんだよ、何処も追われ通しという処だ。」「いつたい貴方は何処へ勤めているのだ。」「俺はトーチーテン・バーズで皮の鞣しをやつたり羊毛の整理をしたりしている、これも九月頃から四月頃迄の期間だよ。」「それで一ヶ月いくら給料を貰うのか。」「大体請負だから、一日よくやつて十トコロゴだ、普通七、八トコロゴが相場だ。」「家族持ちだと相当苦しい生活になるんだなあ、それだから副業もせにやらないというわけがわかつた。」「大体羊の肉など吾々には食えないから、ラクダの肉にしている、これが一番経済的だよ、大きなラクダ一頭が三五〇トコロゴ位で買えるからなあ、三頭分の値段だよ、若し羊肉だけ食うとしたら十頭位必要だから、経済的に相当な相違が出来て来る。だから貧乏人はラクダの肉で我慢して、量を多く食う事を考えるんだよ、若しお前がラクダの肉を食うようだったら、少しあげよう。」「それは有難い、羊の肉よりラクダの肉の方が脂肪が多いから、身体に寒さの抵抗力がつくので大好きだ。監獄では主にこの肉だよ。」「監獄もラクダの肉か、それならば大丈夫だ、明日でも少しあげよう。」「有難う、遠慮なしに頂きましょう。」「お前、監獄の中で苦勞したか、何年入つていたのか。」「監獄では苦勞した、この苦勞も人には話せない位だ、丸七年四月月いたが、よく病死もせず、こうやつて釈放されて出て来たと思ふよ。幸運だつたんだよ。」「全く幸運だよ、これから暫く静養して、又大いに働くん、働けば食う事だけは出来るからなあ。」「俺も暫く静養してから仕事にしようと考えているが、金がないから静養出来るかどうかわからない。」「彼はお茶を飲みながら又続けた。」「お前は日本人だそうじゃないか、俺は日本人が好きで、よく日本兵の捕虜に、黒パンをくれてやつたよ、俺はあの日の丸の旗が好きだし、大体日本人は嘘を言わないよ、それに比べると、外蒙古人は馬鹿で、嘘を言つて喧嘩が好きで、全く信用は出来んよ、今と昔とは全く反対になつて終つた。」「俺が日本人だと誰から聞いたんだ。」「俺は自分の妻から聞いたが、バルトン医者が話したらしい、妻がお前が日本人だというので少し驚いていたよ、しかし俺は、心配するな、日本人は信頼が出来ると言つておいたよ、妻は俺が仕事から歸つて来るなり、バルトン医者の処に日本人が監獄から釈放されて、今日午前中に来てゐるんだ、何だかわからないから、お前行つて見て来いと言われたんだ。そう言われて俺は実は驚いたんだ、日本人がまだウランバートルにいたのかと思つたんだ、それで御飯を終つてから来て見たのさ。」「そうだよ、俺は日本人だよ、間違いない、しかし日本人は貴方の信じているように、嘘や泥

棒は絶対にしないよ、心配しないように言つて聞かして欲しい。」「うん、日本人は嘘や泥棒はしない、全く驚く程だ、俺も六十を三つ出たが、この年をしても未だ幼かねばならない、しかし助けば食えるから心配はいらんよ。」彼は煙草を吸わなかつた、お茶を飲みながら又続けた。「バルトンがこの部屋を貸せというので提供した、家賃はたゞだよ、バルトンは医者だから、我々が病氣した時に診断して貰い、処方箋を買つて薬の購入が出来る好都合があるんだ。」「病院に行つて良い医者から診断して貰つた方が徳ではないか。」「お前一度病院に行つて見る、それこそ大変だよ、午前の三時頃病院に行つて受付け時間・午前九時迄待たねばならない、そうしておけば絶対見て貰えないんだ、だからバルトンがここにいと、この附近の者は大抵ここで診断して貰つて、薬を買うようにしているんだ、バルトンも金をとらないから助かるよ、大抵の者は金をとるんだがバルトンはそれをやらない処にいい処があるんだ。」「そんなに病院は振うのか。」「それこそひどいものだよ、列をなして待つているよ、本当に早いものになると、ねずで待つている者もあるんだからなあ、だから午前六時頃行つたら、いつまで待つても一生診て貰えないよ。」「本当かなあ、監獄の中でも一寸耳にした事もあつたが、まさかそれ程でもないと考えていたんだが

急病人でもあつた時はいつたいどうしているんだらう。」「急病人がある場合は特別だらうが、普通患者は全く大変な事さ、死ぬ様な目に遭うと言うものさ、病氣はしたくないね。」「それはひどいものだ。」「お前の名前は何と言うのだ。」「俺はK.Y.と言ふものだ。」と私の氏名を中国語で話して聞かせたがよく分らないらしい。それで紙と鉛筆を探し出して書いて示したが彼にはそれが読めない、仕方ないから蒙古語で今迄使ひ馴れた名前をいふと漸く納得した。「俺は今度の戦争で察哈爾盟安旗で捕つたんだ。」「何だと、察哈爾盟と言つたら、張家口ではないか。」「そうだ、張家口に、張北、多倫、徳化、等あるよ、その北の方に蒙古人の明安旗がある、俺はそこにいたんだ、終戦になつたのも知らないで家族と共に、ソ蒙軍に捕つたわけさ、それから多倫に連れて行かれ、多倫で家族と生き別れ、俺達は多倫からウランバートルに連れて来られた次第だ、そして判決は十五年という長期刑だつたよ。処が、今回アジリンホノクを買ひ満刑となつて釈放されたわけさ、まだ監獄には日本人が三人いるよ、一諸に来た者で二人病死したよ。可愛相な事をしたものさ。」「俺は大同附近のものだが、張家口に、張北、徳化、多倫、みんな知つていふよ、昔何回も行つた事があるからなあ。」「まだこのウランバートルに日本人がいるという事を聞かないか。」彼は暫く考えていたが、「知らないなあ、前に日本軍隊が帰つてから日本人がいるとは全々聞かない、今初めてお前に会つて、まだ日本人がウランバートルに居たかと驚いたわだよ。」ウランバートルには日本人がいないのかなあ、いたら会いたいものだ、若し外に日本人がいると聞いたら直ぐ俺に知らせしてくれ

ないか。」「いいとも、聞いたら直ぐ知らせるよ。」彼は仲々話が好きだ。

日本軍の強い事や、日の丸の旗は立派だと自分達華僑も日本軍の来るのを待つていたが、負けたのではどうにもならないとか、お前は日本に帰らないのかとか、外蒙古はどうして日本へ帰さないのだからかとか、仕事をすれば技術を覚える事が最も大切だとか、このウランバートルではもう商売は駄目になつたとか、華僑はウランバートルには沢山いるとか、俺は中国の故郷には帰らないとか、その中に世の中が変るだらうとか、その他雑多な話を続けるのだつた。

こんな話をしている処へ彼の妻が入つて来た。彼は自分の妻だと私に紹介してくれた。年令は六十に近い白髪交りのオバアさんだ、少し腰が曲つてゐる、私はふと日本の故郷に達者でいるかどうか分からない母の事を思い出した。私は監獄生活中病臥した際何時も母の姿が浮んで来て、色々と母の事を思い出して、それが後丈夫になるとすつかり忘れてしまつてゐた、処が今晩ここに老婆を見て、再び母の思い出をたどる事が出来た。

この老婆のように白髪も交り、よぼよぼしてゐるんじゃないかと、故郷の空に、想いを走らすのであつた、今年は何才になるだらうか、数えて見ねばはつきり分らないが、多分六十五、六才になつてゐるんじゃないかと思ふのだつた。母も七人の男の子を育て、采た、其の苦勞が今このような身になつた私に始めて母の愛情の強さがわかるのだつた、もう年も年だから死んだかも知れない、生前にもう少し母に楽をさせてやりたかつた、切実に母への感謝の念と、生きていてくれるようにと願うのだつた。

老婆は老人と二人で話をしている、いかにも老人夫婦の良い処を示している。「貴男は身体が疲れているんだから、早く休まないと、明日早く起きられないよ。」と長年の妻としての心づくしを示しているのだつた。

私は何だか、母が私に諭してゐる様に聞えるのだつた、私は老婆にお茶をすすめた、老母は飯茶碗を受け取つて飲んでくれた、私は何げなく老婆に言つた。「私に、あなたのようなお母さんがある、今日本に居るが生きてゐるかどうか分からない。遠者でいてくれるよう願つてゐるけれど、心配だ、俺も四十の年を迎えて、初めて母の愛情がわかつて来た。今親孝行をしようと思つても、日本とウランバートルは余りに離れてゐる為、それも出来ない、今あなたが入つて来たので母の事を思い出してゐた処だ、私は今日監獄から釈放されて出て来た者だが、悪い者ではない、嘘を言つたり、泥棒したり、金を借りたり絶対しないから安心して貰い度い、自分の子供の様に世話をやいて、教えて貰い度いものだ。」「そうか、お前さんにもお母さんがあるのか、一人じゃないのか。」「こゝにはお母さんはいない、しかし日本という国にお母さんが待つてゐるかも知れないんだ、十何年も会わないからはずきりわからない、元気でいてくれ

れば、よいかと思つてはどうか。」「なる程、日本という国があるのか、それはいつたい何処にあるのか。」「日本の国は海の中にあるんだよ、こゝから汽車や気船で行つたら早くて十日はかゝるよ、飛行機だつたら、大体二日はかゝる処だよ。」「遠い処だね、お前は日本へ帰らないのか。」「俺は帰りたいけれど、外蒙の国では帰してくれないんだよ。」「おばあさんは私のいう事が分つたか。」「知らないが、うなづいていた。

おばあさんは、こまごまとこの柵内の事を知らしてくれたい。」「この附近には泥棒が多いから、大門の扉は必ず閉めておくように、開け放してあると柵内の材木、石炭、家財道具、家畜迄何時の間にかなくなつてしまふからね。」「そんなに泥棒が多いのか。」「いるよ、油断をしていたら、大変な事になつてしまふ、俺の処の犬は良い犬だよ、知らない者が入つて来たら必ず吠えるから、よい用心棒になるよ。」「私はなんだあんなよぼよぼした老衰した小さな犬が用心棒になるなんてと思つたが、それでも泥棒が多いとすれば、無いよりはましだとも思つた。

老婆は小さな声で私に再び告げた。」「お前、この柵の内にも小泥棒がいるんだよ、あの西側の家に住んでいる老人が、俺の処の石炭や、材木を盗むんだよ、気をつけなければお前さん処もあの老人に盗まれてしまふよ。」「え、あの西側の家に人が住んでいるのか。」「住んでいるさ、一人者の老人で、食うにも困るんだ、ただ、夏野菜を作る日雇で働いているだけだから、とても貧乏だよ、家の爺さんの知人だから仕方ない、泊めてあるんだ。」「このおばあさん、中々盗棒の事で氣を病んでいるようだ、おばあさんは又続けた。」「あの一人者の老人がね、家の前にある石炭の中から大きな石炭を選んで持つて行くんだよ、わしは毎朝、石炭の山がどうなつていくか知つていゝんだ、泥棒はきつと夜、便所の歸りに持つて行くんだよ、東は置いてあつた小さな木もなくなつてしまつたしなあ。」「おばあさん、その人はそんなに困るんですか。」「いつたい、なまくらで働かないから駄目なんだよ。家のお爺さんのように働いてでもいればどうにかなるものなのに、働かないで寝てばかりいゝんだよ。」「おばあさん良いお爺さんを持つたものだ、幸福なものだよ。」「三十年から一諸につれそうだからね、それだけお爺さんに一生懸命だつたからね。」「蒙古人の婦人としては稀しい事だ。そうなくてはならないよ、おばあさん。」「おばあさんは嬉しそうにお爺さんに向つて、「遅くなつたから早く休んだ方がいいよ、身体が大切だよ。」

そうこうしている所へ、十二、三才位に見える娘が入つて来てニヤニヤ笑つて立っている。何だか氣味が悪い、老婆は大きな声で「あつちに行け」と奴鳴つたが、娘はそれでも笑いながら立つていゝ、私はこれは少し頭が変だぞと思つた、食べ残りの薄やきを取つてやると、老婆は、「この娘に物をやるとくせになるからやらなくてくれ。」「どうして

だ、いいじゃないか。」「この娘は啞だよ、何にも分らないで本当に困るんだ。」「啞の娘は薄やきをむしやむしや食べながら出て行つた。」「本当に食いしん棒で、俺の所の穀つぶしだ、啞だし、何の役にもたゝない。」「と老婆はぶつぶつ言うのだつた。老人は何にも言わずに聞いていた。」「生れた時から啞だつたのが。」「俺達に子供が無いから、他人から生れたばかりの乳児を買つたんだ、初めは何にも分らなかつたが、段々に育て、大きくして見ると啞という事がわかつたんだ、今更悔いてもどうする事も出来ないわけさ。」「何か仕事でもするのか。」「何にも出来ないんだ、水くみも掃き掃除も、炊事の手伝も少しも出来ないんだ、食う事は大人より余計食うのだから、全く穀つぶしだよ。」「私は初めて穀つぶしという訳がわかつた。蒙古人は穀つぶしという言葉を使わないので、どういふ意味かわからなかつたが、漸く納得する事が出来た。

老婆は又続けた。」「あの啞よりも、もつと厄介な者がいゝんだ。前の蒙古包の中に私の姉がいるんだ、これが又手数のかかる者で、ロクでなしで、強情で本当に困るよ、何しろ食事から、薪炭からすべて心配してやらなければならぬからね、水汲迄してやらにやならないよ、この年をして水汲みは大変だからね。全くこのように穀つぶしが揃いも揃つたものさ。」「あんたのお姉さんは主人が無いのか。」「あるもんか、若い時に男を変えてばかりいたから今になつて、どうすることも出来ない、悔いても始まらない、早くクタバツてくれれば幸いだよ。」「そうか、それは大変だね、お姉さんは縫い仕事でも出来ないのか。」「そんな事ができるようなら、こんな処におかないよ。只座つて威張つてばかりいるんだ、やれストーブの燃えが悪いから、煙突を取り換えるの、寒いから割木を持つて来いだの、フェルトを二枚重ねるとか、包の周囲に土を寄せるとか、水が無いから持つて来いと、お茶がなくなつたから持つて来いと、全く自分が家主のように威張つていゝやがる。」「全く口の悪い老婆だ。自分の身も知らないで、実姉の悪口迄いゝやがる。」「いゝ心境は、いつたい何処から出て来るだろう、すべて物からではないだろうか、もう少し心のゆとりがあつてもよさそうなものだと考えさせられた。

私は外蒙も深刻にセチカライ処だと痛感するより外になかつた、私は老婆の愚痴を聞くに耐えられず話をそらす為老人に話しかけた。」「あなたのラバは良いラバじゃないか、ウランバートルにはラバが沢山いゝのか。」「あのラバは俺のじやないよ、俺の隣の姓李の、彼は蒙古大学の便所の汲み出しをやつていゝんだ、あの車は大学のさ、相応しい給金になるらしい、その外彼は大学の便を利用して土糞を作り、それを野菜畑にくれていゝ野菜を作つていゝんだ、彼の生活は楽だよ、まだ若いからなあ、働けるよ、五十を出ないのだから働き盛りという処だ。」「あゝ、そうかね、蒙古にラバがいるとは少しも思わなかつた。」「ラバは蒙古馬より丈夫で、力があり使い易い、値段だつて一、二〇〇

トコロゴ以上するよ、蒙古人はロバだのラバを非常にきらうが、中国人はこれを一番財産として尊ぶのだ。」「燈油も大分少くなつた。寒風は身を切るように沁みこんで来る、もう十一時近くになるであろう。

老婆は老人をセキタテているが、老人は中々腰をあげない、私は部屋が益々寒冷を覚えて来たので、ペイチカに割木を押し込むのだつた。老人もやおら腰をあげ、「遅くまで話してしまつた、俺の処に遊びに来るがよい。」「有難う、御厄介に行きましょう、明日は何時頃お帰りになるのか。」「大体トーチエン・パーブから此処まで一時間近くかゝるよ、夜は暗くて歩き難いからな、昼だつたら三十分で行つてしまふ、朝も早いからなあ、午前の六時に行かない事には仕事に間に合わない、夜は七時でなければ帰れない、全く遠い処はつらいものだ。」「大変だね、よくまあ続く事だ」「身体が丈夫だからよ。」「老夫婦は連れだつて出て行つた。

彼等が帰つて一人となると、何だか淋しい気がして来る、今迄老夫婦がいてくれたので、何かと気が紛れていたが今一人になつて見ると心の置き場のない焦燥感に打たれるのであつた。

家主老夫婦の何の目的もない、楽しみもない、愛国心も湧かない彼等はいつたはどうして生きようとしているのだろうか、只牛への慾望に食いつないでいるというだけのことであろう。

俺もこの老夫婦のような境遇に陥入つて行くのではないだろうか。自分は監獄から釈放されて自由の身となつたものの日本には帰して欲らない、黒いカーテンに閉ざされた外蒙ウランバートルに、住まねばならぬ運命のはかなさ。嗚呼日本に帰りたいなあ。

日本の国土に一步でも良い踏み入れたら、その場で死んでも悔ゆる事はない。

歩いて日本に帰れというならば、喜んでこの厳寒の真中でも押し切つて帰つて行く、途中で狼に襲われようが、凍死しようが、そんな事は問題外である、只無心に帰りたいのだ。

言語の自由、民族の同一、国家意識のある、日の丸の下に帰りたいのだ、思えば思う程一途に日本の事のみである。バルトンをつたが遂に彼は帰つて来ない、今頃は暖かく何処かの蒙古包で床に就いているであろう。夜は誠に静かだ、遠くに自動車の走る音がホンに僅かに聞えて来る、もう真夜中となつたようだ。

外に出て見た、星がきれいに光つている、寒気は身に刺し込むように酷しい。部屋に入つて、監獄から持つて来た寝具を敷いて、着の身着の儘ねた。その晩は色々の事を思い浮かべ、うとうととして寒さに震えながら、寝返りを打つていた。

オ一章 ウランバートル市民生活

一、パスポート（居住証明書）發給迄の経過

(1) 釈放された次の日

昨晚は寒くて一晩中少しもねむれず、寢台の上で寢返りはかり打つていた。寢返りをすればする程、寒さが身にしみてどうにもならず、バルトンの毛外套を取り寄せ頭から覆つて膝小僧を抱き円くなつていたが、それも長く続かず、足腰を延ばす毎に再び冷めたさが身にしみ足腰の温まる暇も無かつた。しかし明方からグツスリ寝たものか、気が付いて見ると、監獄ではなくバルトンの宿舎であり、窓には太陽の陽が射しているのはつきりわかるのだつた。明方迄は相当寒かつた。こんな寒さは監獄でも最近はずつた事もなかつた。それにつけても、監獄では、寒い時は何処からか燃料を泥棒して来て何とかなつたが、実社会に出るとそうはいかない。川岸か山へ行つて拾うか街で燃料を買うかの二つの道しかない。それも自分の労力でやらねばならぬ。おのずと燃料の節約を心がけざるを得ない次第である。

私は起きぬけに顔も洗わず、外へ出て見た。空は曇り勝ちであるが、昨日に比べれば静かな良い日だつた。何だか東の方が懐かしく、両手を合わせ遙かに東方を拝した。このようなことは監獄に在る間は、ほんに数える程しかなかつたことである。今の自分の心の奥にはそんな事をしてもどうにもならないじやないかという、なかは自嘲的なものの反面、人ぼつちだという淋しきから救われたい、何かに頼りたい衝動に駆られたことも、また否定し得ないことであつた。

私は火をたき付け、水汲みに行かねばならなかつた。隣の家主から、水汲みのビケ（支那式水汲ザル）を借りて大門を出た。左に曲つて柵依いに行くと、直ぐだつた。井戸の附近はすべて氷で張りつめて恰も井戸か、なだらかな坂の上にある様な感じを受けた。井戸の開石が氷で分厚くなつていたのである。これぢや大人だつて容易な事では汲めない。

私は、そこに這うようにして近寄り、井戸の中を覗き込んだ。一切が氷で、只水汲みビケか入る位の円い穴が、煙突の穴の様に氷の中に開いてるだけで、中は暗くて何にも見えない。

井戸の水を固めた氷



張り詰めた氷、井戸の方が高くなつていて
バケツかスルスルと滑り出してしまふ。

私か持つて来たバケツを下に置いたとたん、バケツがスルスルとすべり出したのは慌てた。私はバケツをとらえ、氷に押し込むようにして固定させ、ついで注意深く麻縄のついたビケを穴の中へ下して見た。相当深いらしく二丈位あつたらう。水面に達した事が感覚でわかつた。二、三回ドウツキをつくようにした。水かビケに入つたようだ。さて引き上げるに当つて、足が滑り、井戸の中にメリ、込みそうに仕方ない。それでもどうにか、麻縄をたぐり上げ、水汲みビケを取つて見ると半分しか入つていない。みんな途中で漏水してしまふ事が分つた。その漏水が凍つてこんな白氷に包まれた井戸が出来上つてしまふのであつた。同じ事を三回もせねば、バケツは一ぱいにはならなかつた。私は水の入つたバケツを氷の上に押しつけながら井戸から退つた。水汲みビケを右手に、水バケツを左手に持つて帰り、家住宅に水汲みビケを返しに寄つた。内に入つて行くと、老母と啞の娘とか雑用をしていた。娘は私を見てニヤニヤ笑つていた。私は麻縄を手から外そうとしたが、手袋が麻縄に凍りついて離れない。その儘外して、力一ぱい手袋を引きはがして取り除いた。私は何にも言わずそこを出た。(蒙古の習慣として家に入る時も出る時も挨拶しないのが習慣である。)

洗面器に水を入れ、ペイチカの上に置いて温めた。私は部屋の何処かに歯ブラシヤ、歯磨粉が無いかと探したが見当らない。石ケンも何処かに有りはしないかと探したがそれも見当らない。仕方ないから、微温湯で顔を洗うだけにす。何年振りだろう、考えて見ると、家族を興蒙女子中学校から引き揚げさせるべく、送り出した日から今日迄丸七年四月月間洗面したことがなかつた。よく顔の皮が厚くならなかつたものだと思ふ。たつぷり湯の入つた洗面器でブルブル洗う気持は何ともいえない。また監獄の時の事が生々しく思い出される。

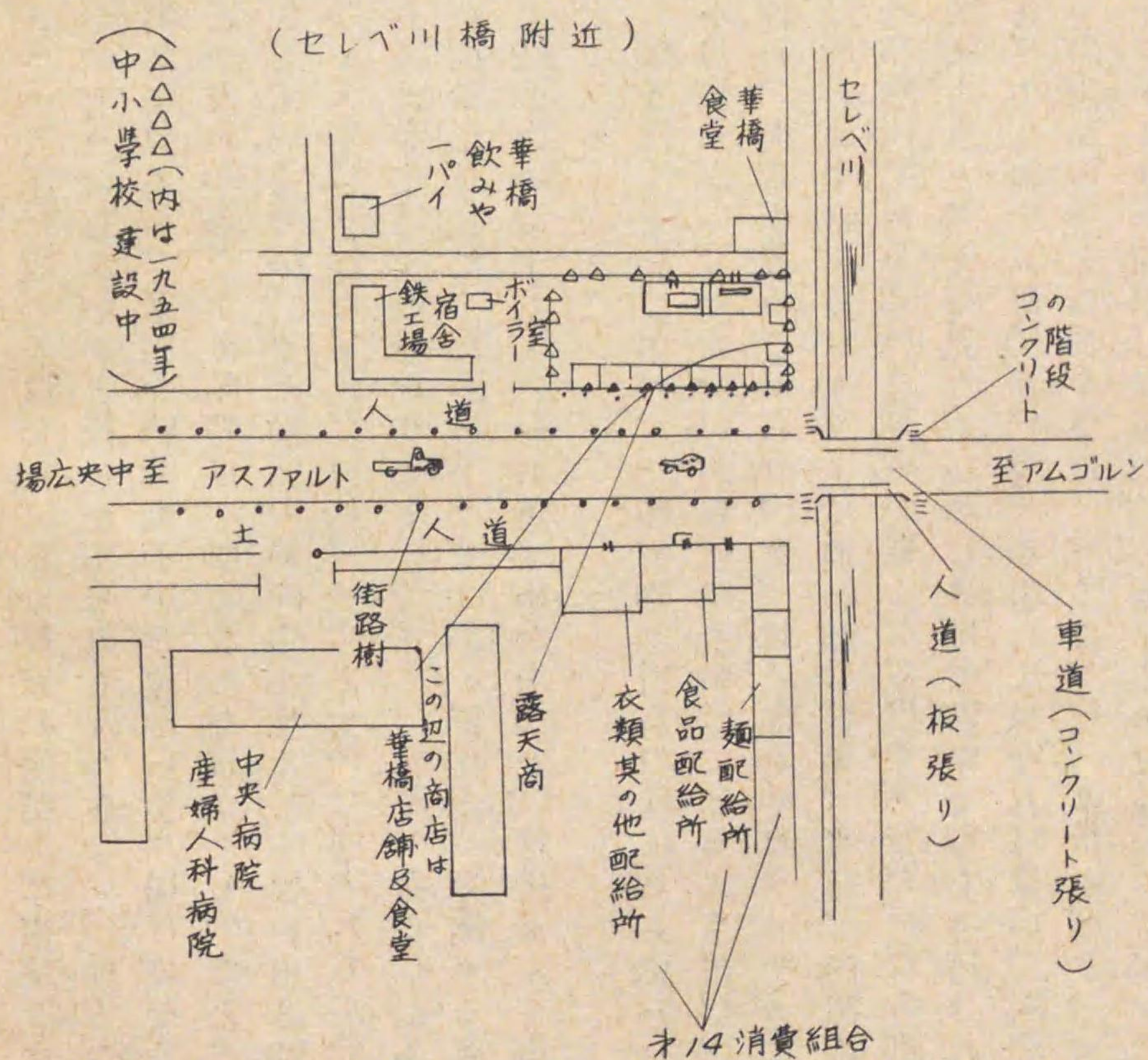
およそ湯で顔を洗うなんて事は想像もできないし、バケツ一杯で何十人もが洗面しなければならなかつた。若し水の無い場合は、配給されるお茶でよく顔を洗つたものである。水やお茶を口にふくみ、それを少しづつ手の平にふき出して手を洗つたり顔を洗つたりした。だから手は誠によく荒れた。労働する者は瓜と肉の間によくアカギレが出来た。そのつらさから顔も洗わないで十五・六日も過す事が有つた。衛生なんて事で細い神経を尖らせている暇は少しもなかつたものである。

ここで洗面器の微温湯で顔を洗うという事は、一種特別な行為の様にさえ思われるのであつた。手や顔を奇麗に洗い終つて、手拭を探したが見当らない。仕方ないから何時も監獄でするように蒙古服の帯でかたづけける。

又昨晩と同じ薄焼きを作り、お茶を飲みながら食つた。暫くぼんやりペイチカによつて暖をとつている気持はまたとない良いものであつた。昨日までは毎日ノルマーに追われ、仕事、食事、睡眠の三つの外には何も考えられなかつた事を思うと、初めて自分の身体であるという意識が強くなるのであつた。この部屋にとじこもつていようより、ウランバートル市内を一巡して来ようと考えて見た。しかし途中で警察でも連行され訊問されたらどうしようかと心配になつた。その時はこの「トクトール」(証明書の意)を出して見れば良い、瞬間その「トクトール」がたしかに有るか心配になり、ズボンの上から手を当てて見た。有るようだ。革帯を解き、ズボンの内側に作りつけたバケツの中から白紙に包んだ「トクトール」を出して見た。心配する事はない。ズボンの股グラの内側に入れて置けば、絶対に紛失したりぬすまれたりする事はない。外蒙の監獄では大事な物は皆この処にバケツを作って蔵つておくのだ。トクトールを丁寧に折畳んで例のバケツに蔵い、ズボンの革帯を締める。身仕度をし戸口に鏡を下ろして外に出た。風が少し出て来たようだが、昨日のような吹雪ではない、しかしとても寒い。

セレベ川の川沿いに道路がある。自動車も通れるかしかし悪い道である。一軒半位南へ下つて行くとセレベ川橋にぶつかる。

川は凍つていて馬車など自由に木橋の下や、川を横切っていた。この橋がウランバートル市では、基幹道路に架つている唯一の木橋である。木橋の上を自動車は激しく往来していた。人通りも多く、又中国人の店舗が並んでいた。それも中国の田舎街道程度であつた。みんな泥葺き屋根で小さな店舗である。これ等の店舗の前に、蒙古人や華橋の露天店が乳製品、駄菓子・飴・箒・皮革類・薪炭、支那ドンスの絹布の小布などの立売りをしていた。



私は華僑経営の食堂に入って見ようと思つたが、帰りに寄つた方が良いと考え、基幹道路に従つて西に向つた。

少し行くと二階建のアパートらしい建物があつた。後になつて、バルトンと一語にこの建物の一部屋に住んでいたブリヤート蒙古人を訪ね、就職を依頼した事があるが、この蒙古人は鉄工場の運転手である事から、この建物は国立鉄工場の宿舎である事が判明した。

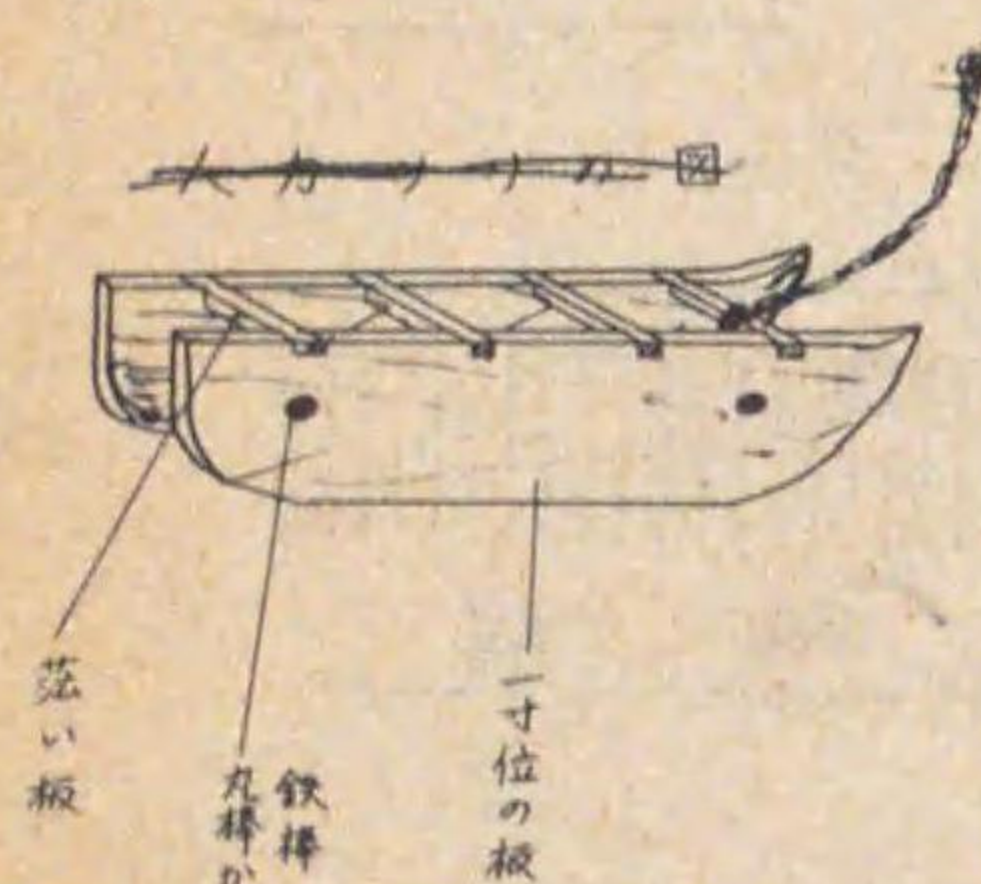
その次の建物はやはり二階建ての洋館だつた。学校らしく、人道に長髪にした学生が煙草をふかして、僅かな休息時間を楽しんでいる処らしかつた。女もいた。女はみんな蒙古服を着ていた。男生徒の服装は非常にまちまちで、背広・詰襟・蒙古服等で、誰も長靴を穿いていた。

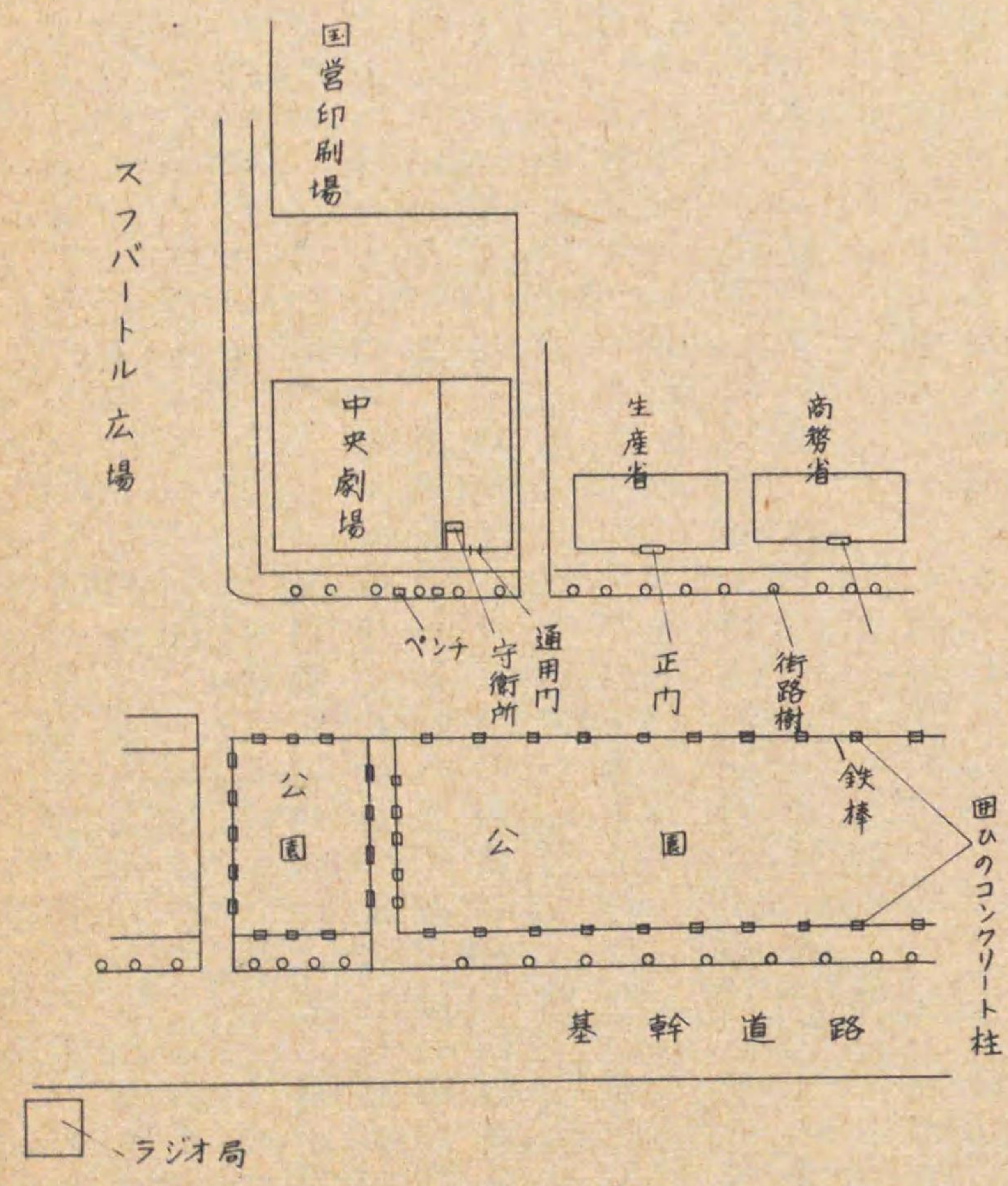
後になつてわかつたがこれが師範学校で、附近一帯が校舎、寄宿舎であつた。この師範学校から、西側は狭い公園らしいものと、広い道路になつていたし、人道もアスファルトで固めてあつた。

私は公園の北側に添つて西に向つた。この辺に来ると人通りも多くなつて来た。誰も私を日本人であると思つてはなかつた。蒙古服を着ている。振り返つて見る者さえなかつた。私はほつと安心した。自動車の往来も激しくなつて来たようだし、又人力ソリに荷物をつけて引ばつている者も屢々みられた。

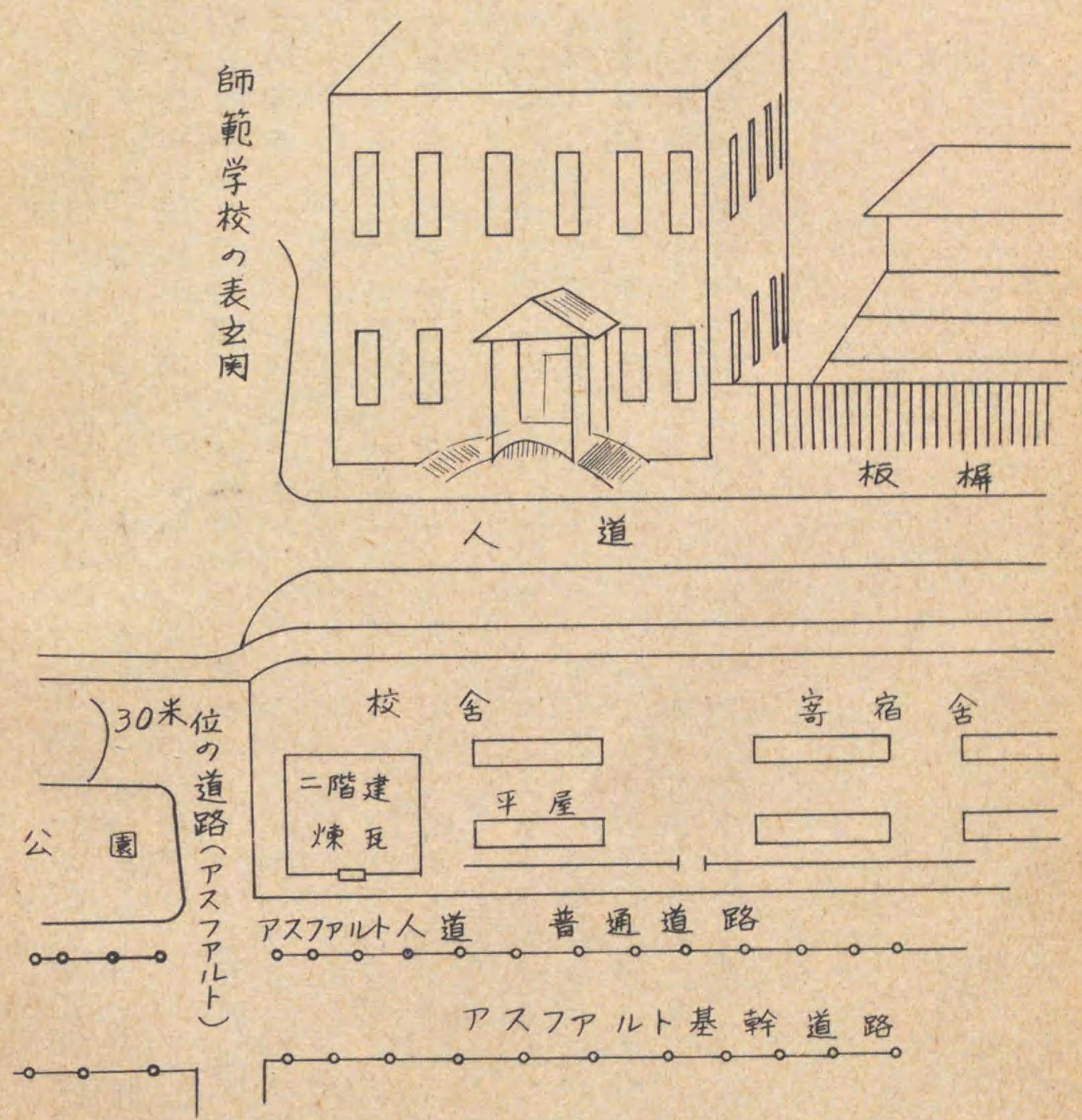
人力ソリというのは、形も色々あるが、主に板で造つてあるものが多い、ウランバートル市民にとつて、冬期間最も必要な運搬具の一つである。そして一方自転車の姿は殆ど見受けられない。

図のソリカ人





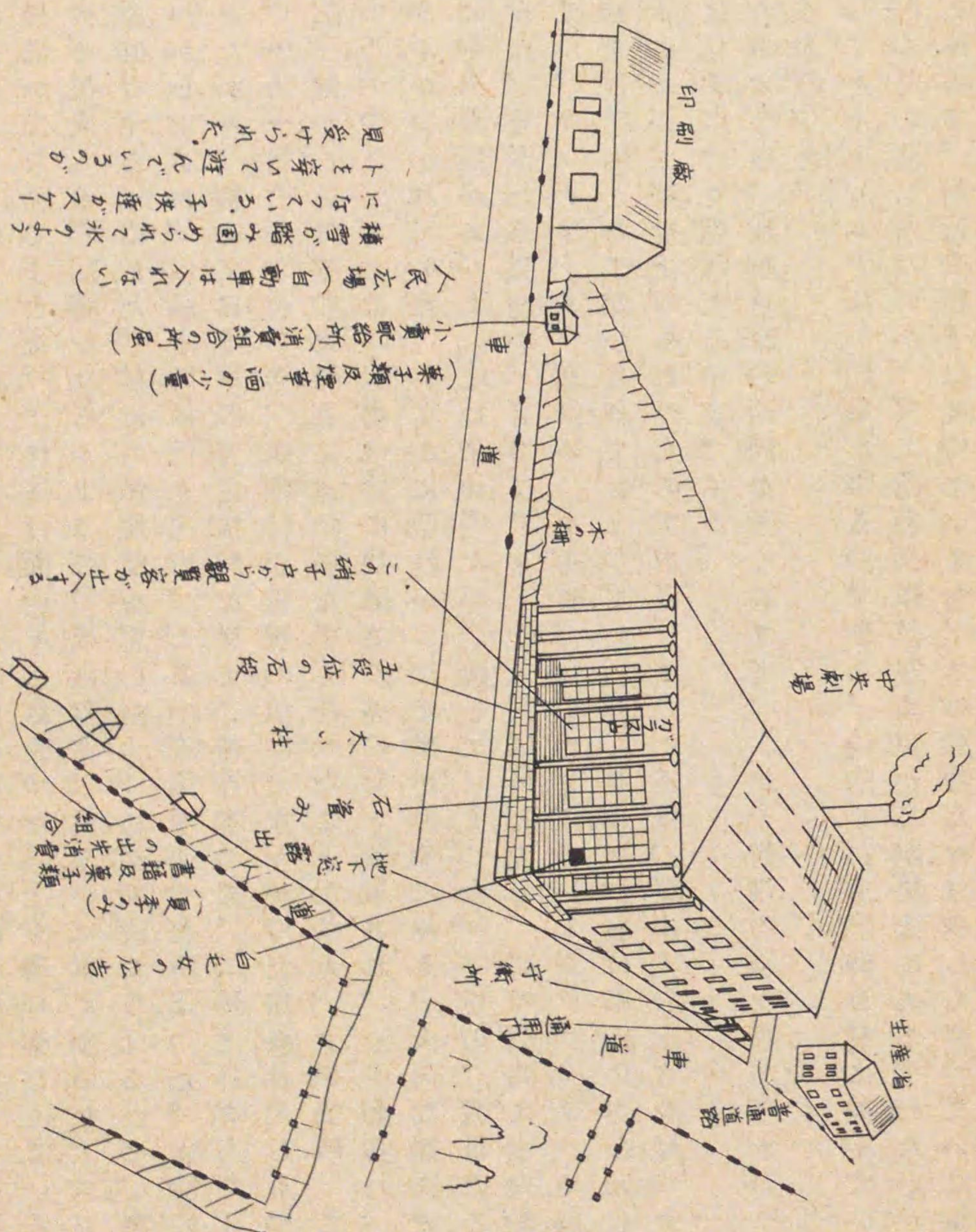
私は途中から北側の歩道に移った。この辺を歩いている者は少かつたが、自動車の往来は絶え間が無い位だつた。
 この人道の北側に、二階建の煉瓦建てがある、これが商務省と生産省である事が後になつてわかつた。この辺に來ると、ラジオ局の屋上に備え付けてある拡声器からウルサイ程、蒙古語とロシア語の放送がさかんに響いて來て、何だか慌しい気分になり込まれた。



商務省と生産省の前を通つて、道路を横切つて行くと鉄で出来た通用門が両開きに開いており、中庭に沢山の石炭が積み下されていた。守衛所が門の傍にあり、一人の老人が小銃を背にして見張りしていた。初めは何だろふと思つた。いつたいこの建物は何だろふ？はかに大きな建物である。この建物の南側は直ぐ歩道になつていたので、その大きさも見上げるように大きい感じだ。側へ寄つて見ると、歩いている足もとの下に窓硝子が三分ノ一ほど下から路上に出ている。確かに地下室があるらしい。人民広場も見え出した。辺りは一面の白雪に閉ざれているが、人通りのある処丈は点々とアスファルトが見え、それが一本の線のようにも見える。又自動車道路だけは黒い帯状に南北に続いて消えていた。この大きな建物は西側が正門で人口になつていて、白毛女の劇の宣伝広告が張り出してあつたので、これは中央劇場であることがわかつた。表正面は歩道から直ぐ五段位の石段になつていて、その上つた処は太いコンクリートの柱が何本も高く建つていた。その内側は客人の待合所のような開放された場所になつていて、そのつき当りが開閉自在のドアになつていて、私は白毛女の広告を眺めていたが、西北風が人民広場を吹き渡つて来るので、そこにのんびりと白毛女の広告を見ているわけにいかず、沢山の人の行き交う人民広場を斜断する事にした。私は自動車道路を横断して、人民広場の人々が踏みかためた人道へ出た。積雪は溶ける事を知らず、只踏固められ、氷よりも固い位で、滑り転ぶのではないかと思われる位であつた。

人民広場は西北風の吹きさらしで物すごい。中央に馬に跨り刀剣をふりかざしているスファートルの石像がある。今この人民広場を通る者の中に一人としてこの革命の勇者に対して敬意を現そうとする者のないのはどうしたことであらうか。ただ慌しく過ぎ去るのみである。

この石像の北側に、大きな四階建の建物がある。私はすぐこれか蒙古人同囚達かよく宣伝口外していた、政府官庁だと気がついた。外蒙古最大の建物である。よく見ると、階段下の小さな箱のような建物の前に、歩哨か二人向き合つて立哨している。これは仲々警戒が嚴重だなどと思ひ、少しそれより離れた場所を通る事にした。この辺がウランパートルの中心地であるらしく、電柱は殆ど見え、街燈の柱と高層建築が少しの間隙を置き乍らたち並んでいる。



通信省（逓信省）の屋上に時計台があるが、動いているかどうかはつきりわからない。このあたりのスピーカーから流れ出る放送が、人民広場一ぱいに響き渡つて来る。

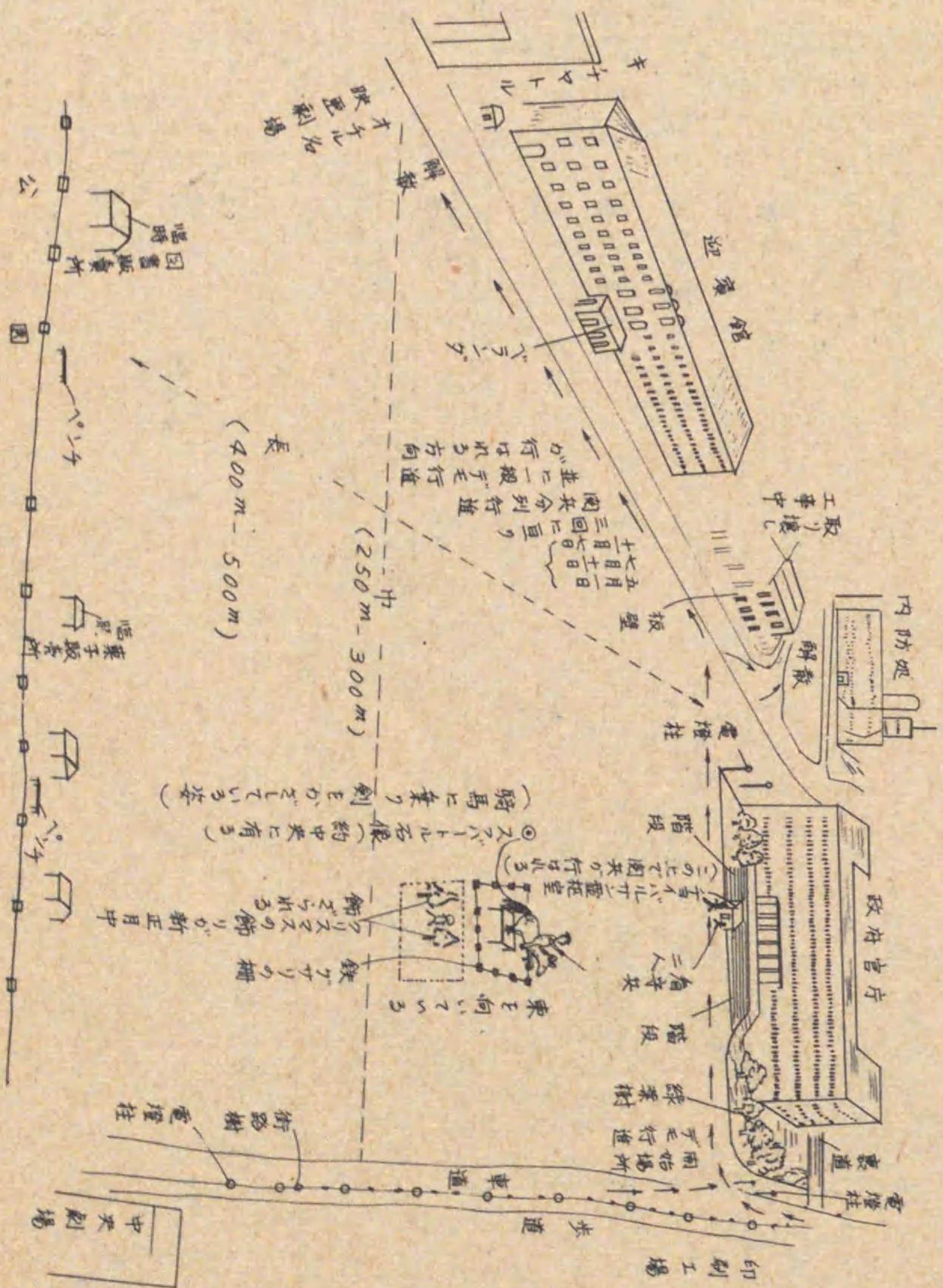
私は何だか圧迫されているような感じを受けた。迎賓館の前通りは自動車も激しく往来している。人通りは私の前後にかなりあるようだ。子供達は面白そうに凍つた路上を滑り楽しんでいる。

私は成るべく往来人との間隙をひらくように、或は遅く、あるいは早く歩いた。スフパートルの石像の傍を通り遠回りする事にした。私は六年位前を思い出す。私が判決をうけるため、護衛つきで初めて内防処の未決から出され、最高法院に行く途中、この広場を通つた時だった。太陽の直射を受けた喜びもさることながら、初めて日本軍の労役状態を見て、走り寄つて、「私は日本人だ。兵隊さん達も御苦勞様です。」と一言の語り合いも、銃剣付き監視の故にできなかった無念さ、じれつたさ。私は最高法院に着く迄、懐かしい日本の兵隊さん達の姿を思い浮べたことだった。あの当時、この石像は只土台しか出来ていなかった。またこの広場は盛に兵隊さん達の手、測量され、土が堀られ、運搬され、整地され、ローラーがひかれていた。わずかに壊れかゝつた家が西側にみえ、大きな建物としては、北側に丸い屋根の旧中央劇場があつた（之は失火のため全焼してしまつた）。位の、荒涼たる荒地であつた。六年後の今日は、荒涼たる荒地が、アスファルトの人民広場と変り、この周囲に中央劇場、政府官庁、迎賓館、オチル、キノチャトル、逓信省、畜産省、レーニンランドクラブ、ラジオ局等全く面目を一新して、立派な官庁街として建設されてしまつてゐる。しかしそれらは筆舌にあらわし得ない日本軍人の尊い血と汗によつて築き上げられたものである。このことは、日本人のよさをはつきり外蒙ウランバートル市民に植えつけた厳然たる事実である。

そんな事を考え乍ら、政府官庁の西側を通り過ぎて、「サテ何処の道を選ぶべきか」と思案に耽つて、暫くそこに立ち停つた。

附近を見廻していると、ふと深い印象が甦えつて来る。内防処が道の向う側に控えているじやないか。未決の通用門かその儘じやないか。又二階の指紋及写真室が二階楼上にあるではないか。ポイラーの煙突にも見覚えがある。附近の様子は變つていても、この建物だけは少しも變つていなかった。忘れんとして忘れ得ぬ建物！

若しもこゝで不審訊問でもされ、文句なしに未決にたゞき込まれてしまえば、どうにもならぬぞと考え、真直ぐ北に向つた。

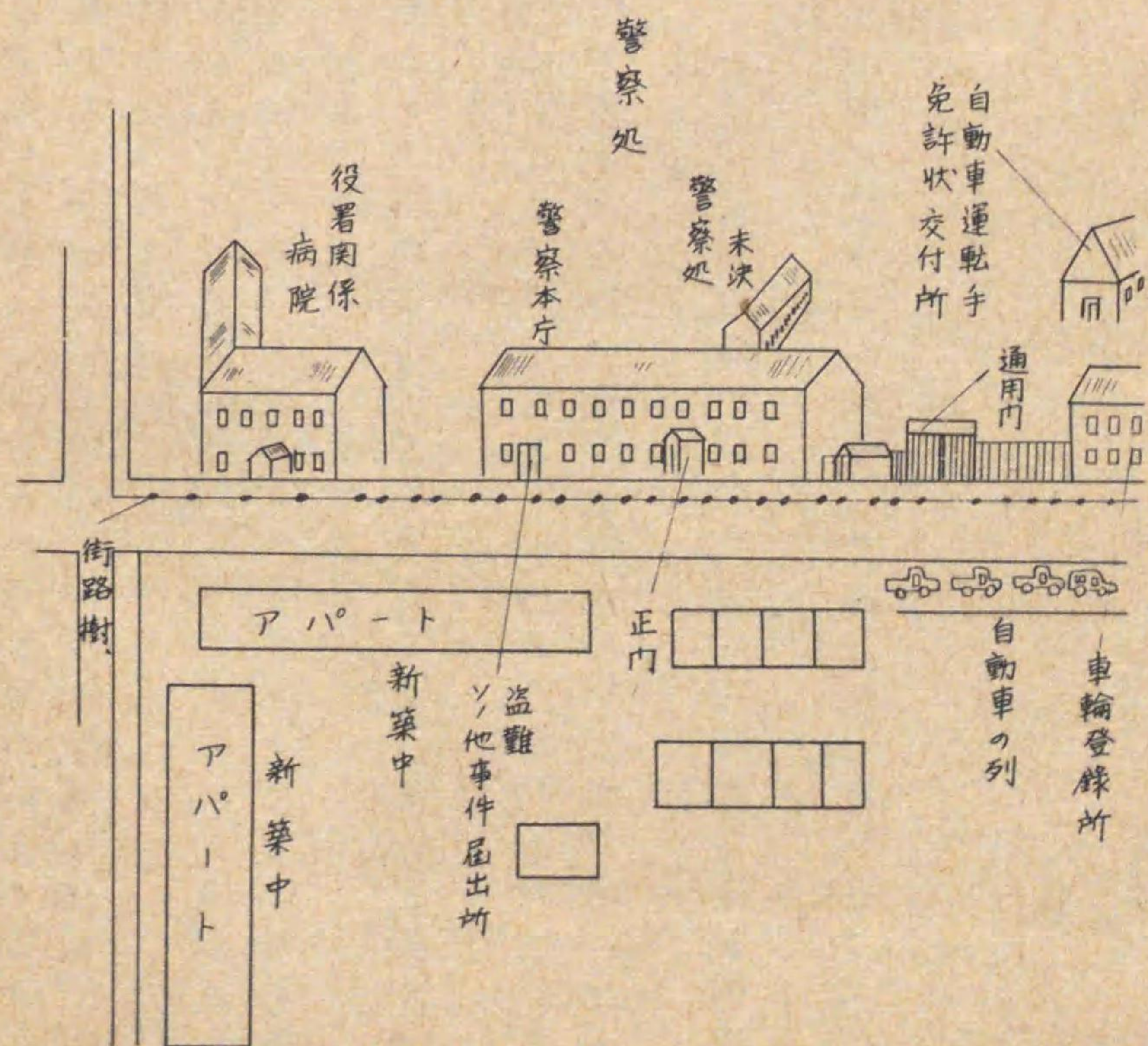
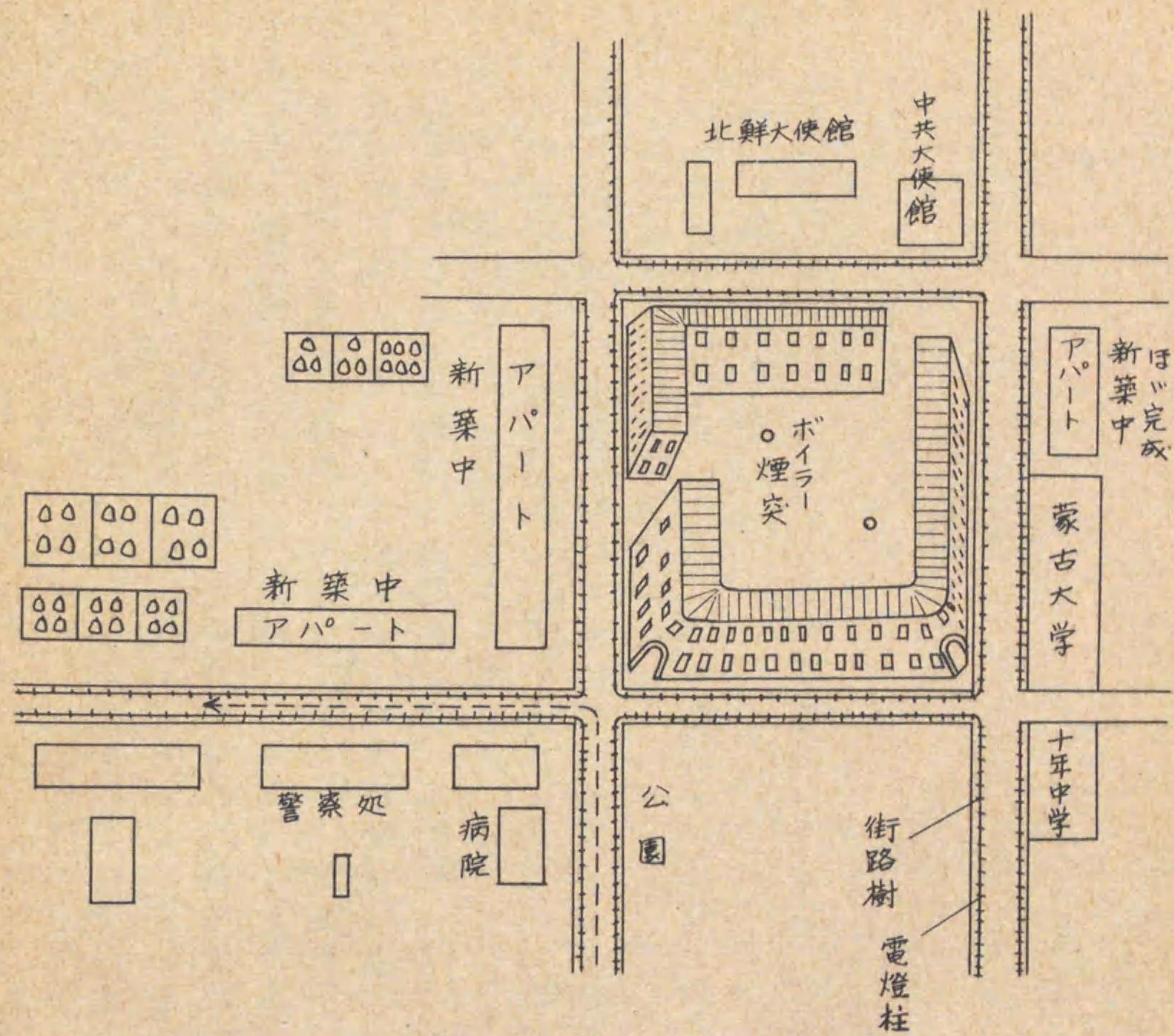
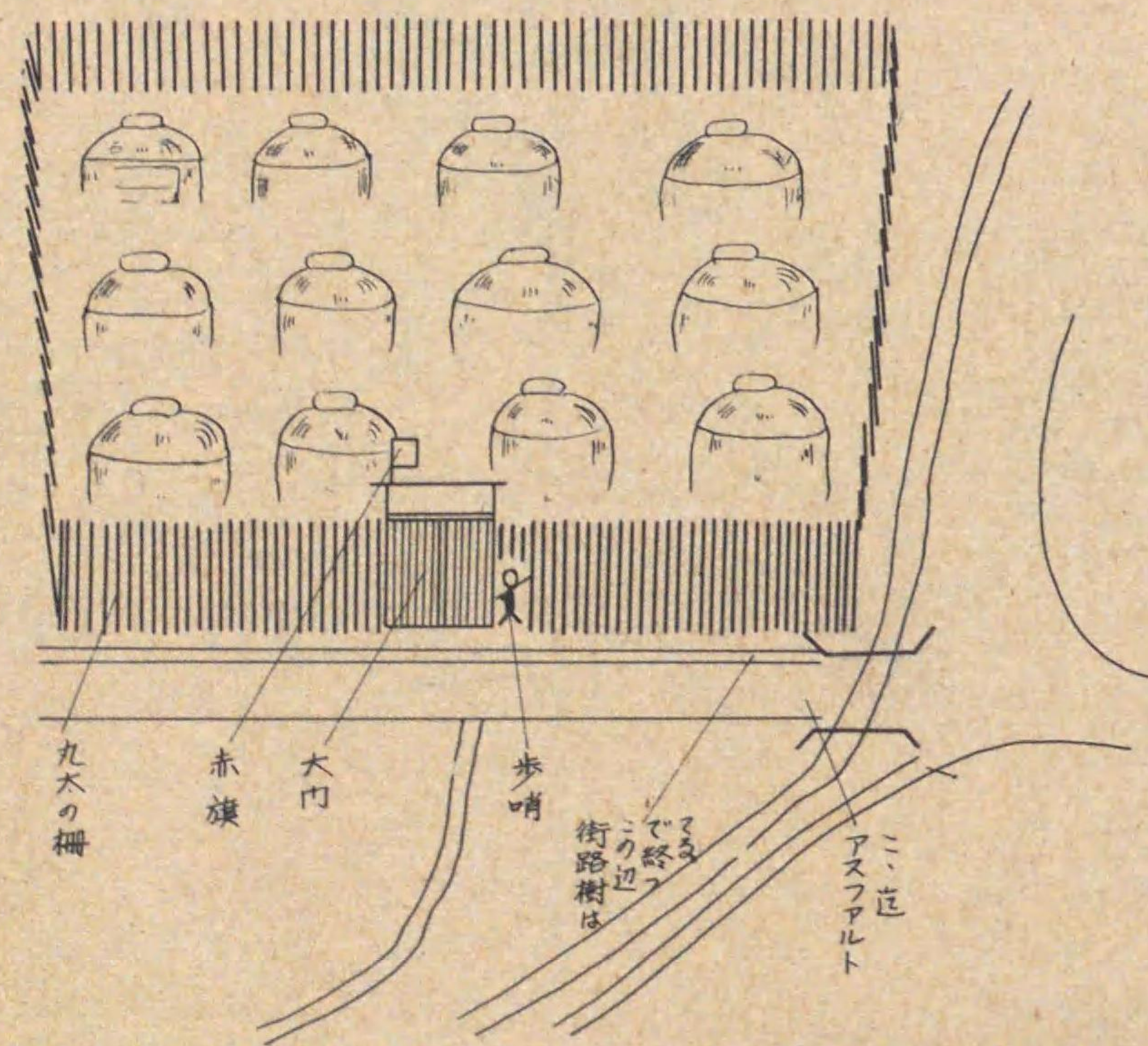


その前を通つてコンクリート橋を渡つた。長さ二・三米位の小さな橋である。こゝ迄はアスファルトの舗装道路であつたが、これからは少しも修理した事のないような悪い道路であつた。この辺に来ると支那人（華僑）に行き会ふ度数が多くなつて来た。きつとこの方面に華僑の集団が存在しているのである。

このコンクリート橋のかゝつてゐる川には、全々水はなく、雪が投げ込まれてあつた。道は凸凹が多く、歩くのに相当注意しないと横転しそふである。向うで蒙古婦人が転んで起き上るのか見える。

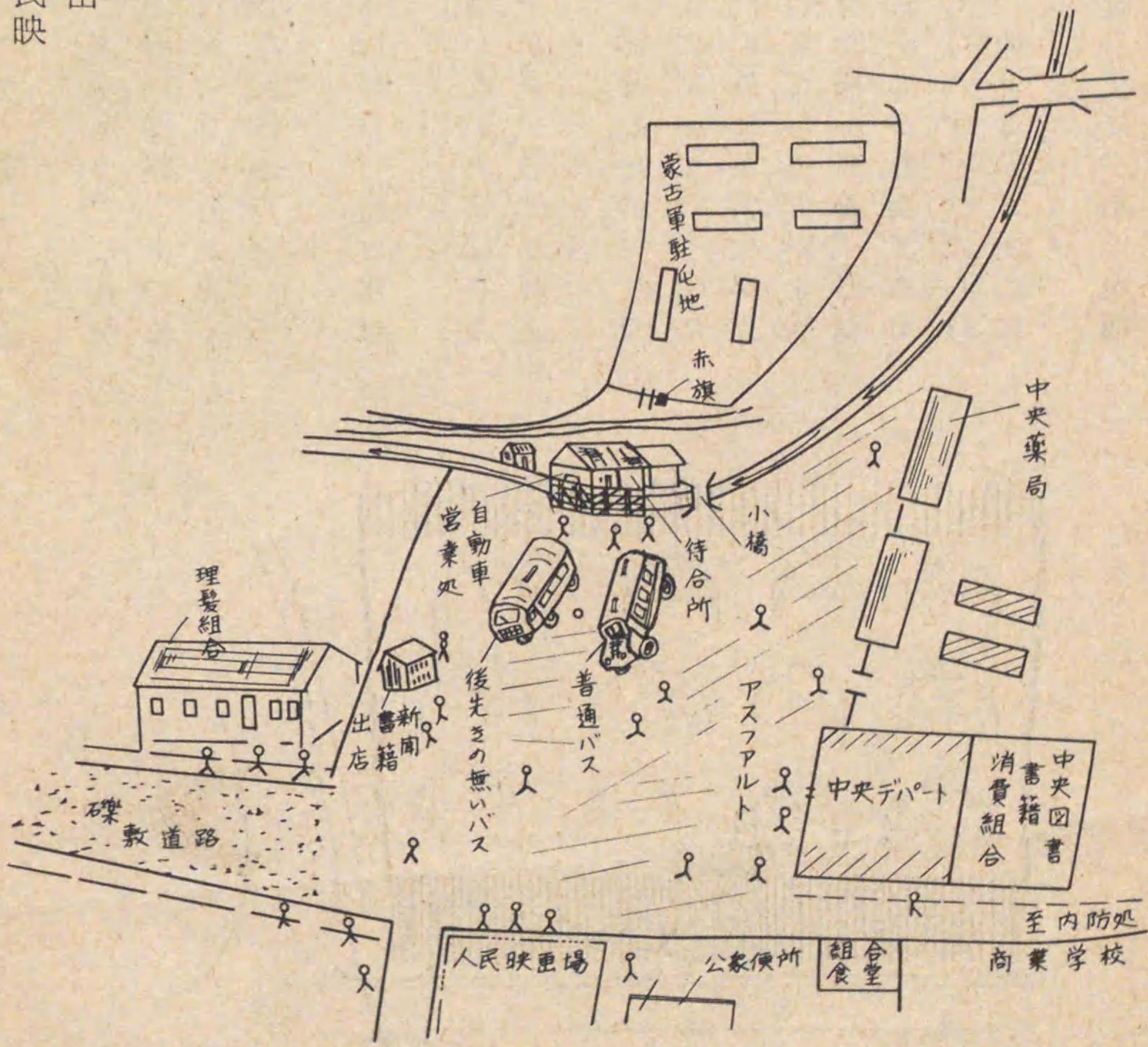
私はこゝからどの方面に行こうかと考えたが、どつちでもよい、人通りの多い方に、人に附いて行く事にした。暫く行くと、赤旗をたてた門の外に蒙古兵が立哨している。何だこんな処に又駐屯しているのかと奇意な感じを受けた。暫く進むと小さな橋がある。自動車は通れない。よく見ると殆ど壊れかゝつた橋である。こんな街の真中にある橋が、修理もされず、穴だらけのまま放任されている処を見ると、仲々この方面迄は手が行き届かないものらしい。

私は沢山の人があるように小橋を渡らずに、小川を横断して対岸にのぼつた。こゝへ出ると、誠に人が多く、黒山と言ひ度い位のにぎやかさである。バスも停つて



いた。見ると最新式のバスらしく後先きのないバスである。一台は普通のバスだが、もう二台とも満員の盛況である。人の往来の激しさに気をとられ、何処に行つてよいか分らない。行き当りばつたりに歩き出す。映画館の前の映画の広告を、黒山のようになつて見ている群衆を押し分けて、道路に出る事にした。

こゝは今迄通つて来た処とは違つて、自動車の往来は案外少いが、沢山の人が右往左往していて、一寸支那町の賑やかな場所を思い出させるのに十分であつた。私は人民映画館の西側を通つて、南へ南へと歩いて行つた。

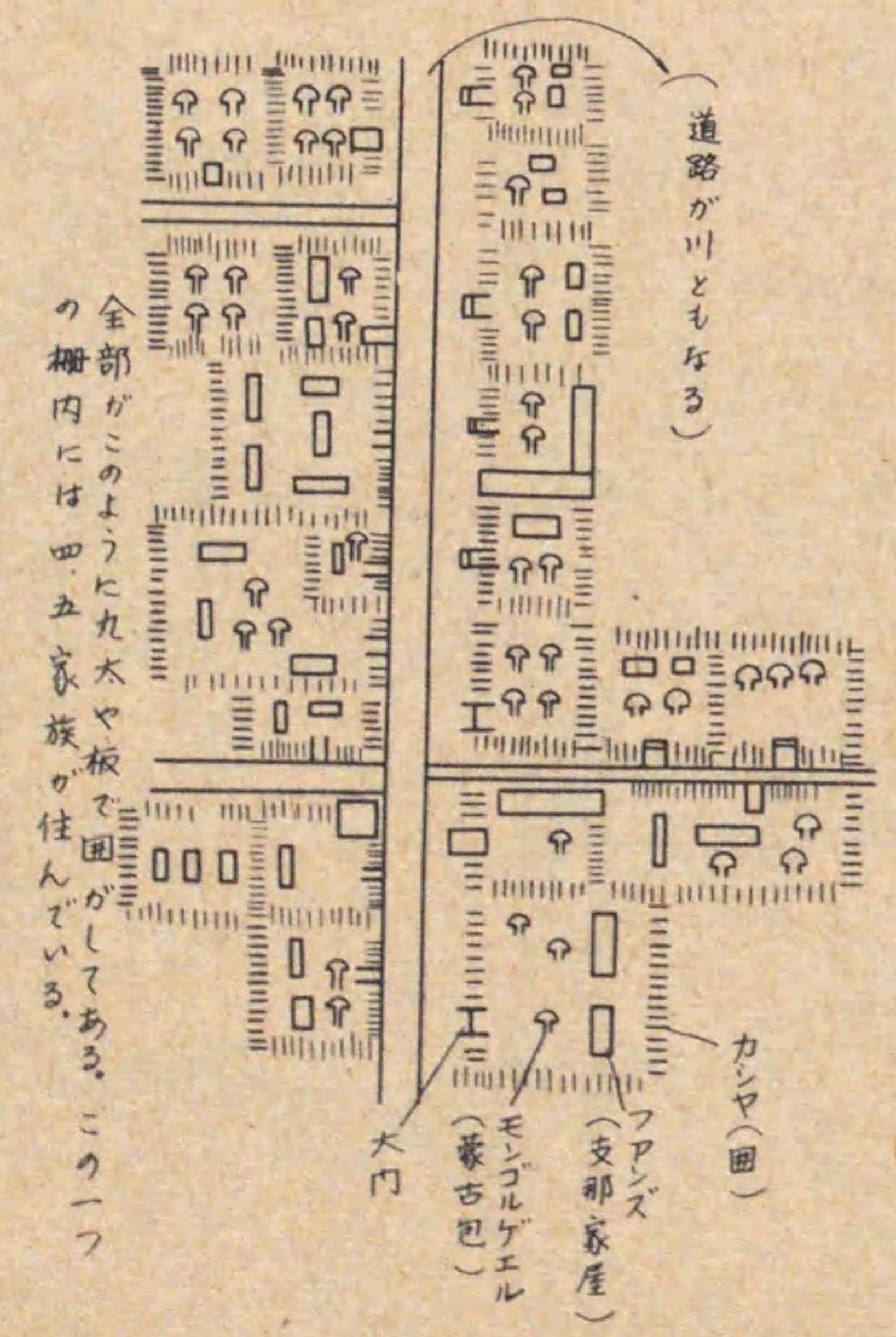


この辺は誠に汚ない道で、雨でも降つたら川になるらしく、道が人家より低くなつている。この辺の柵の中には支那家屋と蒙古包が雑然と立ち並んでいる。このような開か何処迄も続いていた。恰も何年も浚渫しない川底を歩いている感じであつた。柵に用いた材料はすべて落葉楡の丸太で、直径一寸五分から三寸位である。この も高いもの、低いもの、壊れかかつたもの、新しいもの等区で、街の展望も甚だ雑多となつてしまつている。

相当南に下ると、広いアスファルト道路にぶつかつた。之れが基幹道路で、ウランバートル市を東西に貫いている。

この方面は人通りは非常に少くなつたが、自動車の往来は相当あるようだ。しかし中央広場の辺に比べれば非常に少い。

私は大体の見当かついた。そしてこの基幹道路を東に添つて行けば、セレベ川橋に行きつけると胸算段して、思い切つて東に向つた。少し行くと道よりも二・三米高い平地となり、道から一〇〇米位の所に、四階建ての建築物がある。沢山の子供達が庭で遊んでいる。私はふと監獄の中で何回も質問された話を思い出した。「蒙古には四階建のチヨイバルサン名の十年中学校がある。あのような立派な学校がお前の国にもあるか」と。



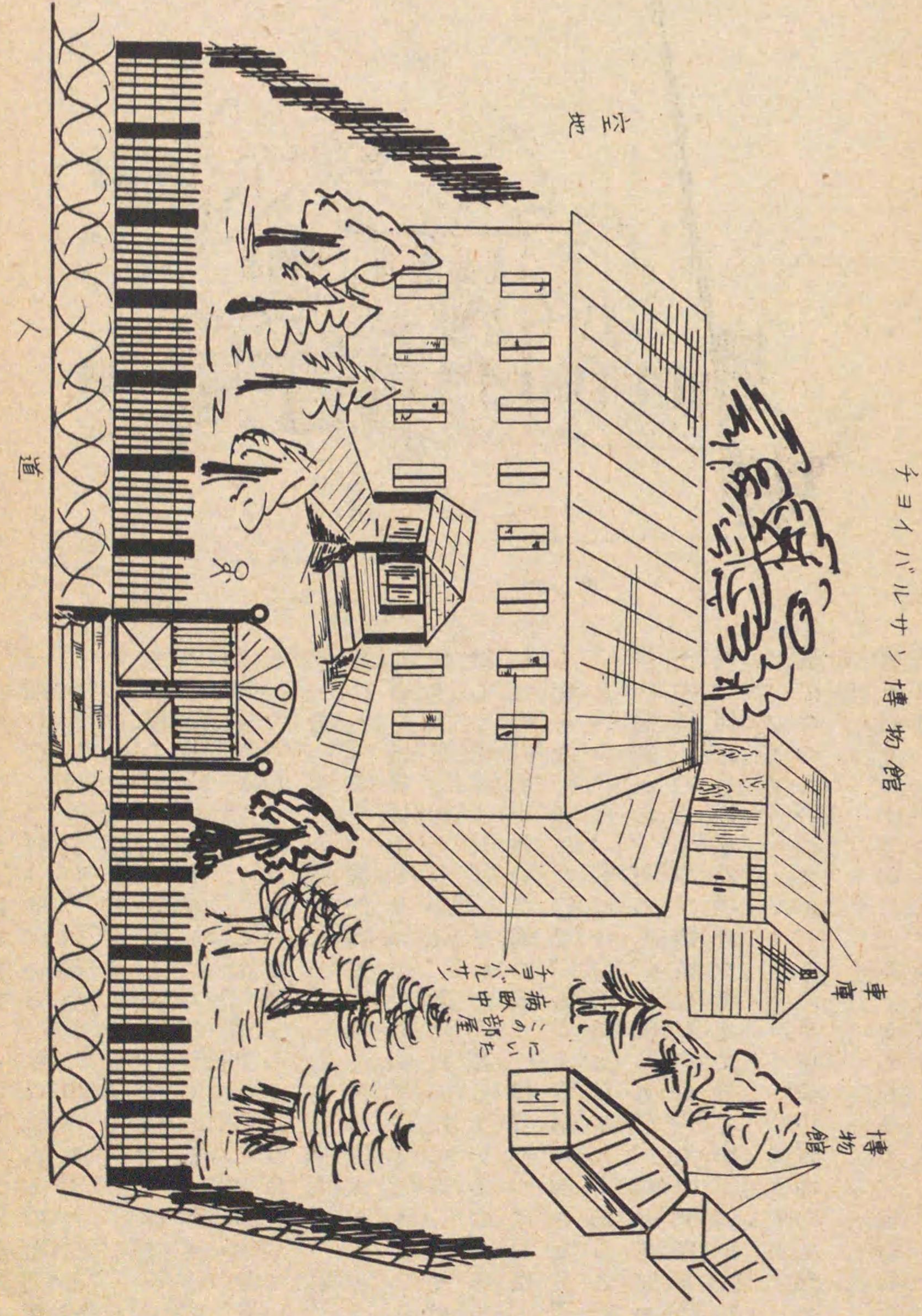
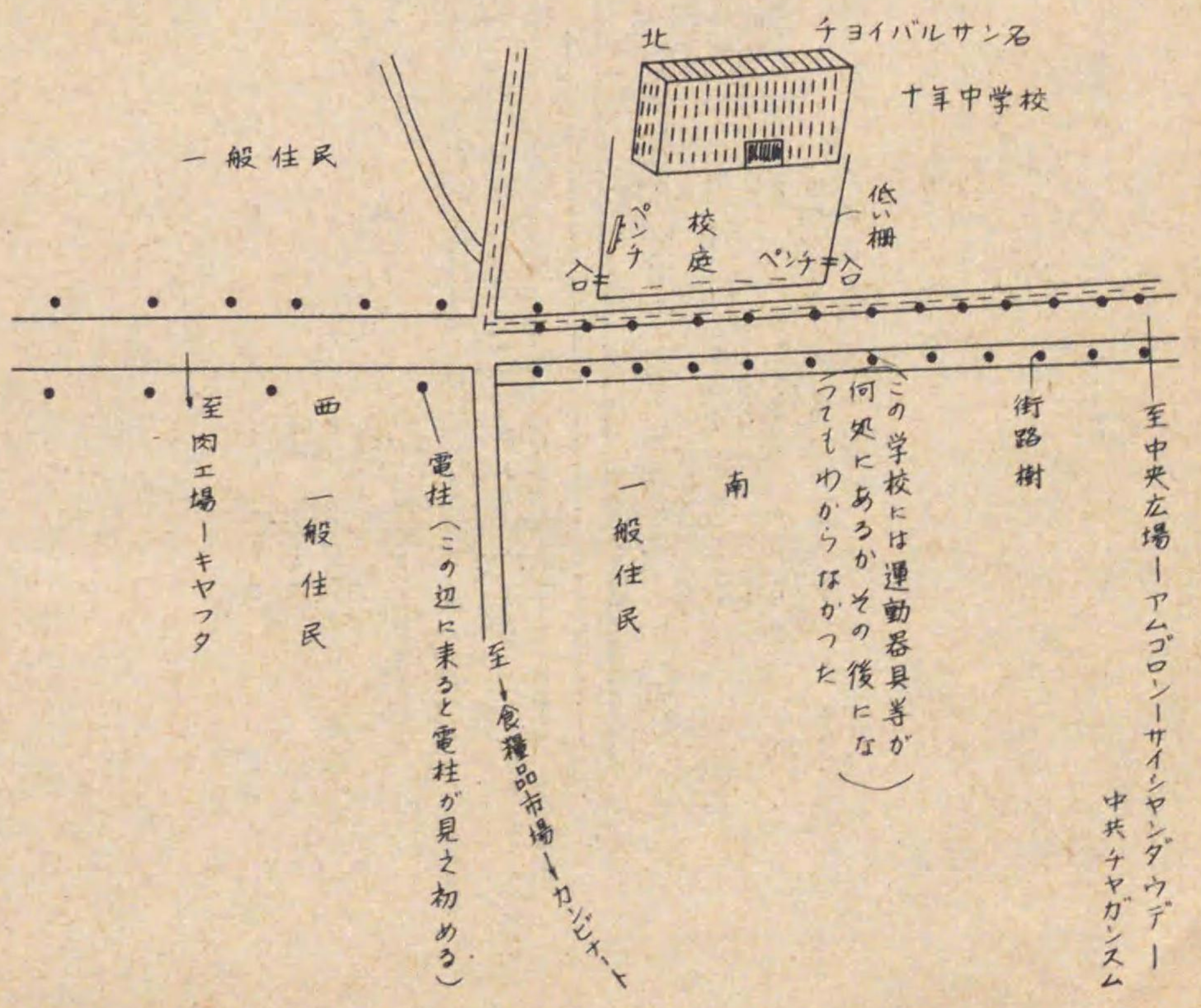
私はその度毎に、この蒙古人の常識外れの質問を聞き捨てにしていたのだが、今はからずも、その四階建の十年中学校にお目にかゝつたのである。

私は中学の過程が十年だと解釈していた。ところが後で分つたことだが、そうではなく、小学から中学までの過程で十年ということであつて、道理で今この庭で遊んでいる子供達の余りにも小さい身体であるのもうなずけるのであつた。

十年中学校は男女共学で、満七―八才から入学出来る。これにも考査があつて、成績の良いものから採用している。小学程度四年、初級中学程度三年、高級中学程度三年、計十年である。

この小さい学生達は男女共に赤いネクタイを結んでいる。赤の思想、社会のみが存在するというこの象徴でもあらうか。

その学校の東一〇〇米位の処に、鉄柵で囲まれた豪華な二階建が庭木の間から見え隠れしている。鉄門の所に警察官が監視している。誰か要人でも住んでいるのかと推定せしめるに充分であつた。彼等の国では、一寸重要な公共施設には必ず監視員がついている。後になつて分つたが、これがかつてのチヨイバルサンの官邸であり、現在は彼の遺品を蒐集してあるチヨイバルサン博物館であつた。



基幹道路の南側には相当立派な建物がポツリポツリと並んでいた。私にはそれ等の建物がどんな関係にあるものか少しも分らなかつた。しかし私が六年前、最高法院における裁判をうけるため連行された時はこの辺一帶はすべて廻り返され、何処を通つて良いか分らん位であつた。その当時この辺一帶は建物らしいものは無く、わずかに最高法院だけが、建設中の道路の南側にあつたにすぎない。それも今のラジオ局あたりに位置すると考えられたが、改築せられたものか、その面影に接することはできなかつた。道路はコンクリートがアスファルトの立派な補装道路となり、街路樹に交つて街燈の柱が立ち並んでいる。ウランバートル市の中心地とも言うべき中央広場の附近だけは、電線は総べて地下にもぐり、建物もぼつりぼつりであるが建ち並んでいる。今日日は誠に短い。私は正午頃出たのに、もう夕方である。三時を廻つた程度であろうが、夕暮の気配は充分して来た。暗くなつてから不案内な処で迷子になつては大変と思ひ、消費組合（ホリシヤ）にも寄らず、夕食しようと支那飯館子に飛び込んだ。

私は土で作つたストーブの側に寄つて暖を取つた。防寒帽をとり、手袋を取つて食卓の上に置いた。年とつた華僑が出て来て、蒙古語で、

「何を食べるか」と私に聞いた。私は

「どんな物があるか」と質問して見た。

華僑は支那語の名称を蒙古語に直して三つ四つ早口に言つたが、私にはそれがどんなものであるかさつぱり分らなかつた。仕方ないから、「麺条子があるか」と聞くと、

「四トコロゴと三トコロゴ五トコロゴの二種類ある」という

「汁はあるのか」

「三トコロゴ五〇モングの麺条子は汁物だ」
「ではその汁物をくれ」。

その華僑が調理場に行つて行くので、調理人に麺条子を作るように連絡したようだ。

机の上には、支那酢をサイダービンに少量入れて置いてあつた。その他お皿に少量の食塩が置いてあつた。これも全部の机においてあるわけではなく、この部屋の一個所の机に丈置いてある。

そこへ一人の老婦人が入つて来て、

「アソコの入つた饅頭があるか」と華僑に尋ねた。

華僑はあると答えたようだ。

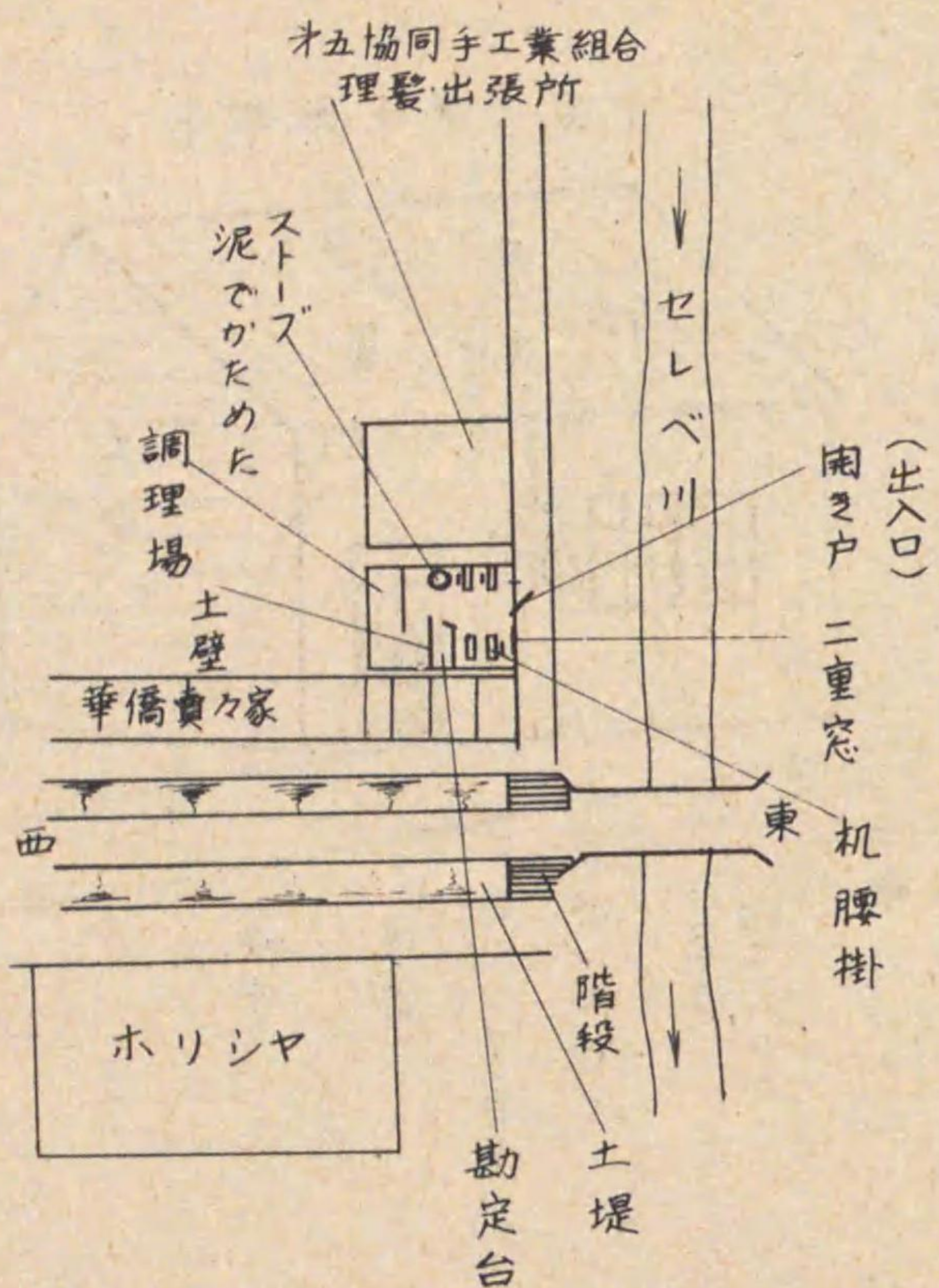
老母はやおら角の机に陣取り腰を下ろした。そしてあんこの入つた饅頭一個、入らない饅頭一個を持つて来るように言いつけ、なおお金の要らないお茶を持つて来いと注文した。華僑は私が暖を取つているストーブにかけてある大きな薬罐から、煮つめたお茶を茶腕に注いで老母の所へ持つて行つた。そして調理場に入つて行つて、瀬戸物の皿に大きい饅頭と小さい饅頭とをとりそろえ、老母の前に運んで来た。

彼の老母は実にみすぼらしい姿だつた。如何にも生活にやつれた、いたましい面影が深くきざみつけられていた。老母はお茶を何杯もお代りして二つの饅頭を食べ、蒙古服の内カクシにしまつてある銭入れから、丁寧に折疊んだ一トコロゴの銭幣を抜き出し、だまつて机の上に置き、その儘扉から出て行つた。この老母の出て行つた後のうす寒い零塵気は、何時迄も、この食堂から消えなかつた。

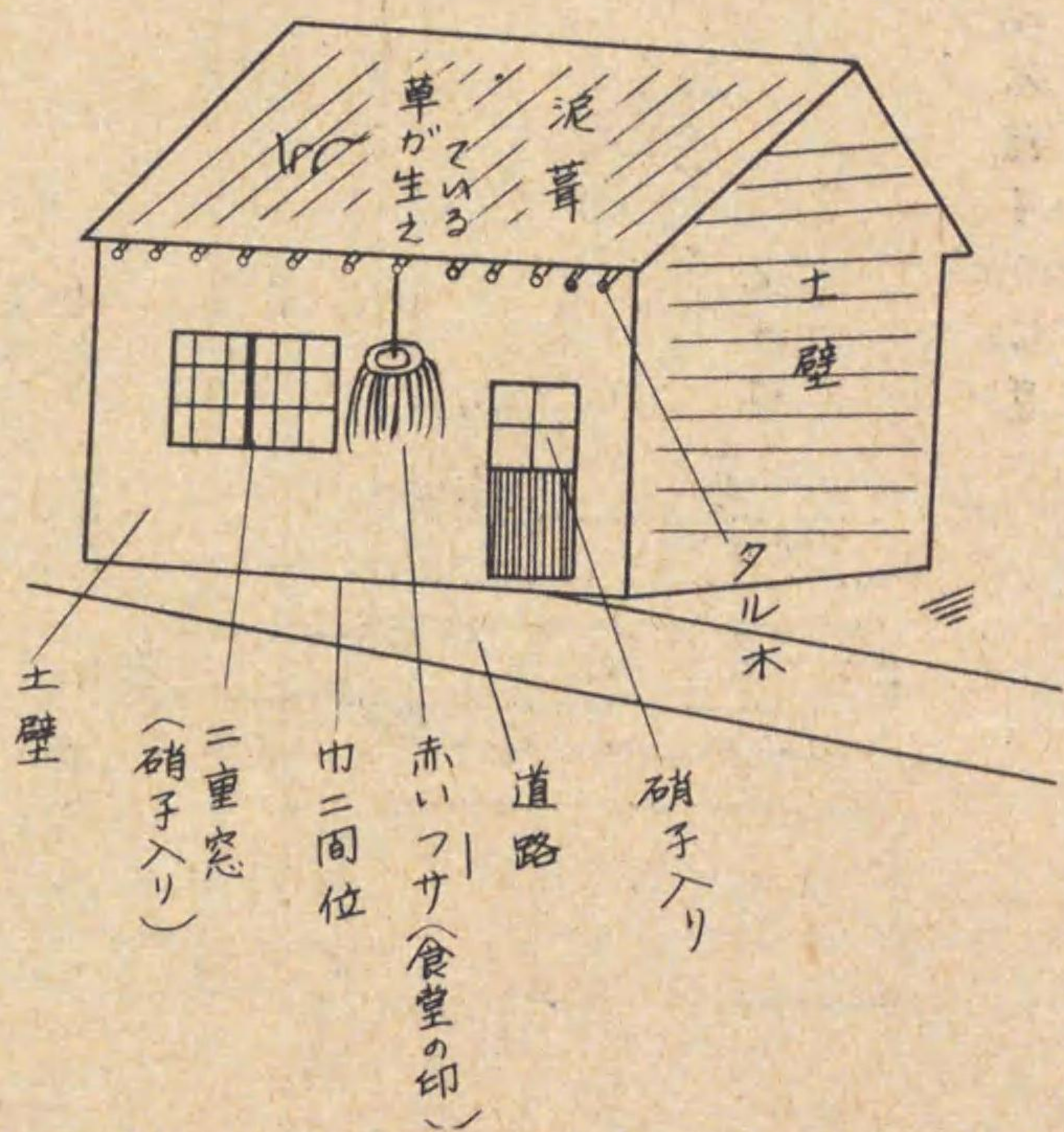
そのうち華僑は汁の麺条子を私のところに持つて来た。私も腹が減つていたので、早速とびついた。何とお美味しい麺条子であろう。七・八年この方全々味わつた事もないお美味しさであつた。

支那酢のサイダービンを取り寄せ、少量入れて味わつて見た。これも特殊な味があつて、食欲をささうので

中国飯館子の位置



中国式華僑飯館子



五〇

あつた。しかし監獄から出て来た者にとつては、量が余りにも少な過ぎた。

私は老母の注文したように二つの饅頭を追加した。華僑は直ぐ持つて来てくれた。私は大きな饅頭を千切つて汁の中に入れて食べた。これもお美味しかった。饅頭もよくふけていた。監獄ではこんな上等な饅頭を作れなかつたし、又上等な粉もなかつた。

アンコの饅頭を一つ味わつて見た。中にアンコが入つていた。このあんこは小豆ではなく豌豆らしかつた。砂糖で味付けしてあり相当甘味がきいていた。

この饅頭は、丁度日本の田舎饅頭と余り変りはない。私は生きているかどうか分らない故郷の母親に思いを馳せていた。私の母親がよくこの饅頭(焼もちと言つた)をふかしてくれた。母親がふかすそばから、兄弟の多かつた私達は、われ先にと食べた。ふかすの間合わぬ事もあつた。その時の母の困つた様子など私達幼い者には何ともうづらなかつた。私はさつき淋しそうな老母に比べ、日本の母の健在を願ひ、そして母の作つてくれる饅頭はきつと素晴らしくうまいであるうと、遙かに惚ぶばかりであつた。

私はこのアンコの入つた饅頭を十個持つて行くから紙に包んでくれるように華僑に頼んだ。華僑は直ぐ包装してくれた。こんなお客は珍らしいらしく、頭をペコペコ下げながら、愛嬌を振りまいていた。

私は十トゴゴの銭幣を取り出し、五十モングの釣銭を貰つてそこを出た。外へ出て見ると薄暗かつた。私は帰路を急いだ。

家主の処から鍵を持つて来て開けた。部屋は全く冷たく、沈黙していた。私はペイチカに火をたきつけた。しかし割木は少なかつた。私は丸太を割らねばならなかつた。暫らくしてバルトンが帰つて来た。

「丁度よい処に帰つて来た。私はさつき帰つて来て、ペイチカをたきつけた処だ。直ぐお茶を沸かすから。」

「そんな事はいらぬ。私は直ぐトーチテンバースに出かけねばならない。」

「飯館子から饅頭を買つて来てある。一諸に食べて行つたらどうか。」

「じやお茶でも御馳走になつて行くか。」

私はお茶が直ぐ沸くように薬罐に少量の水を入れ、団茶を削り入れた。私とバルトンはペイチカにあたりながら、今日自分が通つて来たウランバートル市の状況を話し初めた。バルトンは私の話をうなずいて聞いていた。

「中央デパートというのはどの辺にあるんだ。今日一生懸命探したが見つからない。実際よく歩いたものだし、三・四時間は歩いたろうなあ。」

「中央デパートは直ぐわかるよ。内防所を知つているだろう、その前を通つて西に行けば、沢山の人々か扉から出たり入つたりしてゐる、窓は特別大きいから直ぐ分る筈だ。あの辺で二階建の建物は中央デパートだけだから、知らない者でも分る筈なんだかね。」

「バスの停つてゐる処だよ。直ぐ東側だ。沢山の人々が右往左往してゐるから誰でもあれが分らん筈は無い。」

「その場所がどうしても分らなかつた。兎に角、バスが停つてゐる処は人通りが多くて、それに気を取られ、二階建ての建物なんか気がつかなかつたんだ。」

「中央デパートの北側の並びに、中央アプテーク(中央薬局)があるよ。この薬局で、入院患者以外の総ての患者に対して薬が渡される事になつていんだ。お前が若し身体が悪い時は私が処方箋を書いてやる。良い薬が買えるよ。」

「それは良い事を聞いた。私は長年淋肥腺炎で苦しんでいる。なお神経痛のように腰が痛くて困る事がある

。どうかこれに対する良い薬を書いてくれないか。」
 「よく分つた。一番良くきく薬を処方箋に書いて置くから、後でそのアプテークに行つて置つて来たらよ
 だろ。」

と言いなから、手帳の紙を四つに切り取り、一つに病名と状態とを簡単に書き、その側に薬名をロシア語で
 書き、最後に彼のサインをしてくれた。

これが私の淋肥線炎と神経痛の処方箋であつた。何にも知らない処で、何一つ自由に出来ない現在の私にと
 つて、こんな嬉しい事はなかつた。

「この処方箋は誰でも書く事が出来るのか。」

「大医者は勿論書くが、小医者の中でも、ソ連に留学した者とか、大医者の代診を勤める小医者ならば書く
 事が出来る。」

「そうすると貴方はソ連に留学したのか。」

「そうだ。ソ連に留学したのだ。革命後五年位過ぎた頃だつた。政府の命令で初めて田舎からこのウランバ
 ートルに出て来た。その当時、私は十八才の紅顔の美青年だつたが、何が何だか分らず、十五、六名の者と
 一諸に、モスコーに向つて出発したのだ。」

「ほう随分前の事だね。」

「そうさ。ソ連に派遣された最初だつたから、政府でも色々面倒を見てくれた。兎に角服装は全部官給品、
 日用品も支給されるなど全て準備してくれた。道中の小遣金は一文もくれなかつたが、途中何処へ行つても
 不自由しなかつた。向うの学校に入つてからは、一月小遣金として五トコロゴ（当時の金高）位くれたよ
 。それでは足りないから、学校の先生であつたドイツ人に無心を言つては借りて使つていた。このドイツ人
 の先正は気概のある先生で、いつも祖国ドイツの医学の進んでいる事を吹聴していた。実際ドイツ人は進ん
 だ頭を持つているね。」

「向うではロシア語で教授を受けたのか。」

「そうだ。大体一年位は語学の勉強、後の二年間は医学の勉強だつた。」

「何処に学校があつたのか。」

「モスコーだ。医学を専修した者は僅か三名で、後の十二、三名は軍事関係の学門を受けた。」

「本当に大先輩というわけですね。」

「それは大先輩にはちがいない。しかし今の医学と昔の医学とは格段の差だよ。大先輩だと言つて意張るわ
 けに行かぬよ。」

「そういうものですかね。」

「モスコーにいる時、留学生一同が夏休みを利用して黒海に遊びに行つた事がある。仲々良い処だね。あの
 辺はカザク種族が多いようだ。彼等は生活が益々苦しくなるので、スターリンの悪口を平気で言つているのに
 には驚ろいたね。」

「成る程、スターリンの悪口を口外しても何の罪も着ないのか。」

「その当時は何にも無かつたが、今日はそうは許さないだろう。」

「どのような悪口を言うのかね。」「それは衣食住に限つてゐる。政治的な事はわからないから、只どうかし
 て楽な生活がしたいと言う事から、不平不満が飛び出すんだ。」

「やつぱりソ連でも不平不満があつたわけだね。」

「衣食住の問題になつたら不平は沢山あるよ。外蒙だつて、今になつても、不平不満を言う者が沢山あるか
 らね。」「不平を言う者があつても、政府はそれを放任しているのか。」

「不平を言う事はよくないさ。しかし生活が苦しいんではどうにもならんじやないか。だつて夜昼勤めて
 四〇〇トコロゴ位しか貰えないからね。普通の者が（官吏を指している）二、三百トコロゴと言う処だ。」

私は今迄家内と一諸に働いていたので生活が楽だつた。今度家内がソ連に引揚げてからは仲々苦しくなつて
 来たよ。家内にも子供にも少し物を送つてやりたいと思うけれど、それも出来ないでゐるんだ。」

「フウフン（夫人）から手紙が来るのか。」

「向うへ行つてから二度来たよ。みんな丈夫らしい。皮の外装は向うに無いから非常に値段が高いそう
 だからそういうものを送つてやりたいと思うが、こつちだつて良いのになると一、〇〇〇トコロゴはする
 かね、中々手に入らんわけさ。向うは牛乳が安く沢山飲めると言つて来ているよ。外蒙古には家畜は沢山い
 るけれど自由になるものは少い。殆ど割当制の供出に持つて行かれ、余裕と言うものが非常に少い。その為

に外蒙古は牧畜国でありながら、家畜・畜産加工品はソ聯より高いものが多い。ソ聯から輸入しているものさえある位だ。」

「そんな事は無いだろう。蒙古は牧畜が主体だから畜産品は特に安くてよい筈だ。しかるにそれと反対な現象を来たしているとは、聞き取れない。」

「まあ、お前暫くの間市民生活して見る。段々分つて来るよ。何しろ生乳一リツトル五トコロゴもするのだから、普通の家庭では乳茶を飲むという事はめつたにない。ホンにたまたま乳茶を飲む位がせきの山だ。又牧畜従事者だつて自由に飲めるわけではないよ。昔は捨てる程生乳はあつたものだ。しかし現在は全家畜数に対し供出割当制が出来ている。それを必ず納めねばならぬ為、少ない労働力の所有者は大家畜の所有者が出来ない。労働力に比例した家畜頭数でなければ割当供出量を充足する事は出来ない。だから誰でも余裕のある家畜数を持ってない、ぎりぎり一ぱいと言う処だから、自家用に生乳も余り飲めないという事になるんだ。」

「では小人数の家では多数の家畜を飼う事は出来ないわけですね。その労力を補うため機械化でもやつたら良いだろうに……。」

「それも考えられるが、現在の蒙古の文化水準では機械化する丈の段階に到っていないんだ。益々家畜数は減つて来る様子だから、政府としては全力を尽して計画的に家畜増殖に拍車をかけているか、思うように行かぬらしい。遊牧民達は所有家畜を全部売り払つて、ウランバートル市に移住して来る者も有るようだ。」

「成程ね。私にはさつぱりそんな事は分らない。家畜を売り払つてウランバートルに移住して来るとはいつたいどうした事だろう。家畜が斃死したか狼害にやられたかして、生活が出来なくなつたからだろうか。」

「まあ色々な事情はあるが、ウランバートル市の都会生活の方が生活がし易いと言う事だろうね。」

「蒙古人は牧野地帯にいたら家畜は自分のものだし、自由に殺して肉食が出来るから、牧野生活の方が楽しいやないのかなあ。」

「牧野地帯だつて思つたより自由に肉は食えないさ。家畜と言う家畜は全部登録されているからね。自由に屠殺したら大変だよ、すべて許可を得なければならぬ。狼害にあつても証拠物件を持つて、獣医の判定を受ける上で登録簿から抹消してもらうのだ。それも抹消されないことだつてあるんだ。」

「おやお茶が沸いたぞ。温かいお茶を飲みなさい。此処にアソコの入つた饅頭があるが如何ですか。」

「これは御馳走だね。私は甘いものはきらいだが、この饅頭丈は好きだ。」

「そうですか。」私は飯茶碗を取り出し、たつぷりお茶を注いでやつた。

彼も腹が減つていたと見え、三ツ四ツたいらげた。

私は飯館子で腹一ぱい食べて来たが、それでもなお二個食う事が出来た。彼は又話しかけた。

「ト―ヒーテンバーズに行つて診断して帰りは途中の部落に泊る。そして明日は二十四時間勤務の当直に当るから、明後日は一日休みとなる。その日はホリネ・ダラガー(二十家長)を訪ねて、居住証明書を貰うよう交渉しよう。お前も中央監獄事務所へ行つて、積立金でも貰つて来るかい。私か大門の処で当直しているから案内してやるよ。」

「そうしましょう。早く積立金を貰わん事には生活が出来ない。貰つたら肉や野菜を買つて貰う事にしよう。」

「肉と野菜・石炭・薪炭等はラーガルに注文してあるから心配しなくても良い。」

「石炭を早く持つて来て貰わん事にはこの部屋は暖かくならん。」

「石炭はここへ二袋運搬してくれ

る事になつている。それ以上配給にならない。」

「それはよかつた。材木だけ燃していると不経済でいけない。石炭だと長持ちするから経済的だ。」

「それじゃ、私はト―ヒーテンバーズに行くから、明日は中央監獄に来るよ。」

「え、よく分りました。必ず十時頃向うに行くから何分御願ひします。」

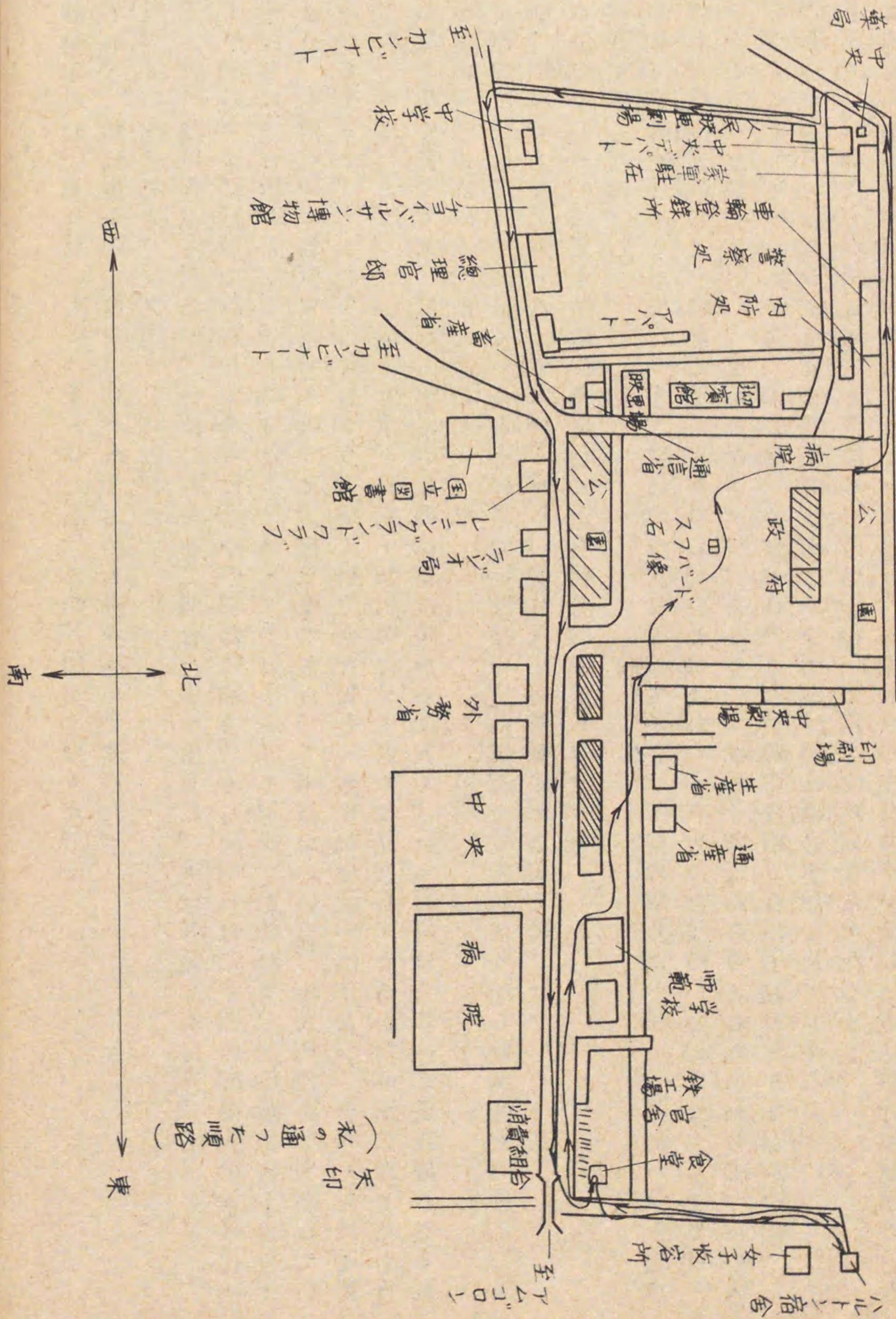
「うん、そうするんだね。」

と言いなながら、手套をはめて出て行つた。私は彼を送り出してから、部屋の暗くなつてゐるのにハタと当惑した。今晚も又昨晚と同じように燈心でぼんやりしていねばならぬかと思ふと実際のやになつてしまふ。昨晚の残り少なくなつた油をとかし、燈心をひきたて、あかりをつけた。薄ぼんやりとしたあかりの中に一人ポツネンとうずくまつてゐる私の頭の中には、今日一日のことが走馬燈のように明滅してやまなかつた。あんな処に中央デパートがあるとは全々考えてもみなかつたが、明日は必ず探し当て、やるう。

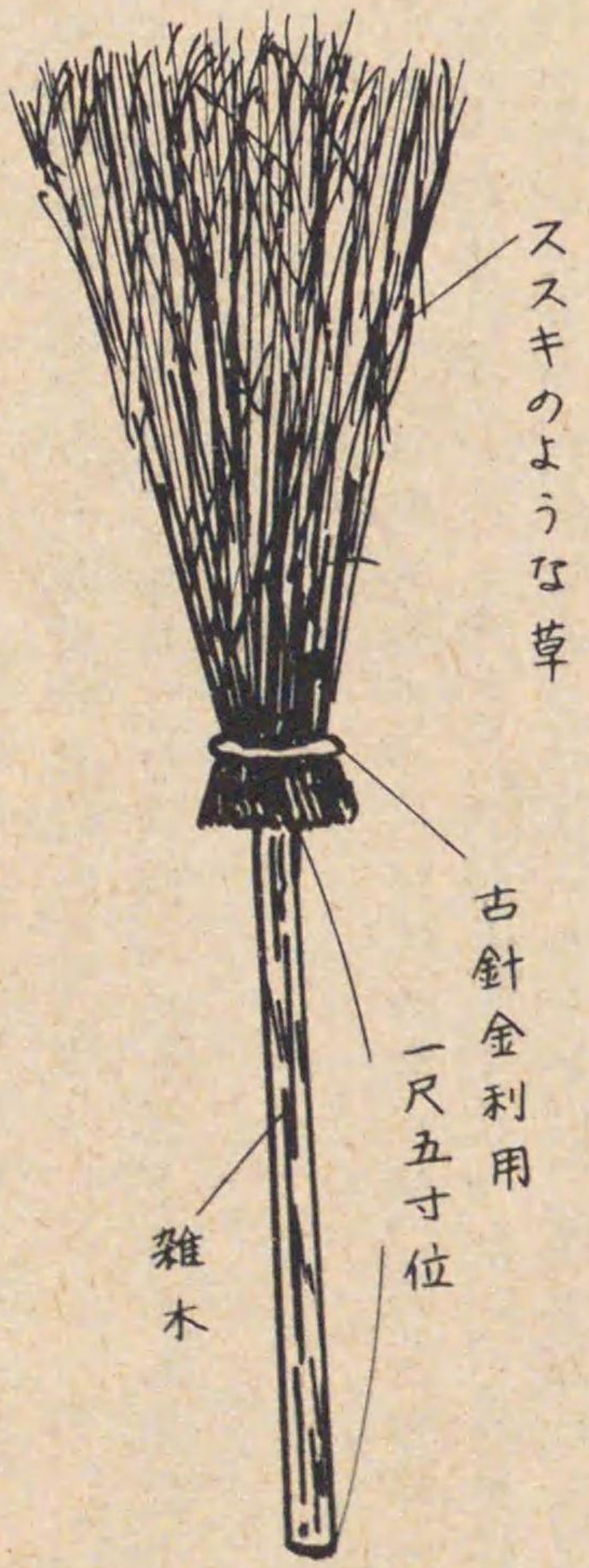
夜も刻々と更けて行つた。昨晚と同じようにヒザ小僧を抱いて寝なければならぬか……。

この部屋に時計が無いが、何処かあるまいかと思ひ、バルトンの寝台の下を探したら枕時計が転がり出た。ねじをかけても動かない、冷え切つてゐるので、ペイチカの上において暖めたが何の音沙汰もない。

私は暇つぶしに機械を分解して見た。ラセンが曲つて重なつてゐた。それを直して動かしてみると、今度は



簡単に動き出した。時計を持って隣りの家主の処に時間を合せて出かけた。
 出入口から入つて見ると華僑の家主が盛に内職の箒を作つていた。
 私は入るなり「サイハンバイノオー、(御気嫌いかが) イフウアシルタイバイナー、(非常に仕事が出来ますね)」と声をかけると、彼も「サイハン、バイナー、テイモ、イフウアシルヒイガウゲエ(お蔭様で、それ程大して仕事はしていない)」それでも彼の傍らには五・六本の箒が出来上つて並べてあつた。
 彼は仕事になれていて技術も或る程度うまいが、しかし上品なものは出来なかつた。



(一本五、六トコロゴで売買が行われる。)
 この箒はどの家庭でも欠くことのできないものだが、一年に一・二本位しか消耗しない。蒙古人は一般に部屋の掃除を余りしないから消耗率は低い。さてこの材料費だが、これは殆んどただである。針金は古いものをペーパーで磨き二廻しか巻いてないし、箒になるススキのような草も山から採取して来たと言つておつたし、柄も雑木で、これも附近の山から取つて来たものかもしれない。労力も自家労力であるから、五、六トコロゴがまるまる収入となるわけだ。彼はこの内職を毎夜はしなかつた。たまたまやる程度であつた。それでも一晩やれば十本位は楽に出来るので、五日に一回の割合で内職するとしても一日平均十トコロゴの副収入が得られるわけだ。
 私は時計を合わせて帰つた。もう八時半を過ぎていた。昨晩は寒くて眠れなかつたが、今晩は少しは暖かい

ようだ。それでも寒さは身に沁みて来る。

ペイチカに割木を入れて、なるべく火種を絶やさないようにせねばならぬ。私はペイチカの側に寝具を拡げ、幾分なりとも温めておこうとした。それにはペイチカを相当燃やしてやらねばならなかった。しばらくすると余り火力が強いのか、天井紙がビリビリと音をたてて裂けてそこから天井の寒い風が吹き下す。私はたまらなくなり鍋に粉を入れて糊を作った。新聞紙を見つけた。バルトンはプラウダを購読していた。私は彼の寝台の下から二、三枚取って来て、裂けた場所に貼り始めた。処がその紙が乾くと貼った処から又裂けて来る。全々手の下しようもない。バルトンの貯えてあつた十五、六の新聞紙を殆ど使い果してしまつた。実は後になつてバルトンが知り非常に残念があつた。それは外蒙に於ては紙と言うものに実に不自由して、バルトンもこの新聞紙を大切にしていたからである。この一事からしても外蒙の文化水準がわかるというものである。

時間は十一時を過ぎた。寝台に支那布団を敷いて、着の身着の儘横になる。

明日は中央監獄に積立金を貰いに行くんだ。そして若しかしたら同囚達にも会えるかも知れんと思いつつ。

(2) 積立金請求

目が覚めて時計を見るともう九時近い。慌て、身仕度をし、ペイチカに火を入れ、お茶を沸かした。昨日買つて来た饅頭をペイチカにのせて暖めた。暫らしてお茶も沸き、饅頭も暖くなつた。それを朝飯にして、宿舎をとり出した。中央監獄の大門に行つて見ると、当直であるべきバルトンは、席を外して守衛所にはいなかった。

私は大門の守衛にトクトールを見せ、積立金の請求に來た事を述べ、経理部に入れてくれるよう頼んだ。守衛も仲々返事をしてくれないので、三十分位待つたであらう。そこへ私の知つてゐるヂチュールがやつて來た。私は積立金の事で経理部に來たのだが、中へ入れてくれないので困つてゐる、何とか便宜を与えてくれないかと頼むと、彼は守衛と連絡した後直ぐ門を開けてくれた。私はその足で経理部に出頭した。大體の見当はついていたので、人に尋ねる事もなく無事にその経理部に入る事が出来た。そこでソヨルジャツプを尋ねた。ソヨルジャツプは終戦前、興安北省公署弘報股長であつた。日本語が非常に上手だ。彼の兄は旧制

東京第一高等学校二年生の時肺結核のため東京で死亡してしまつたが、仲々頭腦明晰であつた。其の弟である彼も又兄に劣らぬ程であつた。ハルビン学院（ハルビン大学）を卒業し、直ぐに北省に官吏として勤める事になつた。彼の家は仲々の名望家で、貴族だと言われていた。彼は終戦後北省（ホロンバイル自治政府）から外蒙古党大学に派遣生として留学してゐた。三学年も終つた頃、雑談の合間に、何かのきつかけで前歴が出てしまつた。それが上司の耳に入り、早速内防処未決へと送り込まれ、刑期二十五年の判決を受け、中央監獄に投監された來たものであつた。

彼は中央病院付教化者、生産部教化者となり、特別禁個二カ年近く監禁され、それ以後、生産部鉄工班、書記、教化者又は生産部教化者兼経理部補助者ともなつてゐた。私は、このような経歴のある彼から監獄の内状を教わる事が非常に多かつた。實際積立金の事も、彼に依頼して、早く出して貰えるよう頼んで置いたのだつた。

私と彼の間の柄は、本当に親しい友達以上のものであつた。

彼に会つて挨拶した後、彼も私の出獄後の状況、特に生活状態を心配してくれた。私達の附近には、私の知つてゐる囚人で、経理部の補助者も三、四名いた。それだけに彼等も、私とソヨルジャブが釈放後どうしているか等について日本語で話をしても不思議がらなかつた。彼等も私に挨拶してくれた。皆実社会の生活はどうかと尋ねてくれた。私は「まあ今の処、何にも分らないが、監獄生活よりずっと自由だよ。」と本当らしく答えておいた。彼等はそれを聞いて、羨しいようであつたし、又自国の外蒙ウランバートルの市民生活が自由であるという言葉を日本人から聞かされただけで、満足気に已惚れてしまつたのかも知れない。

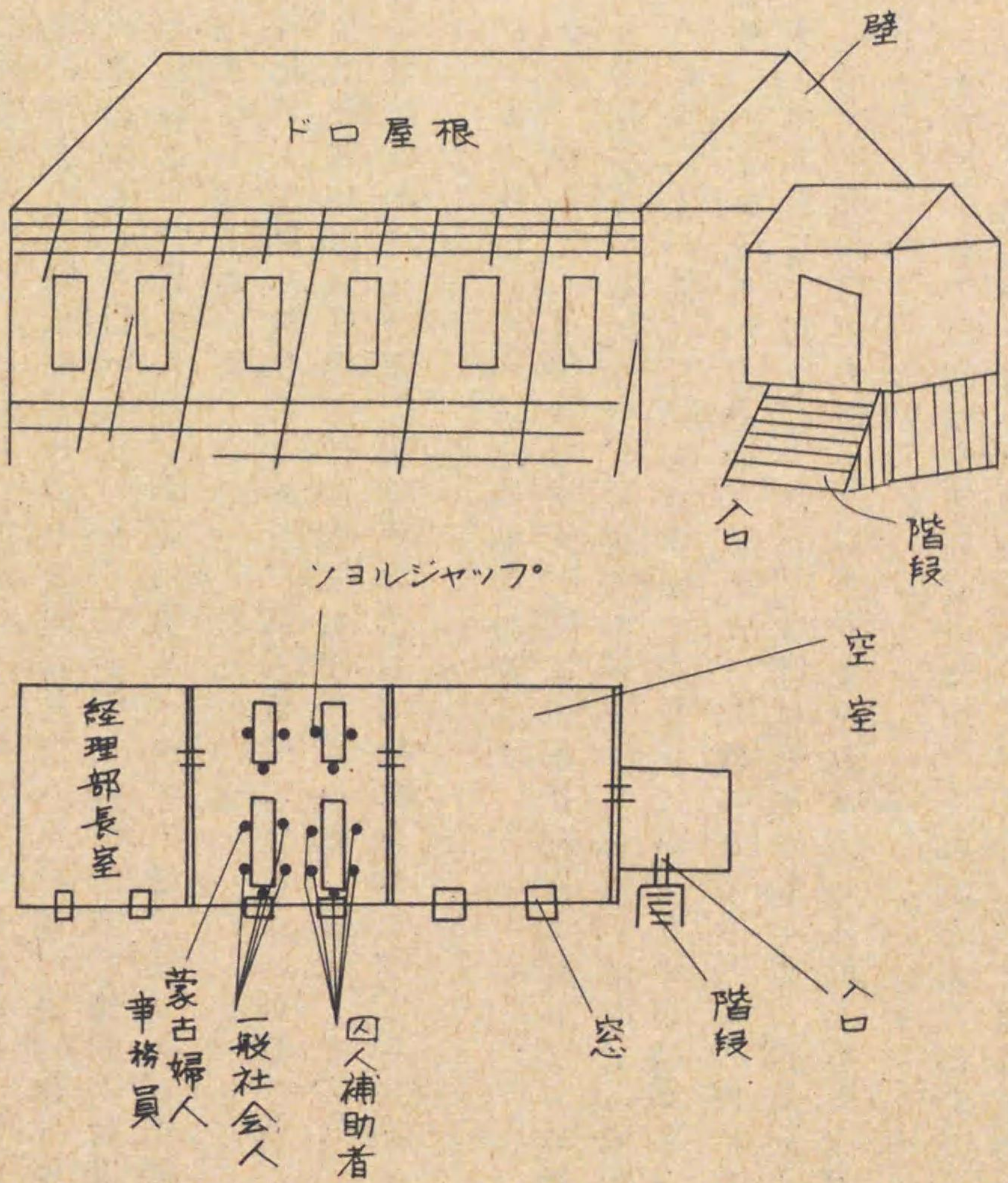
彼等は一様に、私とソヨルジャブの会話を聞いていたが、それがどんな話か少しも分らなかつたであらう。又ソヨルジャツプも日本語の上手な処を彼等外蒙古人に、誇らしげに話して聞かせる風も見えた。

「積立金はどうなつてゐるでしょうか、」

「申請書を私が作つて請求してありますが、まだ精算が終つていないらしい。私が聞いて上げましょう。」
彼は自分の席から立つて向う側に腰掛けてゐる蒙古婦人事務員（年令四十才近くになる）に積立金精算支払について問い合せてくれた。それに依ると、二、三日中に精算されるからそれ迄待つて貰い度いと事であ

つた。

私は再びソルジャツプに、「若し積立金が出るようだったら貰つて置いて下さいませんか。」と頼むと共に、在監中の同囚達に宜敷くと伝言を依頼して、その経理部を出た。



私は、同囚達が私の来たのを知つて、東側の柵内から見ていいないかと注意したが、そのような気配はなかつた。

ラーガル事務所の前に職員クラブがある。その戸口からアピルミト（日月寮出身）がバケツを下げて来るのに出あつた。彼も少し日本語が話せたので、簡単な挨拶を日本語で交わした。附近には監獄幹部は見受けられなかつた。「二、三日中に積立金を払い出して貰いに来るからその時又お会いしましょう。日本人にも元気でいるから安心して貰うようお願いして欲しい」と依頼した。

守衛に対しても又来る事を告げて、大門を出た。バルトンはまだ見えなかつた。何処かへもぐり込んだものごろうか。蒙古人の役人中にはこの種の者が多いが、今更驚く事もなかつた。

私はその足で基幹道路に出た。そして西に向つて歩いた。暫く行くと坂道になる。その坂道の下り終つた処に、二階建の煉瓦造りがあり、その正門に掌銃を持った歩哨が一人見張つていた。その坂道の下り終つた後になつて、これが陸軍省であると知つて、こんな処にと驚いた次第である。

この陸軍省の前を通り過ぎると、間も無く昨日見たセレベ川橋に出た。昼近くなつたと見え、人通りも多いようだ。再び昨日寄つた支那飯館子に立ち寄り、昨日と同様の食事を注文し、腹ごしらえをしてそこを出た。師範学校の前に生産省、中央劇場、人民広場、スフパートル石像、政府官庁等の側を通つて内防処の前通りに出た。

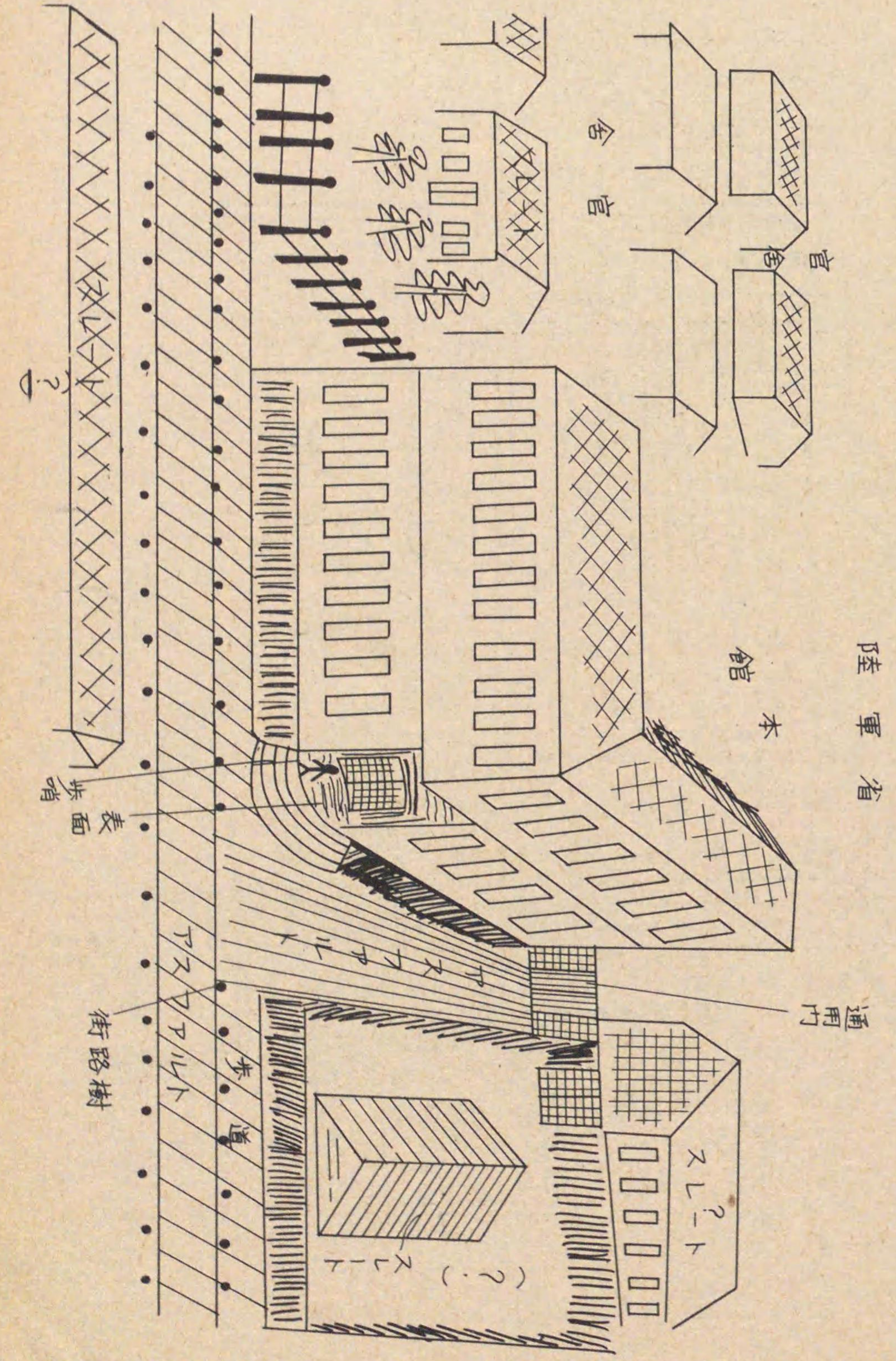
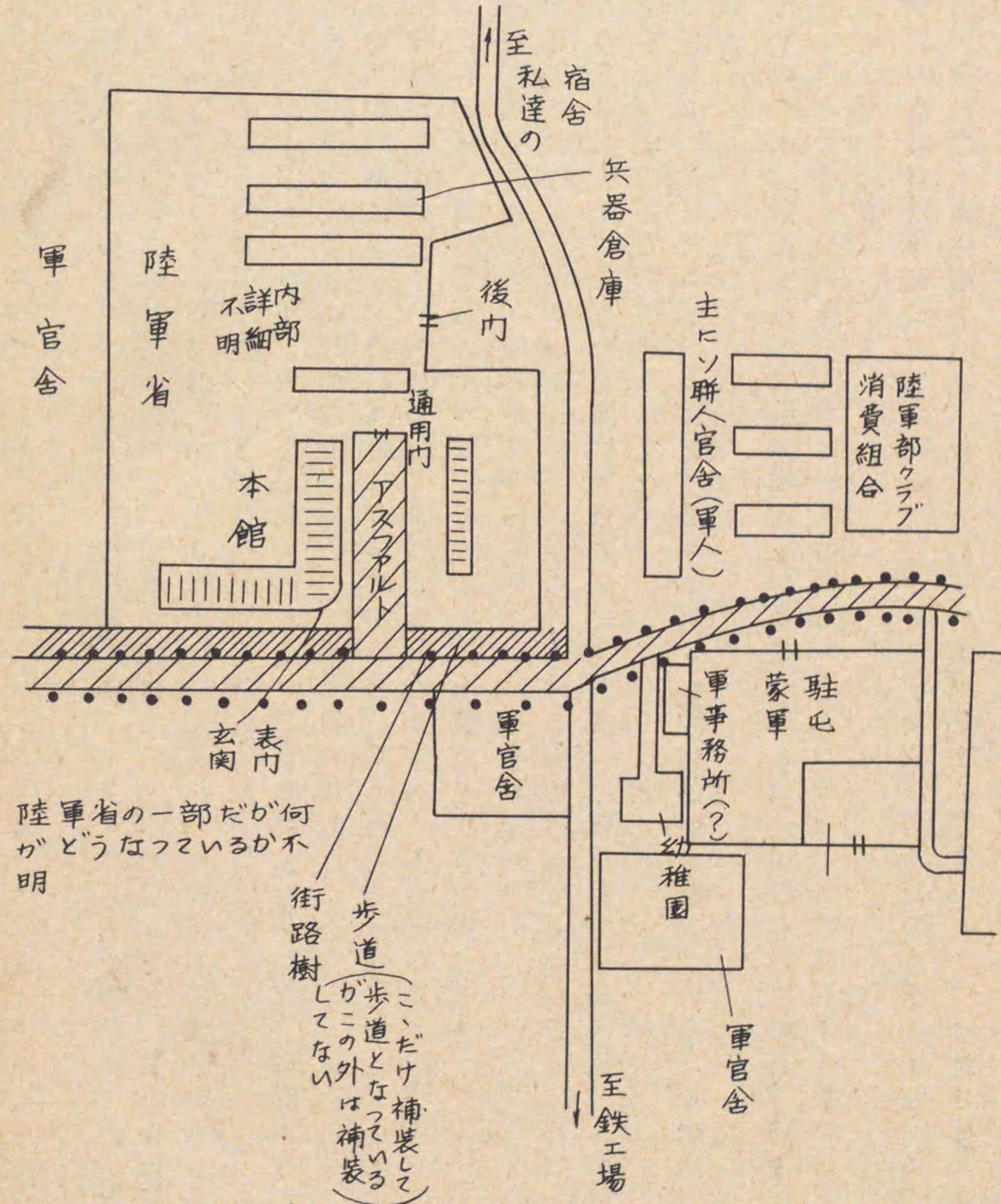
内防処前には庭園が作られており、それを挟んで両側に舗装道路が出来ている。その両側道路の交又点が中央銀行である。

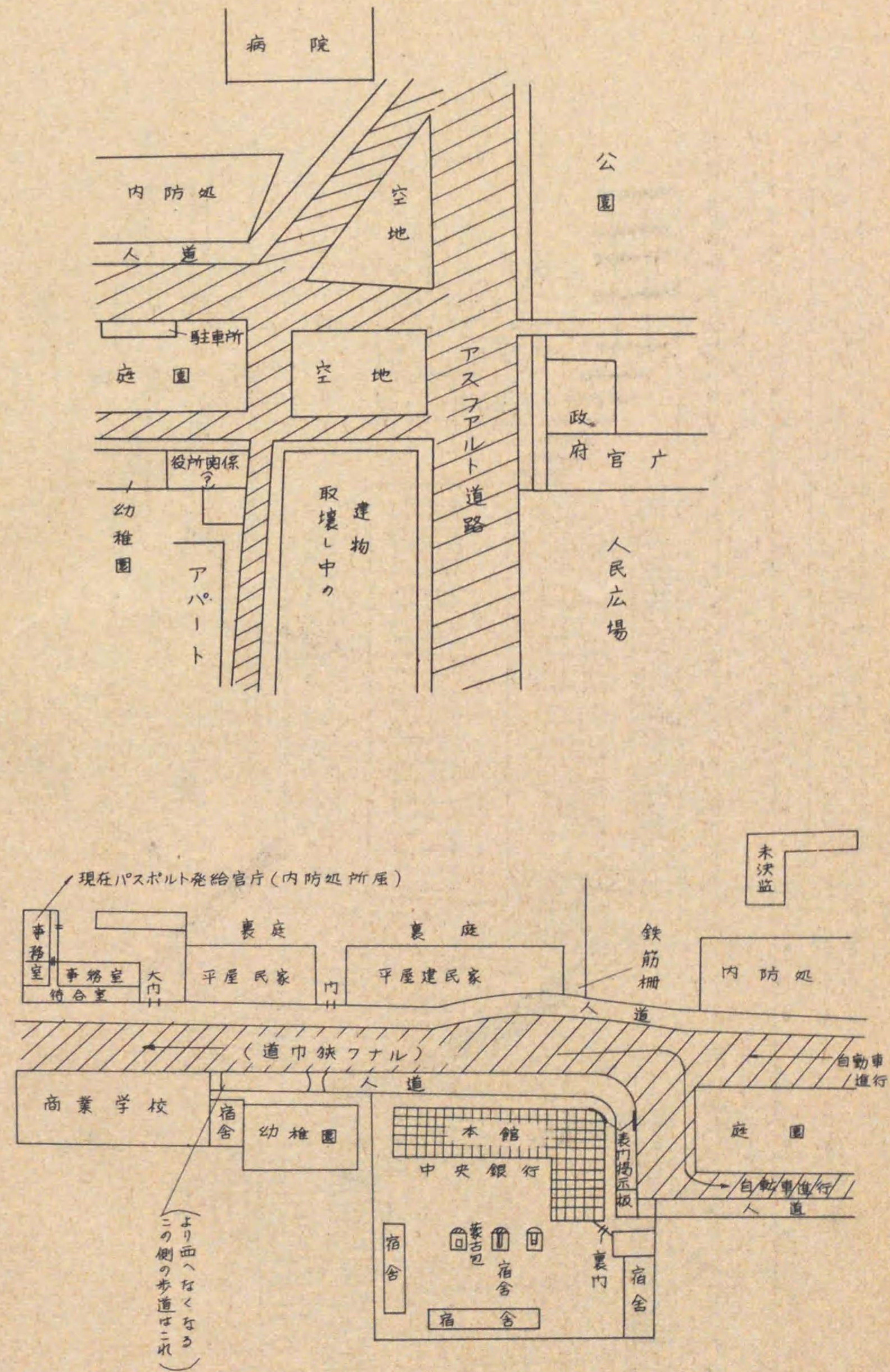
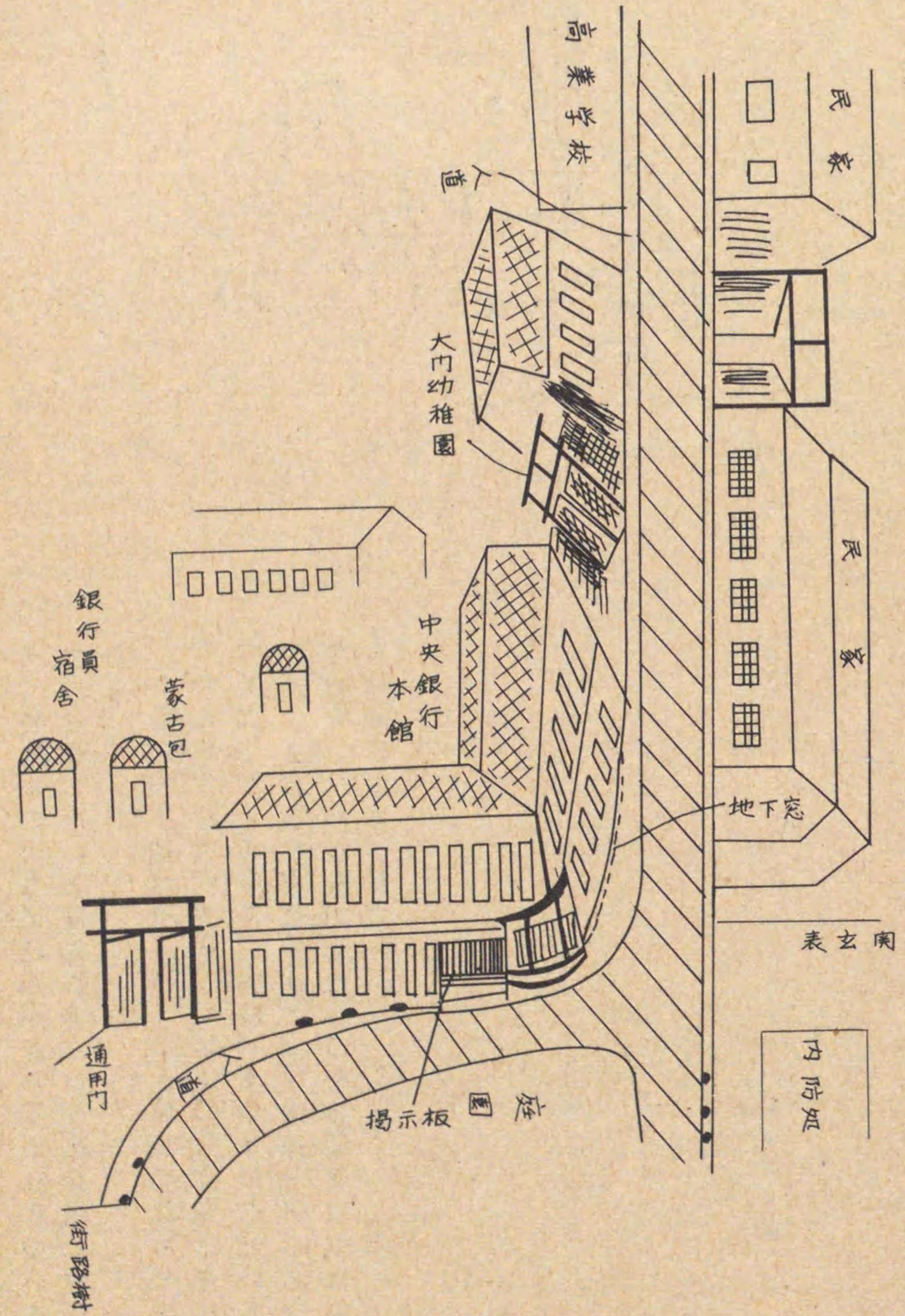
中央銀行の掲示板には、貯蓄奨励の告示、広告と彩票の売出し広告が貼られてある。前者は貯金通帳を片手に持つた勤労者のポスターであり、後者は一等当選は一万トゴゴロ、二等は五千トゴゴロという見出しを大々的に広告したものである。

私は中央銀行の玄関口前を通つて西に向つた。すると中央銀行の本館の北側に歩道があつて、その歩道に中央銀行の地下室の窓が極く僅か路上にはみ出している。中央劇場と同じように地下室があるのかと一種特別な興味を覚ゆるのだった。

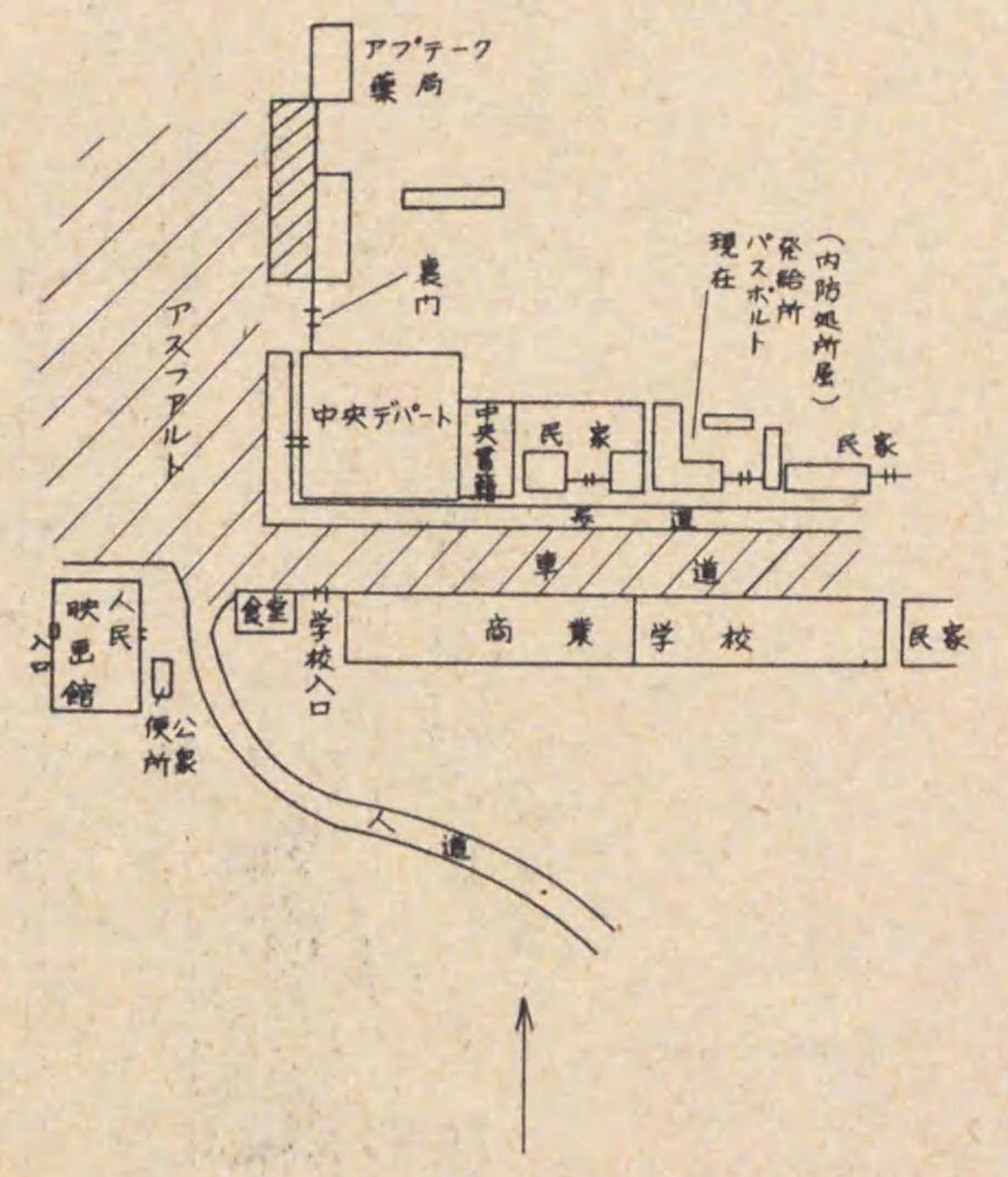
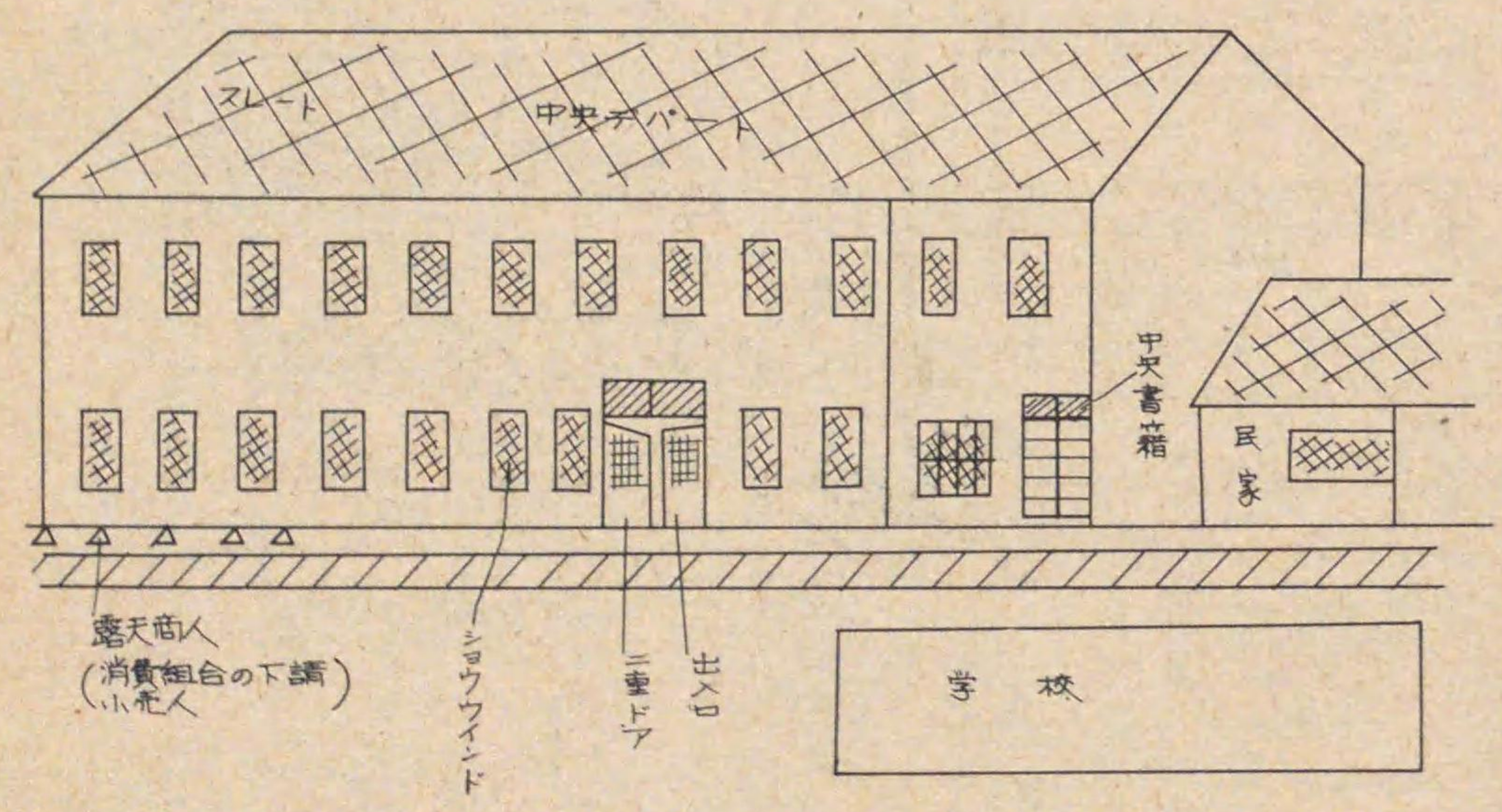
地下室の窓は北側にあるので、嚴重な防寒設備が施されているものと見え室内の電燈の光は少しも漏れてい

なかった。





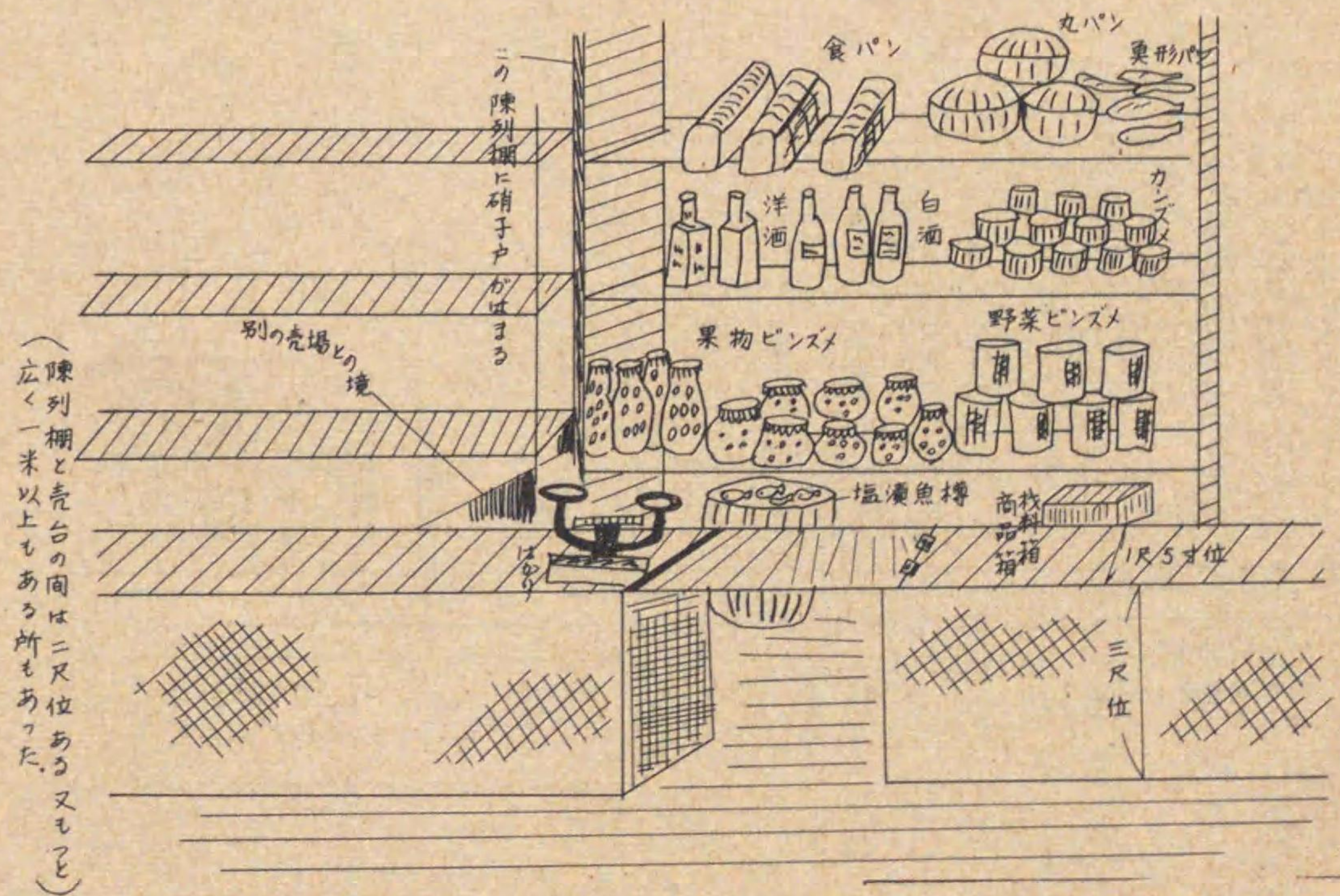
(3) 中央デパート
 成る程、来て見れば、中央デパートは直ぐわかつた。誰も彼もが押し合いながら出入りしている。窓も普通のより大きく出来ている。
 中央書籍消費組合もこの建物の一番東側の一角にあつた。
 私は中央デパートの出入り口を、人の後に続いて入りこんだ。二重扉である。外蒙は何処でもこの二重扉を用いるのが普通である。
 中に入つて見ると仲々お客は多い。行列で買い物をしている風景も初めて見た。この時の行列は、三〇―四〇名位で二等麵を購入する列及びカウンターに金を納めチケットを貰う列の二つの行列であつた。
 一般住民は、格安で大衆向きの二等麵を購入するのに、かくも行列をせねばならない。
 一等麵は一匁一トコロゴ三十モンク、二等麵一匁一トコロゴ一〇モンクである。誰も小さな小袋を持つていて、十匁位購入する者が多い。
 入口の西側と東側にカウンターが置いてあり、それに向つて行列をなしている。
 カウンターの処で自分が買おうとする物資の代金を支払い、引換券を貰つて、売子から配給を受ける仕組である。
 陳列棚には硝子戸があるが、どれも締めて錠がかかつ



この辺に来ると全く人通りが激しくなり、又自動車も絶えず往来する為、道路の横断も中々出来ない位である。特に氷のように路面が踏み固められているので、十分注意しないと横転百出という悲喜劇を演ずる事になる。
 この辺の歩道は全く狭く二人位しか並んで歩けないのみならず片方の歩道は幼稚園の前で中断され、後はなくなつていたので、混雑はまことにひどいものであつた。人は正に右往左往で交通道徳も何もあつたものではない。しかし車道はどうやら交通規則に規制され右側通行であつた。

ている。
よく見ると中央監獄生産部で作った錠である。自分の作った錠も一、二個見えたが、結構立派に役立つているじやないか。

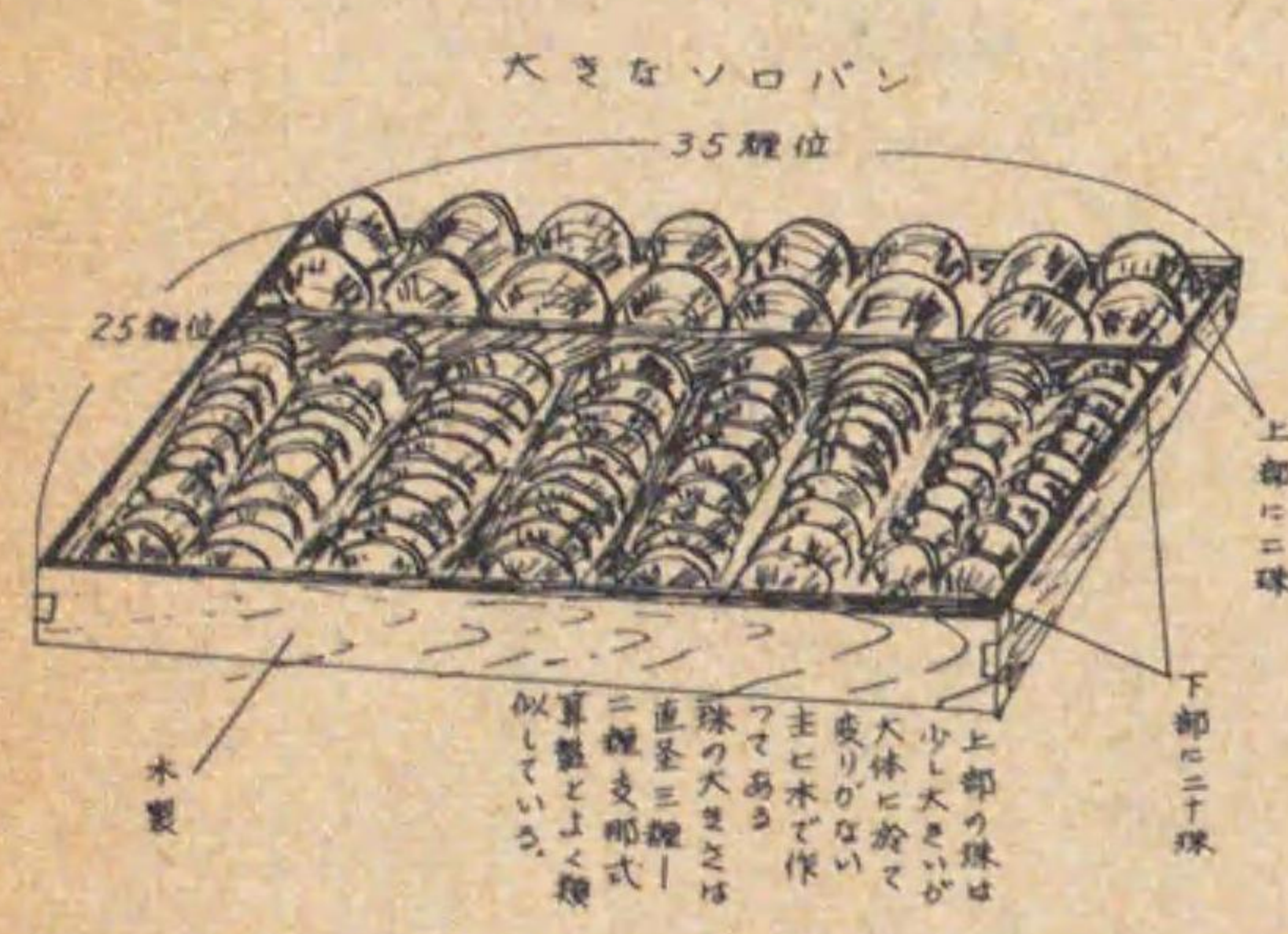
私は行列の人々を押し分けて売台の側に寄つて見た。この売台は高さ三尺巾一尺位のもので板で作られ、品物と客人を隔離している為、客人は好きなものを自分の手にとつて見て購入する事が出来ないようになっている。各売場毎に一名の売子がいる。こゝの売子は男女共に大概二十五才以上のものである。陳列棚は単に品物が並べてあるというだけで、美的感覚も全然無い。しかし売子間ではあらゆる売却技術競争が活発に行われる。それは売上高によつて給金が決められ、また優秀者には特別賞状も与えられ、さらに年間休養は一番良い時期に与えられるようになった。売れぬという手段も構ぜられる。又彼等の下請小売人を指定して貰い、それに依託販売せしむる事が多くなつて来た。現在中央デパートの前に、これ等に類する下請小売人が露天に箱を並べ、少し値段は高いが商品を売却しているのを見受けるのである。この下請小売人の存在はどう解すべきか、この国としてはおよそ奇妙な存在ではある。



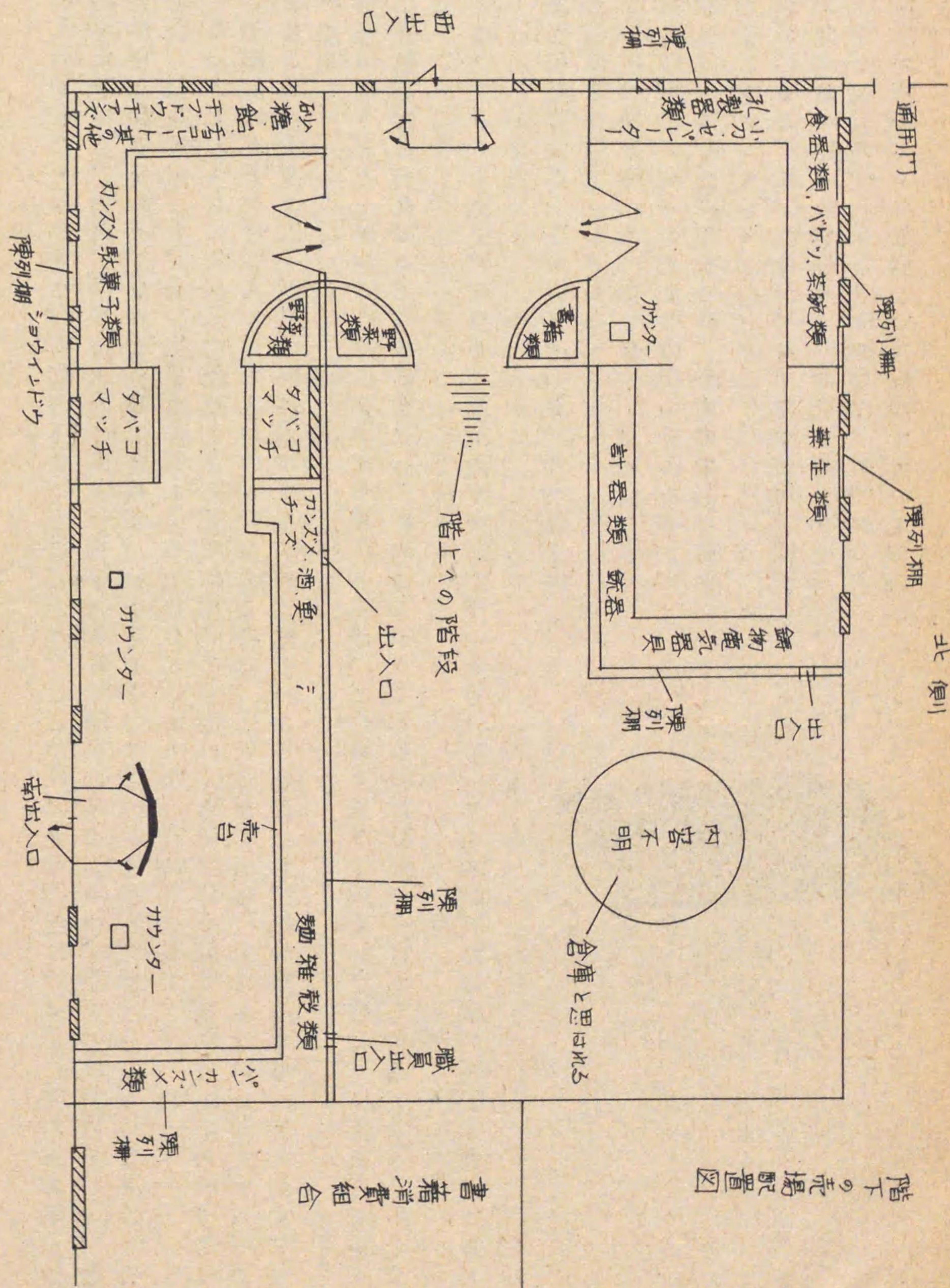
一例として甘味品の売場のやり方を紹介することにしよう。ここでは、売台の上に、硝子で開んだ容器を並べ、その中に駄菓子、砂糖、飴等を入れてある。売子は固体の商品は手づかみで、粉末の商品はさじで、直接什器にのせ必要量を計り、そのまゝ顧客に渡す。およそサービスの一かけらも見受けられないことは、御世辞は勿論、包み紙、ひも、袋、紙袋等が見たくも見られないことで一目瞭然である。外蒙第一の中央デパートに於てこの程度である。大体硝子の容器は、食糧品部全般に亘つてあるわけではなく、極く一少部分にあるだけである。ちよつと変つて居るのは、この売台で一〇〇グラムの酒を即売する事である。食堂とか、喫茶とか、酒場とかがあつてそこで、飲むのならまだしも、純然たる売場に於て酒を飲ませるわけである。

南側の出入口にも左右一個つづの、カウンター箱があるが、このカウンター箱というのは、丁度街頭にある日本の公衆電話箱と思えばよい。この中に一人の女カウンターが入つていて、小窓から現金とチケットの交換をしているのである。中に大きなソロパンをおき、それを不器用な手付きでゆつくりはじいているが、非能率的なことおびただしい。

さて階下を概観しよう。図でみるとおり、食糧品、器具及び食器類の売場となつて居る。一番東側のパン類売場には、丸い食パン、四角な食パン、角型のパン、アンパンのような丸い小さいパン、その他中型パン等を並べてある外、果物の罐詰が売れそうもなくすぶつて居る。この罐詰も色々あつて、梨罐、パイナップル罐、桃罐、桜桃罐等名前も分らぬ罐詰も二、三種類置いてあつた。すべてソ聯製の罐詰ペーパーがはつてあつた。この外瓶詰の茄子、トマト等二、三種類のものも並べてあつた。



階下の市場配置図



瓶詰類が一番値段が安く、一トコロゴ二十モングから三トコロゴ位までであった。罐詰類は四トコロゴから十二トコロゴ位までであった。このように果物の高いのは外蒙に生産されず外国からすべて輸入せねばならぬからである。

次は粉類、雑穀類等の売場である。こゝには男の売子が粉だらけになって忙しそうに働いていた。こゝの売場だけは、客は行列を作つて配給を受けていた。粉、雑穀の箱が四・五個土間に並べられ、それから一人一人に渡されていた。

一等麵、二等麵、フウフテン、バター（小児用粉）、サクテン、ゴリラ（ソバ粉）、白米、小米等である。次の売場は若干の甘味品で、四十才を越したおばあさんが売子であった。

売台の上に硝子用器が置いてあり、その中に砂糖（白砂糖）、ペロシコ（ミンパンのようなもの）、シウシコ（ドウナツのような菓子）ビスケット、干ブドウ、干アンズ、各種飴類（国産品と外国品とがある）、高級品としてはチョコレート（主に板型のもの）外に角砂糖、マカロニー等もあつたが、商品の種類も極く限られた僅かのものである。

次の売場は酒類、塩魚、チーズ、ソーセイジ、魚類の罐詰等で三十五六才の肥つた蒙古婦人が売子であつた。酒類には、ビール、チャガン、アリヒ（白酒、アルコール含有量25%）ホーライアリヒ（アルコール含有量98%）、シムスアリヒ（蒙古山野より採取した果実汁を酒に変化せしめたもの）、特にソ聯製のブランデー、ウオツカ等があつた。

塩魚は大きな四斗樽漬けのカチカチに干からびた鯨か鰯で、おそらくシベリヤ経由で樺太、カムチャツカ・沿海洲等から来たものである。魚類の罐詰や瓶詰としては殆どが小魚ものである。いわし、さば、鯨、まぐろ、かに等の罐詰は見られなかつた。なお後で三回ほど鮭・鱒の売り出しにぶつかつた事がある。

しかし、一般蒙古人の中には、これ等の魚類には見むきもしないで、酒の方に走つて行く者が多く見受けられた。こゝでコツプ酒を売っているのであるが、百グラムの白酒が五トコロゴ（日本円に換算すると大体一五〇円程度）で、一ぱいひつかけて行く者が仲々多かつた。酒は外の物資に比べると高価であつた。しかし、蒙古人もソ聯人も、この酒には目がないらしく、次々と百グラムの酒が売れて行つた。

その次はタバコの売場で、北側の売場には二十七八才位の男子売子が、南側の売場には二十五六才の婦人がいた。タバコは殆んどが箱入れて、戸棚には一パイ一列に陳列してあつた。(後で分つたことだがこの陳列は空箱である。)箱入れタバコは口付きの二十本入りで、安いものになると一トコロゴ五十モンゴ(日本円に換算四十五円位)高いものだと二十トコロゴ(日本円三百六十円)であつた。

最も大衆的な煙草はオランダタバヒ(赤い煙草で刻み、マドロスパイプ・キセル、又は紙に包んで使用する)とパピロス(丁度日本の朝日のような包装で、大ききも同じ位)である。オランダタバヒは四〇〇グラム一包二トコロゴ、パピロス二十本入り一包一トコロゴ二十モンゴで、いずれも誠に質は悪いが、品不足と安価の為売り切れは早かつた。オランダタバヒの如きは何時も開相場があつた。四トコロゴから五、六トコロゴに上昇する。それでも蒙古人の経済から言えば、高い口付き煙草を喫うより安価であつた。この売場でマツチを売つていたが品質粗悪の国産品である。小さな箱に、太い軸や細い軸が混じつて平均四十四、五本入つてゐる。少ないのになると三十五、六本というのもの。点火の悪いのは驚くばかりで、十本のうち、三、四本位つけば上等である。国産品の評判は悪く、買手も少ないようだが、それでも長い年月の間には品切れとなるらしく、一般住民はマツチ欠乏に苦しんでゐた。

ソ聯製のマツチの配給の時は、押し合い喧嘩、腰で、行列を作つて購入するのであるが、これが年に四、五回だけで到底需要には充たず、正に焼石に水である。そこでまた闇が生れる。配給価格一箱(小箱十個入り)五十モンゴのものが、二トコロゴから三トコロゴに飛躍する。大多数の蒙古人はこのマツチが手に入らぬので、ヒユウテ(火打石)を使用している。ウランバートル市民の中にもまだこれを使用している者が多いのはびつくりした。ライターなどを使う者は、ソ聯人か或は本当にも好きで、商売根性のある特殊な者に限られてゐる。煙草の火も次から次へと貰ひ火をするのが常である。

今迄通つて来た売場の売子達は、全々愛想がない、洗練されてゐない、これは年令のせいもあるが、只自分のノルマーの売上に奔走するからとも考えられる。彼等売子の服装がまた色とりどりである。各自洋服、蒙古服の上に薄汚なくなつたエプロンを、男女を問わず着ており、それも白、青、茶と色々様々だ。恰も何処かの田舎宿の女中さんか、コツクさんのようにみられる。それがまた何でもかんでも手ずかみという次第である。

其の次の売場は右側の部屋隅で野菜売場である。そこには四十才前後の男の売子がいた。

例の白いエプロンを掛けて、お客のソ聯人に、手真似、身振り、下手なロシア語で応待してゐた。

野菜としては、白菜、キャベツ、人参、ジャガ芋、大根、ロシア赤カブ、ニンニク、葱等があつた。

私は在監中、よく、外蒙でも野菜が出来るということを知り、実際に売りさばつてゐるのを見たのはこれが初めてであつた。北緯四七度以北、海拔一、二〇〇米、河川もこの辺より北流し、気温も最も低いこのウランバートルに、このような野菜が出来るのは、すべて華僑の非常に根強い農魂の結実したものと言われている。この売場の顧客は蒙古人は殆どなく、主としてソ聯人と華僑であつた。

次は左側の二正面をあてた甘味品専門の売場である。ここには男の売子が二人いた。

飴類を始めビスケット、ペローシコ、シユウシコ、砂糖、角砂糖、干アンズ、干ブドウ、チョコレート等、ほかに野菜類の罐詰が並べてあつた。(パン類と魚類の罐詰を除いて。)また団茶が特別棚に淋しそうに列べてあつた。こゝでは砂糖が一番よく売れてゐたが、砂糖も白砂糖だけである。一匙四トコロゴ。角砂糖が四トコロゴ五〇モンゴである。干ブドウは種なしが安く四トコロゴから五トコロゴ、種のあるのが六トコロゴから七トコロゴ、干アンズ種なしが四トコロゴ、種のあるのが二トコロゴ五〇モンゴである。

顧客はこれらの品と飴類を購入して行く者が多かつた。飴類は外国品はすべてソ聯製で、品質はよいが値段は高く、八トコロゴ一十二トコロゴ位。これに比し国産品は品質は極めて悪いが六トコロゴ一七トコロゴ位。従つて、国内品は低給者達の口に入り、外国品は高給者達の口に入るのである。

以上が食糧品部である。一般売場は朝十時から夜六時までであるのに、食糧品部だけは朝八時から夜十時迄で、売子も二交替制をとり、大衆へのサービスを考えているというわけである。

この売場に間仕切りがあるが、ここを出ると西側出入口となる。又出入口と反対側には二階に昇る階段もある。その階段を狭んで両側三角の場所に、野菜と書籍、新聞等が売られてゐた。北側にも間仕切りがあるが、そこを入ると直ぐ右側にカウンターがあり、左側と正面には食器類と乳製品器具が並べてあつた。

食器類はソ聯から輸入した主としてセトモノの茶碗類、皿等、ほかにアルミニウムの鍋類(大小取り混ぜて)、大きな洗面器、汁杓子等であつた。こゝに見当らぬのは硝子の容器類である。私も市民生活一年半の間遂に見受けなかつた位であるが、外蒙人は硝子の容器を非常に珍重する。

特に演説会等で使うフラスコ型の水呑器を非常に貴重がる。大体ガラスのコップや硝子の菓子入れ等は買ひ度くも、配給にならない現状である。

アルミニウム製の鍋は相当有つた。大中小に分れていて、六トコロゴから十八トコロゴ位の物が一番多かつた。その他ナイフとか、カンキリ、セン抜等も並べてあつた。ナイフは七、八種類の道具がついていて、何かと重宝であるが、恐しく高く二十四トコロゴもする。これでは誰しも足ぶみしてしまうのは当然の事である。

乳製品を作るセパレーターも分解して陳列してあつた。生乳を入れる大きな乳罐が置いてある。五十リットル入りの乳罐は一二〇トコロゴ位であり、二リットル入りの乳罐は五トコロゴであつた。

この売場は客は非常に少く、二、三人の蒙古人が売子と話をしている位であつた。

私は隣の売場に入つて見た。三方が売台で隔てられていた。

北側には洋紙類が山程積んであつた。この洋紙は各官庁に割当配給済みの札が貼つてあつた。その側に、小さな水入れバケツが置いてあり、定価は七トコロゴ五十モンゴであり売子は二人いた。

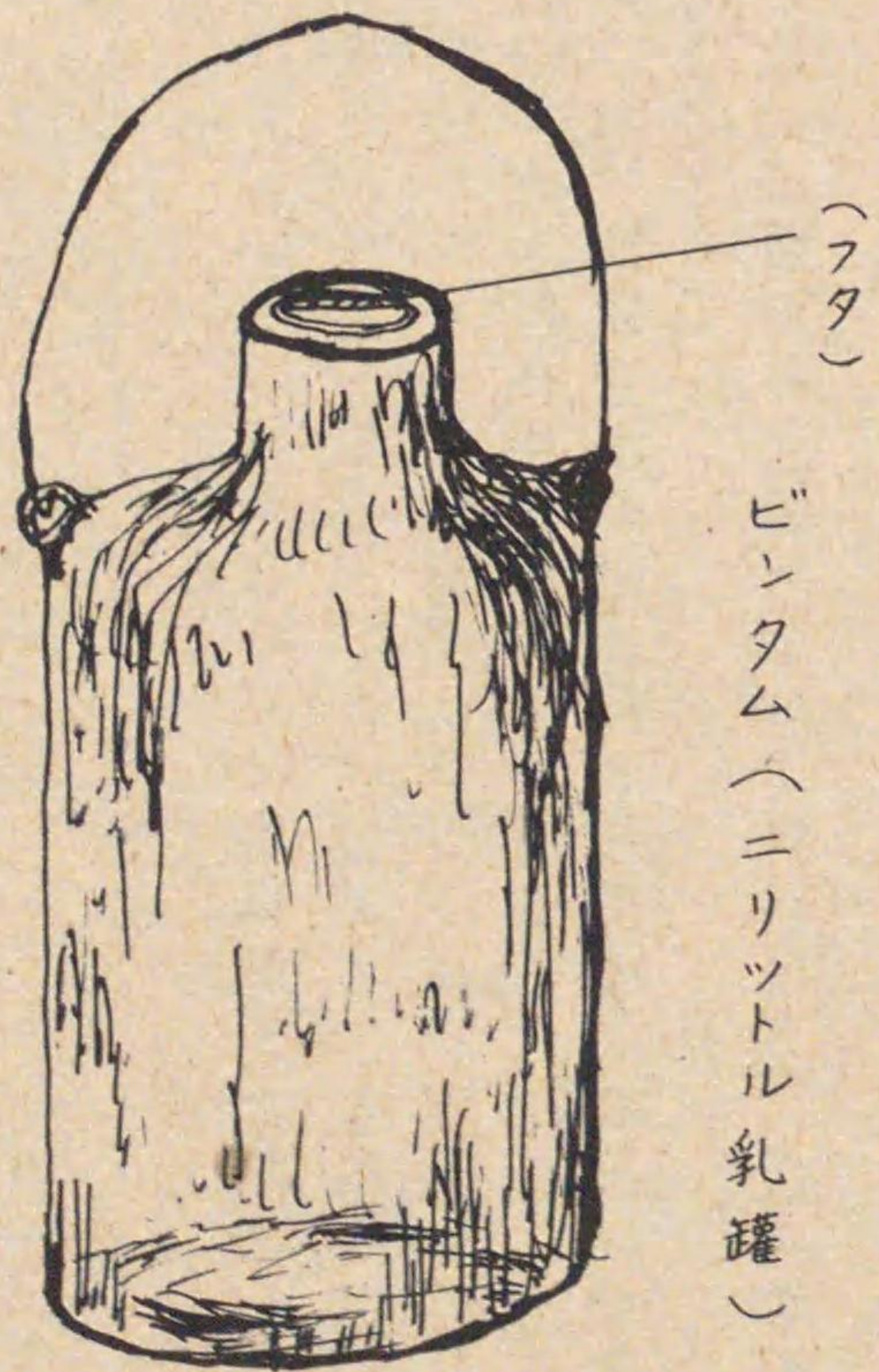
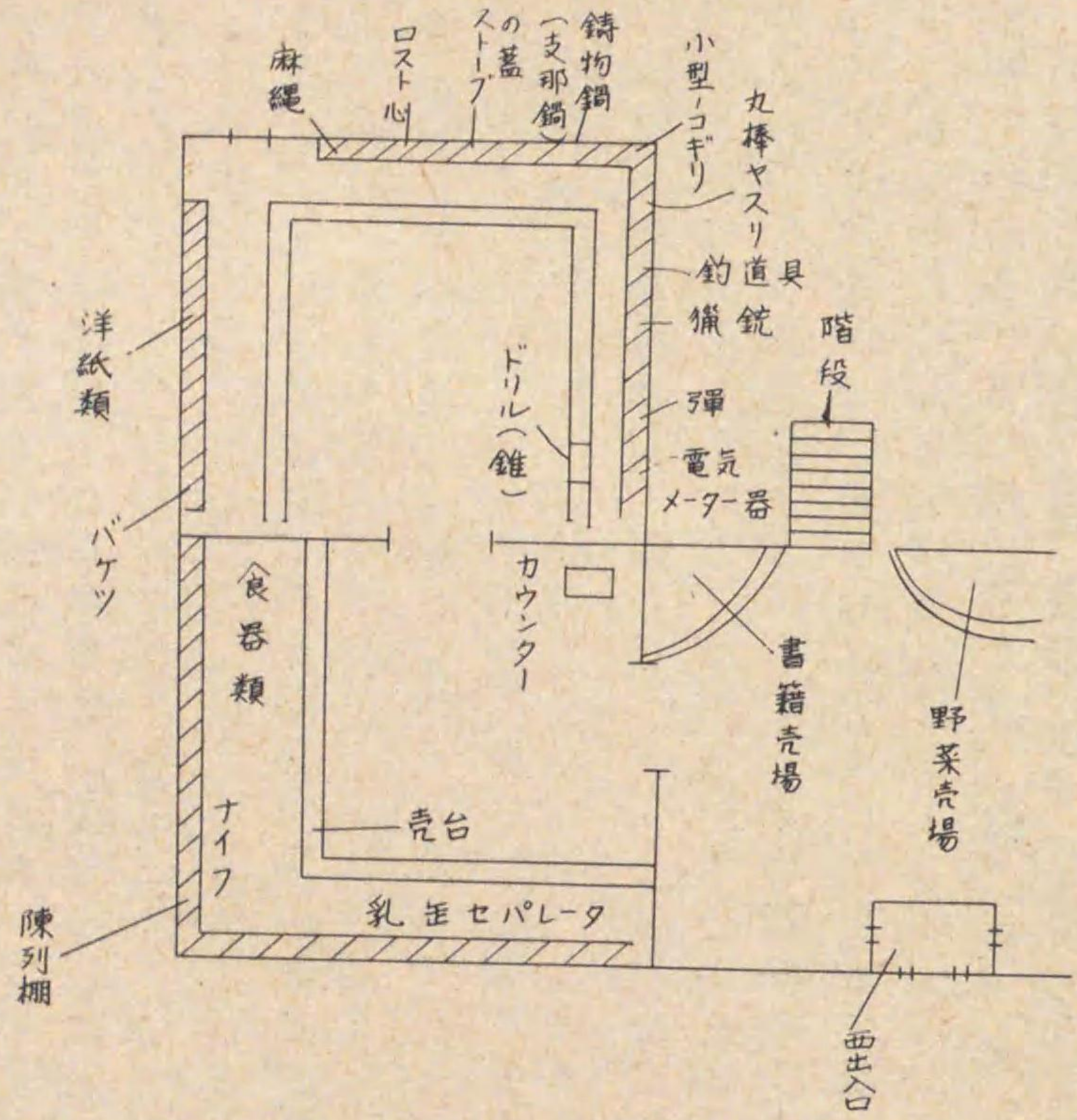
私はヤスリが欲しかつた。しかし私の欲しいような平、角ヤスリは見当らず、あるものは丸ヤスリが五・六だけだつた。

私は目を皿のようにして、それでもハンマーや鉄ノコ、ペンチ、鉄尺、組ヤスリ位はありはしないかと探したが見当たらない。売子に尋ねて見たが、「無い」という簡単な返事で終つた。只豊富にありそうなのは電気メーター器と電気アイロンであつた。又猟銃も棚に沢山箱に入れてあるようだつた。

こゝで注目されたのは、ロストルとストーブの蓋それに鑄物鍋であつた。これはこのウランバートル市国営鉄工場で作るものらしく、鉄工場製として価格が貼り出されてきた事だつた。

私は階下全部の売場を見て廻つたが、手の届くような処には品物は並べてなく、完全に手の届かないようにしてある。また顧客の自由な選択はゆるされず、売子の任意に依り、品物が良かれ悪しかれ売りつけられている。さらに陳列棚には必ず硝子戸があつて、蒙古の錠をかけるようになってゐる事だ。

私はよく監獄の中で、「社会人として外に出ても、蒙古の錠をかける必要であるから、出来る限り錠を持つてゐる事だ。」と聞かされた事を思い出した。同じ民族でありながら、顧客を信頼せず、さらに売子同志でさえ



ビンタム(ニリットル乳罐)

商品の取扱いが自由でないということは、我々日本人には理解し得ないところである。私はただ一つの二階の階段を昇つて行つた。二、三人の顧客の下りるのとすれ違つた。上りつめると二個所にカウンターがあつた。二階は顧客の数も大分少いように感ぜられた。売場によつては、客のいない処もあり、二、三人のお客と立話している売子もいた。

二階の床には、防水用ゴムが張つてあつた。

窓はすべて二重窓で、中から嚴重に目張りがしてあつた。今も思い出せないのは暖房装置が何処に有るかという事である。ペイチカもボイラーも電気ストーブも一年半の市民生活中、この自分の目に止らなかつた事は全く不可思議な事である。

お客も三、三、五、五連立だつて階段を昇つたり、降りたりしている。

二階の平面図を書いて見よう。

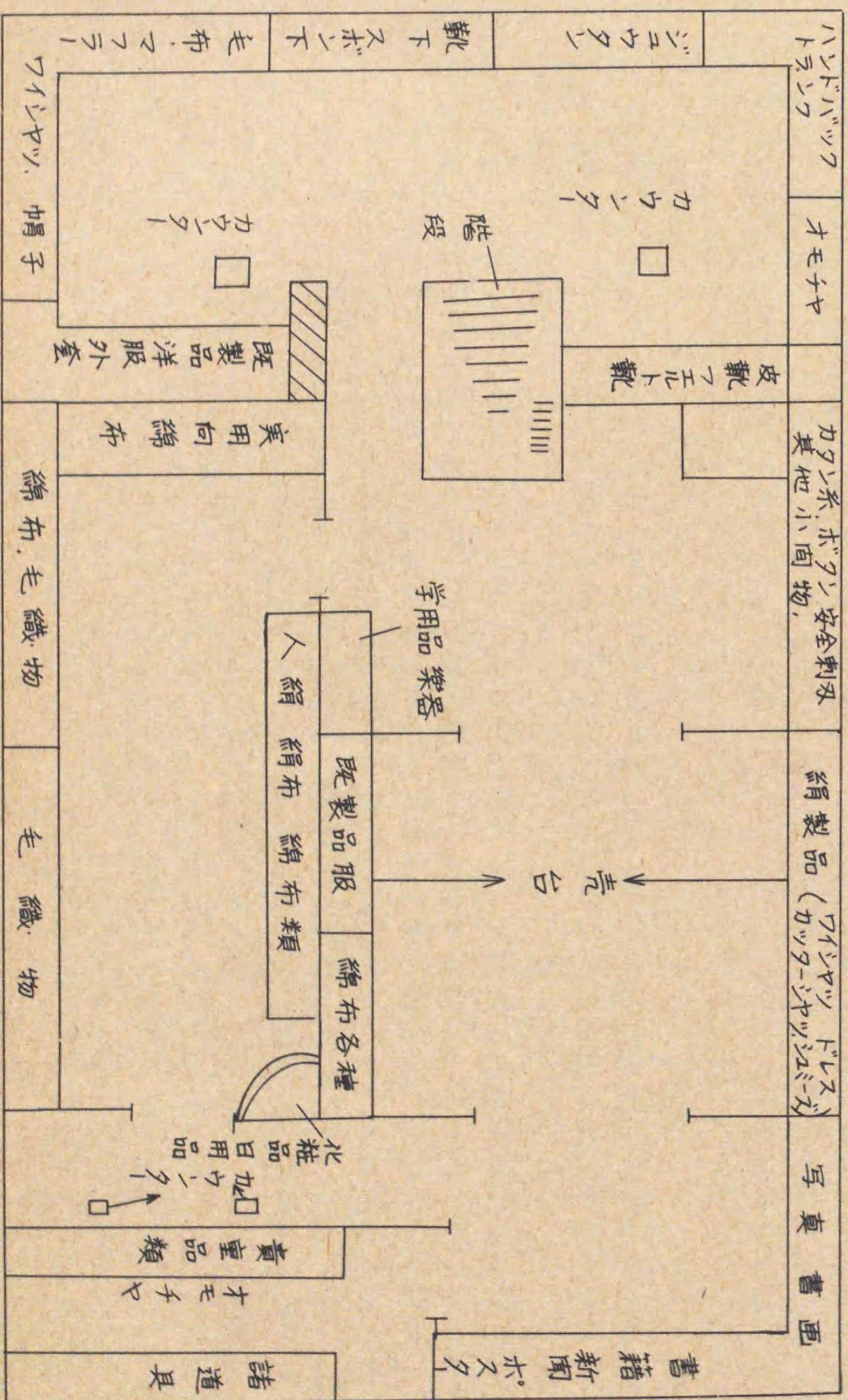
階段を上つた右側には、皮靴とフェルト靴が陳列してあり、めづらしく二十才位の若い娘が売子であつた。女の靴はハイヒール、中ヒール等が並べてあり値段も案外高く、一足一五〇トコロゴである。これはソ聯製であるから無理もない事だろ。フェルト靴はソ聯製が一二〇トコロゴ、国産品は六〇トコロゴから八〇トコロゴで、品質は非常に落ちるが、冬ともなれば誰もこのフェルト靴に穿き代えるのである。

長靴はこゝには見えなかつた。後になつて分つたが、品不足の為、長靴売出の際は押すな押すな盛況を呈するのであつた。畜産国と自認している外蒙がその様な状態なのである。

次はオモチャの売場で、売子は三十才位の男子である。おもちゃは種類も沢山あるが、大別して、ゴム製品、ブリキ製品の二種類に分けられすべてソ連製である。

ゴム製品のおもちゃは、熊、うさぎ、狼、犬、アヒル、鳥、猿等動物が多かつた。ブリキ製は船、汽車、電車、消防自動車、乗用車、戦車、蛙、自動ピストル等すべて螺旋のあるもので、動く事の出来るものである。

その次の売場はトランクとハンドバックである。ハンドバックは国産品で誠に不恰好でお話しにならない。勿論買手もないようで、陳列棚の中であくびをしているようだつた。



トランクは純皮製品は殆どなく、レザーをはった国産品が大部分で、大、中、小の三種に分れ、三十五トコロゴから売二〇トコロゴ位であつた。

その次の売場は靴下類である。殆んどが綿製品で、人絹、ナイロン等の靴下は全然見受けられなかつた。それでも女の長い靴下はよく出るようだつた。女客が並んで靴下の配給を受けていた。ナイロンなどは全く未知のものであつた。

帽子類もあつたが、ハンチングがあるばかりで、中折帽、スキー帽、運動帽等は全然みえなかつた。婦人帽はそれでも大黒さんの頭巾(ベレー帽)のようなのが陳列されていた。色は白、赤、黄、紫、黒、青等で単色ものが殆どであつた。女の帽子はこれより外に見当らない。

蒙古では、女子も男子も、帽子を冠る事を非常に好む。何かの祝日等に於ては勿論、街を歩くにも、この大黒さんの頭巾を載せているものが多い。そうでないものは、ベールで頭を包んでいる。

こゝにも女客が四、五人集まつて帽子を選んで見た。しかし二、三個の帽子しか売台に出さない。若し外の帽子を出すとするれば、前に出した帽子を片付けてから、出して見せるのであつた。

その次の売場は既製品の洋服と外套であつた、誰も高級品である既製品を買おうとするものは無く、素通りして行くのが殆どである。オーバも三五〇トコロゴから六〇〇トコロゴ、洋服(背広)三揃で八〇〇トコロゴから一二〇〇トコロゴである。

私は階段の南側を通つて次の部屋の売場に移つた。第一に小間物が並べてあつた。各種糸類、各種ボタン、各種針、各種ブラシ、各種紙ばさみ、各種ひも、その他各種各様のものが雑然と並べてあつた。売子は二十七、八才の婦人であつた。

こゝでよく見たか、どうしても木綿糸が見つからない。私は売子に聞いたが、そつけなく「無い」とのみ答えた。後になつて、木綿糸は僅かしか配給にならないので、普通日にはなく、特配の日にはしか無い事が分つた。安全カミソリの台は沢山並べてあつたが、刃は何処にも見当らなかつた。必要なものは早く売り切れて仲々補充がつかないらしい。その為に、無いものは無いとしか返事の出来ない事が分つた。こゝで又革製の手袋を売つていたが、一組十トコロゴから二十トコロゴ、国産品で、ソ聯製は見えなかつた。次の売場は学用品売場である。

学用品の手帳は僅か二、三種で主に新文字練習用の初歩手帳である。これ等の手帳は十枚位の僅かなもので一冊の値段も五〇モンク(日本円に換算十五円位)であつた。筆入れ、筆、絵の具、クレオン、消しごむ等は全く何処にあるか見られない。あるものは鉛筆位で、鉛筆一本十モンク二十モンクである。

インクやザラ紙等を買ひ求めようと思つて、二十二、三才位の女子売子に尋ねて見た。しかし彼女は頭を横に振るばかりだつた。

後になつて分つたが、学用品は非常に不足していて、学生でさえ学用品購入には並々ならぬ努力が必要であつて、毎日毎日この売場へかけ込んで来るのが実情である。だから、手紙を書こうとにも紙がなく、勿論便箋などは思いもよらない。蒙古で困つたことの一つは紙類の少い事である。便所、炊事、鼻汁、書き物、包装、目ばり、天井張り等不自由な事は言語に絶する。

おそらく手帳、インク、鉛筆、三角定規、コンパス等はこの売場に殆んど日参せねば絶対購入する事は出来ないであろう。この学用品売場に楽器も陳列してあつた。

マンドリン、アコーディオン、ギター、バイオリン、胡弓等。又蒙古特有の大きな三味線よりの楽器も一譜に陳列してあつた。これ等の楽器の売れ行きは悪いらしく、楽器も大分古びているように見えた。

この隣には男女一般向きの洋服が陳列されていた。こゝの売場では労務者用の洋服が多かつた。綿入れの上下が六二トコロゴから七〇トコロゴ、夏服だと三十五トコロゴから四十五トコロゴである。

外蒙の洋服の種類は誠に少く単調である。日本のように種々多様の洋服は見受けられない。ソ聯製を真似したごつちものが多い。此に並んで色模様の綿製品が陳列され、その向いには、絹製ワイシャツ、婦人用ドレス、ベール、男子用マフラー等が陳列されていた。絹製ワイシャツ一枚九十トコロゴから一〇〇トコロゴ、婦人用ベール、一枚三十五トコロゴ、男子用マフラー一六トコロゴで日本に比し約五倍位の高値であろうか。こんな処に、日本のナイロン製か絹製品を持つて来たら、またたく間に売り切れてしまふであろう。ここの売子は十七、八才位の若い娘であつた。

次の売場は写真、洋画である。写真はすべてスターリン、レーニン、マルクス、エンゲルス、スパークト(蒙古革命者)、チヨイバルサン(最近迄総理、死亡)等の写真である。画像も大体人物画が多く、只一

風景面の油絵があつた。ソ聯兵が蒙古草原で馬から下り、馬に水を飲ませている風景面で、附近には蒙古包もあり、大小家畜が草をはんでいる自然の風景面であつた。その隣には書籍と新聞、ポスター等がひろげられてあつた。

書籍は殆ど新文字で、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの書籍が多く、小説等は第二次世界大戦に於ける、スパイ戦記、ベルリン攻略戦記、又はドイツ軍隊のウクライナー地帯制圧時に於ける、ウクライ人の反撃等殆んどが戦争に關係のある小説である。最もよく目についたものはスターリンの政治に關するものである。それはソ聯の五カ年計画の成果、将来に対する希望、計画等が、蒙古語に翻譯されて、新文字で印刷されたものである。

又新文字規則が大々的に売り出されていた。ここにはロシア語の書籍は売られていなかったが、しかしブラウダ、ウネン新聞（外蒙古革命党政機関紙）、労働新聞、青年新聞、赤い星（軍人關係の新聞）等の諸新聞が二、三日前からのものを別々にして売り出されていた。

宣伝用ポスターは、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの四人を並らべて撮つたポスター、チヨイバルサン、スフパートル等蒙古革命指導者のポスター等、主に人物画像が多い。注意をひいたのは孫逸仙、毛沢東、金日成等の画像であつたが、中共解放当時の軍人志願の画像や北鮮援助の与論を喚起せしむる為の宣伝画像もあつた。ここにある書籍類は、小規模で冊数も余りなく又之を購入せんとする客も殆どなかつた。次の売場はまた沢山のおもちゃで、前のオモチャ売場と同様の動くものが大半であつた。全々その姿を見せないのは人形である。日本のひな人形式のものもセルロイドのものも他の材料のものも全然見受けられなかつた。又運動具は、何処を廻つて見ても見受けられず、わずかにバスケットボールが二、三個あるだけだつた。元来外蒙の競技としては、独特な競馬、蒙古角力、蒙古将棋、弓道、蒙古シヤガイ（蒙古独特な遊び）等がある。この外はすべてソ聯、中共から入つて来たもので、ほんの僅かであるが、スキー、スケート陸上競技、自転車競争等が行われるのである。しかしこれ等の運動具が何処にも見当たらないのは驚く外はなかつた。この売場の中央にソ連輸入の腕時計と懐中時計が並べてあつた。柱時計もあつたが枕時計はみづからなかつた。しかしこれ等の時計はすべて一種類だけである。腕時計は旧式な大形の男子用のものであるが、これがまた女子用にもなる。価格は二四〇トコロゴで、丁度労働者の一カ月分の俸給位である。

懐中時計は厚味が非常に薄く、上品な丸味を帯びた中形のものであつた。値段は百四十トコロゴ、腕時計に比べ格安であつた。しかし蒙古人は懐中時計を持つていない者はなく、腕時計が一種の流行として、ウランバートル市民を魅惑していた。なお時計の分解修理所だけはあつた。鏡台というものは見られなかつたが鏡は大小色々のものがあつた。床屋で使いそうな大きなものから、懐中鏡に到るまであり、これにも外国品と国産品とがあつて、大衆のほしいの何と言つてもソ聯製の鏡である。国産品には一、二年たつと早くも曇が生じ又錆びて来る。外蒙の技術の非常に遅れている一端がみられると思う。

入つた処から再び出て次の部屋に出た。ここは休息所であり、二個のカウンターが置いてあつた。休息所には長椅子が二個並べてあり、壁に絶対禁煙と書いてあつた。カウンターには二人の女性が顧客に対しチケツトを切つていたが、一個のカウンターは暇のようで客も少なかつた。

次の部屋は広々とした服地類の売場で、最初の角には化粧品と日用品が並べてあつた。化粧品は主に香水で、頭髪油は極く少いようだつた。その他日用品として歯磨ブラシ、ねり歯磨、歯磨粉、化粧石鹼が置いてあつた。売子は若い女性で口紅を付けた、モダンな洋姿であつた。蒙古人としては一寸ちがう処を見るとアルリーズかも知れない。（父が中国人母が蒙古人の混血児）

よく見ると小さな棒状なものがある、これが口紅かも知れない。メンソレタムのような小さな入れ物もあつた。香水の値段は、大衆向小瓶で八トコロゴから十二トコロゴ位、高級品の裸婦型瓶入りは八トコロゴから四十五トコロゴまでである。化粧石鏡は一トコロゴ二十モンゴから五トコロゴで、僅か二、三種類しかなかつた。国産石鹼は最も安価な一個一トコロゴ二十モンゴの只一種類に限定されていた。粉はみがき、四五モンゴ、煉はみがき、一トコロゴ五十モンゴであつた。

その次の売場は絹布、人絹類それに高級綿布類が売り出されていた。顧客は非常に多く、押すな押すなの大盛況であつた。

彼等の最も喜ぶものは人絹類である。安くてけばけばしく、彼等には非常に高貴品に見えるからである。単純な遊牧生活の彼等にとつては、派手な色彩の衣類が、いくらかでも日常生活にうるおいをもたらすのかも知れない。

人絹類は黄、青、紫、赤、黒等の単色ものが非常に多く彼等の外出用の蒙古服や帯になる。

之等の人絹はすべてソ聯製品であるが、輸入数量は僅かで、消費組合から売り出されるのも年間五、六回に限られている。その時は黒山のような人だかりとなり受傷事件さえ生ずる事もある程である。値段は一米八トコロゴから一四トコロゴである。絹布は支那ドンスや日本の婦人用帯のように色彩模様のあるもので、人絹同様蒙古人の好むものである。値段は高く、一米十四トコロゴから二十トコロゴである。高級綿布類は、花模様が非常に多く、一米三トコロゴから六トコロゴであつた。

綿布類の売場では、五段位の陳列棚に綿布類が、ぎつしり積み重ねてあつた。このように綿布類が多くなつたのは、この一、二年來のことで、それ以前は（大戦中より最近迄）綿布類など見たくもなかつたという窮屈さであつたという。

売子は三十才を少し出た位の女子であつた。こと向き合いの売場は、毛織物類で三十トコロゴから九十トコロゴのソ連製毛布生地、洋服生地、サージ類、それに国産品としてカンピナートで作つた毛布生地のような誠に粗雑な品物もあつた。国産品の方は一米三十トコロゴ位であつた。

毛と綿布との混合生地は一米十五トコロゴから三十トコロゴで、大衆向きであり、蒙古服や洋服に仕立て、いる。これは非常に丈夫である。

その隣りは実用向き綿布で、赤、白、青、黒、黄、茶色等単色物が多い。白綿布が一番よく売れるが、一米一トコロゴから一トコロゴ二十モンク原色ものは六米ものが七トコロゴから十二トコロゴ、手拭用綿布は小巾ものが一米一トコロゴであつた。

私はこれで外蒙古人民共和国における最大の国营デパートを一巡したわけだが、期待外れで、がっかりした気持であつた。そして何等のことも起らなかつたことではつと安心もするのだつた。

この程度のデパートなら日本の地方都市に、個人経営でいくもみられる。しかも品物の豊富さ、内部の奇麗さ、売子の親切さ、清潔さ等々全々問題にならぬ。およそ他の消費組合もおして知るべしと断定した。

尚この中央デパートには中国人の売子は一人もいなかった。総合すると非常に不十分なデパートであるが、八十五万人の外蒙としては、分に過ぎると思われる。そしてまた何から何迄ソ聯の製品で出来上つている処を見れば、この国は経済的にもソ聯に確り握られてい

る事を知る事か出来るのである。

私は階段を降りながら、蒙古人とすれちがい、弱少数民族のはかなさを痛感させられたのであつた。私は西門から出た。出て見れば昨日通つたバスの停留所がある。昨日はどうしてこのデパートが分らなかつたのだろう。昨日に比べれば今日の私の心境は非常に大胆になつて来ている事に気がついた。今日は内防処の前を通つてやろう。

この中央デパートの角に並んで、飴、煙草、パン等を売っている五、六人の露天商の前を通り過ぎ、前に来た道を引き返し、内防処の前に出た。内防処の前は歩道になつていて、街路樹が植つている。

歩道の北側にはコンクリと鉄で出来ている柵が続く、その真中に扉のないコンクリート門がある。そこに歩哨が銃剣付きで立哨している。内防処本館の正面は三段のコンクリート階段があつて、そこに両開きの扉があるが、閉つていた。柵と本館建物との間には樹が一本並び位に植えられている。私はそこから、政府官庁の裏道を廻つて見た。建物は「コ」の字型で、裏は相当広い広場で、ロータリーも何もない自動車の発着所になつてゐる。そこには十段位の階段があつてそれから各通用門に通じてゐる。

私は政府官庁の東側を通つて中央劇場の前に出た。それから前の道を引き返した。そしてセレベ川橋の側にある、華僑の売買家に寄つた。中央デパートでも購入出来なかつたローソクを華僑売買家から闇で購入するつもりであつた。

かたつぱしからローソクが有るかと思つて、三軒目に漸くローソクを見つけた。一本三トコロゴ、高いのに驚いたが三本購入する事にした。この華僑の店もデパートと同じく売台が有つて境になつてゐる。

私は購入したローソクが余りに太く長いのに驚異の目を見つけた。商店の内容は実に貧弱で、僅かの食糧品と、石鹼、野菜等が並べてあるにすぎなかつた。しかしソーメンのあるのには正にびっくりした。

私は五トコロゴの食パンを一個買ひそれを持つて帰路についた。

(4) 第十一行政区第九ホリン(二十戸)

バルトンは、昨日からの二十四時間勤務で疲労した身体を、午前十時頃宿舍に運んで来た。私はまえから聞いていたので、ペイチカに火を入れ、お茶を沸かして待つていた。早速昨日買つて来た白パンを出して労をねぎらつた。彼はお茶を飲みながら、今日こそ居住証明書を下附して貰う順序として、第十一行政区第九ホリンに行つて申請書に署名して貰わねばならぬから、一諸に出かけようというのだつた。

勿論、私は何処に行つてどうするのか、皆目分らなかつたので、彼に殆ど一任したも同然だつた。それだけに、彼は暇を見付ける事に専念して、漸く今日その暇が得られたのだつた。

バルトンは、「私(筆者)をしてこの第十一区第九ホリンに居住せしめて下さい」という申請書を、手帳の紙を一枚はがして書いてくれた。そして私の名前だけを新文字で署名した。捺印する事は必要としなかつた。

今迄蒙古において個人の捺印のしてあるのを見た事はなかつた。

私共二人はお茶を飲んでから外出の仕度にかゝり、戸締りを嚴重にして出かけた。

女囚監の監視楼と高い柵沿いに南に行き、陸軍省の東側を通つて、基幹道路を横断した。少し行つて入つた処に大門があり、そこを入ると二棟の平屋建があり、その東側に蒙古包が一個あつた。

バルトンはこの蒙古包の扉に手をかけ開けながら、「サイハンバイノウ」と挨拶した。中には中年の婦人が何か片付けていた。彼女は振り返つて見て、「オヤ、バルトン、サイハンバイノウ、どうして長い事顔を見せなかつたのか」と問う。バルトンは、「非常に忙しいので来られなかつた」といいながら寝台に腰を下した。

私は入口の机に向つて椅子に腰かけた。主婦は仕事の手を休めて話し初めた。

「この前貰つた薬は非常によく効いたよ、四、五回服用したらめつきり痛いのが無くなつたよ。」

「それはよかつた。一番良い薬を書いてやつたのだから、効かない筈はない。」「今度又処方箋を書いてくれないか。」「それはおやすい事だ。それよりも御主人はどうしたか。」

「ハラフン(蒙古ではラマ僧のみが赤や黄の衣を着、普通一般人は、黒、紺、藍等の衣服を着ているが、ハラフンとはこの一般人の総称である。こゝでは自分の主人を指す。)は保育園に行つてゐる。何か用事か。」「実はこのハラフン(筆者を指して)が、私と一諸に居住する事になつたんだ。それで御主人にこの申請書

に署名して頂きたいと思つて来たのだ。」「じゃ向う、行つて(保育園を指して)会つたらよいだろう。お茶を入れるから飲んで行つたらどうかね。」「用事が済んでから載く事にしよう。」と言つて私を連れ出し保育園長は事務机に向つて、保母と事務打ち合せをやつてゐる処だつた。

打合せが終る迄、私共はその側に立つてゐた。保母が帰つて行くと、園長は、「いや、バルトン久し振りだね。御元氣か、今日は又どうした事か。」

「園長も御元氣かね。私も忙しかつたので御無沙汰してしまつた。実はこのハラフン(筆者を指して)が私と一諸に住む事になつたんだ。それで居住の手續きをして、早くパスポートを貰わんと仕事に付く事が出来ないからなあ。一つ御迷惑でも手續を取つて貰い度い。申請書も書いて持つて来たのだが、どうしたらよいか、宜敷く御願ひする。」

「そうか、昼休みの時間も近いから、暫く向うの蒙古包で待つていてくれると都合がよい。私も用事を足して直ぐ行くから。」

「そうか、じゃ向うで待つことにしよう。」

二人はそこを出て前の包に戻つた。夫人はお茶を沸かし初めた。私は不思議に思つた。さつき夫人はお茶を飲めとすすめてくれた、それだのにお茶も沸いてはいなかつたのか。蒙古人もこのようにお世辞か上手になつたのかと思ふのだつた。

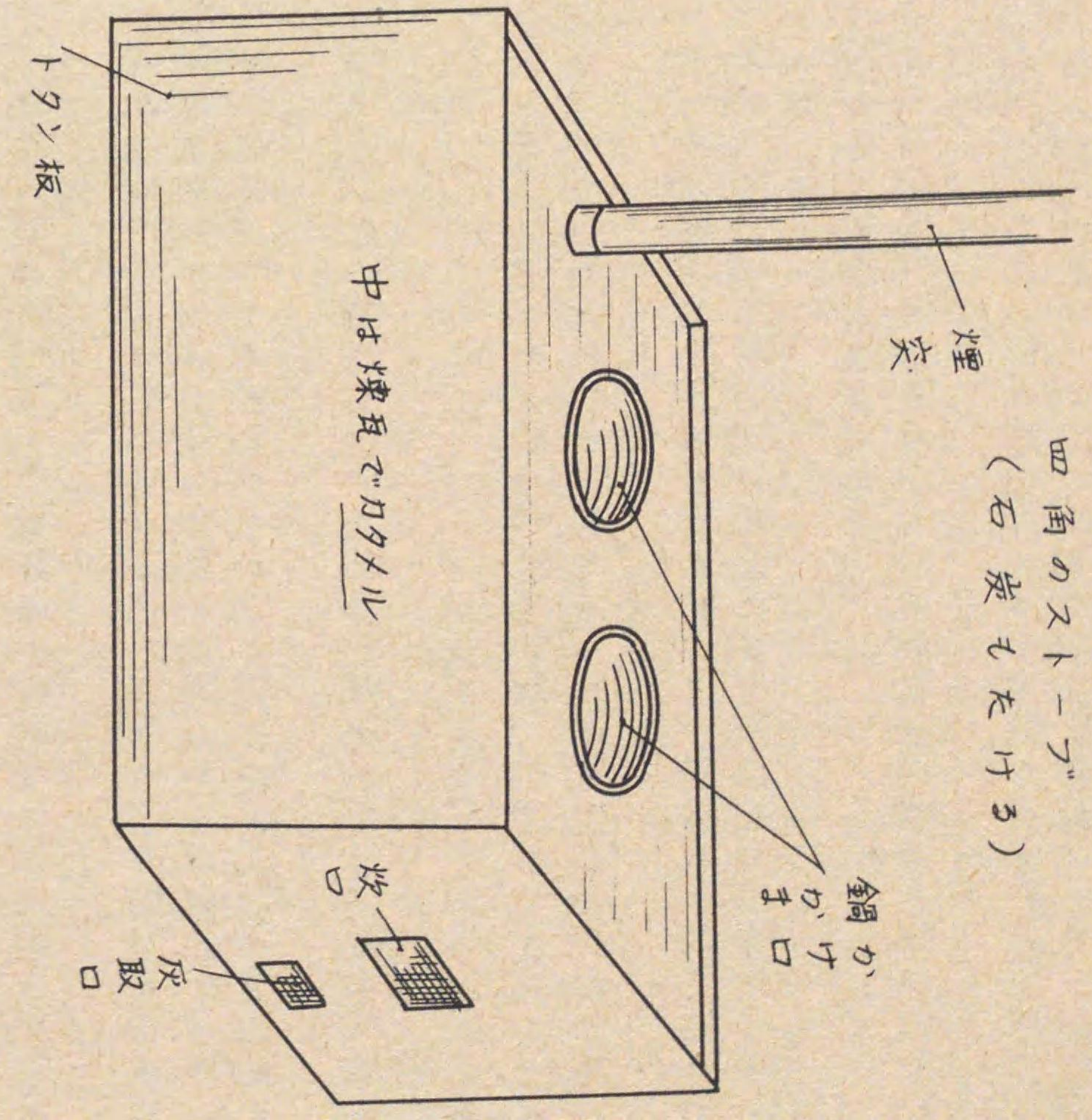
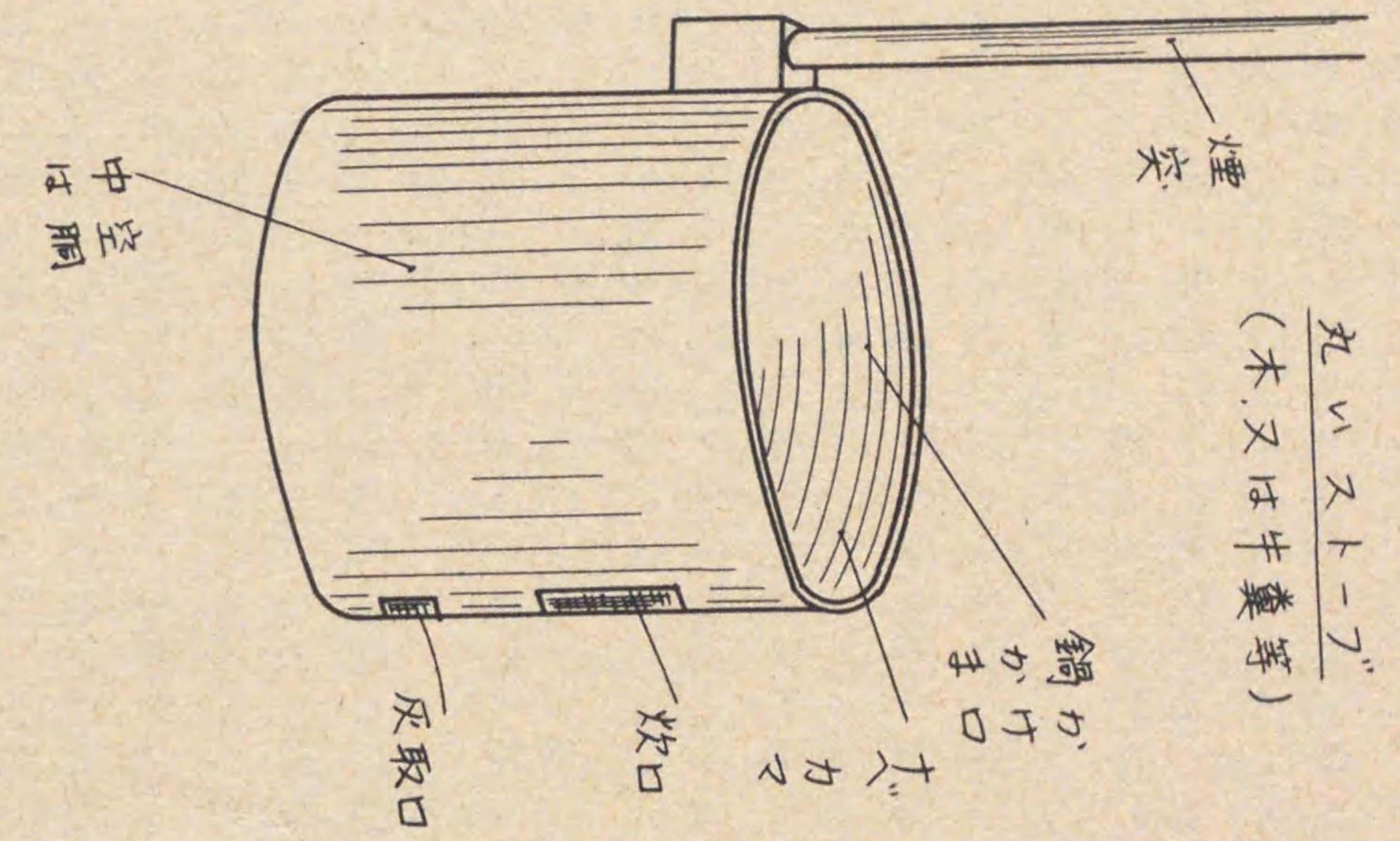
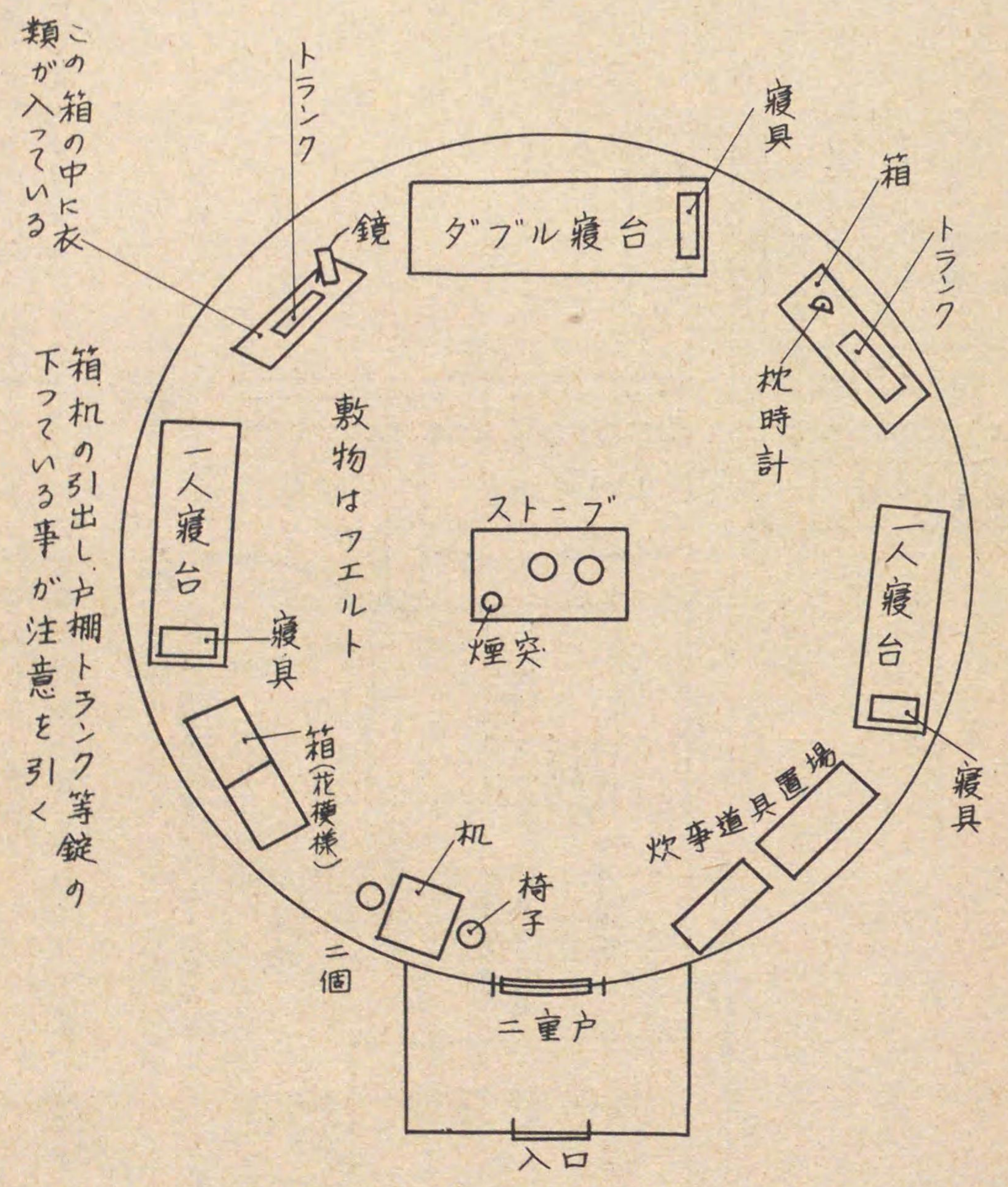
四角のストープで、これは表はトタン板で作り、中は煉瓦でかためたものがある。蒙古包にこの四角のストープが入つてゐる家庭は、主に中流以上の生活者である。中流以下は殆ど丸いトタン板で出来たストープか、泥で作つた自家製ストープである。

この四角のストープは、鍋をかける口が二個所もある位の大きさである。

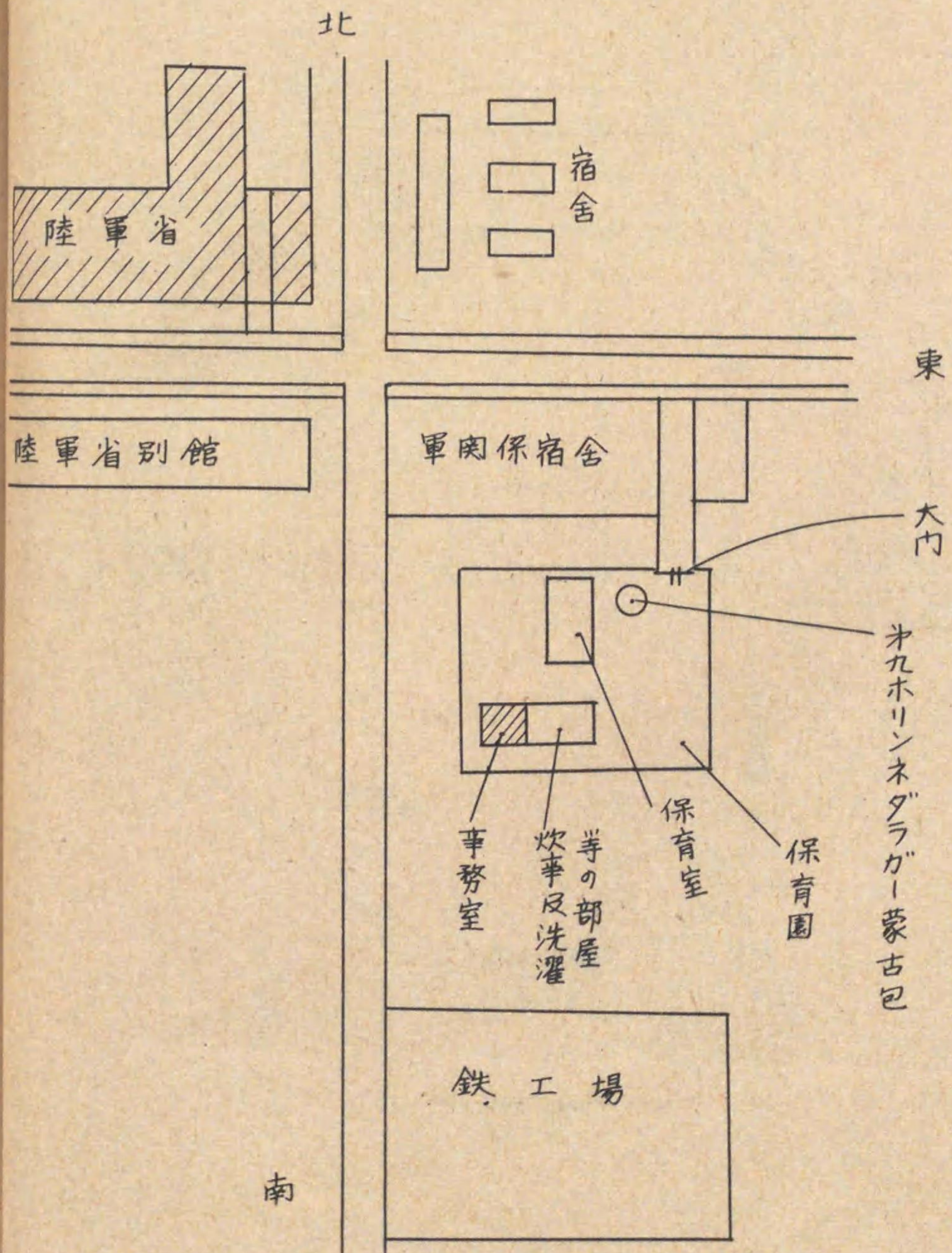
煙突は真直ぐ蒙古包の天井を貫ぬいてゐる。夜はこの煙突を引き抜いて、天井にはフェルトの覆いをして、外気の寒冷を防ぐようになつてゐる。

燃料は五寸位に短く切つた割木であつた。夫人はバルトンと色々話している。ソ連、引き揚げて行つた妻や子供から手紙が来るかとか、今どうして生活しているかとか、生活に關する話で途切れない。

私は蒙古包の内容をよく見た。包内の整頓は余りよくない。子供がある故か、包内が雑然としてゐる。



このような家庭は中等程度より下廻るかも知れない。肉類は別に箱を作り、その中に入れて外におき、錠をおろしてある。これが第十一区の第九ホリンネ、ダラガア（二十家長）の蒙古包であり、又大衆を指導する事務室でもあつた。



この蒙古包の入口に机が一脚と旧式な椅子が二個あつた。私はその一つに腰かけた。待つ事三十分位で團長が漸くやつて来た。バルトンは寢台に腰掛けていたが、主人が入つて来ると立つて迎えた。蒙古人は主人が入つて来た場合、立つて迎えるのが礼儀である。私は前から蒙古の習慣をよく知つていたが、何にも知らないふりをして腰かけていた。主人は寢台の下から小さな腰掛（蒙古包内で使う特有の低い腰掛、又机ともなる）を取り出し、ストープの側において、腰かけた。普通なら、下敷のフェルトに直接、立てひざか、アグラを組むのかあたりまえであるが、この時腰掛けた処を見ると、少し威勢を見せる為かとも思われた。バルトンは私の事を説明し初めた。

「本当の日本人であつて、一九四五年に逮捕され、刑期十五年を受け、トウブ、ラーガルで服役していた。仕事の成績が非常によく、アシリンホノクが沢山支給されたので、今回刑期満了し、釈放された。しかし日本人なので、誰もこの日本人の身柄を引き受けて面倒を見ようとする者がなく、困惑している処を、私は独身者だし都合が良いと思ひ、突然引き受ける事になつたのだ。仕事が見つかつて少し落ちつき、宿舎でも正式に見つかる迄、私の処で面倒をみる事にしてあるのだ。釈放証明書もあり絶対危険性はないから、心配御無用だ。この申請書に記名して貰ひ、尚居住手続き用紙に証明して頂きたい。」

「そうかね、日本人はまだ、ウランバートルにいたのか。みんな引き揚げたと思つていたが、まだ監獄にいたとは全然知らなかつた。まだ監獄に日本人がいるのか。」

「二人死亡したがトウブ、ラーガルにまだ三人いる事は確かだ。この日本人と合せて日本人は四名という事になる。」

「しかしよく釈放されたものだなあ。どう考えても不思議だ。釈放されたからには日本には帰れないのか。」

「いやそれが分れば安心出来るのだが、全然五里無中という処だ。そんな事はわれわれには分らない。」

「それはそうだ。しかし日本が民主化したら帰れるのは確実になるね。」

「勿論、日本が民主化すれば当然だよ。」

「彼等の話の中で、私の事が主たる話題となつてはいるが、結論は、「今はどうにもならない、時期を待つより外にない。その時期は日本が民主化される時である。」というのである。この意見は誰でもが落ち着くところ

ろであつた。私はこれを聞いて或はそうかも知れないと思つた。しかし私はまだ希望は捨てていなかった。兎に角就職して二、三年働いている中に、誰か、日本の情報を与えてくれるかも知れないと、心ひそかに期待していた。若し二、三年の間に変化がない場合は、国境突破という最後の手段も考えていた。私は、彼等の話の中に含まれた、氣持を推察して見る事を忘れなかつた。

「お前は妻や子供があるのか、年はいくつか、仕事は何が出来るか。」

「私は聞かれた事を素直に答えてやつた。」

「私はY・Kという日本人だ。年は四十才を出たばかりだ。未だ元気がよい、どんな事でもするつもりだ。監獄にいる時は、錠を作つていたか、外でも同じ錠を作るか、国営鉄工場にでも勤めたいと考えている。貴方から心配して貰えないか。妻子はあるが、終戦時一諸に逮捕され、ソ蒙軍に連れて行かれた。現在何処にいるか分らない。本当に可愛想な事をしてしまった。私が監獄から釈放されたとは知らず、死んだと思つているかも知れない。或は又何処かで生きていて、私の健在を祈つていてくれるかも知れない。」

「釈放証明書(トクトール)があれば、見せてくれたまえ。」

「これです。どうぞ御覧下さい。何分宜敷くお願いします。」

「よいとも。すぐ居住証明をしてあげよう。しかしそれには写真が八枚いるよ。こゝのホリンで二枚、ホロで二枚、パスポート・ヘステンガザルで四枚必要だから、先ず写真を準備する必要がある。」と言いなから私の釈放証明書を見た。そしてバルトンにこう付け加えた。

「バルトン、この日本人を連れて写真をとつて来てくれないか、一時間位待つたら出来るかも知れない。私は写真さえあれば証明は直ぐ出来るようにしておくから、早くしてくれ給え。今日中に持つて来てくれれば都合だ。私は二、三日後は用事があつて非常に忙しい、今日中は何とか暇を作る事が出来るからね。」というわけで、お茶もそこそこにして、そこを飛び出した。

セレベ川橋を渡り、師範学校、商務省の前を通り、中央劇場との間の道に入つて。暫く行くと東に入る小道がある。その曲つた処が写真館だつた。

この写真館は公営制のもので、経営者及び技術者はすべて蒙古人であつた。

元来、蒙古人は牧畜を王業として生活している關係上、牧畜以外の技術及び知識は全く無いと言つてもいい位であつた。しかし革命以来三十有余年で生活様式と思想が変り、野菜を作り、商売を行い、鉄工、運転手、靴工、縫工、木工、食品製造工、電工、皮革工、農業等各分野に技術を修得して進出して来た。特に婦人の進出は全く驚異的である。

この公営写真館もやはり、女性の事務員と技術者であつた。

私共が一部屋に入ると、一人の婦人が出て来て、写真撮影室に案内してくれた。そこでパスポート用の写真依頼し、一組八枚で現金六トコロゴを前払いした。

私は「今直ぐ必要だが、出来るかどうかと」尋ねてみた。「一時間後には出来上るから、それ迄何処かで待つて貰い度い」との事であつた。私は姿勢を正して撮影して貰つた。

私共二人は暫時そこを出、セレベ川附近の華僑飯館子に寄つて食事をする事にした。

バルトンは白酒を二〇〇グラム頼んで、二つのコップを持つて来るよう命じた。華僑は二つのコップに夫々一〇〇グラムつつの白酒を入れて持つて来て置いて行つた。私は何年振りに酒を口にすると、確かな事は分らないか三〇度位はありそうだ。口の中に入れてと燃えるようにあつく感ぜられ、咽喉から胃に流れ込むさまがありありと分つて、何年振りかで味つたその快感は、今でも忘れることができない。私はこの時生れて初めて酒の味を最高度に味わい得た。私は沢山は飲めなかつた。一〇〇グラムの酒は今の私に多すぎる位であつた。顔はほてつき、全く赤くなつた事が鏡を見なくても分る氣がした。脈搏は、恐しい程早く打つているのが、手にとるやうに感じられた。

バルトンは私の出獄のお祝だといつて、祝福してくれたのだつた。そして(ポーズ(蒙古では祝日にポーズを食べる)を取つてくれた。華僑の食堂は非常に客足が多かつた。入れ代り、立ち代りして食事をすまして行く。それも、最も経済的に、三トコロゴ位ですますのだつた。よくそれで空腹を押える事が出来ると思ひ思へた。何しろ、ポーズ二個、一トコロゴ、ホーシヨール一個一トコロゴ、シヨーズ二個一トコロゴ、ソーメン類三トコロゴ五〇モングから四トコロゴ、マントー二個一トコロゴ等である。食堂の内容は三流どころの中国飯館子と変りはない。

私共の食事の会計は、バルトンが支払をしてくれ、二十トコロゴの紙幣を出して、釣銭を貰つたやうであ

つた。二人はぶらぶらしながら、師範学校の前を通りかゝつた。バルトンは基幹道路の南側の建築物を指して、あれが中央病院の本館で診察が行われる処だ。西と東は入院病棟になつてゐるのだと説明してくれた。彼は又続けて「若し診察して貰うのだつたら、あの玄関から入つて行くと受付がある。その受付で受付番号を貰うんだ。処かこの番号を貰うのに非常に困る事がある。それは、午前二時頃から待つ者がある程、相当数の患者が押し寄せ、しかも三分の一位は明日廻しとなつてしまふことだ。だから皆我先きと順番を争い玄関に待つのだ。その苦しさは全く言語に絶するものがある。」と話してくれた。

私も治療して貰う事があった。それは監獄生活中の、栄養不良と不衛生の為、大半の齒が抜け或は折れ或は虫し齒となつてしまつていたので、その治療であつた。

監獄内では齒科が無い為、私は齒痛をがまん出来なく、無理に折り曲げて、抜いたりした為、まだ齒根が残つていたし、又虫歯で大きな穴が開いて、御飯も噛む事が出来ず丸のみで過ごしてゐたのだつた。

バルトンから病院の在処を教つたので、就職する前に全部治療してしまいたいと、ひそかに考えた。

そうこうしている中に、公営写真館に来てしまつた。バルトンが先に行つて、出来上つた写真を持つて来てくれた。私は出来上つた写真を取り出して眺めた。何とまあ貧相な顔付きである。こんな淋しい顔付きであるとは自分ながら考えても及ばなかつた。

私は監獄での精神的肉体的打撃の大きかつたことを痛感した。枚数を数えたら十枚入つてゐた。僅か巾一纏長さ三纏の大きさである。撮影技術は全く幼稚である見え、濃いのもあれば、影の薄いのもある。顔にしわがよつてゐるのもあつた。どんなにしても一人前の写真師とはお世辞にも言えない。それも無理もないと推察した。

私共は再び戻つて第九ホリンネ、ダラガアの蒙古包に行つた。

バルトンが保育園の事務室に行つて連絡を取つてくれたので、直ぐ第九ホリンネダラガアは来てくれた。

彼は、居住手続用紙や申請書に記名サインしてあるから、これを釈放証明書と一語にナリンビチギンダラガア、(書記)に提出し、記名サインして貰つた後第十一区長に提出し、許可を得ねばならぬ。又写真二枚はナリンビチギンダラガアに提出して置くようにと注意してくれた。

第九ホリンネダラガアの夫人は、蒙古人としては稀しく、子供四人もの母であつた。四人も子供がある家庭

は蒙古では見られない。普通子供があるといえは一人位である事を思へば、この家庭は、所謂「律義者の子沢山」という処であろう。女の子が三人、男の子が一人で、三人は十年中学校に通い、一人は保育園に行つてゐる。

夫人はハラチャ(黒茶)と、二等麵のパンを出してくれた。二、三日蔵つておいたのか、干からびて、かさかさして固かつた。

食堂で白酒を飲んでいたので、黒茶もおいしかつた。私はお茶を飲みながら、ふと内蒙古で蒙古人の家庭を、行き当りばつたり訪問しては、えらい厄介をかけた事を思い出した。

どんな貧乏な蒙古人の家庭でも、少くとも乳茶と乳製品は出してくれた。その外、蒙古菓子、牛乳酒、米、肉等を出してくれる家庭もあつた。家庭にあるものを出してくれるのが蒙古人の習慣であつた。

しかし外蒙は、革命以来三十有余年経過した今日、精神的にも生活様式にも相当の変化を来たし、乳茶、乳製品など常食出来ないような経済生活となり、一部黒茶とパンに置き換えられてしまつた。

私はこのホリンネダラガア夫妻に厚く礼を述べて去るとき、一つの注文をされた。壊れた錠が二・三個あるから、後で修理を頼むという事だつた。私が在監中錠を作つてゐたと聞いて、彼等は役得として私にこの件を申し出たのだつた。私は、若し錠作りの仕事に就職出来たら、修理してもよい旨を伝えた。

私共二人はホリンダラガアの包を辞し、ナリンビチギンダラガアの記名サインを貰う為、彼の家に向つた。歩いて五分とかならなかつた。大門を入つて行くと、三、四個の蒙古包が並んでゐた。この辺は最近出来たらしく、木柵も新しかつた。蒙古包の外には支那式家屋は殆ど見受けなかつた。

一つの蒙古包に入つて見た、老母が一人と寝台の上に丸くなつて寝てゐる猫の外には誰もいなかつた。

バルトンは老母に尋ねた。その結果ガソリン配給所に勤めてゐる事が分り、帰るとしても午後五、六時になるとの事であつた。

私共二人は急いでそのガソリン配給所に出かけた。

ガソリン配給所はそこから十五分位かゝつたであろう。私の在監した中央監獄から、自動車絶えず列をなしてガソリンの配給を受けてゐるのがよく見えたが、その処だつた。

バルトンは立哨中の軍人に理由を話して事務所の中に入つて行つた。

る。私は呼ばれて、区長室に入った。南側の窓下に一人の壮年が机に向つて書類を整理していた。これが区長だつた。その机の上に稀しく電話器が置いてあつた。この部屋の真中に応接用の机を閉んで椅子が四つ並んでいる。私とバルドンは区長の前に行つて、椅子に腰を下さず、バルトンが女書記に説明したと同様、事情を述べ、区長の居住認可を願つた。区長は、私から書類やら申請書やらを受け取つて、詳細点検した後記名サインしてくれ、なお必要場所に丸いゴム印を押した。この区長は、吾々に親切丁寧に居住証明書の下附願に関する注意事項を述べてくれた。それによるとカシヤのデブトル（一柵内に五、六個の家庭が住んでいるが、これ等の者を、纏めて登録してある台帳。）を持つて、パスポート、ヘステンカザルの外国系係に下附願いを申請せねばならぬ。

その際、外国系は手数料として六十三コロゴ支払わねばならぬ。（内国系なら十三コロゴで済む。）又パスポート、ヘステンカザルには、午前の三時頃から行つて順番を待ち、受付番号の札を貰わねば、手続がとれないから防寒着等十分仕度をして行くようにとのことであつた。

そして、話が日本の事に移り初めた。この区長も日本人に対し反感を持つてゐるだらうと思つたが、それは少しも認められなかつた。「日本人がまだウランパートルにゐるとは思わなかつた。外に日本人かいるのか。」私は素直に答えた。それは彼の質問の態度が余りにも和やかであることを感じたからである。

「まだ日本人がトウブブ、ラーガル、（中央監獄）に三人残つてゐる。私が最初に出獄したが、外の者は刑二十五年、二十年、十五年である。みんな身体を悪くして、十二分に働く事が出来ないから、釈放されるのは遅くなるだらう。この人達を特別に監獄から出して貰える方法はないものか。」

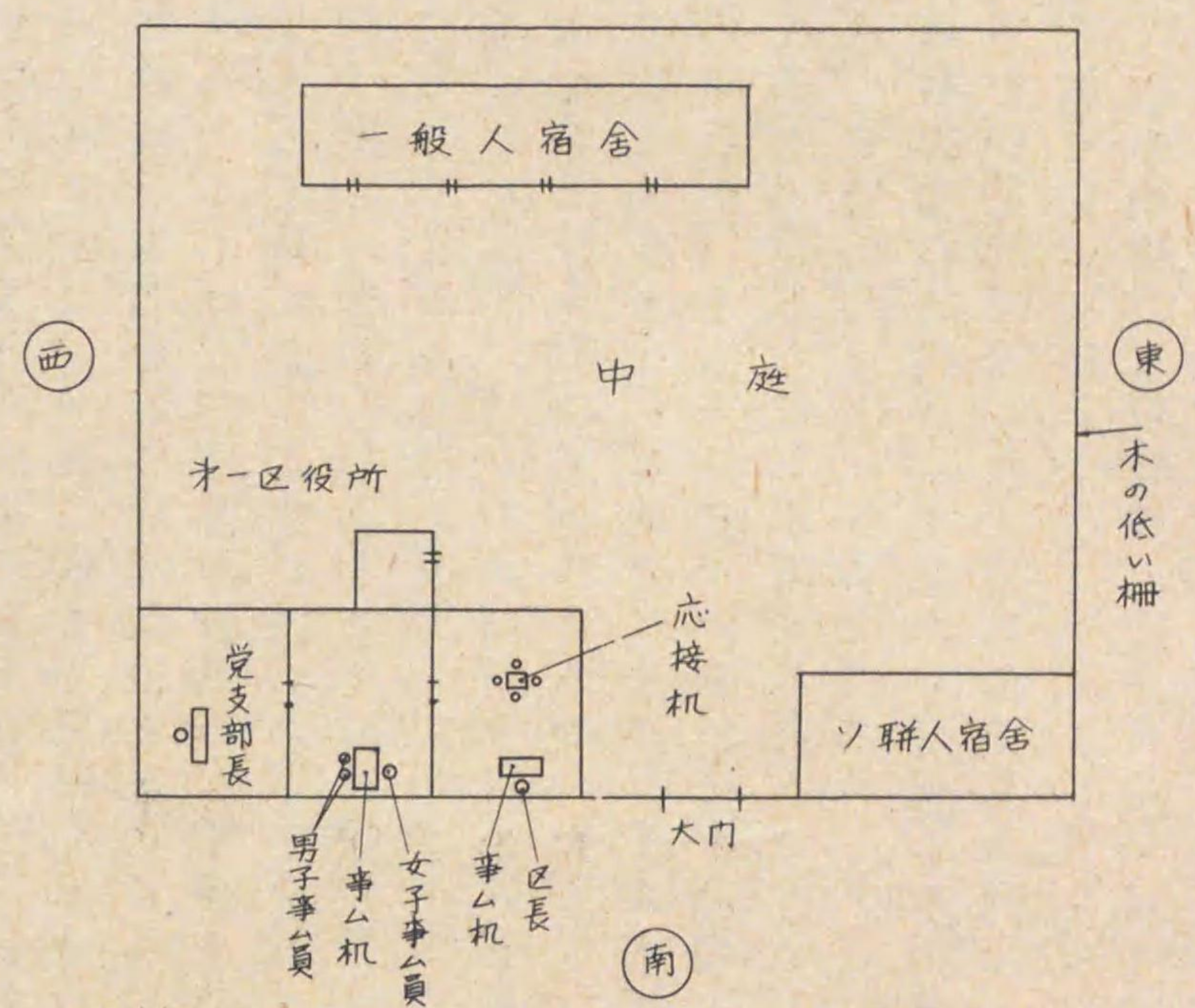
「それは私には分らん。まあその中に何とかなるだらう。お前は何か特技でもあるものか。」

「特技という程のものはないが、鉄工として幾分なりとも経験したので、出来得れば今後もこの方面に進みたいと考えてゐる。」

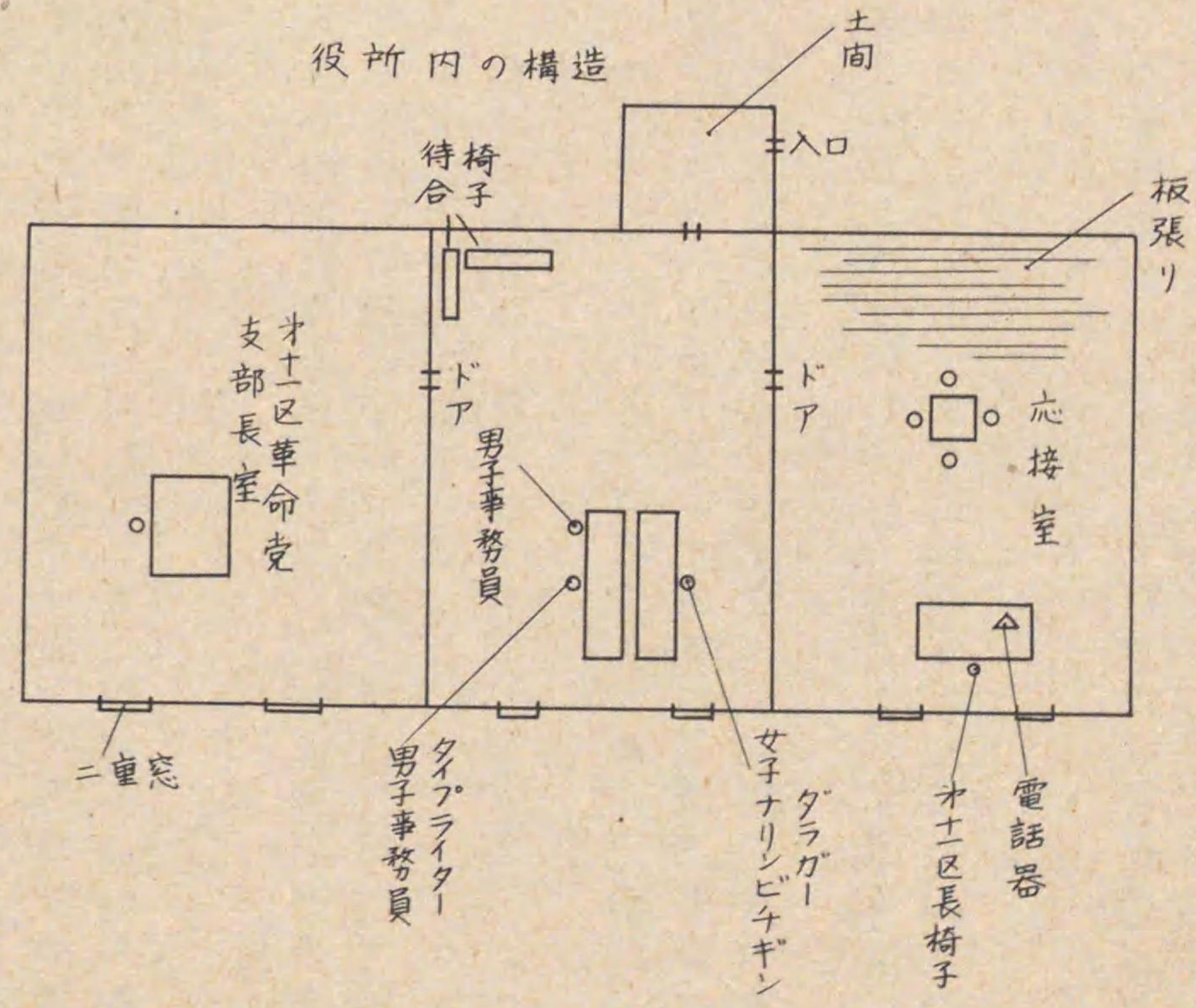
「それは良い事だ。監獄で身につけた技術を生かす事が、一番落ち付くのに早い。その上、鉄工は足りない現状だから、何処でも採用してくれるであらう。早く居住証明書を貰つて職を探す事だ。」

「どういふ職場があるか。」「国営鉄工場、国営カンピナート、国営自動車修理工場、建設鉄工所、手工

北 (オ十一区役所略図)



役所内の構造



業組合等、何処でも鉄工が足りないから、採用するにきまつている。何処でも能率給だから、給与は働き具合による。鉄工なら四〇〇トコロゴは普通だろう。沢山とる人は一、〇〇〇トコロゴ以上にもなるが、こんな人はそうあるもんじやない。普通真面目に働いていけば四五〇トコロゴは下るまい。」

と言いなからバルトンに向つて、「どうしてこの日本人達を日本に帰してやらないのだろうね。日本軍が帰つた時どうして一語に帰さなかつたのだろうね。」

「それは色々意味があるんだ。われわれのような下端役人には奥行き深さは分らない。」

「本当に四、五人の日本人を残して置いたとて何にも深い関係があるわけでもないのに。」

「全くだ。その中に何とかなるだろう。」彼は私に向つて慰め顔で、日本の気候はどうか、今頃は零下何度位に下るかなど聞いた。そして向うの部屋で暫く待つようにと言つて、彼は机の上の書類を片付け初めた。

私共はそこを出て隣室に移つた。椅子に腰掛けて暫く待つと、区長は出て来て、女書記の机に腰掛け、私達二人を手招きするのだつた。私共二人は一語に彼の側へ行つた。区長は仲々話好きらしい。彼は事務員達にも、稀しい日本の事情を知つて貰う為に、私共をこの部屋に移したのかも知れない。或は日本人と長く話す事は疑われ易いから、公衆の前で話し合うためかも知れない。

「日本は地震が多いというが本当か。」

「日本には地震が多い。しかし毎日あるわけではない。体に感ずるような大きなものは年に十数回位のものだろう。日本は海に囲まれ、その上火山が多いから地震の数が多いのだ。」

「その火山というのはどんな山か。」

「山が突然爆発して、火をはく、溶岩を流す、石をふき上げる。そういう事に依つて、段々高い山となつてしまう。その山頂には、大きな火口があつて、その底からは煙をはいたり火をはいたりするのだ。」

「では火を絶えずふいているのか。」

「絶えず火をふいているわけではない。活火山が何時どんな風にふき上げるかは豫測出来ない。しかし、地震観測者等は前もつて豫測出来るように科学が進歩して来ている。」

「地震はどんな風に揺れるのか。」

「横に揺れるのと、縦に揺れるのとあるが、この二つ一語に来るのが一番恐ろしい。大きな地震になると、

地割れしたり、家屋が倒れたりして火災が起こり、人命にも相当被害が出ることになる。その反面、日本には到る処温泉が湧出する。この温泉は保養に最も必要だ。日本人は入浴する事を非常に喜ぶ。」

「温泉は外蒙にも二箇所ある。現在、療養所になつては行かれない。そこへ休養に行くものは、医師からの証明を受け、生産省の許可を得なければ行かれない。そこへ行つて来ると、身体はめきめき肥つて、健康になるよ。日本では温泉が沢山あるとすれば、自由に行かれるんだね、それは羨しい事だ。こちらでは余り遠すぎて旅費もかゝるし、そう簡単に行かれない。」

「日本じやその点具合がよい。交通機関が発達しているので、どんな山奥の温泉場でも自動車や電車が通つている。その外、旅館もあるから、金さえあれば、簡単に行つて来られる。」

「日本にも大きな建物があるか。ウランパートルの政府官庁、劇場あのような大きい、立派なものか幾つ位あるのか。」

「日本の家は普通木造で二階建てだ。大都会に出ると八階位のビルディングがぞくぞく林立しているよ。ウランパートルの建物なんかはほんとの大都市の建物の中間に入らないよ。田舎の市街地にもあの位の建物はある。また、高層建築はすべて鉄筋が用いられ、木造は特殊な技術で耐震用に出来ている。この木造建は、冬でも障子一枚で過すのだから日本は相当暖かい事が分るだろう。」

「障子とはどんなものか。」

「こちらで言えば、硝子窓に紙を貼つて置くのと同じだ。」

「そんな事なら寒くて家の中にいられないだろう。」

「ところがそれで十分過せるんだ。その位日本の気候は温暖なのだ。こちらのようになら零下三十五度以上になる事は絶対にない。下つても零下七、八度という処だ。だから昼間は暖く、降つた雪も日中は溶ける事が多いんだ。」

「いつたい日本は雪が降るのか。」

「そう、沢山降る処は一日一米の上になる事もあるし、全々降らない地方もある。」

「そんなに雪が降つたら困ろう。交通の杜絶する事もあるかね。」

「交通の杜絶する事も所によつてはある。しかし大体科学的に進歩しているので、除雪機械で片付けられ

るから、そんなに混乱する事はない。」

「蒙古は雪はほんとうに少い、十糶も降らない。しかし溶けるといふ事を知らないからね。今の雪は来年四、五月にならねば溶け初めない。大体日本の気候と較べたら、春の時期は二ヶ月以上遅れているね。」

「そうだね。二、三カ月は確実に遅れているね。しかし、私の驚いた事は、こちらで野菜が出来る事だ。そして小麦なども出来る処を見るとそれ程でもないように感じるね。」

「日本人は肉より魚肉を好むそうだが本当かね。」

「日本は海洋国だから魚類には不足しない。丁度外蒙が牧畜で、家畜肉が豊富であるのと変らないよ。」

「外蒙は牧畜を主体としているけれど、家畜肉が豊富だとは言えないよ。昔に較べたら大分窮屈になつて来たからね。それでも食えない事はないからね。何とかして少量ではあるが過せるよ。」

「毎日肉かなければ過せない蒙古人と菜食の日本人とを競べれば日本人の方が抵抗力が少ないというものだね。特に寒さにおいては全々駄目だね。」

「魚肉も新しい程美味しいそうだが、吾々蒙古人は少しも食えない。あの悪い臭が鼻についてどうしても食う気になれない。全く吐気を催すね。」

「そうですかね。監獄の中では肉がない時、蒙古人の人達も本当に悪くなつた魚を煮て食つているのを見たか。……」

「外にいれば何とか工面すれば肉が手に入るから、わざわざ嫌いな魚肉を食う必要を感じないのだ。これが肉もなくなつて手に入らなくなれば、魚肉も食うようになるが、まあまあそんな事は無いだろうね。」

「日本では刺身と言つて、魚の生肉を食べるが、これが本当に美味しいんだ。蒙古では羊の丸煮の半生という処が一番美味しいんだそうだが、丁度それに似ているね。」

「なる程ね。処変れば品変るとよく言つたものだ。全くその通りだね。」

第十一区長と書記達は日本人の私と、こんなに親しく話し合つてくれた。このことは誠に稀しい出来ごとだつた。それは第十一区長が、日本について相当の関心を持つていて、そのことを示しているのである。うし、また書記達の目を丸くして驚いたり、喜んだりしている処を見ると、彼等の持つていた今までの日本人観というものが、或は變つて来たのではないかとも思われるのだつた。

私共は互にバヤルタイ(サヨナラ)と言つて別れた。

私は道々考へて見た。区役所と言つてただあれだけのものだろうか。区長一人、女書記一人、男タイピスト一人、その他雑役一人、計四人、余りにも少なすぎるようだ。ウランバートル市は十三の行政区に分れ、(ウランバートル市内は第十一区まで、アムゴロンガ第十二区、ナライハラガ第十三区。)総人口、十五万乃至二十万と推定して、一区平均一万人から一万五千人位であろうか。自分の見たこの区役所は、単に居住手続の中継場所であり、また上級官庁からの命令の伝達機関に過ぎなかつた。これでは広汎な区行政が行われる筈がない。他に実質的な執行面がなければならぬ。それは何と言つても第十一区党支部長となるのである。区役所を出た頃はもう夕方近くであつた。寒さも厳しく、西北風は肌を刺すように沁み込んで来る。

ガソリン配給所の上方から、第一自動車修場工場の前を通り過ぎる。吹きまくる西北風のため、ことごと。途中バルトンはグループ(内防処出張所)に用件があるというので別れた。私は前に来た道を通つて陸軍省の東側を通り、宿舍に帰つた。

部屋は全く冷え切つてしまつていたが、それでも吹雪でないので、粉雪が屋内迄飛び込んでくるようなこととはなかつた。

早速、ペイチカを焚きつけ、お茶を沸かし夕食の準備をした。今晚はバルトンも帰つて来るだろう。

(5) 建設省直屬鉄工場

其の後積立金の支払請求に中央監獄事務所に出かけたが、現金がないと支払つてくれない。

所持金も僅少となつて心もとなくなつて来た。早く何とかして、どこかに就職せねば生活していくことができなくなつてしまう。これを解決するのは一日も早くパスポート(居住証明書)を貰うことだけである。それなのに私はウランバートルの街を全々不案内で、何処にパスポート(居住証明書)を貰うか、(居住証明書発給所)があるかが分らない。一番頼りにしているバルトンも忙しそう、殆ど宿舍に寄りつかないから、相談の仕様もない。

私には在監時の知り合で、一度訪ねて頼ろうと絶えず念頭から離れないでいた朝鮮人が一人あつた。彼は鮮名はイイミンホウといい、一度日本人として福見と姓名迄変えた男であつた。又やはり在監時に助け合つた蒙古人で、ザウナスト、ツアカンドルチ・ナムスライジャップ、スへ等もいた。これ等の人達が、同じ鉄工場に勤めている事を私は聞いていた。

私は彼等を頼つて行けば、何か得られるであろうという漠然たる希望を持つていた。懐中も淋しくなるにつれ、何とかせねばならぬという気持はいよいよつのり、私はこの鉄工場を懸命に探し求めた。

私は朝から宿舎を飛び出して、監獄内で聞いた僅かな情報をたどりながら、一日中足を棒にして処かまわず探し求めたが、何処にも見当らなかつた。街の角々に地図の立看板でもないかと探したけれど、このウランバートル市街にはそんなものは全々見えないし、役所、公社等にも門札は何処にも掲げてない。これが社会主義国家のあり方かも知れない。学校の名前さえ出ていない処もある。全く雲をつかむようなものだ。特に私のように監獄に長い間いた者は、何が何だか皆目見当もつかないのが当然だつた。

バルトンがその晩帰つて来たので、建設省の鉄工場は何処にあるか尋ねて見た。彼もくわしくは知らない。只サーカス劇場の附近だろう位である。それでも大体の見当がつけば、その辺を探せば分らない事もないと思ひ、夜の明けのを待つて再びサーカス劇場を目標に探す事にした。

私はサーカス劇場を探すのに一苦労した。全々見当違いの方向に行つてしまつたりして見付からない。再び人民広場に引きかえして真直ぐ北に向つて見た。たゞ漠然と歩く私には、何の目標もなかつたが、只一つ、蒙古包と同じに出来ている大きな丸い建物だという事だけだつた。

舗装道路もなくなつてしまひ、その辺から先は何かしら淋しい場末のように思われた。しかし思い切つて北に向つて見た。暫く行くと広い空地が開けて来た。北の方に時々と人家が並んでいる。立ち止つてその辺の様子をよく見た。何か掲示板か広告板のようなものが道路の南向きに立ててある。側へ寄つて見たらそれがサーカス劇場の広告である事が分つた。よくその辺を見ると、直ぐ側に丸い大きなサーカス劇場があるではないか。實際地理も何も知らないとはいへ、明きめくも同然なのにあきれてしまつた。さてこの辺とすると、北の方かも知れない。向うの人家迄は広い空地となつてゐる。北風は物凄く、サラ

サラした粉雪は、氷つた地面を這うように襲つて来る。この辺に来ると全々人通りはない。たまに自動車を通る位である。私は北向きに進むので、全く顔中が凍るような痛みを覚えて来る。クルリと後向きになつて進むが、とても我慢の出来る寒さではない。途中から西南方に進む道路があつたので、これ幸いとその道に進路を変えた。お蔭で助かつたような感じを受けた。暫く行くと、モーターの廻転している音が聞えて来る。よく聞いて見ると直ぐ傍の通り道の建物からである。それは二重に張り廻らされた鉄条網の中にある。私は瞬間、鉄工場はこれでは無いかと直感した。鉄条網で出来た臨時門の側に立哨小屋があるのを見て、誰か門衛でもないかと、のぞいて見たが誰もいない。少し門内に入つて行くと忽ち蒙古犬に吠えつかれてしまつた。突差に石でも拾つてなげつける真似をしたが、犬は益々吠えさかるので仕方なく門外へと引き返した。犬も役目を果たしたというのか、おとなしくなつて、餌をあさりに出かけて行つてしまつた。私はどうしようかと思案に耽つてゐると、突然建物から蒙古人が飛び出して来て、盛んに鉄材を選び出した。私は大声を挙げて、その人を呼んだ。彼は私の呼ぶ声が聞えたと思ひ、手を休めてこちらを振り返つた。

私は急いでその人の側へ行つて挨拶した。

「サイハンバイノオー」(お元気ですかの意)

「サイハンバイヤア」と彼は答えてくれた。

私は穏やかに、「ここは建設省の鉄工場ですか。」「そうです。」「

「あゝそうですか。ではこゝに、イイミンホウ・ザウナスト・ナムスライジャップといますか。」「います。しかし今日は日曜日だから、みんな休んでおります。多分、家はこの近くにありませんか。」「私もよく知りませんがね。」「

「今日は日曜日だつたんですね。全く忘れていました。それでは伝言してくれないでしょうか。」「

「いゝです、どんな御用ですか。」「イイミンホウ・ザウナスト・ナムスライジャップ、この三人に、Yという日本人が尋ねて来たが、日曜日だったので、明日午後こゝに来るからと御伝え願ひ度い。」「

「ハイよく分りました。明日そのようにお伝えしておきましょう。」「

「います。その向うの部屋にいます。」
「ハウ有り難う。」

私は指さされた方向のドアに向つた。ドアを開けて入ると、暗い電気の下で三人が器具の組立て作業をしている。

「サイ、ハン、バイノウ」と声をかけるとみんな振り返つて私を見て、「おう、Yさんではないか、昨日の伝言を聞きました。よくこゝが分りましたね。私達も貴方を見つげようと思つても住所が分らないので、失礼しました。本当に早く釈放されましたね。貴方の来るのを待つていました。」と言いなから、みんな旧友としての情誼のこもつた挨拶をのべるのだつた。

私も嬉しさ一ぱいで、

「皆さんお変わりありませんか。漸く釈放されました。大いに頑張つて十五年刑を全部完了です。十五年刑の者の中でも一番最初というわけです。釈放されたが誠に不案内だから、実に不自由で仕方ない。それでも、この頃は一人歩きが出来るようになった。最初は中央デパートさえ分らなかつたからね。」

「そうだろうね。会えるなんて奇蹟というものだ。」

おめでどうおめでどう。」

そして、私は彼等と力強い握手を交し、互に健康であつた事を祝福し合うのだつた。

ハイミンホウは、仕事の関係で外出して留守との事だ

つた。

ザウナスト、ナムスライジャップ、スヘー、の三人は、中央監獄で、同じ鍋のジャンホーを分け、固い黒パンを嚙つた仲間である。

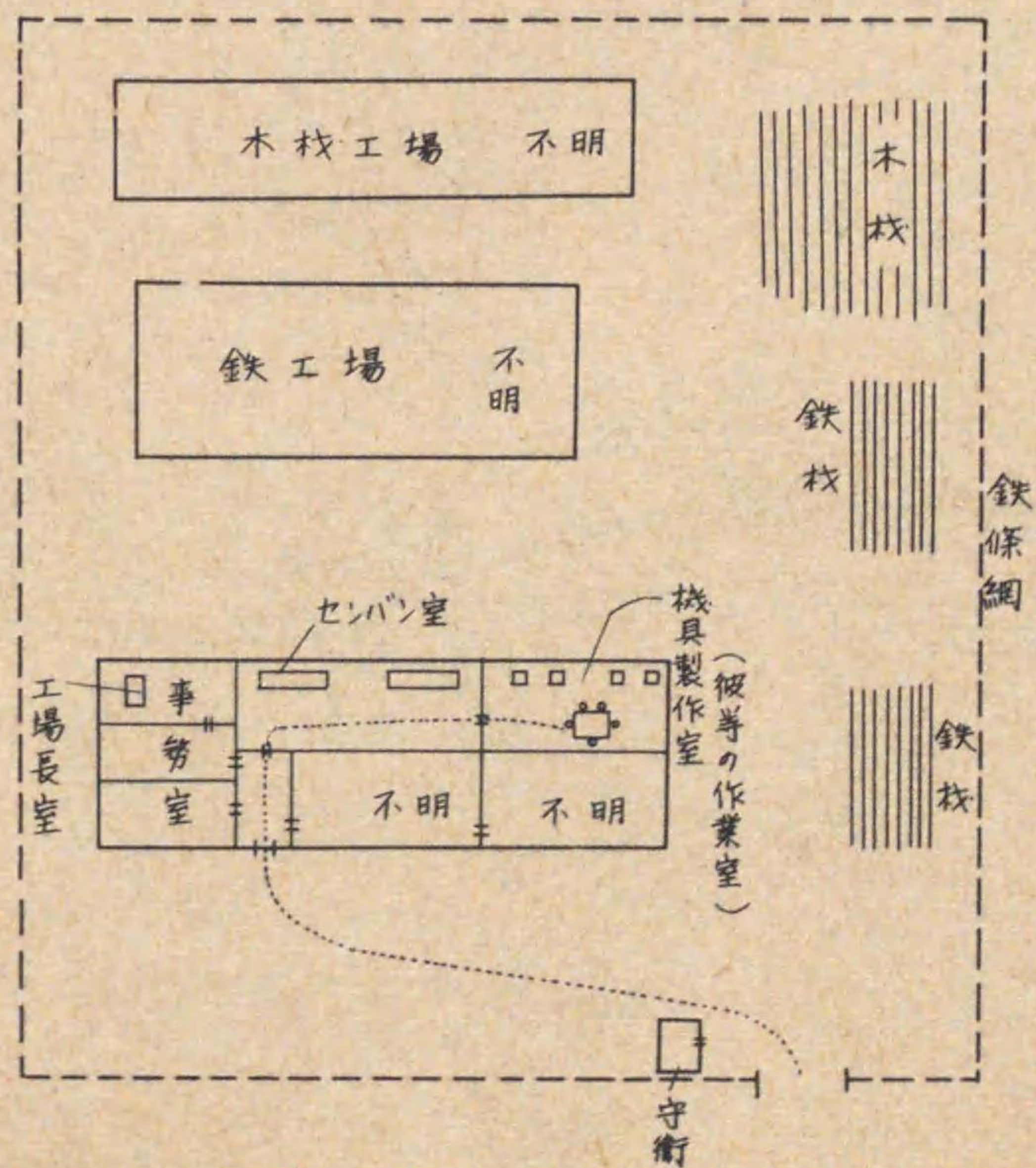
一番最初に釈放されたのがザウナストだつた。次にナムスライジャップ、スヘーが一番遅かつた。彼の最初の刑期は十年であつたが、四、五人で共同逃亡したかどにより、刑三年を増加された為、外の者より遅れたのだつた。

ナムスライジャップ、とスヘーの二人は、満洲興安北省、ホロンバイルのソロン人である。彼等は満洲関東軍謀略部隊の一員として、教育を受けた件及び特務機関に密接に協力した件により、十年刑を言い渡されたのだつた。この種の十年刑囚は、ホロンバイルの蒙古人を初めソロン人が多く、バイントモンで裁判を受け、オノン等の收容所を経て、中央監獄に移送されたものだつた。

この三人はやはりノルマーの仕事で、ドアの取手を作つていた。中々優秀で、一寸見た処、ソ連製品と交りはない位だつた。しかし、それだけに生産量は少く割高となるのだつた。彼等もこの冬期間は暇であるらしく、鉄工場から保証金を貰つているとの事であつた。この保証金というのは、仕事がなく、月三〇〇トコロゴに達しない場合は、その不足分だけ保証するという方法である。実際はノルマーの仕事がない場合は、ノルマーでない雪除けや土堀りや家屋の修理、其の他あらゆる雑用に追ひ廻されるから、結局他の仕事を働かせて保証するというのである。

彼等は口を揃えて、何処へ就職するか、住所は何処か、パスポートを貰つたか等ときいてくれた。その中でも就職の問題に付いては真剣であつた。それは、職のない、しかも身寄りもない日本人がどうなるか分り切つていたからである。就職して生活を保証する。これが先ず第一の重大問題であつた。

彼等は、「この鉄工場に推薦してもよい」と言つてくれた。特にザウナストは、「日本人が釈放されて来たら採用したらどうかと、工場長に話しておいてある。工場長も採用してもよいという意見を持つていた」と話してくれた。ザウナストの意見に依ると、この工場長も一度監獄に入つた者で、監獄で生活して来た者の気持をよく知つてゐる。特に日本人という身寄りもない者に対しては特別好意を持つてゐるとの事であつた。



ザウナストは「俺が行つて大体の話をして来るから、暫く待つていて見ろ」といつて、仕事を放り出して出かけて行つた。

彼が出かけた後、ナムスライジャップとスへは、「どうもザウナストは口が軽くて困る。免に角、われわれ労務者の一挙手一投足が工場長に筒抜けだからね。いつも言葉や行動に十分注意して居ねばならないので窮屈で仕方ない」とこぼしていた。そして「特に、Yさんは日本人だから注意人物として、工場長もみることだろうし、又任務を持つている者をたえず側におくかも知れない。それを覚悟の上で就職せねばならぬ。だから此処で働く事は十分考える必要がある。」と小声で注意してくれるのだつた。

ザウナストが行つてから、われわれ三人は、昔話から現在の監獄生活の変化、ウランバートル市の感想とかを語り合つた。間もなく、ザウナストが帰つて来た。

このザウナストは、この班の班長で、模範工人として、上司から信用されていた。彼の故郷は熱河蒙旗で、蒙蔵学院の出身、ウランバートルに住み、国民政府からの派遣情報者でなかつたかとも推察出来るか、この点は確實でない。

彼はこの期間、外蒙のスパイとして、日本の勢力範囲であつた包頭厚和に出没、情報を探つて、ウランバートルに持ち帰つていたが、終戦後モスコに派遣されて印刷技術の講習を受け、帰国後国営印刷工場勤務中、口が割れて政治犯として刑十年を受けたのだつた。

このような経歴から見ても、彼の性情に異状なところがあると思われる。

彼は私に向つて、「工場長か会いたいと言つて居るから、よく事情を話して見る方が良い」と言うのだつた。そしてナムスライジャップに「案内してやれ」と言つた。

ナムスライジャップも、「それじゃ今日はこれで仕事を切り上げるから、ザウナスト、宜敷頼む」というのだつた。まだ三時を少し廻つた位だつた。

工場長の部屋は直ぐだつた。ノックして入つて行くと、誰かと話しをしている。

この工場長は、軍人に準ずる服装をしている。軍服に違いないが、肩章や袖章等の色合いか違う。

彼はちよいちよい私を見ては、蒙古人と話を続けている。

私達二人はそこに暫く立つて待つた。この部屋は工場長一人だけであるらしく、机は一つしかない。電話

器が置いてあるはかりで、外に何にも見受けられない。誠に殺風景な部屋である。おまけに非常に暗い。窓は一つしかなく、二重窓の下の方は凍つて白くなつて居る。暖房は見えないが確かに壁ペイチカである。工場長の事務室とはこんなものかとあきれてしまつた。蒙古人としてはこれで満足しているのかも知れない。話が終つて客は帰つて行つた。

「これは大変お待せしました。」私はそれに対し、「お気嫌は如何ですか」と挨拶した。処が彼は日本語で「コンニチハ、ワタクシニツポング、ハナセル。」

彼は最上の好意を示したのだから。拙い言葉であるが、その意味がよく汲み取れた。彼は色々日本語で話そうとするが、スムーズに出ないので、蒙古語で話し初めた。私は、「私は日本人のYというものだ。最近十五年の刑期が完了して釈放されたが、身寄りもないので、早く就職せねばならぬと考えている。ここではどんな条件で採用するのか。」

「よく分つた。さつきザウナストが、お前の事を大変ほめていた。仕事がよく出来るそうだね。直ぐこゝで働いて貰い度いかどうか。俸給はノルマ制で、一日の出来ばえに依つて決まる。よく仕事をすれば俸給一、〇〇〇トコロゴ以上になるものもある。こんなに沢山貰う者は特殊な技術者であるか、まあ大体四、五百トコロゴが普通だろう。」

「私が現在最も困つて居るのは宿舎だ。この宿舎はどうしてくれるか。」

「宿舎は何とかなるよ。今鉄工場宿舎の内一間房子が空いて居る。ペイチカ、天井、窓等壊れて居るかそれを修理したら入れるよ。」「この寒いのにどうして修理をするか。材料はどうなるのか。」

「材料は建築現場から支給する。工賃は出さなから自分で修理する。内部の修理は出来る。先ずペイチカを修理してこれに火を入れ、部屋を暖ためてから内部の修理をやれば、必ず出来るよ。それに使う薪炭は配給割当であるから、足りない分は自分で購入せねばならない。尚水代も自分持ちである。」

「電燈はあるのか。」「電球を買つて来ればつく。しかし電球が仲々手に入らないから、工場から一つ借してやつても良い。」

「イイミンホウのようにアパートに住まわしてくれないか。」

「うん。それが出来ない。部屋が空いていない。」とうまく逃げ口上を述べるのだつた。

アパートに入るには、高級者が特殊な技術者という特別な条件を必要とした。だから私を、アパートに住ませる事は絶対不可能な事であつた。アパートに住めば薪炭費はいらぬ。電気料だけで一〇〇トコロゴ以内で済む。独身者には最も経済的だから、私はそれを希望していた。

イイミンホウはどうしてアパート住いをするようになったか。それは彼が北鮮大使館に取り入つて、大使館建築の際尽忠奉公した時の技術が認められたからであつた。即ち釈放の際は、前借金一、〇〇〇トコロゴ、寝具、炊事道具、アパートの一室等を無償で貰い受け尚建設省鉄工場のミハニク（機械工）として月俸六〇〇トコロゴで採用されるという前代未聞の好条件に恵まれたのであつた。彼はハイラルの日本映画の映画館主であり映写技術者でもあつた。彼はハイラルで中国人とロシア人の混血児の女を第二夫人として貰つた。第一夫人は北鮮の原籍地にいる。彼が終戦と同時に、逃亡もせずハイラルに残留したのは、この夫人と子供、及び財産があるからであつた。ソ連軍が入蒙するに当り、彼は黙々と居を変えたが、遂に逮捕されて外蒙バイントモンに送られた。その結果政治犯として十年の刑を受け、オノン収容所、ウランバートル中央監獄、チャガンホウレイ収容所と移り、その建築場で配電工事、時計の修理、ラジオの修理等で一躍技術者として認められるに至つた。そして最後に、北鮮大使館建設には全力をつくした。このような功績が、北鮮大使館、及び建設省にも認められ、前記したように優遇されたのだつた。

私はアパートの件は断られたので、
「まだ居住証明書を貰つていないので困るのだが、下附されてから再び御相談に來ますから、何分宜敷御願ひします。」と丁寧にお願いした。彼もそう言われて見ると無理に引き留め、私から返事を貰うという事も出来なかつた。

「ああ、いいとも、こゝにいるメハニク（機械工）イイミンホウは仲々大した技術者だ。お前もこゝで働くようになったら負けないように努力して貰い度い。私は、日本軍がウランバートル市街の建設事業に携わつて居る時、日本の技術者と討論したものだ。日本人の技術は相当優秀だ。この鉄工場で請負つた建物は、大抵日本軍の手に依つて基礎づけられたと言つても良い。今は立派な建物になつて居る。」
「そうですか、そんなに日本軍が貢献したのですか。しかし、そのかげには相当犠牲者もあつたでしょうね。」

「それは確かにあつた。大体日本軍は寒さに弱いし、食事にも馴れない為だ。その上、被服が非常に悪かつたから、凍傷と栄養失調にかゝつたんだ。」

「それでしようね。では、この次お会い出来る事を楽しみにして。」

「この鉄工場は将来益々拡大されるから他へ就職するより、この方が将来性が充分あるよ。」

「よく分かりました。じゃ失礼致します。」

「ザア、ザア」（ハイ、ハイという意で最後の言葉に用い諒承の意）

私が、この工場長の部屋を出たのは四時頃であつたろう。

外に出るとナムスライジャップは「私の家に行こう」と言つて案内してくれた。

ナムスライジャップ、彼は、ソロン人である。満洲文学に非常に堪能である所から、大連の満鉄本社研究所に招へいされ、蒙文翻譯に従事したそうである。彼は奉天にも新京にもいて、日本人とも接触した。

彼は、終戦当時、ソロン族の青年訓練所の訓練主任であつた。この傍ら関東軍謀略部隊の一人でもあつた。

ソ蒙軍侵入と共に逮捕され、バイントモンに収容され、十年という刑を受けたのだつた。

その後、オノンに移り、ウランバートル中央監獄、ジュンハラ収容所（後ラーガル）、再び中央監獄に移り、そこを最後に釈放されたのだつた。

(6) ナムスライジャップの道案内

ナムスライジャップと私は連れだつて歩きながら、工場長との会話を検討して見た。

採用したい希望を持つて居る事は確実だ。宿舍も与えるつもりで居る。兎に角悪い条件ではない。

しかし、一番の問題は社会教育の服務についてである。若し之が十分でない場合は、再び監獄へ戻らねばならぬという事態にぶつかると考へておかぬならぬ。

私は監獄を出る時、マーシナル、ダンビルヂヤムソ等から懇々と注意されたし、又日本人からも特に注意されていた。さらに現在、社会に出て経験の有るナムスライジャップからも、よく考へるべきだと注意さ

れている処から見ると、簡単に就職するわけに行かないのだ。

ナムスライジャップは日本語をまぜながら、「Yさん、何事も馬鹿になつていないと、直ぐ目をつけられ、利用しようとかゝるからね。十分この事を考えて置かねばならないよ。」

「そうですか。偉そうな事を言わないで、馬鹿ツラしていれば、安全というわけだね。」

「そうですよ。でしやばらない事ですよ。」

「この辺を歩いて見ると、華僑が多いように見受けられますが、どうしてでしょうか。」

「この辺は第一区です。この第一区は殆ど華僑と言つてもいいです。中に蒙古人の家庭も混つていますが、十対二位の割合でしょうね。しかし、この華僑の妻は殆ど蒙古人だから、混血児が多いんだ。兎に角、三、四人の子供を持たん家庭は無い位だね。そこへ行くと、蒙古人は子供を持つていても、一人か二人という処だからね。本当に華僑は老いて益々盛という処だ。この華僑も、革命以前の者だから殆ど五十才以上だよ。それが若い蒙古婦人を貰うんだから大したものだ。中には、蒙古婦人が好んで華僑と一諧になるのがあるよ。これ等の者はみんな華僑の財産が目当てなんだね。」

華僑は、一たん結婚すれば、妻への監視は厳しいらしいね。兎に角蒙古人の性行為はルーズだから、華僑はそれを心配して、嚴重に監視するわけさ。」

などと話してくれた。こんな事を聞いたたり、話したりしている中に、ナムスライジャップは、「ザウナストの住む処はこの柵内にあります。こゝに住む者は、すべて建設省に關係のあるものです。」「こんなに壊れていますが、建設省の官舎ですか。」

「官舎ではない、労務者の宿舎です。」

「高官達だつたら、自分の家を持つていたり、アパートに住むようになります。」

「すると大きな差別があるわけですね。」

「勿論差別はあるね、何と言つても政治を独断している者が強いですからね。」

「なる程ね、差別待遇か。」「こんな事は大きな声で言えないよ。直ぐ密告されるからね。気を付けねばならん。」本当にそうだ。うつかり気をゆるめては大変な事になるぞと思うのだつた。

実際、この宿舎はひつつぶれた建物で、柵などは有るか無いか分らない位である。大門はとり除いてあり

、その大門の入口に大小便所が有る。それが氷で盛上つて塊状になつてゐる。その外観を見る丈で宿舎の程度が分る気がした。今日、工場長か私に与えようと話した宿舎はこの中にあるというし、又ザウナストは一人で宿舎に居るが、外に内妻があつて、たまたま出かけて留守である事が多いと告げてくれた。

私共は、その宿舎の前を通つて、本通りに出た。この道を一度通つた事が記憶に真新しかつた。それは一番最初の日ブラブラ歩いた時、この橋を通つた。そして真直ぐ行こうか、左に曲ろうかと思案した結果、人通りの多い左の通りに曲つてしまつたのであつた。

私共二人は、左に曲らずに真直ぐ進んだ。一〇〇米も行くとナムスライジャップが指さしながら、

「あれがパスポート、ヘステンガザルですよ。中国語、ロシア語と新文字、三国語で書かれています。」

こゝから見ても中国語が分るでしょう。」

「漢字のようですが、はつきり分りません。あれがパスポート、ヘステンガザル（居住証明書発給所）だとすれば、直ぐ手続きを取らねばならない。」

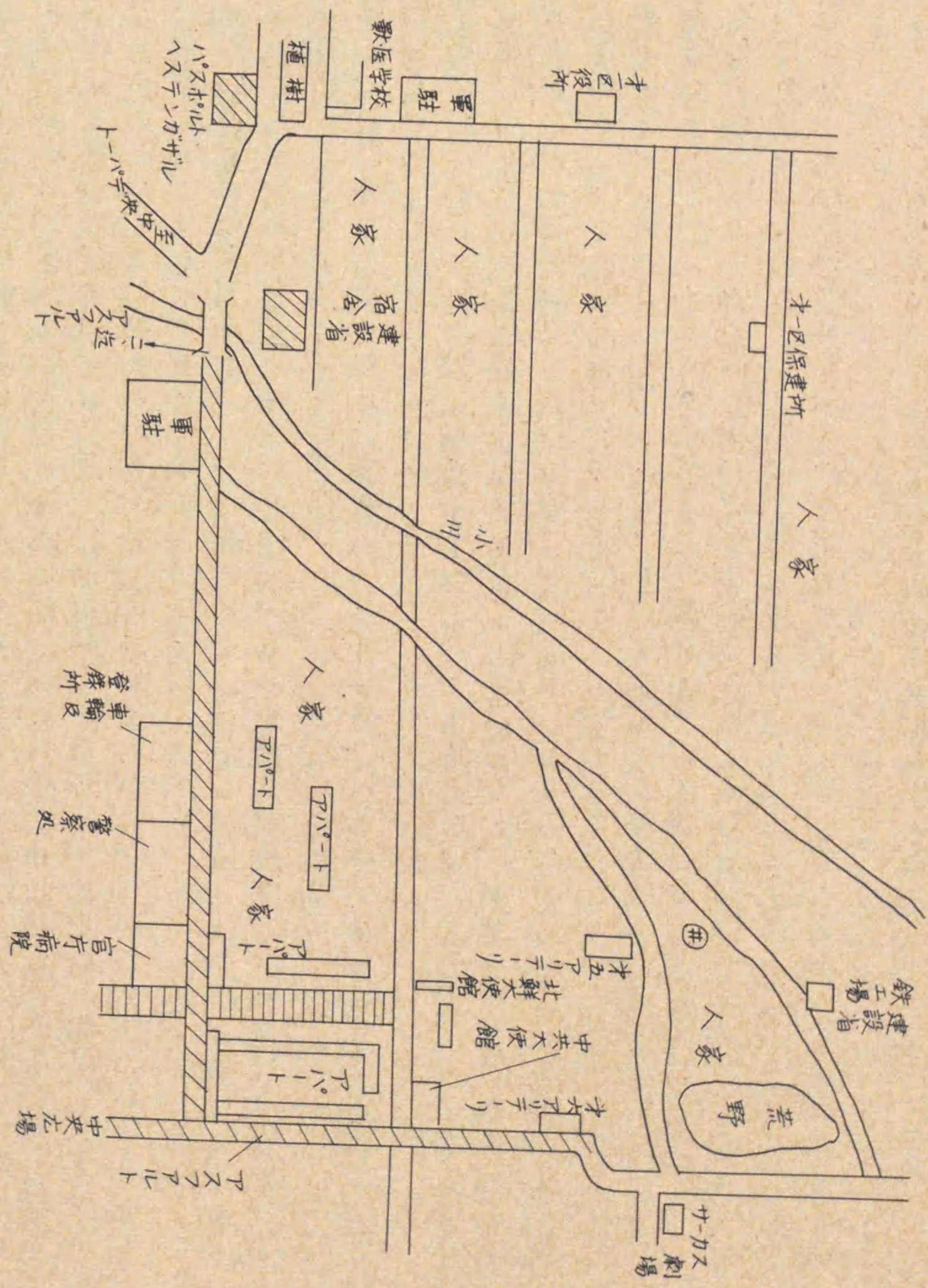
「そうです。早く申請しておかないと、証明書を下附してくれませんよ。私など、一カ月以上もかゝりました。その時外国系は高い率の金額を納入しなければならぬです。最初に下附される場合は、六〇トコロゴ五〇モンク支払い、一年経過すれば書き換える為二十トコロゴ支払いねばならぬ。この外半年毎に証明書の検査があるから、仲々厄介なものだ。」

「そうですか。私にはさつぱり様子が分りません。打つかつて見れば何とかなるでしょう。」
私は、中共に移管される迄、一年七カ月間、このパスポート、ヘステンガザルに三回出頭し、厄介になつた。それも半年毎に、定められた期日に、居住証明書の書き換えと検査があつた。又このパスポート、ヘステンガザルも、その度毎に移転していた事は面白い現象である。

この辺から、道路には真中に植樹かしてあり、それを保護する為柵が設けられ、その両側に車道と人道が入り交つてゐる。

植樹は計画的に出来てはいるが、毎年植え変えせねばならぬ程管理が悪い。早い話が、ウランパートルの市内に飼育されている家畜（牛・馬・羊・山羊・サルラカ・ハイニク等）が、冬期になると、植樹の小枝を好んで食うし、またその為柵も打ち壊され、ここを人間も家畜と同様わが物顔に近道として往来する

という次第なのである。



パスポスト・ヘステンガザルの前を通りすぎると、直ぐ右側に獣医学校が見える。この建物は相当注意せねば、学校とは思われない位である。平屋作りの二棟が道路に沿って建てあるか、実際学生も見えなれば、校庭もなく、特に実習用の家畜さえいない。ナムスライジャップも、初めは何にも知らなかつたが、後になつてから人が話してくれたので、知つたとの事だつた。学生数は百五十余名と伝えられているが、実数は分らないとの事だつた。

この学校は男女共学で、寄宿舎があり、遠隔地の学生はこれを利用してゐる。学生は初級中学三年卒業以上で、年限は三年である。こゝの前を通ると、次に官庁直轄の縫工場がある。こゝは大門も通用門も閉ざされ、板塀と家屋の土壁で内庭の様子は分らない。次は蒙軍の駐留所で、僅かの兵隊が中で騒いでいるのが手に取るように聞える。

この辺は車の往来は少ない。人通りはぼつぼつである。その次は手工業組合の幼稚園である。この幼稚園の大門には、新文字で手工業協同組合幼稚園（保育園）としてあつた。その隣りか第五手工業組合の鉄工場である。大門は閉ざされていた。

ナムスライジャップは「こゝが通用門だが閉まつている」と言いながら近寄り、中をのぞき込んで、マナー（守衛）がいない、と言いつつ帰つて来た。そして私に告げた。

「Yさん、こゝでパルトンジャムンとアリヤボル二人が銃を作つてゐるんです。一本調子の仕事だから気が楽のようだし、社会教育も官庁関係の処より大分楽のようです。将来を考えたら、身体に無理せず、精神的にも余り苦勞しない、こんな場所が、最適地ではないでしょうか。そして、細く長く生きのびる事を考え、何時か日本に帰る日を持つ方が、得策ではないでしょうか。」

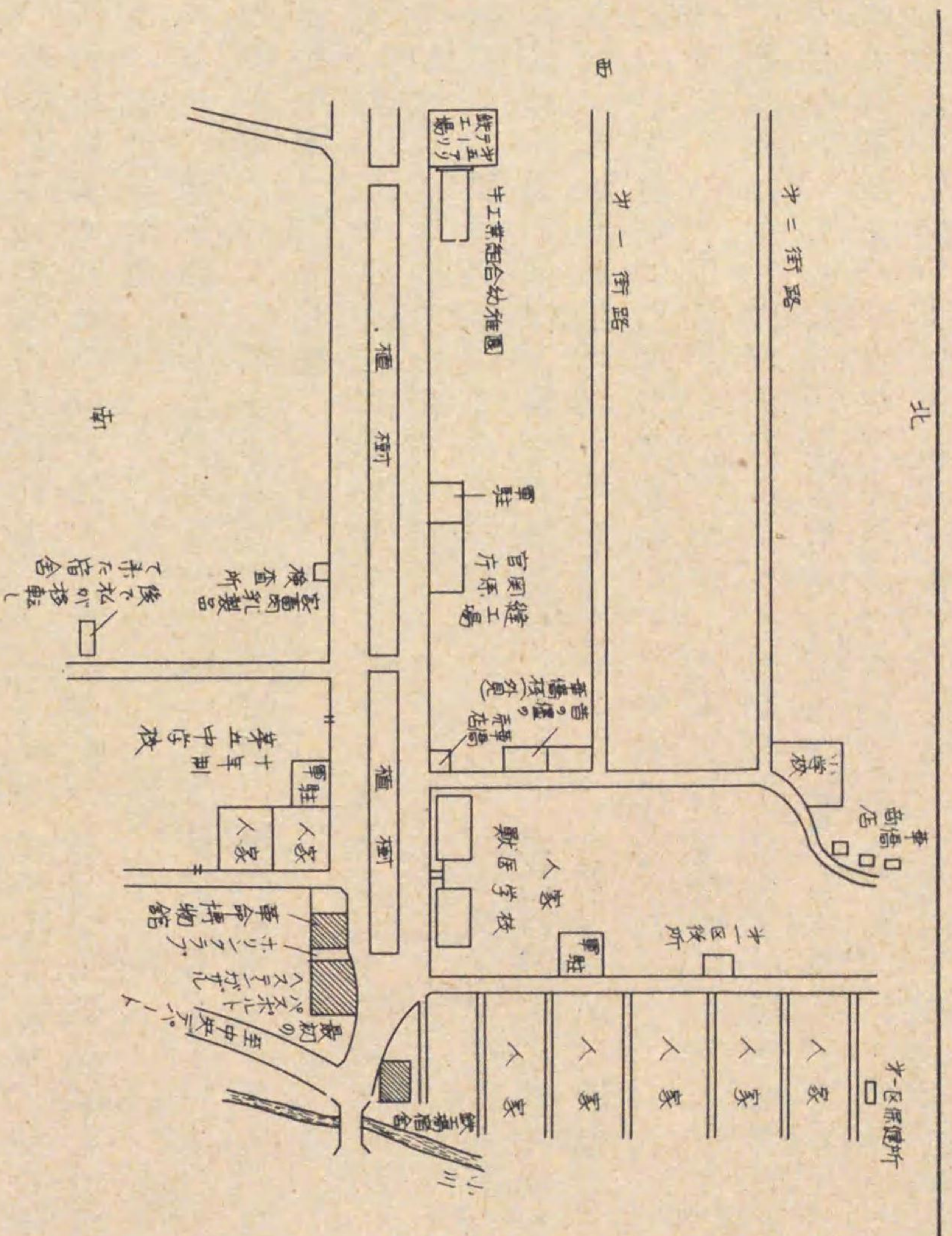
「そうですね。二人がこゝで働いてゐるんですか。一度会つて見たいものだ。気持の楽な処が一番私に適當だから、よく聞いてからにしましょう。」

「一度会つて内容を聞く事が必要だ。早い方が得ですよ。」

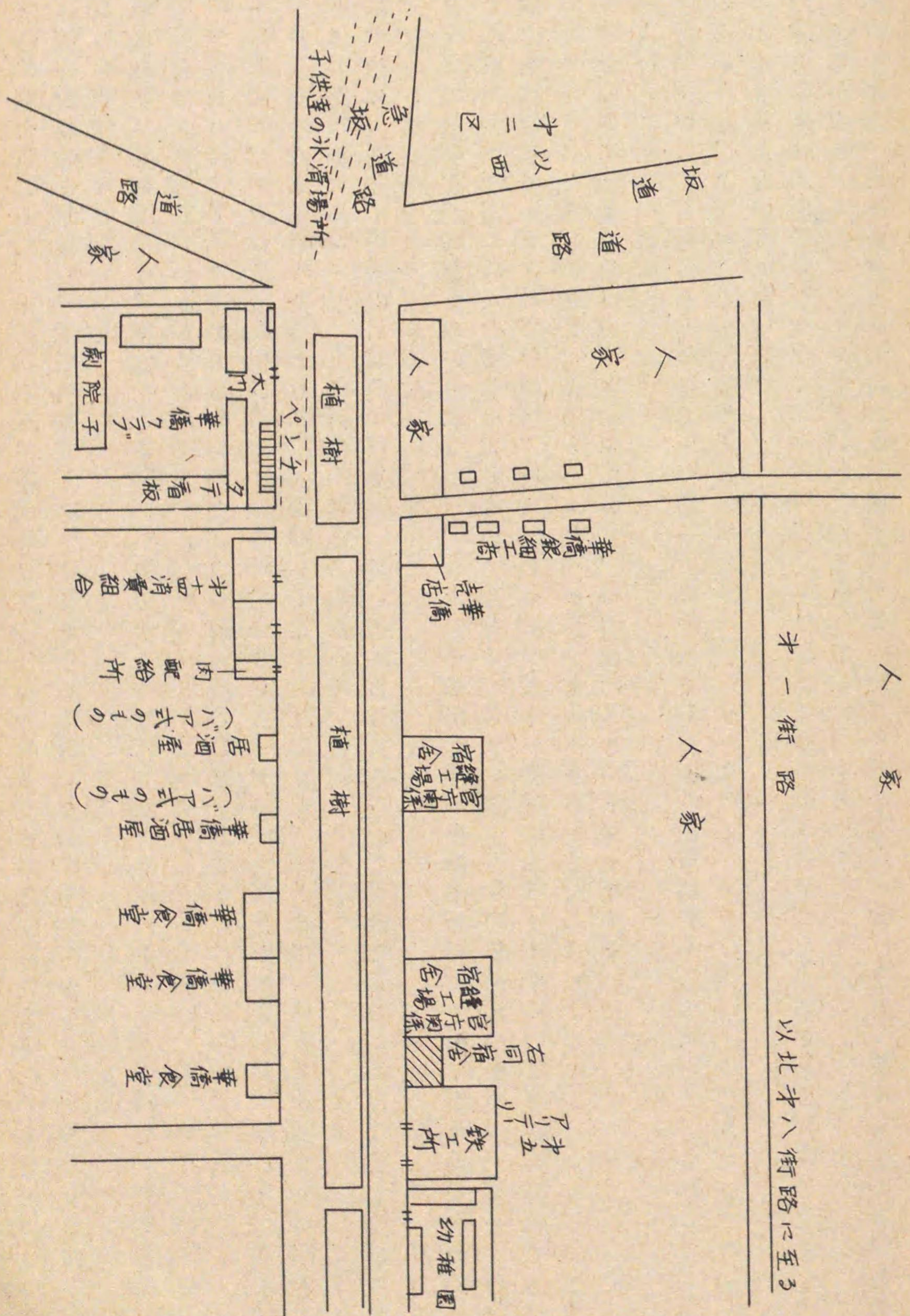
「そうしましょう。」

その隣りか同宿舎であり、その隣りか、さつき通つて来た官庁関係の縫工場宿舎である。この向き合は二軒の中国人（華僑）の個人経営の食堂になつてゐる。その隣りに二軒ばかり、立ち飲み屋（バー式のもの）

がある。この辺は客足も相当有り、中には酔客が混っているのも見受けられる。その隣に、表看板に第十四消費組合と、新文字で書かれてある建物がある。この建物には出入口が二つあり、その一番東側は肉配給所となっているか、冬期間は開店しない。この消費組合の西側通りは、仲々人通りも多く、沢山の人がこの通りに吸い込まれるように歩いて行くのだった。その道路の西側か、華僑だけのクラブであり、又劇院子であつた。



人家
才一街路
以北才八街路に至る



ここでは表に大きな掲示板を出してある。珍しく毛筆の告知が出ていて驚く。附近のペンチに老人達が犬の毛皮の外套を着こんで、三三、五五、腰かけて話し合っている。彼等は一目見て華僑である事が分つた。これ等の封建的な華僑は、革命以来三十有余年経た今日でも、革命の影響が少しもなかつたように、風俗は少しも變つてはいなかつた。

この華僑クラブ兼劇院子は、華僑の一番楽しい場所の一つであつた。それはこの老人達の唯一の楽しみである支那芝居(支那劇)かかかるからであつた。映画・サーカスよりも、かん高い、キイキイ声の劇と、それにうるさい程のドラや鐘の伴奏は彼等にとつて唯一の心の慰安となるものであつた。

又日本の敗戦後、中共は漸く政權を手中におさめ、ウランバートルに大使館を設置した。そして、今年、中共の身寄りの者と手紙のやりとりや引き揚げも出来るようにした。三十数年も外界と遮断されて閉ぢこめられていた華僑にとつては、正に再生の思であつたろう。

この掲示板に、毛筆で沢山の着信の受信者名が書いて貼られてあつた。手紙を受領した者は墨で消してあつた。なおこれには内蒙古人も加えられてあつた。

このクラブには現在、名前を思い出せないか、日本の早稲田大学の出身者かいで、すべての事務を取扱つてゐるとの事だつた。又この人の妻君は、日本語が上手で、ウランバートルの放送局に勤め、一週一回の中国語放送を担当してゐるとの事だつた。私は、よくこの人達が監獄に入らず無事にいる事か不思議であつた。ナムスライジャップの意見に依ると、「任務を持つてゐるから安全なんでしょう」という事だつた。

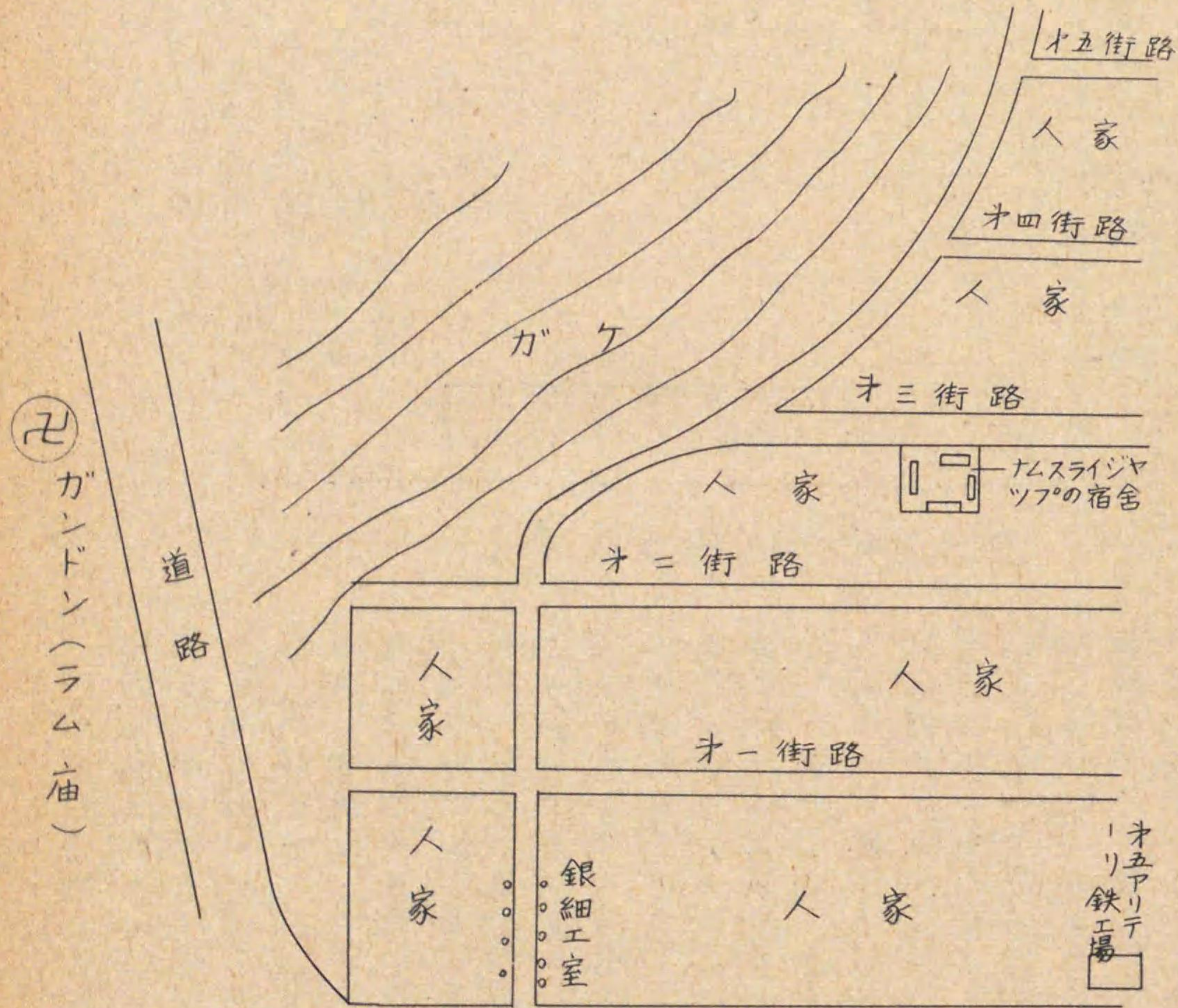
この劇院子の西に当る道路は急坂になつていて、小供達のスケート場となつてゐた。私共二人は北に向う小道に入つた。

この小道の両側は、十軒余りの銀細工屋である。この職業も華僑の独断場である事はいふ迄もない。何処の店からも、コッコツと小錘で細工してゐる音が、かすかに聞えるような気がする。客はいても一人位でほとんど見えない位であつた。

私共は、その銀細工屋の間を抜けて、第一街路、第二街路、第三街路に至つた。道を入ると直ぐ大きな門がまゑの家がある。ナムスライジャップは私を案内してその門を入つて行つた。私はこんなに太い良材は薪にしないで、用材

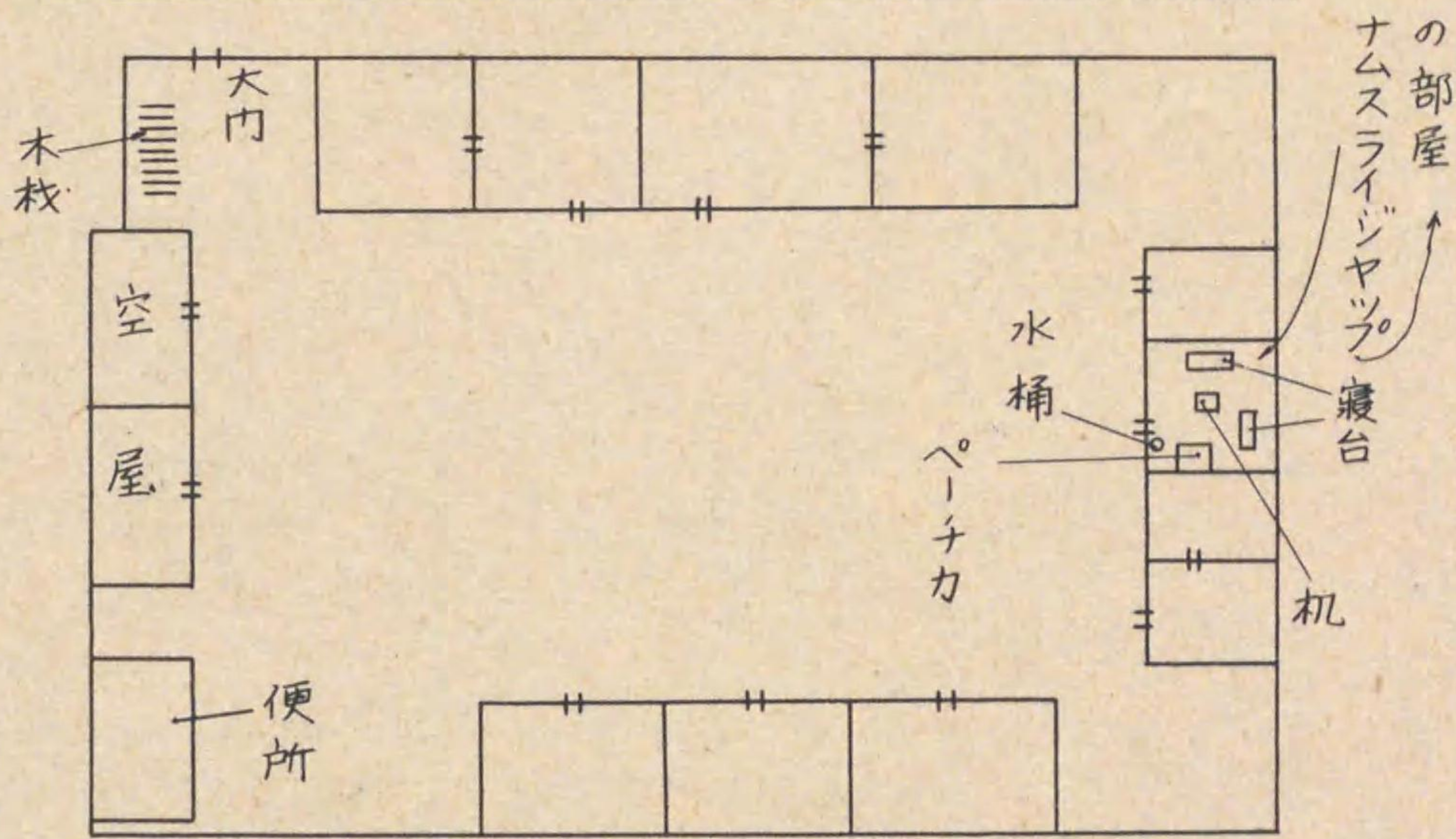
大門の中には、大きな材木が薪用として転がしてあつた。私はこんなに太い良材は薪にしないで、用材

(建築)に用いたら立派なものになるのにと思ふのだつた。



この大門は実に立派なものだ。革命以前は相当金持の華僑がいた事だろう。ナムスライジャツプは、この宿舍が現在ザミンガザル（道路局）のもので、自分は友達の処に寄宿しているのだと私に話して聞かせた。この一廊には七・八戸の世帯が入っていた。この一廊を、カシヤと言ひ、このカシヤの中に組長かいて、カシヤのデブテル（カシヤの台帳）を保管している。このカシヤの居住者に移動が有つた場合は、このカシヤのデブテル（台帳）を持つてパスポート・ヘステンガザルに出頭記入して貰わねは、住む事が出来ないようになってゐる。ナムスライジャツプは、私を彼の部屋に招き入れた。寝台が二つ置いてあり、一つはザミンガザルの友達のだと教えてくれた。机が一つ、腰かけが二つ、箱の棚が隅に置いてあり炊事道具が入つてゐるようだ。壁には懐中時計がぶら下つていて、四時を指して動いてゐる。寝台は萬年床らしく敷き放してある。床は板張り、天井はシツクイ塗り、壁は荒壁に石灰をぬりつけてある。窓は二重窓で一個、壁ペイチカで炊事をやるようになってゐる。出入口は二重扉となつてゐる。一間房子の部屋である。

才三街路



ザミンガザルの宿舍

ナムスライジャツプは、お茶とパンを出してくれた。良いと、すすめてくれた。今晚ポーズを作るから食べて、ゆつくりして行くが

華僑は中共の故郷に帰つて行くが、長くは落ちつかず直ぐ戻つて来る者が多いとの事だ。それは老年の華僑が、中共に渡つても、適当な就職が出来ない。建設創業途上に於ける中共は、若い労働力を必要としている。又老年者は思想的にも再訓練を必要とするし、その為には老年の華僑達は恋しさの余り帰郷したものの、全く思想的にも経済的にも一変した中共が恐ろしくなり、いたたまらず、逃亡するように戻つて来るのだという事だつた。それは滯蒙三十年間に、こつこつときぎいた、財産は少くないし、その上蒙古人の妻を持ち、混血の子供を育て、家屋を所有して、又自分の特技を生かして外蒙に重宝がられ、職の心配もないからである。

この第一区の第一街路から第八街路に至る区間は彼等華僑の世界である。常に人殺し・窃盗・強姦・淫売賭博等が行われるが、しかし摘発は殆んど出来ないとの事だつた。

第一街路から第四街路迄は、革命以前中国人の店舗及び旅館が多かつたとの事だ。現在もまだ、その面影を此処彼処に残している。大門、それに〇〇店舗、△△機等の彫刻が残つてゐると聞く。暫くそんな話をしている、同居の某が入つて来て紹介された。やはり、この人もホロンバイルのソロン人で興安軍の兵士であつた。兵であつた為、連行はされたが罪を着なくて済んだ。今迄ザミンガザル（道路局）で道路の修理に当り相当遠い処へ出張するので、この部屋が留守になる。その為ナムスライジャツプに同宿して貰つてゐるとの事だつた。又、彼は来年は金を貯めて、帰国旅費にしようと言つてゐた。ウランバートルから、故郷ホロンバイルに帰国するには、飛行機だと一、二〇〇トコロゴ位、自動車だと五、六百トコロゴで済むという。

ウランバートルを飛行機で出発するとすれば、先ず北京に直行し、そこから内蒙古関係の者は内蒙古自治区政府に移管され、綏遠迄汽車で運ばれる。ここで旅券が下附されて、自分の故郷迄無賃無宿代で帰国出来る。また手荷物は三十斤迄許されるが、その運賃は必要で、結局どうしても千五百トコロゴ以上必要との事であつた。

携行禁止品は、現金・金・銀・金時計・銀時計等である。したがつて、外蒙から中共に持ち込む物は、

綿布類、毛織物類、時計類、皮製外套、靴等となる。或る者は狼、狐、リス、小羊等の毛皮を着物にして持参、又は自分が着て帰るのであつた。これら帰国旅費の工面は並大底の事ではなく、俸給が月に三、四百トコロゴの者なら、普通のやりくりでは一カ月どんなに節約しても、五十トコロゴは残るまい。一年間に千五・六百トコロゴ貯蓄する事は先ず不可能に近いことである。

こんな話をしてるうちに、大分暗くなつて来た。夜遅くなつては、道を間違える心配があり、それに例の沢山の野良犬の襲撃が恐い。又来る事を約してそこを出た。ナムスライシャツは大門迄送つてくれた。今日は何事もうまく行き心ひそかに喜んだ。

(7) パスポルト、ヘステンガザル（居住証明書発給所）

自分の宿舎に帰つてみると、バルトンが久し振りに先に帰つていた。彼はペイチカに火を入れ、お茶を沸かしていた。

私は彼に今日建設省鉄工場を探しあて、そこにいる私の知人等と会合出来た事を話して聞かせた。彼もよく見つけたと、驚ろいたり、喜んだりしてくれた。そして、明日は午前中国営中央病院で医学について学習がある。それが終れば暇だから、パスポルトヘステンガザルに行き、居住証明書を下附して貰うよう手続きを取らうといつてくれた。

この晩は、久し振りにバルトンはここに泊るといい出した。暫く雑談に耽り、萬年床にもぐり込む事になつた。蒙古の習慣として、就寝する時は裸体が常であるが、現在は大分變つて、シャツとズボン下を穿いて床に入る者が多くなつた。バルトンもこれにならない、シャツ・ズボン下を穿いて床に入った。五分か十分もたぬ中に、どうも部落で泊つて来たので、虱がたかつたかも知れんといいなから、起き上り、シャツを脱ぎ、縫い目を探し始めた。虱を一匹宛捕えてはペイチカに放りこんでしまふ。

昔のラマ教信者達は、決してこのように生物を焼き殺るしにする事をしなかつた。虱かいても、その儘か、捕えても別の場所に離してやるという慈悲心（？）があつた。今でも老年のラマ（僧）ならこのようにする。彼は一とおりシャツをみ終ると、つぎはズボン下を脱いでさがし出した。

それからしばらくすると、冷えた体に虱のいなくなつたシャツとズボン下をはき、ぶつぶついいながら床にもぐり込んだ。

私は部落も虱の点では監獄と大した変りはないなと思つた。虱といえは、隣の啞娘は、全身虱で埋まつていると言つてもよい位である。バルトンは、彼女が彼の宿舎に来る度に、虱退治の薬を与えてやつていた。私は監獄から釈放された許りで、まだ墮性も抜けていないし、このように非衛生極まる環境に住みつくくと、彼等と同じように無神経無感覚となり果てるかも知らんとふと思つたりした。

次の朝九時頃、パンとお茶で食事を済ませ、二人でパスポルト・ヘステンガザルに出かけた。

バルトンは先にたつて扉を押し開け、中に入つて行つた。入つた瞬間は真暗で、何処がどうなつてゐるか皆目分らない。

私達二人は、暫く目の慣れるのを待つた。みると、沢山の人が行列をなして、順番を待っているようだつた。華僑は片方に集まつて語り合つていた。

長椅子が二つ置いてある。吾々二人はその一つに並んで腰を下した。

薄暗い廊下の壁に、吸煙厳禁と貼り紙かしてあつた。道理で煙草の香も煙も少しもしなかつた。煙草好きの私は、一寸手持ぶさたで困つた。

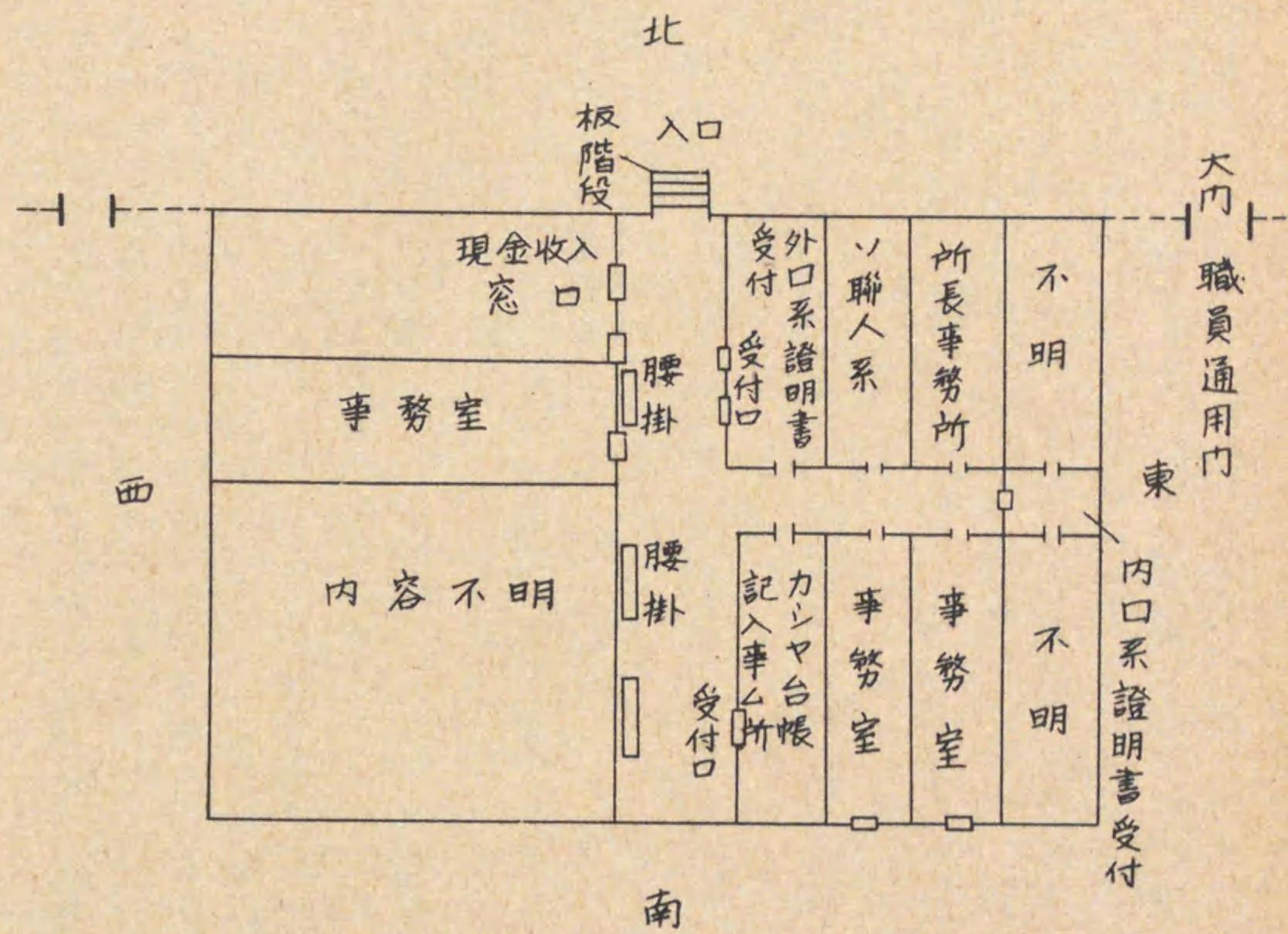
漸く落ち付いて来た。よく見ると、直ぐ前に「外国系証明書受付」と新文字で書かれた窓口が二つあつた。しかし戸は閉つていた。私はこゝへ届けるんだと直感した。

バルトンは私をさそつて、「内国系証明書受付」に行き、パスポルト・ヘステンダラガアの部屋は何処に有るか尋ねた。直ぐ左手である事が分つた。

バルトンはその部屋のドアをノックして押入つて行き、私を招き入れた。

中に入つて見ると、三人が事務を取つていた。

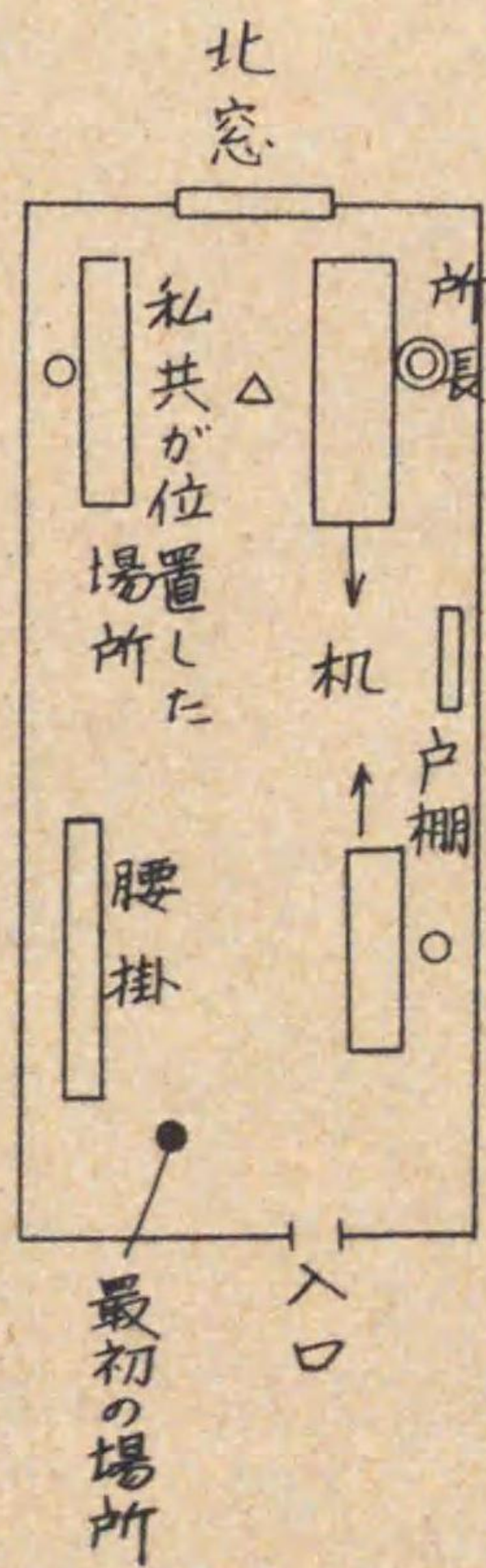
入り口に長い腰掛があり、その向き合いに警察服を着た男が事務を取つてゐる。北側窓の両側に夫々机があつて向き合いになつてゐる。その東側が所長の机である。バルトンはどちらが所長であるか、職掌柄直ぐ分つたらしく、東側の机の前に行つて話し初めた。



所長はまだ四十才には達していないようだった。警察官服を付けた中佐である。その真向いの男は、丸く太つた男で背広を着ていた。その格好は余りにも不釣合であつた。

所長と警察官の間に、トタン張りの戸棚が威圧的に据えられてある。

暫くそんな事を眺めていると、バルトンが私を呼んだ。側へ行くと、所長の中佐は私に向つて、「お前は日本人か、何時何処で逮捕され、何時何処で裁判を受け、何時何処で刑期を完了したか、何時何処から釈放されたか。釈放証明書があるか、ホロ・ホリンに登録したか。ホロ・ホリンの居住申請書があるか。」等々次から次へと質問して来た。

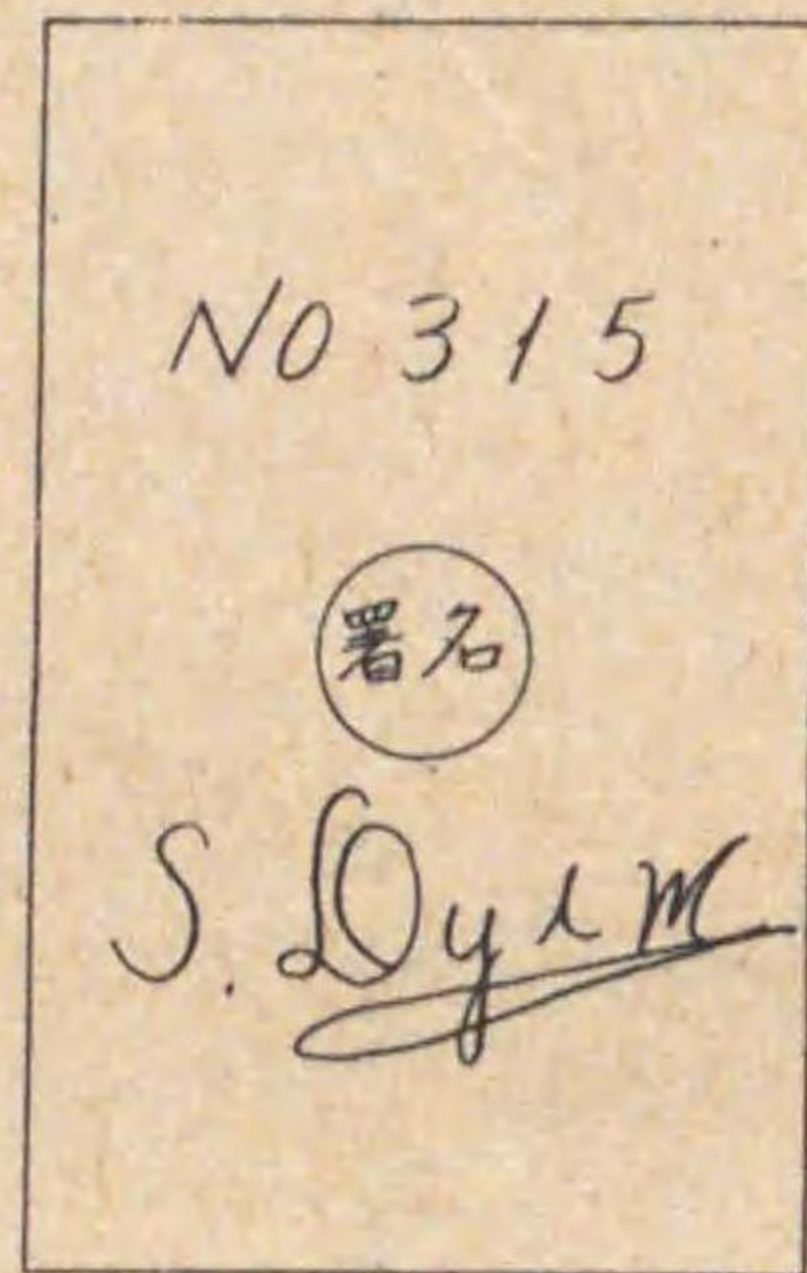


私はありのままを答えるとともに、トクトール（釈放証明書）と居住申請書を取り出して、所長に手渡した。

彼はそれ等の書類や証明書を、詳細に点検した後、居住申請書だけ返してくれた。しかし、一番大切なトクトールは返してくれない。さて困つた事になつたと思つてみると、「二、三日中に居住証明書を発給するから暫く待つて欲しい」というのだつた。

私は直ぐ、

「その二、三日中でも釈放証明書が無くては、市中で警察官やその他の官吏に訊問された場合、どうするか。」「そんな心配はいらない。若し訊問があつたら、この私の所へ電話で連絡せよ。直ぐ分るようにして置く。」「この電話番号は何番か、紙に書いて貴官の署名をして貰いたい。」「そんなに心配しなくても大丈夫だ。訊問されるような事は殆どないだろう。しかしまあ御希望通り署名してあげましょう。」といいなから綺麗な字態で書いてくれた。



小さな紙片であるか、私にとつてはトクトールの代りとなる最も大切なものであつた。

このように私が執拗に彼の署名紙片を求めたのは、監獄生活七年半の結晶たる釈放証明書を、有無を言わず没収してしまつてから、無理難題を吹きかけ、遂には私がどうにもならなくなつて、とんでもないことを仕出かすことを、恐れたからである。

だいいち、このように、警察の中佐の身分を持つ居住証明書発給所長をも疑うようになったのは、私共日本人は、逮捕されて以来、未決監、中央監獄等に於て、幹部から、こつびどく騙され、いつも裏をかゝれ

、しかも、捕われの身であるが故に泣き寝入りせざるを得ないという事態を何度もくりかえして来たからである。その為に、如何に外蒙古政府の高官の言であろうと、一応は必ずその裏を考えて置くという風に疑深くなつたものである。所長は隣りの警察官に、外国系係官を呼んで来るように伝えた。私はこの暇に聞きたい事を素直に訊す事が必要だと考え、おそるおそる丁寧に言葉を柔げて、たずねた。「貴官は私の質問を御許し下さいますか。」彼は私の質問が突然だったので少し驚いたようだった。しかし何くわぬ格好で、「それはどんな質問か、自分に分る事なら答えても宜しい。」

「はい、難しい事ではありません。私は日本人として、こゝに只一人です。不自由な事は申す迄もありません。ですから何とかして日本に帰りたいと、たえず念願しているものです。このことについてお聞きしたいのです。」

「私は日ソ開戦後、家族と共に内蒙明安旗に於て逮捕されました。家族とは内蒙ドロノールで生き別れとなり、妻子達の行末は今もつて不明です。私はドロノールから、このウランバートルに連行され、今日迄監獄生活を続け、刑期十五年だったか、アジリンホノクを貰つて漸く刑期満了となつて釈放されたのです。私は日本の政治犯として抑留され、釈放されたのだから、当然日本に帰してもらふ権利があると思ひます。外蒙古政府が日本人の一人や二人をこの地に留めたとして、少しも利益がないと考えます。何とかして日本に帰して頂く方法は無いかと御尋ねしたいので。」

「私にもはつきり分らん。帰す事は帰すだろうがその期日は分らない。帰す時期が来れば必ず帰す。それ迄はこのウランバートルに住まねばならない。」

「私の家族はどうなつているか分らないでしょうか。」

「それは私には分らない。」

「まだ監獄に日本人が三人います。この日本人達は、身体が非常に弱いし、只気力で頑張っているだけです。特別の措置を講じて釈放するか、或は別に保護するか等何とか出来ないものでしょうか。」

「そんな事は絶対出来ない。民主國家に於ては法を曲げる事は絶対出来ない。監獄に三人とは少ない。全部で六人だった筈だが、いない二人はどうなつたのか。」

「いない二人は病死しました。さつきも申し上げた通り、身体が衰弱して病死してしまふんです。今後こ

のような生活か、永続するとすれば、日本人は一人も生きぬけないでしょう。」

「そうか、病死したのか。どんな病気で亡くなつたのか。」

「一人は栄養失調で体力を消耗して肺結核となり病死、もう一人は栄養失調により腸疾患となり遂に病死してしまつたんです。」側からバルトンが話をつけ加えてくれた。

「この日本人は監獄でよく働いた。十五年刑を受けた者の中、一番最初に釈放されたのだ。このような模範工だから、政府でもよくその身を保護してやる必要がある。日本人は相当教養があるから、党大学の別科（特別に外国から依託されて学習する課程）にでも入学させ、勉強させる事が出来ないものか。」

「それは難かしい。本国人でさえ監獄から出て来た者は絶対入学出来ない。ましてや、日本人であれば不可能なことは確実だ。兎に角党大学入学は以前の経歴や人物を詳細に調査し、党規に違反した行為のあるものは絶対入学不可能であるから、この問題は絶対的に不可能であろう。」

バルトンかともでもない事を言い出したので、これは困つた事が出来たぞと考えた。

「居住証明書の手続はどうしたら良いだろうか。」

と話を別の方に持つて行つた。所長もこの方が本職だから直ぐ乗つて来た。

「それは簡単だよ。証明書を下附されたら、直ぐカシヤのデブテル（台帳）を持つて登録すれば、居住権は与えられた事になるよ。」

「そのカシヤのデブテルは何処にありますか。」

「それはカシヤ（五、六戸単位をもつた開の事）にデブテル（居住台帳）が置いてあるから、それを借りて来て、一番南側の窓口に提出して記入して貰えば良いのだ。」

「そうですか、よく分かりました。」

こんな話をして居る処へ、さつき呼びに行つた警察官と、別の警察官が入つて来た。

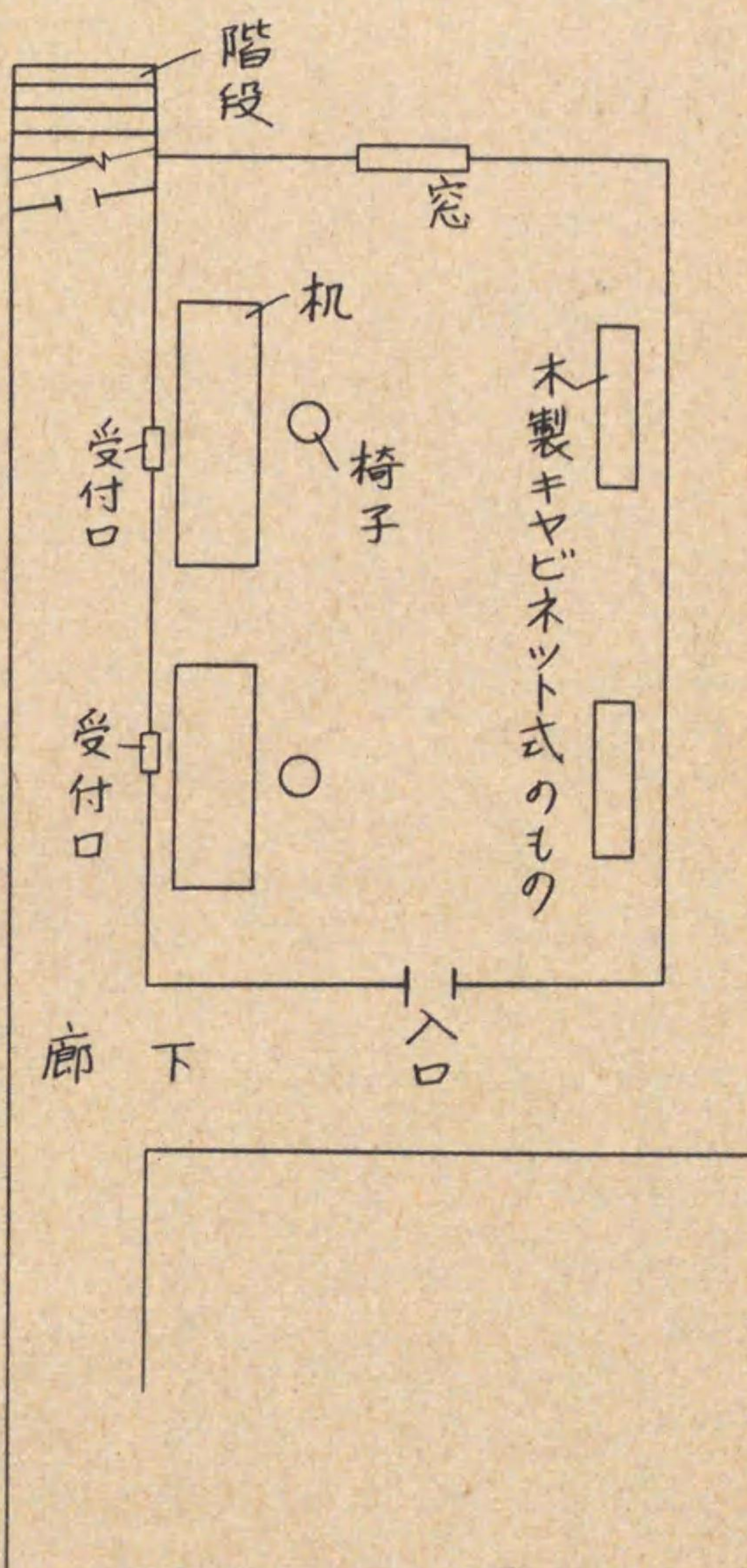
所長に対し挨拶した。所長はこの警察官に向つて、

「これは日本人だ、お前、この日本人を連れて行つて記入事項を聞き取り、居住証明書（パスポート）発給手続を取るように、この釈放証明書は参考にして、後で又私の方に廻してくれるように。」

彼は、「ハイ分かりました。」と挨拶してから私共二人を連れてその部屋を出た。

私達二人は外国系証明書発給受付の部屋に案内され、中に入つた。

中には机が二つ置いてあり、受付口に向つてゐる。東側の壁ぎわには、キヤビネットのような、木製の戸棚が二個置いてある。



私共がそこに入ると、そこにいた警察官は出て行つてしまつた。私を案内して来た警察官が、次ぎ次ぎと質問した。

住所氏名・原籍・国籍・前歴・入獄年月日・出獄年月日・特殊技術の有無・語学の程度・外国語の知識程度・家族・兄弟・父母の年令氏名・現在の同居者氏名年令・住所等であつた。最後に写真二枚必要だからというのだつた。差し出す写真を受け取りながら、

「貴方は内蒙の何処で逮捕されたのか。」「私は内蒙古察哈爾盟明安旗管内で逮捕されました。」

「逮捕された時貴方一人でしたか。」

「いや、私の外に妻子三人、Y明安旗顧問と家族三人、もう一人明安旗公署補佐官、Kと言う若い青年、計八人で一諸に捕りましたか。」

「明安旗の第十一佐の砂漠の中で逮捕され、そこから夜通し雨の中をドロソノールに向け牛車で行動をした。途中ドロソノールの附近で、ソ蒙軍戦車部隊にぶつかり、それに私共だけが引き渡され、女子供とはそこで生別してしまつた。それ以後妻子の行末は少しも分らず、生死不明です。」

「それはお困りでしょう。」

「実際、生死不明が一番困ります。日本に帰つたのか、現地に残留しているのか、死亡したのか、生存しているのか、全く何とも確証が得られないので、一番心配の種となつてゐる次第です。」

「私は多倫ノールも明安旗もよく知つてゐます。あの辺には日本人は一人も残つてゐないはずですよ。みんな引き揚げた筈です。確か一九四七年頃最後の引き揚げが終つたらしいですよ。其の後の事は分りませぬかね。」

「貴官は内蒙古に住んでおいでになつたのですか。」

「明日の晩証明書が出来るかも知れないからこゝへ取りに来るよ。」とつけ足すのだった。この警察官は内蒙古人かも知れない、顔かたちが外蒙古人よりスベスベした処がある。きつと少しは日本語を話せるかも知れない。こんな良い機会を逃すのが誠に残念であつたが、バルトンが先に立つて部屋を出て行つたので仕方なく私もそれに従つた。

後になつて分つたが、この警察官は内蒙古人であつて、現在はスフバートル夫人ヤンジマの貰ひ息子として育てられてゐるのであつた。このヤンジマ夫人は、党大会副議長であるが、非常に外国系の者を懇切に取扱ひ、身の上相談にも乗り、よく面倒を見るといふ義侠心があつた。或る党大会で、外国系（戦争に依つて連行して来た外国人）を一日も早く彼等の自国に帰り得るよう善処して欲しいと切望したと伝えられていた。或は内蒙古人を自分の処に預り世話をしやる事に依つて、内蒙古人と外蒙古人との融和が計られるという大きな目的をもつてゐるかも知れないと思われた。

私共二人がパスポートヘステンガザルを出たのはもう夕方近かつた。バルトンは、これで大体パスポートは貰われるようになったから、あとは当面最も緊急重要な、就職の問題を至急片付けようと考えたらしく、このまゝ脚をのほし、彼の知人で国営鉄工場の乗用車の運転をして

いる友人を訪ね、国営鉄工場労務者にでも何とか斡旋を頼もうと、気を配ってくれた。私共はいつの間にか、人民広場に出てしまった。通信省屋上の露天ラジオとラジオ局の拡声器とから流れ出る音声は、ともに入り交つて人民広場を吹き流れていた。

(8) 国営鉄工場のアパート

バルトンは、私を、彼の知人である運転手が住むアパート第十二号部屋に案内してくれた。私は始めてアパートをみた。それは階下にあつて、正面玄関からは左手に当る部屋である。中に入つて見ると仲々広いのに驚いた。

バルトンはこの部屋に来るらしく、よく知つていた。

バルトンは扉をノックしたが、何の応答もない。しかし、おかまいなしに扉を開けて、「サイハンバイノウ」と挨拶しながら這入つて行つた。私もその後が続いた。

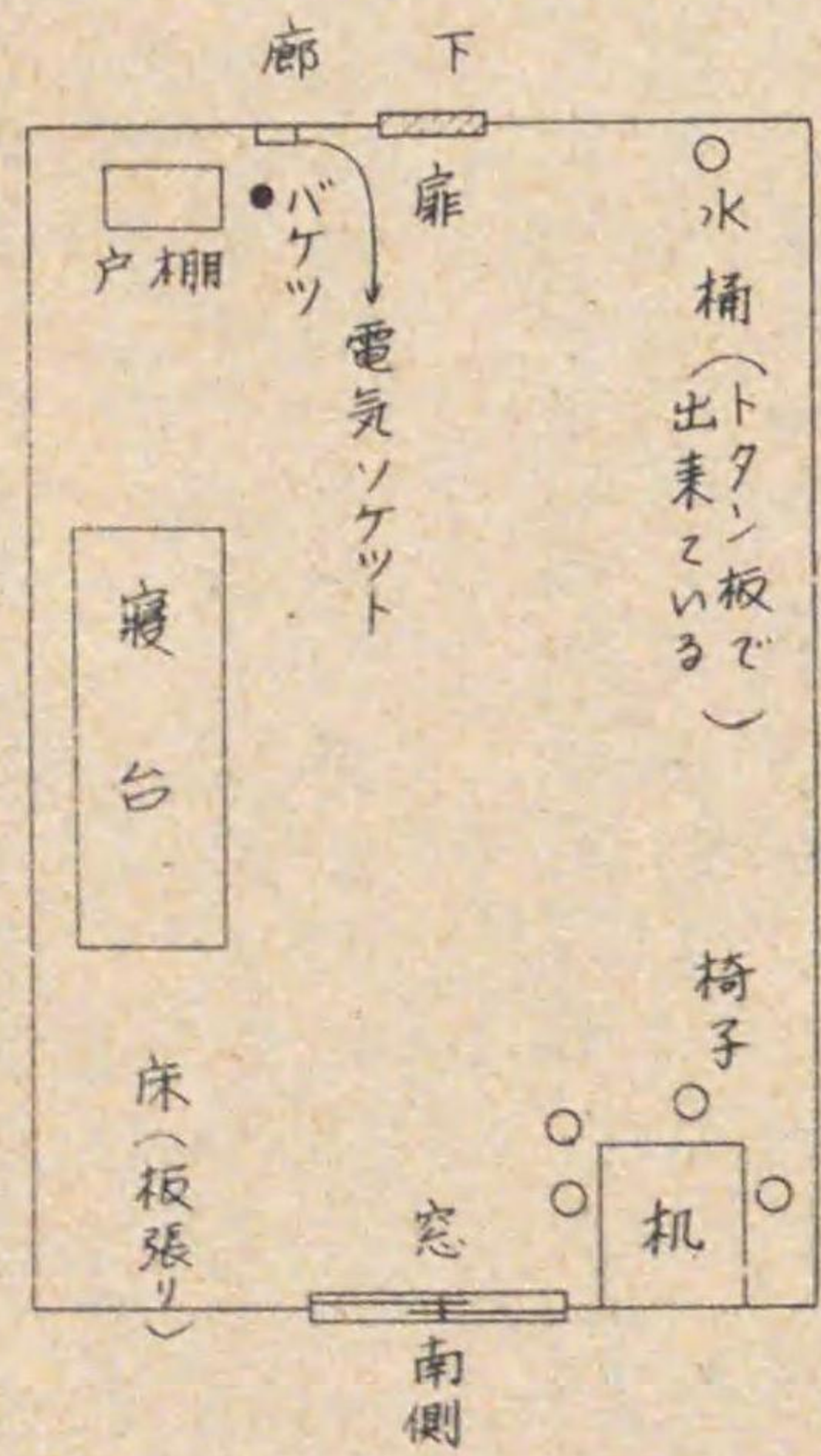
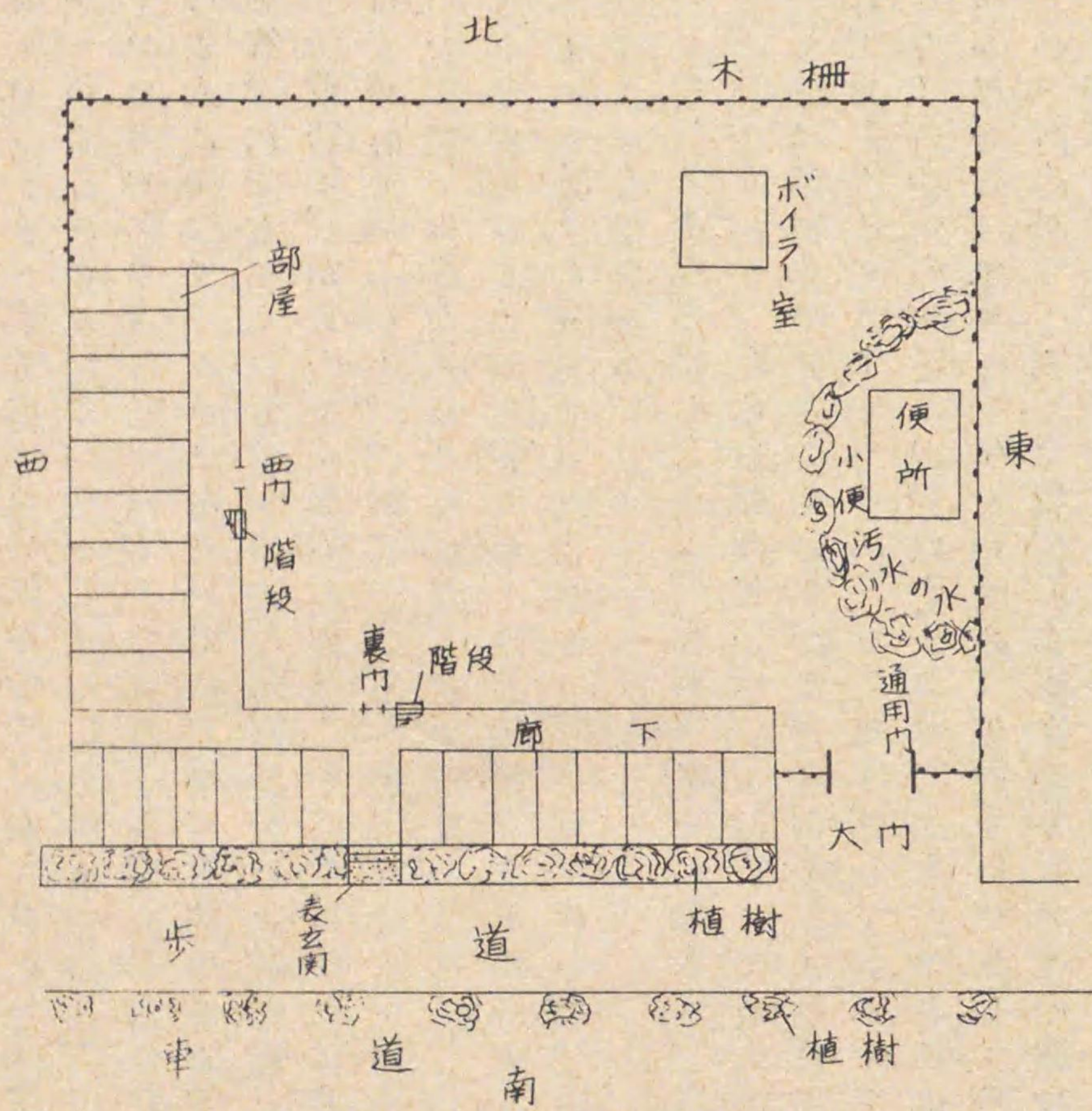
部屋の中は足の踏み場もない位、小さくちぎつた紙くずが散らかしてあつた。これは三、四才になる子供がいたずらで、老母が相手をして遊んでやつていた。この老母は、われわれ二人の入つて来たのを振り返つて見て、「サイハンバイノウ、バルトン」と挨拶を返した。

ふとみると、二人の男女が寝台の上で、寝ているとも思われず、横臥していた。

老母が私共二人を椅子に招じてくれた。その中に寝台に横臥していた男女二人が起き上つて来て、われわれの側に寄つて挨拶した。この夫妻か、バルトンの知人であつた。老母が気転をきかして、菓罐をガソリンコンロにかけ、お茶を沸かし出した。

バルトンはこの若主人と話し始めた。この若主人は、元軍人で相当の勲章を持つており、現在でも略章を胸に付けている。彼は鉄工場乗用車の運転手、妻君は同工場のタイピストとして勤めているのだつた。この部屋には寝台一つしかなく、これを若夫婦二人が占めている。子供と老母は床の上にも寝るのである。寝具は寝台の上に一組乗せてあるはかりだ。

ほかに押し入れもなく、部屋もないところから見ると寝具はないだろう。蒙古人は着ている蒙古服が寝具になり、防寒用具ともなるのだから、誠に簡素である。



私はこの部屋の内部を見て、余りに簡素なのに驚いた。独身者でもこの位は家財道具があるのに、この家庭はどうした事だろう。余りにも殺風景である。

炊事道具は、トタン板で出来た水樋が一つ、バケツが一コ、調理台は戸棚の上を利用してゐるらしい。電燈が一つ天井からぶら下つてゐる。たしかな事は分らないが二十五ワかせいぜい四十ワ位であろう。

バルトンはこの若主人に私が日本人である事を紹介してくれた。妻君は主人に向つて、ラジオが買ひ度い、絹布を買つて着物を作りたい、帯を買つてくれ、ハイヒールが欲しい等、何でもかんでも欲しい物をねだつてゐた。私は、これを見て、この女はたゞものでないと直感した。一般的に、蒙古の女は虚栄心が強く、おまけに性的に非常にルーズである。その為に、財産家でさえあれば、華僑であろうと、朝鮮人であろうと、ソ連人であろうと、かわまず自分の身体を提供して、欲しいものを買つて貰うということになる次第である。

従つて、離婚は極く簡単に行われ、今日結婚、明日離婚という程でもないが、大体これに近いものがある。われわれ日本人の常識では考えられない。離婚の経歴少ない者でも普通四・五回、多いのになると十二・三回に及ぶものもある。

私は今この婦人を見て感じた事は、教養のない、愚かな、婦人道德などいつたい何処にも見受けられぬ事である。バルトンが、私の就職問題に付いて話してくれた処、この運転手は同僚と酒を飲んだ挙句、喧嘩となつて遂に懲戒免職となつてしまつた。その為三・四日出勤しないで家にいるとの事だつた。また妻君は、鉄工場のタイピストであるが、今日は早退してゐたのであつた。

後になつて分つたのであるが、此の夫婦は、主人の失職による生活苦のため、妻の方からの請求で離婚となつてしまつた。老母と子供をかゝえて彼の生計は苦しくなる一方だつた。母親は炊事道具や、諸道具を売り払い生計を補つて来た。離婚した妻がまもなく別の男を見つけたことはいふまでもない。

このような婦人は外蒙古では珍らしくなく、普通のこととして行われてゐる。

このアパートには、鉄工場の職員の中、最も優秀な者のみが生んでゐる。階下より二階の方が高級者が多いらしい。かの運転手は、この二階の一部屋に鉄工場のシン・コチンネ・ダラガア（人事課長）がいるから、その人に

会つて就職問題について話して見たらどうかというのだつた。

運転手は酒の上で喧嘩しやめさせられたのだから、人事課長の処へ私を連れて行く事は、とても出来ないらしかつた。

妻は主人に行かせようとしたが、それは無駄な事だつた。

妻は、私が錠を作つてやる事にして漸く納得し、私を人事課長のところへ案内してくれた。階段を昇り切つて左に曲り、四・五個の部屋を通り過ぎた所が、シン・フチンネ・ダラガアの部屋であつた。二階も階下と同じように、一部屋毎に扉がついてゐたし、廊下もカギ型になつて通じてゐた。

(9) 鉄工場のシン・フチンネ・ダラガア（新鋭の人事課長）

妻君はノックして部屋に入つた。私はその後からノック入りして行つた。

部屋の内部は非常に整頓され清潔である。

一人の男が机に向つて本をおきながら、こちらを見て怪げんな顔付きをしてゐた。

その机の上に鉢植のツタが青々とのびてゐる。南側の窓際に本棚が二個置いてあつて、本がギッシリ並べてあつた。蒙古人がこんな沢山書籍を持つてゐるのを見たのは、今度が始めてであつたし、私が一年半ウランバートル市民生活の中でも見かけなかつた。

妻君は来意を告げ、私を紹介してくれた。

「この人は日本人で、今度中央監獄から釈放され、ウランバートル市に居住する事になつた。しかし現在就職口がなく困つてゐるようだから、何とかしてどこかに採用してもらつて方法はないものか。細かい事は本人から聞いて貰ひ度い。」

妻君は私に向つて、

「この人は鉄工場のシン・フチンネ・ダラガアです。この人に詳細に事情をお話し採用して貰えるよう、よく頼んで下さい。私はこれで失礼しますから。」と言つて挨拶しながら部屋を出て行つた。入れ代りに一人の若い青年が入つて来て、

「ガソリンを貰つて来た。何処を探してもないので、Mさんの処迄行つて貰つて来た。」と大声でいつていたが、私のいるのに一寸めんくらつたらしく、その儘沈黙してしまつた。彼はもらつて来たガソリンをガソリン、コンロに注入して、夕食の準備を始めた。

私は机の前に腰掛けながら、何と言つて就職問題を切り出そうかと、しばらくの間そのきつかけに本当に困つていた。私はその苦しさから、早く逃れたい気になつて、

「私は日本人です。居住証明書は只今申請中で、近日中に下附される見込みです。釈放証明書（トクトール）はパスポート・ヘステン・ドラガアに渡してあります。御不審の点がありましたら電話でもおかけになつて御調査下されば直ぐ分ります。」

私は中央監獄に在監中、同囚達から国営鉄工場に勤めることを薦められていました。又私も、どうせ働くなら大きい処が良いと考へていた処、さつきの御夫妻と知り会いになり、御紹介に預つた次第です。

私は在監中の服役が非常に優秀だつたので、（蒙古では謙遜という事は通じない。出来なくても出来る」と誇張する事が良い結果となる。）模範囚として、アジリンホノクを沢山貰い、実刑十五年の処七年半で満刑となつて釈放されるに至つた。

それだけに、大いに仕事をしたし、技術も相当優秀だつた。その為、内防処中央監獄長から、一等鉄工員として技術証明書を貰いました。これを御覧下さい。」と私は技術証明書をとり出して人事課長に渡した。彼はそれを詳細に検分して、

「よく分りました。貴方は本当に日本人ですか。今頃迄監獄にいたのですか。」

「そうです。今迄監獄にいました。僅か四人の日本人のうち、私が先ず第一番に釈放されたのです。釈放されても、ウランバートル市には身を寄せるような人も居らず、非常に困りましたが凶らずも、バルトンという医者か心配して、私を引き取つて下さいました。」

「在監中どんな仕事をしていましたか。」

「錠を作るのが主で、其の他小細工の道具を修理したり、作つたりしていました。」

「私の鉄工場では、旋盤工、電気工、仕上工、鑄鉄工、鍛造工とに分かれています。この中で欠員のあるのは鍛造工だけで、貴方の経験は錠作りだから適当な仕事は無いです。鍛造工には欠員があるから、そ

こではどうです。」「鍛造工しか欠員が無いですか。私は鍛造の技術は殆ど知らない。熟練する迄見習いというわけで採用出来ないものか。」

「直接鍛造工の熟練工が欲しいのです。直ぐ役に立たねば駄目なんです。」

「熟練工でなければ駄目なのか。実は仕上工か旋盤工の見習ひに採用して貰い度いと考へていたんですが。」

「今の処年度末なので、欠員もなく、新規採用という事も出来ない。来年の二・三月頃になれば増員する計画だから、二、三カ月待つて貰う方法はないものか。」

「そうですね。来年の二、三月頃迄私はとても待てないんです。どうしても今直ぐ就職したいんです。」

近い内にパスポートも下附願えるから、そうすれば生活のため直ぐ働き出さねばならぬのです。」

「そうですね。鉄工場では今すぐという欠員が無いので困りましたね。どうですか、貴方は監獄で錠を作つていたのだから、実社会に出ても錠作りに専念した方が得策ではないんですか。私の弟が第五アリテリ（協同組合）の鉄工班に勤めて錠を作つています。そこなら馴れた錠作りで、直ぐ生活が成り立つと思いませんか。貴方はどんな考へを持っていますか。」

「貴方の弟さんが第五アリテリ鉄工班においでになるんですか。」

「そうですね。錠を作つています。毎月三、四百トコロゴになるようです。」

「どうですか。一度第五アリテリに行つて採用するかどうか訊いて見ましょう。」

彼の弟は、年令二十才位でニキビ面の、オールバックをした若い青年である。

彼も物珍らしそうに私を眺めながら、

「お前は日本人か。中央監獄にいたのか。」

「そうだ。最近迄入つていたんだ。」

「それじゃ、わか鉄工班にいる、バルトンジャムソとアリアボル、を知つているか。」

「良く知つている。監獄の鉄工班で銀細工をやつたり、錠を作つたりしていた。現在第五アリテリ鉄工班にいます。聞いたか本当か。」

「健在だよ。非常によく働く。監獄から出て来た者は、良く働く者と、怠け者とに分かれてしまふんだね。」

「そうかね。そういう見方があるのかね。」「まだあるよ。生産量は非常に上る。しかし質は誠に悪いということもあるね。」「それは全部が全部そうとも限らないだろう。」

「しかし大体においてそうなんだ。」

「私は明日鉄工班で彼等に会いたいと思うが、会えるだろうか。」

「それは会えるよ。心配はいらない。鉄工班のマナー（守衛）に話し、明日来たら直ぐ分るようにしておくから。」「それじゃ明日行くから、みんなに宜敷く言つて置いて下さい。」

「いいとも。それよりもお前は一日どの位錠を作るのか。」

「大した事は出来ない。監獄では大体二個か一日のノルマーだったが、三つ位作るね。何しろ年期六年以上かゝっているからね。」

「そうか。長い事錠作りをしていたのだね。アリテールの鉄工班の錠作りは一個か一個半位か普通で二個以上になつたら上手の方だよ。パルトンシヤムソなど一日四個位作るから大したものだ。私だつて早く作れば四個は出来るよ。しかし私は沢山作らないんだ。錠を沢山作つたら、一個の錠のノルマーが低下されてしまう。そうなると、自分から一生懸命働いて能率を挙げなければ、前と同じような収入は得られない。だから賢い者は余り沢山作らないよう苦心するんだ。」というのだつた。

この時は、これが何の意味か分らなかつたか、後になつてこの意味をはつきり味う事が出来た。

沢山作れば必ず単価が切り下げられる。又前と同じ賃銀を得ようと一層努力する、このように次から次へと生産に追われ、生活に追われて行くのか労働者の姿であつた。

彼等兄弟二人は、独身者であつた。私は彼等とは後になつてから親しい異郷の友達となつた。

兄はラムスルン、年齢二十四才、弟ダグドルチ、十九才であつた。

次の年九月頃、ラムスルンは蒙古綜合大学文学部と、党大学に受験したが、両方とも不合格となり、鉄工場のシン、フチンネ・ダラガアをやめ、専ら次の受験に備えて勉学に励んでいた。

その為に、鉄工場のアパートにいるわけに行かず、第五アリテールの宿舎に移転して来た。当時、私はこの宿舎の一部屋に一人でいたので、このラムスルンとは毎日のように雑談に耽り、色々の事情を明かにする事が出来た。

彼は今頃は多分党大学、綜合大学かを卒業して、蒙古の中堅幹部として活躍している事であろう。

(10) 第五アリテール（協同組合）鉄工班

懐具合も益々淋しくなつて来た。早く就職しないと、生きて行かなくなる。特に冬期間だけに一層深刻に考えさせられるのだつた。

今日こそは積立金を支払つて貰おうと出かけた。運よく、経理部長や、出納係長等関係者が全部居てくれたので、支出して貰う事が出来た。釈放されてから二週間も過ぎてからの事だから、積立ててあつた四五六トコロゴの金を手にした時は、やれやれこれで当分は生きていかれるとほつと安心した気持であつた。これだけの大金を懐にしたのは勿論今度が初めてだつた。さてこの金の使い途は今の自分にとつては大問題である。私は十分その使用計画を練つた。

先ず第一に蒙古人から借りた金を返済した。残りは四〇〇トコロゴ足らずになつてしまつた。

七年半の苦勞がこの四〇〇トコロゴ足らずの金かと考えると、あだやおろそかに使えない。

どうしても二、三カ月はもたせたいと考えたが、それはとても出来ない相談であつた。試みに、一カ月の生計表を概算してみる。

- 一、羊肉一頭分 一〇〇トコロゴ
- 一、野菜 取り混ぜ 二〇トコロゴ
- 一、調味料（塩砂糖） 二〇トコロゴ
- 一、白米 一〇 二七トコロゴ
- 一、二等麵 二〇 二二トコロゴ
- 一、食パン 六〇分 三〇トコロゴ
- 一、薪炭材ラクダ一頭分 六〇トコロゴ
- 一、石炭 半トン 三〇トコロゴ

以上は一カ月間必要欠くべからざる生活用品であるが、これをパルトンと二人で負担すると一人当り一

五〇トコロゴ余りになる。さらに私は自分個人として、

- 一、パスポルト下附手数料 六〇トコロゴ
- 一、鉄工諸道具購入費 五〇トコロゴ
- 一、煙草代 五トコロゴ
- 一、日用品費 三〇トコロゴ
- 一、非常用として 五〇トコロゴ
- 一、予備費 五〇トコロゴ

小計

二四五トコロゴ

が必要である。合計するとこれが一カ月間に三九五トコロゴはどうしても必要となる計算であつた。

(実際は、十二月下旬になると、非常用も予備費もあらはこそ、全部出し切つてしまい、懐に残つていたのは僅か五トコロゴの始末で、致し方なく蒙古人から二十トコロゴ借用して、正月を迎えたのだつた。)

その日の午後私は、早速第五アリテリ鉄工班に出かけた。パルトンジヤムソと会つて就職問題を話し、はつきりした見通しをつけたいと考えたからであつた。第五アリテリ鉄工班のマナー(監守人又は門衛)に私の名前を告げると、直ぐ職場に連絡してくれた。

パルトンジヤムソとアリヤボル二人が、飛び出して来て、「良く来た」と迎え入れてくれた。私は彼等の後に従つて錠作りの作業場に行つた。

その作業場には五、六人の工員がいて、私の姿を疑い深そうにみつめ、何かひそひそと話しているように思われた。私はパルトンジヤムソの作業台の側に寄つて、久し振りの挨拶を交した。

彼等も日本人の私が釈放されているとは思つていなかった処、今朝ダクドルチが出勤して、私の依頼した事を話したので、初めて知り、驚いたとの事だつた。

彼等は、日本人は刑期が終つても釈放されず、政府もまた特別監視の目をゆるめないだろうと憶測していた。それが突然、日本人が降つてわいたように、私が訪ねたのであるから驚くのも無理はなかつたのである。

彼等外蒙古人の殆んどは、日本人はわれわれ外蒙古人とは別で、特別扱いにされていると考えていた。

私は早速パルトンジヤムソに対し就職に付いて話して見た。

「この鉄工班で、私を何とかして採用出来ないものか。錠作りなら直ぐ役にたつのだが、どうだろうね。」

「大丈夫だと思ふ。特殊技術証明書が有るだろう。あれを私によこせ。直ぐマーシチルに話して見る。」

私は錠作り班の班長だから、少しは押しがきく。きつと採用されるよ、心配するな。」というのだつた。

彼は、私がかゝる事を聞いて、私を採用しようと考えていたようだつた。

彼は私の証明書を持つて、事務室の方に交渉に出かけて行つた。後に残つたアリヤボルは、大声を挙げて叫び始めた。それも冗談のように言うので、誰もか仕事をやめて、こちらに注意を払つていたのでつた。

「この日本人は純然たる日本人だ。この錠作り班にはまだヤボン(日本)ハムル(鼻が大きい)イシダンズン、ハラ(黒い)ナムスライ、ウチムチン(内蒙ウチムチン出身)ポイントクトホ、の三人がいるんだ。この三人のヤボン(日本人)は目あき盲だ。何にも字を知らない。こんな日本人は無い筈だ。こゝにいる日本人は新文字は書けるし、中国語も知つている、又何でもみんな書けるんだ。みんなこゝへ来て、日本のお話でもしてみろ」私は何だかこの三人に対して申し訳なく感じた。この三人は内蒙古人で、内蒙軍人であつた。終戦と同時に連行され、一時は中央監獄に監禁されたが、大した行跡もない為、ウランバートル市内に徴用され、段々生活環境も變つて現在の職場に落ちついたのだつた。

そんな事をしやべり始めたので、四・五人の蒙古人が集まつて来て、私に質問し始めた。

「お前は本当に日本人か。」

「日本人らしく見えるか、華僑に見えるか、蒙古人に見えるか。」と何時ものように答えると、彼等は、「蒙古人ではない。華僑によく似ている。しかしよく見れば眉毛と目が違う。又顔型が少し違う。」と言

うのだつた。私は、大概の場合、こんな問答の後始めて日本人に落ちついたのであつた。日本人と言われている内蒙古人は、日本人と過去において苦楽を共にした関係から、何か日本人の偉大さを話して聞かせたい素ぶりはあつたようだが、それを口にしたら、監獄へ行かねばならぬと言う警戒心からか、聞いても分らん素振りをするのだつた。

主に質問するのは、外蒙古出身の若い青年達だ。この若い青年達は、日本が何処にあるか、どんな文化を持つているかさえ殆ど知らない。

質問の主なる事は次の通りだった。

「お前は釈放されたのだから、日本に帰つたらどうか。」

「昔はどんな仕事をしていたか、日本の侵略軍人だったのか。」

「日本人がまだ監獄にいるのか。」

「日本にウランバートル市のような大きな都市があるか。」

「政府官庁、中央劇場のような大きな建物があるか。」

「前も後もない乗用バスがあるか。」

「このような錠を日本で作っているか。」

「いくつ錠を作れるか。」

「妻はいるか、何処にいるか、子供があるか、何人いるか。」

「日本に帰れないとすれば、蒙古婦人と一諸になつて、暮したらどうか。」等々

こんな事を話し合つている処へ、パルトンジャムソが帰つて来た。

パルトンジャムソの報告に依ると、「私は、『私よりも技術が優秀だし、真面目だから採用した方が、アリテリの為になる。生産計画もオーバーするから直ぐ採用するかい。若し躊躇して外の職場に採用されたら、それこそ大きな損だ。』と言いなから特殊技術証明書を提出して見せた処、『採用しても良い。こゝへ連れて来い。』と言うのだ」と説明してくれた。

私とパルトンジャムソの二人はすぐ事務室に行つた。この事務室には二人しかいなかった。一人はマージナル兼一般総括事務、一人は会計出納係であつた。

マージナルは背が低く、会計係はノツポであつた。

私は「サイハンバイノウー（お元気でですか）。私は日本人で最近釈放されて監獄から出て来た者だ。この鉄工班で私を採用してくれませんか。」といつた。

「パルトンジャムソから承つた。まあ暫くこの鉄工班に来て働いて見るがよい。成績が良かつたら、本採

用になるよう、アリテリンドラガア（協同組合長）に申請するから。それよりもパスポートがあるか。」

「パスポートは今晩貰うことに話しが出来ている。今は何もない。」

「ではパスポートを貰う迄、適宜こゝへ来て錠作りをしていたら良いだろう。」

「では何分そうさせて下さい。私も道具を購入したりせねばなりませんから、四・五日暇を貰い度いものです。」「それは適当でよい。お前の都合の良い時から通うがよいだろう。こゝでは貸与する物は現在の処何もない。只萬力位のものだろうね。」

パルトンジャムソに向つて

「何処かに萬力が有つた筈だ。見付けておいてくれよ。」

「萬力を見たか、悪いものはかりでどうにもならん。後で倉庫に入つて調査して見よう。」

「パスポートを貰つてから正式に採用するように手続を取ろう。それ迄は適宜でいゝから、正式に採用になつたら、服務規定に従つて勤務せねばならない。社会教育も真面目に受ける必要がある。その中によく分るようになるから。」とえらい事も言わず、先ず先ず臨時採用と言う処で落ちついたのであつた。

私はホツとした。やれやれ、これで生きていくことができる。

こゝも簡単に臨時採用に決つたのは、パルトンジャムソが私の技術を高度に評価し、そして私を強く推挙してくれたからであらう。

パルトンジャムソはマージナルと錠生産計画に付いて何かと打ち合せている。

私はその間事務室内をくまなく見廻つた。

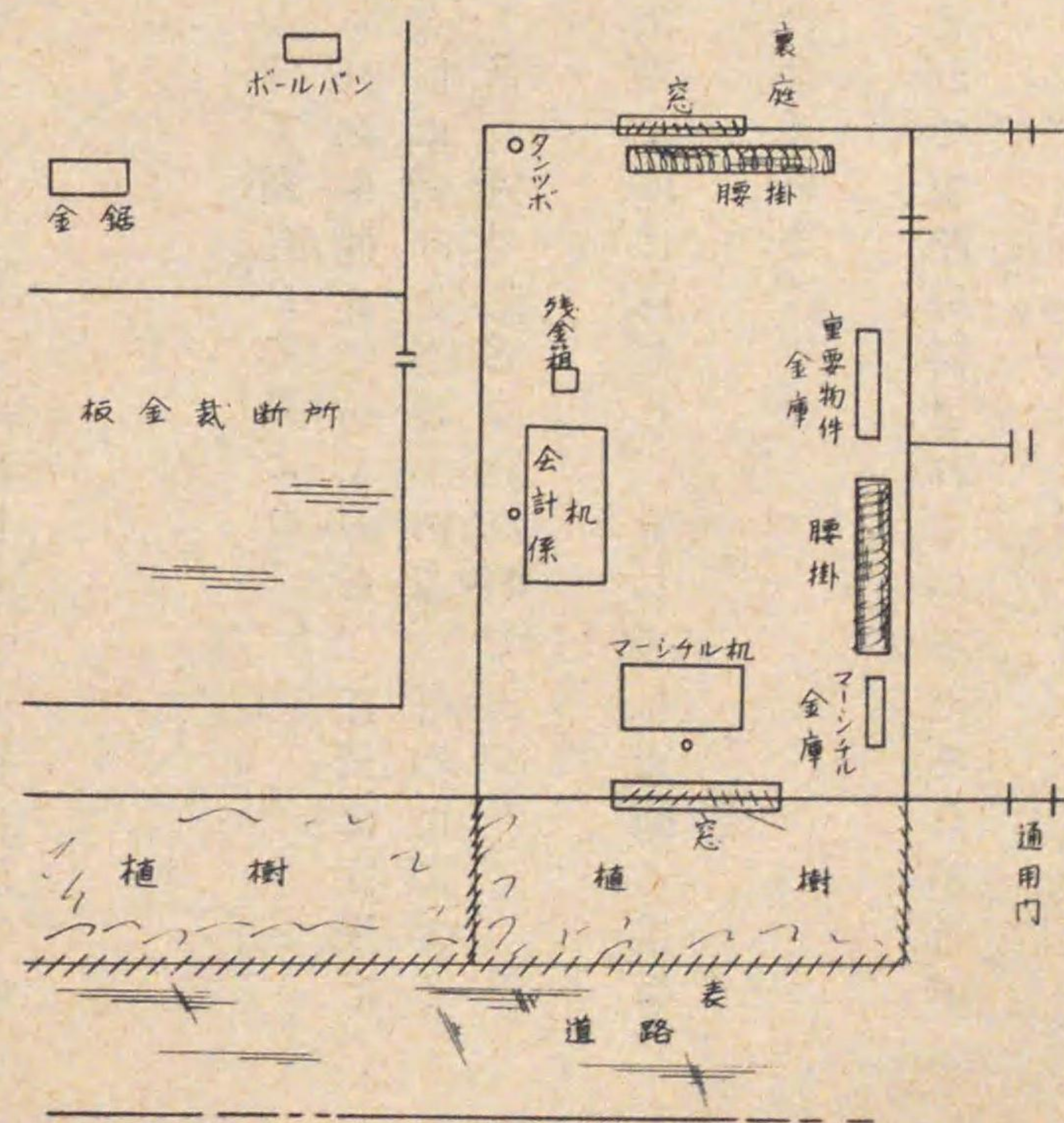
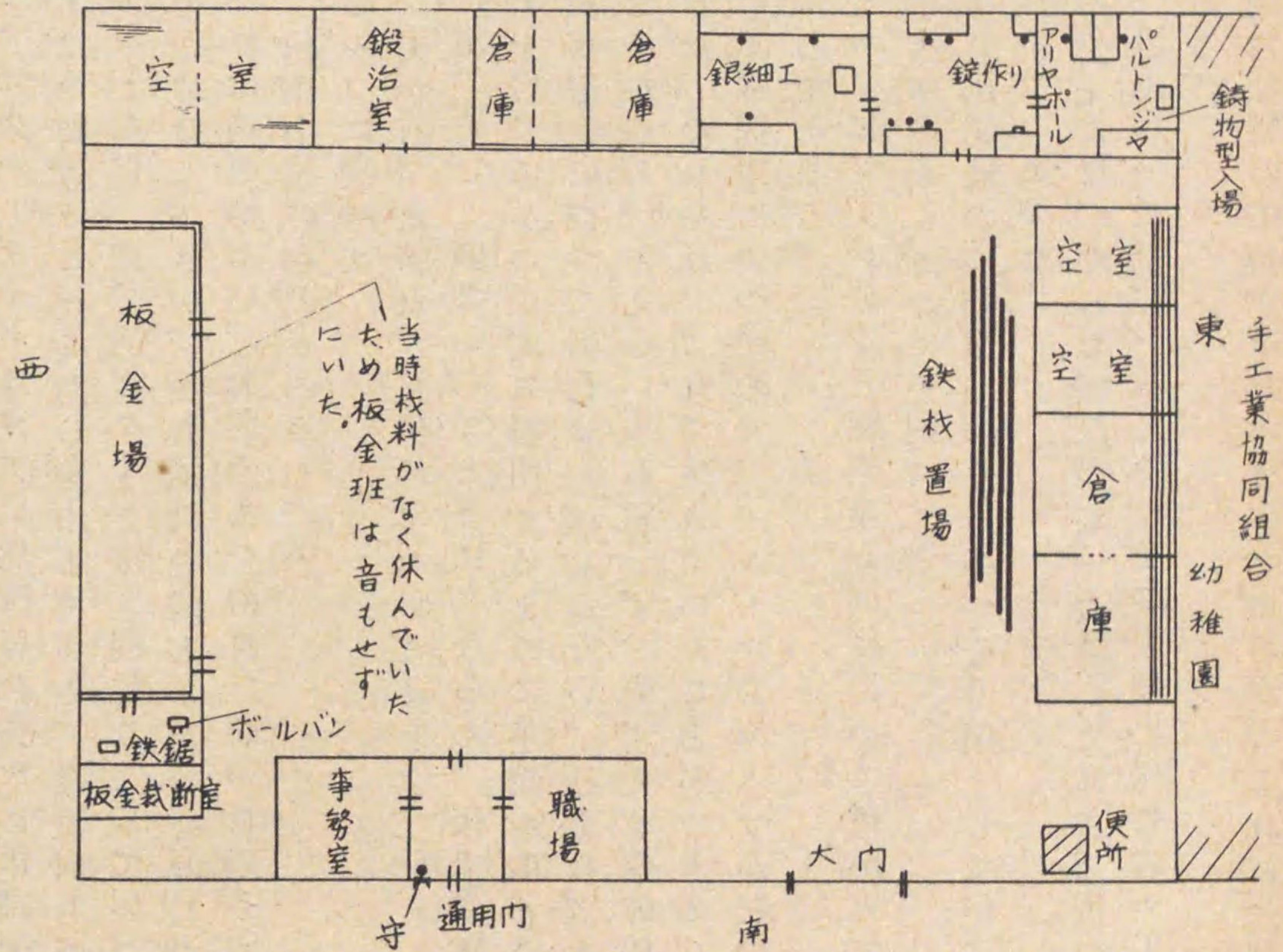
第五アリテリ鉄工班の事務室が余りにひっそり閑としていて、これで実際経営されているだろうかと思議に思われる位であつた。

マージナルの机上には、壊れた電話器が一台置いてある。机に硝子板の板敷があつて、その下に何か色々蒙古語で、沢山書いた紙片がみえる。机の東側に保管者マージナルと記された小さな鉄製のキャビネットが置いてある。

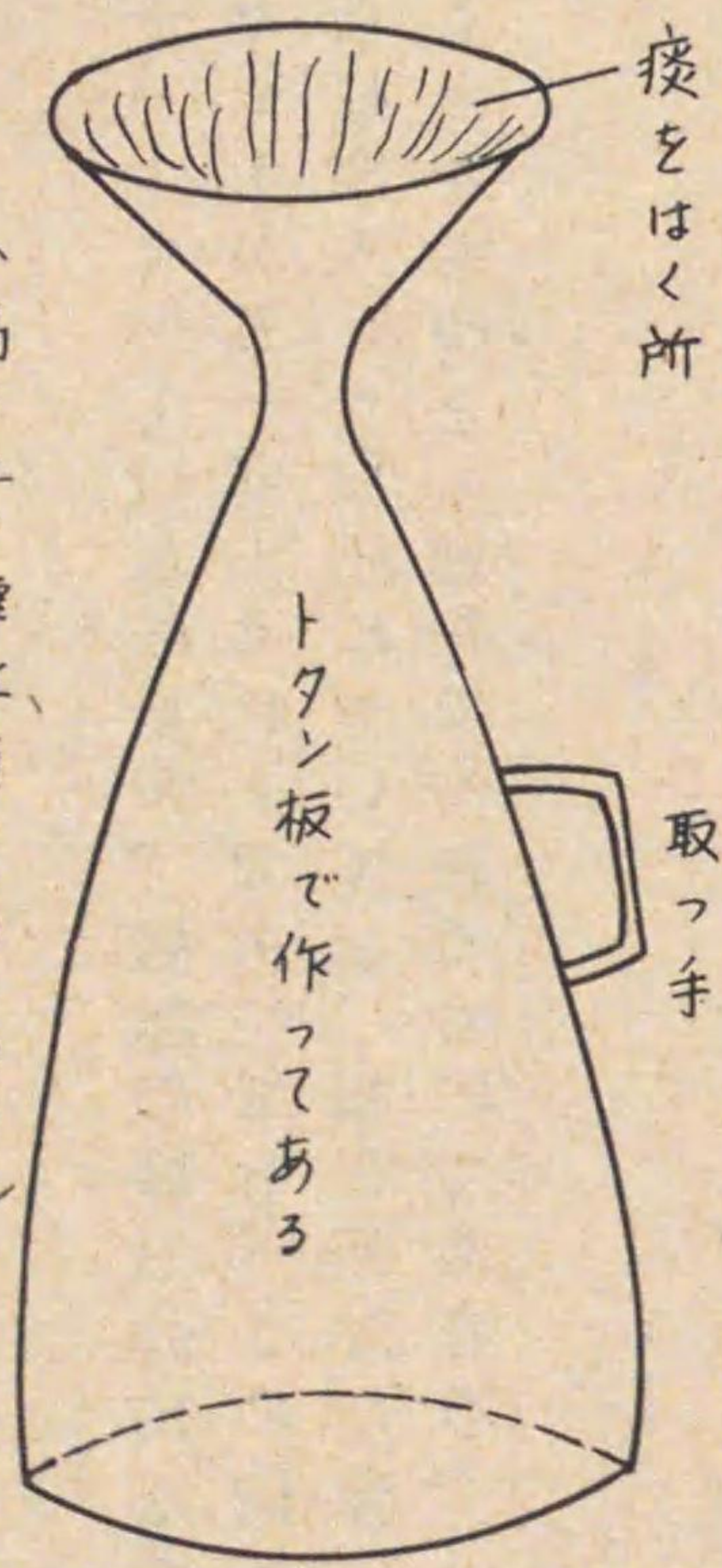
入口の所に蒙古独特の木製キャビネットがあるが、これは会計係のものらしい。

会計係の机上にはソ連式の大きな、ソロバンが置いてある。（中国式ソロバンと同様な大きさのもの）

北アリート五才
図配内部班工鉄



又計算器が黒い箱に入っているようだ。机の横に紙屑箱があつた。私は外蒙に来て初めて紙屑箱を見た。大体外蒙は紙を非常に節約して使うから紙屑として捨てるものも殆んどないくらいで、何処にも紙屑箱を見受けなかつたが、こゝで初めてお目にかゝつた次第で、実は一驚したのだつた。部屋の角に痰壺が一個置いてある。外蒙でよく見受ける形のものだ。



(高さ五〇。糖位有るものもある)

其の他には長い腰掛が二個置いてあるはかりで、黒板もなければ、出欠名札さえも見受けられない。また、壁に何か標語とか生産計画が貼つてあつてもよさそうなものなのに、紙切れ一つも見受けられない。このような様子では、ナムスライシャツの言つたようにアリート関係は、国营工場に比べて、社会教育にしろ、生産競争にしろ、大して厳格でないと感じた。こんな事を考えている間に、マーシナルとパルトンシヤムソの話も一応終つたようだ。パルトンシヤムソは、「では今後宜敷く御願ひする」と挨拶して、職場に帰つた。職場ではみんな錠作りに専念している。私とパルトンシヤムソは相談の結果、必要な道具を購入して準備する事、若し出来得れば、中央監獄生産部鉄工班のマーシナル・ダンビルシヤムソに依頼して、諸道具一切を監獄外に持ち出して貰う方法を構ずる、兎に角実社会に於ても、ヤスリ、組ヤスリ、ペンチ・金鋸等は仲々手に入らないから、ダンビルシヤムソに依頼する方が得策だといふのだつた。私は、やはり購入して置かねば、不都合な事が多かるうと考え、パルトンシヤムソに、鋸・ハンマー・平ヤスリ等を購入して貰う事にし、とりあえず五〇トコロゴを渡した。

パルトンジャムソは私に向つて、「今日私の家に行つて夕食を一諸にしよう」と言うのだつた。蒙古人がこんな事を言うのは非常に稀らしい事である、何か深い理由でもあるか、又は相当金儲けでもなければお客を呼ばないものである。私は無げに断る事も出来ず、今晚の七時にパスポルトを貰いに行かねばならないので、それ迄ならお付き合いが出来ると実際の事を伝えた。彼はそれじや早く出かけようと言つて、仕事道具を片付け始めた。

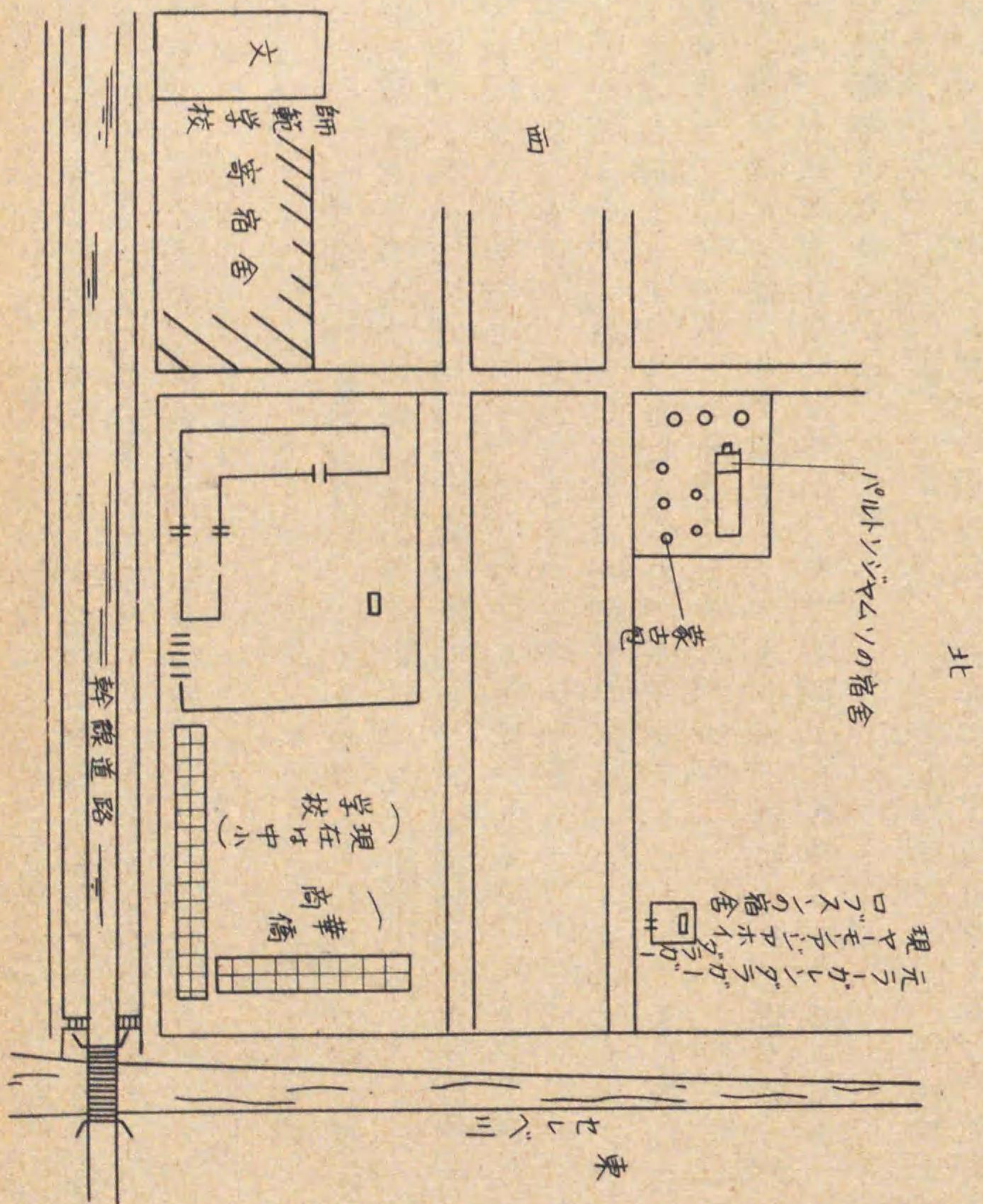
私共二人は仕事でたつたけれど職場をはなれた。途中、中央デパートの金属部に行き、平ヤスリ、金鋸、ハンマー等を探したがこれ等は売り切れて無かつた。何時入荷するかそれも分らないようだつた。そこを出てから道々の話によると、鉄工班のマーチルは元軍人で、全々鉄工技術については素人であるから、少し位品質が悪くても文句なしに納まると言うのだつた。どうしてマーシチル（技術者）になつたのかと言へば、元軍人であり、革命党員であるからと言ふのだつた。会計係は以前中央監獄に御厄介になり、服役した経験済みの男であると言ふ。

この鉄工班にも、中央監獄の御厄介になつた前科者が七・八人いるとの事だつた。僅か二十名足らずの中前科者が七・八名占めると言う事は一寸考えられない事であるが、しかし何処へ行つても約半数が前科者であることは、れつきとした現実である。

私が監獄の中でよく聞かされた事は、蒙古人の八十パーセントは革命以来、監獄の御厄介になつた者であると言ふ事である。このことは、かりに八十パーセントが五十パーセントであつても、この国が封建社会から資本主義社会を通過せず直接民主主義社会に突入した段階においては、相当無理な弾圧を加えねば社会主義建設の独裁政治がうまく行かなかつたことを物語りとも雄弁に物語るものである。

(11) パルトンジャムソの宿舎

彼の住居は、国营鉄工場アパートの直ぐ北側に当る処にある。師範学校の先生方の宿舎の一廊の中にあつた。アパートは彼の宿舎からよくみえた。



パルトンシヤムソの妻は、師範学校の小使兼掃除婦であつた為、通常は家を留守にしていた。しかし、彼の女の姉が同宿舎内にいたので、留守中は姉が監理していたようだ。

私共が行つた時にも、扉には錠もおりておらず開閉が自由であつて、這入つて行くと片方の寢台に二人の男女が、コソコソ話をしてるので、さすがのパルトンシヤムソも、ドキツとしたようだが、何食わぬ様子をして、ベイチカに火を入れ、お茶を沸かし始めた。

暫くすると話していた女は外へ出て行つた。

パルトンシヤムソは、
「この男を知っているか？知らない筈はない。よくそのつらを見るよ。随分厚いだらう」と言うので、私も他人の家で逢引きするような男の顔がどんなものか、見たかつた。

よく見る中に、何だか見おぼえはあるか、はつきりした記憶が甦つて来ない。その中に向うから、

「Y、サイハンバイノウ」と言われて、「いつたいお前は誰か。」

「私を知らない事があるものか。忘れてしまつたのか」と言う。

パルトンシヤムソが横から、「鉄工班にいた銀細工のボンボン（丸い）チヨクトだよ。」

「あゝそうか。部屋が暗くてよく分らなかつた。ポインチヨクトか、久し振りだね。」

「よく早く釈放された。これからどうするつもりか。」

「今日パルトンシヤムソにお願ひして第五アリテリ鉄工班に入れて貰うようになつた。」

「それはよかつた。私はまだ仕事はないか、家で銀細工を内緒でやつているよ。それで何とかやつて行かれるもんだ。色々闇商売はやるがね。」

「君の家は何処にあるんだ。」

「私はダンビルシヤムソ・ゴへ（様）の蒙古包にいるよ。場所はラーガル、アシホイの前だよ。一度来て

見ろ。ダンビルシヤムソ・ゴへ（様）も日曜には出て来るよ。連絡事項でもあつたら頼んでやるぜ。」

「それは有難い。監獄で使つていた道具が欲しいんだ。マーシチル（ダンビルシヤムソの事）に預けてあるから、家まで持ち出しておいてくれるように頼んでくれないか。こちらでも医師パルトンに連絡して持つて来て貰うようにするが、両方うまく連絡しておかないと困るからね。」

「よしそのように伝えておこう。」

「今のはお前の女か。」

「今の女は私の妹だよ。最近田舎から出て来てここに住んでいるんだ。」

「あゝそうか。他人の家で逢引している男の顔を見てやろうと思つていたんだ。お前の妹なら、たいしてあやしむ事もなかつたわけだ。」

「そんなに気をもむな。女なんか何処にだつてあるんだ。適当に話しかければ二つ返事だよ。」

「まさか、そう簡単に行くもんだはあるまい。」

「思い切つて話しかけて見る。簡単に纏るもんだ。」

「まあまあそんな話はどうでも良い。」

そこへパルトンシヤムソの妻が帰つて来て、「皆さん、サイハンバイノウ」と挨拶した。

パルトンシヤムソは私を彼女に紹介してくれた。

「この男が前に話してあつた、ヤボン・フン（日本人）だよ。」

「まあよく釈放されたね。私の兄がよく話していた日本人がこの人かね。」「全く中国人とそっくりだね。」

この夫人のはつきりした言葉には些か参つた。夫人は直ぐ夕食の準備を始めた。

夫人は手ずかみで羊肉と羊骨を取り出して来て机の上においた。そして羊の骨を上手に手に持ちながら包

丁で、大きく二・三個に折つてなべに入れ、また羊肉をナイフで削り、ちぎつて鍋に入れた。肉も骨も少

しの量で、二人分としても足りない位だつた。

洗面器に二等麵を入れ、さめたお茶で粉を煉り出した。蒙古では洗面器を必ず入れ物にし、食事の道具として重宝がる。

私共三人は監獄内の事を話している中に、子供の話になつた処、パルトンシヤムソが、現在の妻と一諸になつてから一年以上になるが、その間一度子供を産んだが二・三日して死亡してしまつたと残念がつて

いた。実は彼は、現在の妻と一諸になる前、外の女と一諸になつていたが気に入らず二、三カ月で別れて

しまつたことがある。現在の妻は、マーシチルダンビルシヤムソの妹で、同郷である関係からうまく結は

れたものである。

外蒙では蒙古人の子供はどうしても、うまく育たない。華僑と一諸になつた蒙古婦人には特別よく子供が育つ。華僑と蒙古婦人の年齢の差はとも大きい。六〇才対二七・八才位である。それだのに子供が育たない理由は何処にあるだろうか。

- (イ) 梅毒、淋毒、等の疾患が多い為。
- (ロ) 性行為が乱脈であつて、少年少女でさえ疾病にかゝる為。
- (ハ) 医学が非常に劣つてゐる為。
- (ニ) 国民の衛生思想が低い為。
- (ホ) 育児方法が依然として旧封建的習慣にとらわれている為。

雑談に耽つている中に暗くなつて来た。電燈をつけてくれたが薄暗い。この家は一番西側にあるので寒さかこたえ、その上ペイチカがよく燃えないので部屋は暖まらない。西側の入り口は二重扉にしてあるが、そこから漏れるすきま風は刺す様に感ぜられる。

私は蒙古人は良くこんな寒い部屋に平気でいられるものと思う。もともと遊牧民である關係上彼等の生活は自然に慣れたものになつていて、人の話に依ると、家畜の見張り人は、雪の中でも、吹雪の中でも、平気で路上に仮眠を取るといふ。その事を思えば二重扉の隙間風位でもないわけである。蒙古には元来寝台はない。勿論パイシン(家屋)もない。蒙古包で、床はフェルトか生皮を敷き、その上に寝たものであるが、革命以来急激に、支那式家屋や西洋式家屋が増加して来た為、何処の家庭にも洋式が取り入れられるようになった。ず第一に大きな鉄の寝台が持ち込まれて来た。その寝台に寝具が必要になり、毛布が持ち込まれ、ついで鏡か、時計が、写真額ぶちか、トランクが、というように持ち込まれて来た。

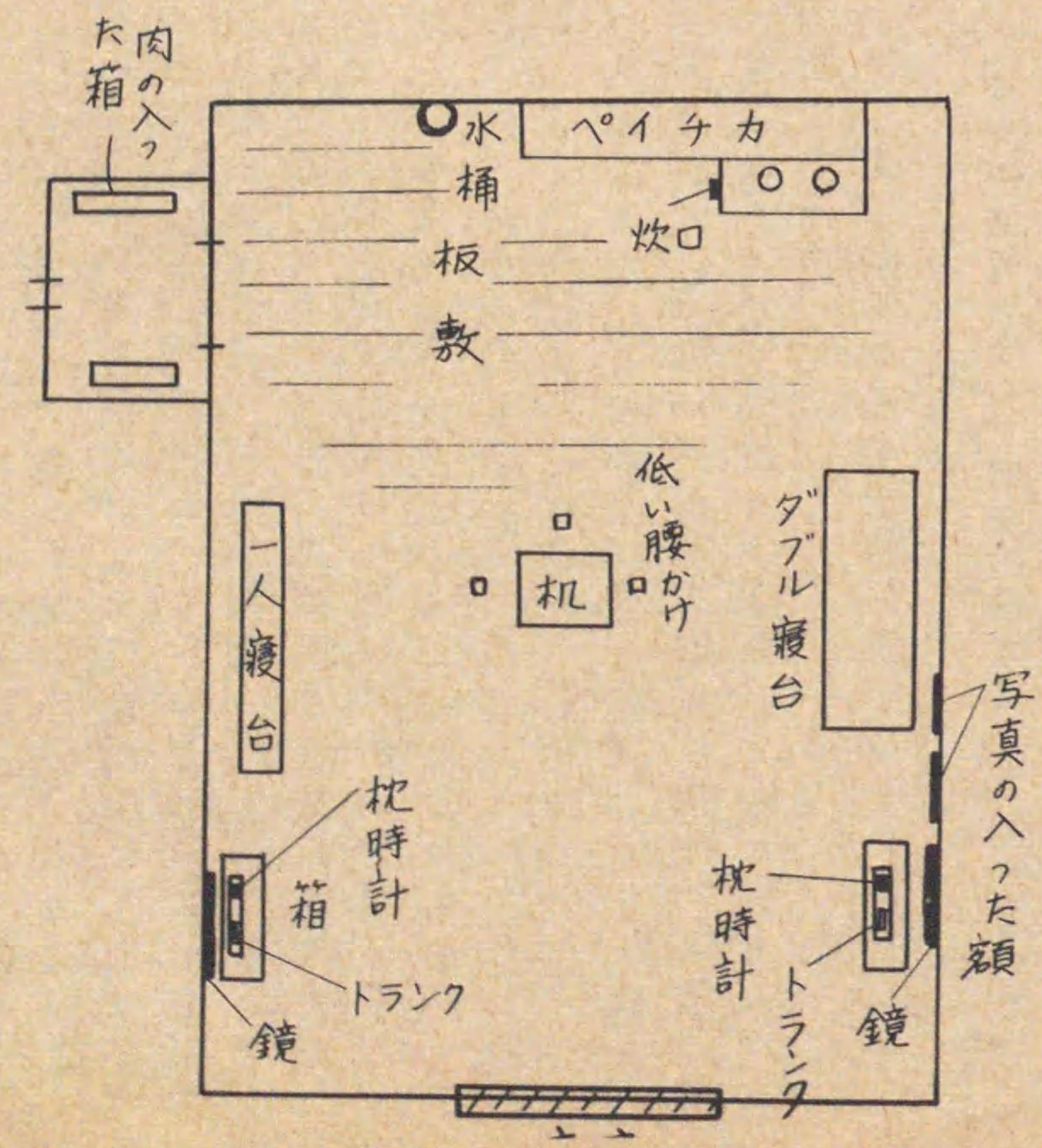
レーニン・スターリン・チヨイバルサン・スフパートル等の肖像の印刷物は必ず、何処の家の壁にも貼られているか、或は額ぶちにはめて大きく浮き出している。一般に仏壇はあまり見られない。若し有るとすれば、厚い壁を四角に切り抜いてその中に仏像を安置し、

上から布で覆つているか又は小さな木箱に入れて保存してゐるのである。

これ等が彼等の全財産である。昔は、蒙古包の中の真中に仏壇が置いてあり、その前にいろいろが切られてあつて炊事をしたものだ。そして三・四月の頃ともなると、可愛い仔牛や仔羊が蒙古包の隅に場所を与えられて、人間と一諸に育てられたものだ。現在の生活はこのような遊牧生活に比較すると、すつかり變つてしまつて、大分文化的になつて来たとも言えるであらうか。しかし我々が考えさせられるのは、これ等の寝台・鏡・寝具・時計・トランク・画像などすべてが、見栄から出た装飾品となつてゐる事だ。そしてさらにまた、恐ろしい程の競争となつてゐることである。

この部屋の真中に低い机と腰掛が置いてあるが、これは蒙古包の中で使うもので、新旧のチャンポンである。枕時計は二個あるが、一個は動いてゐるが一個は故障で停止してゐる。大きな壁かけ鏡が二つかゝつてゐる。ソ連製品である。大体この部屋にある物でソ連製品でないものは殆どない位である。

どうして蒙古人は国産品を置かないで、ソ連製品を購入するのかというと、こういうわけである。消費組合から直接買うと非常に安い。おゝよそ国産品



の半額位である。それを闇で売ると三倍にもなる。原価三十トコロゴの物なら、八・九十トコロゴで売れるのだ。このような闇商売によつて、生計を樹立している者が非常に多いのが実情である。

雑談に耽つている中に夕食も出来たようだ。ニユームの鍋に一ぱいうどんを作つて持つて来た。妻君が骨と一諸にうどんを茶碗に盛つてくれた。私共は骨をしやぶり、骨についている肉を奇麗にむしり取つてうどんを食べた。本当に一切か二切れの肉しか入っていないこのうどんは、全く味気もない、不美味いものであつた。このように外蒙の蒙古人達は肉を食わなくなつて来た。革命以前は全く肉食だつたと言つても過言であるまい。老人達は昔のように肉が食えなくなつたと淋しかつていたが。このように肉食が出来なくなつた原因は、色々有あろうが、あらゆる点に於て、統制が強化され、供出が強化されて来たこと、又生産増強・五カ年計画に基づいて、家畜の屠殺を極度に限定し、又家畜増殖の割当制を実施した為である。肉の配給量は四日に一疋である。老人の言に依ると、一番多く食べた者は一回に羊一頭分だと言う。しかし之は事実でないようだが、羊の六等分は食べたようだ。羊肉一頭分は三〇―一二〇疋位であるから、六等分とすれば平均四疋位に当るであろう。又ラクダや馬の肉は宗教上のこともあつて食わなかつたものだが、現在はそうでなく、ラクダの肉でも馬の肉でも、食いさえすれば良いというように變つて来た。これは、革命以来宗教にとられなくなつたこと、および肉の需要上、この肉の補給を必要とする状態となつて来たことによるものである。現在はラクダの肉が一番安く、脂肪が多く経済的で、庶民的食糧の一つとなつている。この家では少しの羊の肉だつたが、少し位ならラクダの肉を沢山入れて食べた方が、どの位腹の足しになるか分らんというのが彼等の真実の言葉であろう。

時間も午後七時近くなつて来たので、今度暇を見てゆつくり出直して来る事を約し、パルトンジャムソの家を辞した。そしてパスポルトへステンガザルに急いだ。

外国関係の窓を開けて、来意を告げると、顔見知りの警察官が、「まだ出来ていない。明日の晩来るように」という。成程、外蒙の事務波帯はかねて聞きおよんで通りだと思つた。あたりには誰もいない。これから仕事をしようかと思つている時、表の扉が開けられ一人の華僑が入つて来た。窓下に行きノックしているのが、しんとした夜中に何か遠慮勝ちに響くのだった。

ホーチン・ザハ(古い市場)

就職は大体内定したが、パスポルト(居住証明書)は仲々発給されない。二、三日続けて毎晩パスポルト発給所を訪れたが、その度に明日の晩来るようにとのみ言われ、徒らに体力を消耗するだけであつた。この期間、ホーチン・ザハ・シン・ザハ・イテム・ザハ等を歩き回り、鉄工具を購入すべく、やつぎとなつて探し求めたが何一つ見つからなかつた。

このホーチン・ザハ(古い市場)は、中央デパートの直ぐ西方から始まつていた。中央デパートの西側はバスの発着所となつていて、人の往来はこゝを基点として西方市場に向つて繁くなり、ウランバートル市の最も繁華な街道となつてゐる。しかしこの街道は昔からの自然に出来た道路で、道中も狭く曲りくねつた、凹凸のあるもので、修理も殆どされた事がなく放任されたまゝだ。この道路にそつて小川があるが、雨が降つた時だけ、水が流れて来る。この道路は近く都市計画に基づいて建設される事になつてゐた。この道の両側に、華僑の商工業飲食業者の店舗が並び、又国営消費組合・公共団体の協同組合主消費組合・直売所・食堂・理髪所等がそれらの店舗の間に点在している。

ホーチン・ザハ(別添見取図参照)の店舗・組合等はすべて平屋で、大半は泥屋根葺き、窓は二重窓、室内は薄暗い。それでも人通りが一番多い所なので活気がある。この附近にはよく、背に木材や、羊肉をつけたラクダの幾群を見かける。これは、冬期間のみで、夏期には見られない現象である。又目につくのは、女が防寒帽を冠り、長靴や、フェルト長靴を穿いている特異な姿である。ロシア人の女は、毛布や、襟巻を頭から冠り、足は短靴やハイヒールを穿いている。この寒いのにスカートにストッキングとは驚くの外はない。蒙古人はよく次のような事を言つてゐる。

「ロシア人は頭を、蒙古人は足を、日本人は腹を暖めているのが習慣だ」と。蓋しなかなかうがつた見方である。華僑の馬車が、けたたましい叫び声を上げて人群の中を押し分けて通つて来る。道路側には露店商が、寒そうにただずんでいる。酒を飲んで、大声をあげながら歩くソ連兵と蒙古人の若い青年達もある。日曜、祭日もなれば、この街道は目茶苦茶な程人畜の群で一ぱいになる。そして夜は酔どれ共の蛮声と喧噪で、女の争奪戦が行われる。しかしこれは一部の人間に限られてゐるようだ。街燈がこの辺には殆んどないから、一般良民は夜道は絶対歩けない。歩くとすれば、三人、五人と連れだつて歩かねばならぬ。殺人・強奪・強姦などが市民の話題にのぼつてゐるのをみても、大体察しがつこうというものだ。このホーチン・ザハの中で、一番繁華な処は、第二消費組合と、古

物依托販売組合の前の広場である。この広場には露天ラジオ塔が有つて、絶えず、ロシヤ語と蒙古語の放送が拡声器から響いて来る。この辺には露天商がずらりと並び、馬車は十台余りが入り代り立ち代り発着してシン・ザハとの間を結んでいる。又荷馬車が二十台余り顧客の来るのを待ちあぐんでゐる。華僑の老人連中が、綿入れの支那服に腕を差し込んで、おしやべりを盛んにやつてゐる。蒙古人とソ連人が、消費組合や食堂に入つたり出たり、馬車に乗る者歩くもの等、混雑は相当なものである。馬車は、シン・ザハ迄二軒位であるが、一人一トコロゴの運賃をとる。これに對抗したのが、公営タクシーである。この豆タクシーは四人乗せて片道一トコロゴなので、馬車とつては大きな驚威となり、馬車の数も半減して来た。しかしタクシーの数が余りに少く、タクシーを待つ間に馬車でシン・ザハに到着してしまふから、依然として馬車の利用も相当ある次第である。以上がホーチン・ザハの概況である。近頃は商店舗の商品が少々さびれて来た。そして雨戸を降して閉鎖するものも見受けられた。尚製靴業者は材料の入手難と、税率の高評価に依つて、協同組合の下請又は出張所となつて辛うじて経営を継続する状態となつて来た。食堂やバアも同様で合同されつゝある。

その他菓子業者・肉業者・野菜業者も、価格が限定されて来た為、消費組合の配給所と早変わりしてゐるものも一部にある。これ等の華僑業者の外は、すべて相当数の国営、公営の消費組合、直売所、飲食店等で、相当の繁栄振りである。一体華僑業者が、政府の營業税の高額取り立て、商品、原料の抑制配給に苦しみながら、粘り強い商魂をもつて營業を続けてゐるには、二つの大きな原因がある。一つは蒙古人と華僑との間の閹取引きであり、もう一つはウランバートル在住の華僑と地方に住む華僑との間の昔からある連繋である。前者については、国営消費組合から配給品として売りに出される生活必需品が、蒙古人の手から華僑商人の手に閹取引きされるのである。即ち華僑はマツチ・ローソク・人絹・絹布・靴墨・齒磨粉・ソ連製化粧石鹼・硝子器具・鏡・萬年筆・毛糸ジャケツ・人絹シャツ・木綿糸・ミシン機・ヤスリ・鉄製寝台・赤いキザミ煙火・インク・白紙・鉛筆・其の他沢山の品物を蒙古人から買取り、消費組合の倍額位の高値で売り捌くのである。これを政府はどうして厳格に取締らないのか、不思議に思うが、それには次のような理由がある。すなはち、閹の仲介をしてゐる蒙古人が、政府の職員か軍人か、或は又定職がなく閹取引きによつて生活をたてゝゐる者であつて、若し取締を強化すれば、これ等の蒙古人が苦境に立ち到るからである。そしてまた、近い内に国営消費組合・公営機関が充実して、經濟機構が、スムーズに運営され出したら、このような閹は自然になくなると見てゐるからである。

後者の、ウランバートル市在住の華僑と地方華僑の密接なる連繋については次の如くである。地方在住華僑は地

方に生産される原料を、ウランバートル市在住華僑に送り込み、ウランバートル在住華僑はこれに加工して製品として売り出す。例えば、獣毛皮は統制供出されてゐるが、裏には裏があつて、何とかして、原料が運び込まれて来る。小羊の毛皮は高級防寒蒙古服、又は帽子になるといふように、狼・狐・リス・ラクダ毛。其の他牛・馬・ラクダ等の生皮等がこれである。この外に手製品・食肉・塩・木材等、夥ただしい数量が流れ込んで来る。どうしてこれらの物が検門所を切り抜けて来るのか、そこには法の裏があるからである。

また此の繁華道路の到る処に露天商が並んでゐる。彼等は手押し車又は人力ソリに、木箱や、かごをつけて、野菜・日用品・靴・食糧品・煙草・菓子・飴・ソーセイシ・カンズメ・衣服等その他あらゆるものを並べて売つてゐる。彼等は、消費組合の下請として許可証を持ち、売上高の五%を口銭として貰うようになつてゐる。しかし口銭だけでは仲々大変で、生活も相当苦しいといふ。

この古い市場には、華僑の野菜商が非常に多く、殆んど独占的にさえ感じられるくらいである。一般的に、野菜商は何処にでも見受けられるが、これは彼等が自作のほか、お互が密接に連繋しつゝ、販売まで手をひらげているもので、ウランバートル市附近には彼等の農場がよく開け、特にセレベ河附近はもつともよく、アムゴロン附近がこれに次いでゐる。彼等華僑は、野菜の貯蔵にも力を入れ、地下に貯蔵庫を設け、春先きになつても品切れにならないよう工夫し、なかなか商売の根強さを示してゐる。

国営野菜農場もあるが、華僑の生産と技術には及ばないようである。消費組合から売りに出される野菜類は、質も悪い上に量も少く、四、五月頃になるとストックがなくなつてしまふ。華僑の野菜商と消費組合の野菜の小売値は大差ないので、一般需要者は華僑より購入する者が多い。特に華僑、ソ連人はすべて華商を利用する。

野菜の小売値は左記の通りで、時期に依つて多小の差異はあるが大概安定してゐる。

ジャガ芋	一 一匁	一、二〇トコロゴ
白菜	一 一匁	〇、五〇
キャベツ	一 一匁	〇、七〇
葱	一 一匁	一、六〇
ニンニク	二 二個	一、〇〇
トマト	一 一匁	三、〇〇
大根	一 一匁	一、〇〇

ロシヤ赤カブ	一疋	一、〇〇
人參	一疋	一、二〇
ニラ	一把	〇、五〇
三葉	一把	〇、五〇
モヤシ	一疋	二、五〇

現在蒙古人でも、うどんを作るようになったので、葱、ニンニク、ジャガ芋等を利用するようになった。ウランバートル市で、菓子・パン等を個人で製造しているのは華僑だけである。そして彼等は小売商を兼ねている。華僑の製パンは技術的に優秀である為、ソ連人や華僑等はこの華商を利用する者が多い。このパンも消費組合のパンより目方に於て幾分軽いようだし、又値段も一個に付いて〇、五トコロゴ高値である。菓子類は中国で見られるもので、これは非常に高いので、華僑でもホンに一部の者しか利用しないようだ。

小間物・日用品等の一般雜貨商はこの町にも少くない。彼等は前にも記述した通り、蒙古人との間に消費組合から売り出された物の闇取引によつて品物を獲得し、これを所謂又売りするわけで、値段も消費組合の倍以上の高値である。今ではこの種類の華僑は非常に衰微し、ある者は閉鎖し、ある者は転業する等、除々に整理され、自然消滅になるであろうと考えられる。

製靴と靴修理商が非常に多いが、近年になつて、この製靴商の一部が手工業協同組合即ち第三手工業組合に併合され始めた。しかし、まだ個人営業の製靴商は多い。それは華僑の手に依つて作られた靴は非常に質が良く、型も多種類で美しいので、蒙古人は好んで之を利用するからで、このため値段は消費組合より四、五十トコロゴの高値にもかかわらず、結構商売になるものと考えられる。

木工業については、外蒙古は森林資源にめぐまれ、木材は自由販売であり、従つて、木工製品の製造は各所で行われる。その種類も多種多様である。華僑達の木工技術は外蒙古人に比較して優秀である為、値段は高くとも華商から購入するものが多い。華商の店頭にならべてある品物は、花模様のある大きな箱・椅子・机・鞍・靈柩箱蒙古包の骨組等であつて、その他雑多な箱、入れもの等である。花模様のついた箱は一〇〇トコロゴから三〇〇トコロゴ、附属品のついた鞍は四〇〇トコロゴから一、〇〇〇トコロゴ、椅子なども五〇トコロゴから一〇〇トコロゴ蒙古包骨組全部で一、〇〇〇トコロゴから一、〇〇〇トコロゴである。

支那味噌、支那酢は華僑独特のもので、蒙古人には真似の出来ないものである。この醸造場は二個所有つて、ウ

ランバートル市内にも外に見受けられない。この味噌と酢は中国人と内蒙古人に必要なものであつて、何処の中国食堂に入つても必ず食卓に備えつけられてある。特に支那酢は独特な味がするので華僑達には喜ばれる。支那の味噌の原料の大豆類が外蒙管内では出来ない關係上、代用品として豌豆の少量に、小麦類を用ひて作られる。その為此の味は全く悪く、用ひる者も案外少いようだ。彼等の中でもこの味噌の中に砂糖を混入して使用する。

中国食堂は、何と言つても華商の中で特に目だつて榮えている。現在政府の高率な税金と、食堂数の制限に依つて抑圧され、又国営、各種団体の公営食堂が代つて設立され、これに對抗している。しかしこれに従ふ調理人は、すべて華僑という現象である。私共が中国在住中、丸いテーブルを開んで、中国料理を味はつた、あの豪華な料理は、外蒙の何処へ行つても絶対見受けられない。それも無理もないというのは、宴会という事が絶対見受けられないことである。そこに料理の貧弱さの原因があるのかもしれない。このような食堂であつて見れば、唯一回食事をして、何うにか安く食えればよいという実利主義に基いているから、料理の種類も僅か五、六種類に限定されている。

- ホーシヨール (肉と葱、ニンニク等を入れて油であげたもの)
- ポーズ (饅頭の中に肉と葱、ニンニクを入れ蒸したもの)
- 麵条子 (肉うどん)
- 焼麵条子 (油でいためたうどん)
- シヨウズ (肉と葱、ニンニク等を入れ湯の中に入れて取り出した小型饅頭)
- 饅頭 (麵で作つた蒸した饅頭)
- あん饅頭 (あんこの入つた饅頭)

等で、本当に淋しいような料理種目である。このように料理の種類が少ないのも、社会主義民主国であればこそで、統制限定されてしまうのかも知れない。

バア(一ぱい飲み屋)は相当数有る。蒙古人、ソ連人、華僑共に酒が好きだし、寒い環境に有るので、バアが繁昌するのも無理はない。バアで特に目に付くのは、ソ連人と蒙古人の姿で、中にはソ聯婦人、蒙古婦人も混つている。バアの内容は、殆どが、机も腰かけも置いてはあるが、殆どが立ち飲みである。特に日曜・祭日は、このバアは満員で、割り込んで立ち飲みすることも出来ないような状態である。どのバアにも、高さ一米、巾五十糎位の立飲み台がある。

酒の種類も二、三種類にすぎない。いつも店頭にある酒は、

(一) チヤガンアリヒ (白い酒)

アルコール含有量三〇%位

一〇〇瓦の値、五トコロゴ

(二) ビーチチュ (ビール)

一リットル 二トコロゴから三トコロゴ

その他の洋酒は仲々手に入らない。祭日、正月等に特配されるが、高値で大衆向きでない。それもウオトカが主で、ブランドイ等の洋酒は仲々売り出されない。値段も三〇トコロゴから五十トコロゴもするから、一般労働者には向かない。ビールが最も安く大量に売り出されている。このビールもビン詰めではなく樽詰めで、リットルではかり売りしている。

このビールと白酒は外蒙古で生産醸造される。ビールの質は程度が悪い。白酒はジャガ芋、粟等から生産され、最も有名な工場はジュンハラ工場で、アルコール九八%含有のものを加工し、飲み安くして白酒として売り出されている。この九八%含有のホーライ・アリヒ (乾いた酒) は医療用のアルコールとして使用されている。この半リットル入りビン詰が一個三三トコロゴであった。監獄の囚人達はこれを購入して、水を三倍位に調合して飲んでい

たものだ。バアの売子はすべて男子で、女子は一人もいない。板金工が四、五軒ある。入手できるトタン板の品質は日本と変りないようだ。トタン板は、普通の手段では絶対に購入出来ない。その為、建設省の役人又は技術者と結託して、何処からか手に入れて来るのである。これは誠にうまく出来ている。例えば、建設省の直轄下にある建築場で使用するトタンを、何んとかうまく流用して来るのであるが、そこにも蒙古人の泥棒根性が現われているのである。私はよくこのようなやり取りが、実にうまく行はれているのを見受けた。ソ聯人でも同様、官庁から自分の私用として払ひ下げて貰つて、横流しして、飲みしろとしていられるものもある。とに角、この板金工は非常に儲かるようだ。トタンで出来た丸いストープが、消費組合で売り出される売値は一個三〇トコロゴ余りであるが、之が市販となると一〇〇トコロゴ迄上昇する。これでどんなに需要が多く供給が足りないかが、はつきり分るのである。蒙古人はなぜ丸いトタンのストープをほしがるかと言ふと、蒙古包の生活が現在も、尚続けられているが、蒙古包に鉄の寝台が入つて、寝具も立派になつて来た以上、昔のようにイロリで火をたいて、食事やお茶を沸かす事は少なくなつて来た。部屋をススだらけにせず奇麗にするには、是非このストープが必要となつて来たからである。自転車修理工も四、五軒あるようだ。冬期間は戸を閉ざして休んでいるが、春から秋にかけて店を開いて繁昌す

る。しかし唯修理すると言ふ丈で自転車の販売はしていない。

ここには浴場もある。華僑の浴場は、中国の〇〇池と書いてある浴場と変りはない。大衆風呂はないが個人個人の風呂である。中に二ふねあるものと一ふねあるものと値段が違う。二ふねは家族持ちが入るように入来しており、一ふねは独身者か、連れ込みように入来している。日曜日などは満員で溢れている。ウランバートル市内に華僑の浴場が三個所有つたが、一個所は公共団体に接収買収されたので、現在は二個所ある。この古い市場には、この公共団体の浴場と、華僑の浴場との二つがある。

華僑浴場の料金は一時間六―八トコロゴであるが、チップは別であるから相当高くなる。しかし公共浴場は一時間三トコロゴから五トコロゴで、チップも要らないので、連れ込みでない限りこゝを利用する。二人になると倍額となる。これは別であるが、国立浴場が別に一個所有する。この料金は前記の公共浴場と同じだが、唯シャワー式入浴室のあるのが特色である。

蹄鉄工、車輪工、鍛冶工特もあるが、これ等は石炭、コークスは使用せず、すべて木炭で加工を行っている。材料もすべて鉄屑捨場から収集している。外蒙古では鉄屑捨場が各所にある。それも自動車の車体やら、機械の破損して使用出来ないものが捨ててある。これは自由に収集出来るので、利用出来る鉄材を拾ひ集めて、修理用や製品として扱われている。このような仕事に従事している者は殆ど華僑であつて、封建的環境をその儘踏襲して、手押しファイゴで、向ふ鎚と本鎚で鍛冶している。これを見ても、近代的手工業としての面影は全然見受けられない。この華僑の鍛冶工は遠からず消滅するものと考えられる。現在公共団体としての手工業協同組合が、ぼつぼつ一部機械化されつつあり、又人員も拡充され、華僑の技術者を優遇採用している点から見てもわかる。

華僑の肉商が、盛んに売り出している肉類は、新しく売れ行きが非常によい。牛肉と羊肉であつて、国营肉消費組合より幾分高値である。牛肉骨つき一疋八トコロゴ、肉だけのものは一疋十トコロゴ、羊肉は骨つき一疋十トコロゴ、肉だけのものは一疋十二トコロゴ。国营肉消費組合は、全部骨つきで二トコロゴ程安くなつてい

る。華僑の肉商達は、家畜市場、又は地方の華僑から成畜を購入し、これを屠殺し、その皮、内臓は自分達が適当に処理し、肉だけを検査所に運び、検査の上捺印を受けてから売り出す。これ等の肉商達は、春四、五月頃から八月頃迄は閉鎖する。其の他の期間商売をして、非常に繁榮している。

成畜が一番出盛るのは、何んと言つても十二月から二月にかけてである。蒙古人もこの期間には、ラクダを幾頭も連れて地方から、ウランバートル市に集つて来る。この地方から出て来た蒙古人を、待ちかまえているのが華

商の肉商達で、この際とはかり成畜の取引を行ふのである。昔と変わったのは、地方から出て来た蒙古人達が、昔の糧棧(穀類仲買商)が現在なくなつたので、直接市場で売り払うことである。だから昔のような中間搾取はなくなつてゐる。

写真屋もウランバートル市には多い。その中でもこの古い市場に殆どが集つてゐる。やはり群集の多い処にこのような商売が栄えるようだ。

蒙古人は非常に写真をとる事が好きで、それを家庭に額縁に入れて飾る事が好きだ。又外蒙古では、必ず居住証明書が必要である。その為、誰もが年一回はとらねばならぬ。特に、ウランバートル市は外蒙の中心地であつて、政治・経済・文化の中心地であるから、各種各様の人々が地方から集まつて来る。これ等の人々が記念に、又地方には写真屋がない為めに、必ず写真をとる。

写真技術は至つて未熟であるが、それでも華僑は蒙古人よりは上手である。何にしろ蒙古人は、文化程度が極度に低く、本当に野人的存在である。革命以来急激に文化が向上したといつても、華僑の水準迄は仲々及ばない。そこに華僑としての生きて行く道が開けてゐるのである。

時計修理工であるが、二軒程この古い市場に店舗をかまえてゐる。現在部分品の入手が困難な為、仲々修理もはかどらない。それ丈に修理値段も高い。一寸した修理でも十トコロゴもとられる。少し部分品の取換えてもすれば、三十トコロゴから五十トコロゴ迄も値が上つてしまふ。

この外に、公共団体の手工業組合第九アリテリ時計修理所が、外蒙唯一のものとして光つてゐる。これも部分品の配給が誠に少いので、経営は非常な困難を来たしてゐる。従業員として約十二、三名の技術者が居るが、すべて蒙古人である事が、一つの特異性であらう。

ミシン縫工であるが、これも二、三軒数えられる。しかし、現在は事業が不振のようだ。兎に角手工業協同組合に押されて終つた感がある。ウランバートル市内にある手工業組合のミシン縫工部が充実して来た。

染物屋も四、五軒あるようだ。蒙古人は物を染色すると言ふ技術が無いから、華僑に独占されてゐるようだ。

理髪業はこの古い市場だけで四、五軒ある。これは仲々繁昌してゐる。日曜、祭日は誠に繁昌して、何処の理髪屋も満員と言ふ状態である。蒙古人も皆丸坊主はきらいで、髪をのばしてゐる。油をつけるにも、油が手に入らないので、水でなでつけてゐるものが多い。理髪屋の内容も誠に不衛生であつて、消毒器もない、理髪場もない、腰掛も木製のもので折畳みが出来ないものを使用してゐる。

長髪の調髪料金は四トコロゴ、顔剃すると六トコロゴである。

公共団体の理髪所もこゝに二個所有する。従業員も十二、三名数えられるが、技術は到つて未熟で、華僑には追いつかない。理髪師はすべて女子であるが、華僑には女子はいない。この理髪師の俸給はその日の出来高によつて支払はれる。こゝの料金は、調髪だけが三トコロゴ、顔剃すると五トコロゴである。

蒙古人の髪は革命以来變つて来た。男子の弁髪が丸坊主となり、長髪となつて来た。現在地方の遊牧民でさえ弁髪は殆どなくなつた。しかし丸坊主が多く長髪は少ない。ウランバートル市は殆ど長髪となつた。

婦女子の金銀・珊瑚・メノウ等の頭飾りは全然なくなり、髪は両側に分けて、あんで下げている。地方では、まだ断髪は全然見受けられないが、ウランバートル市内には断髪パーマがたまたま見受けられる。小さな男の子は丸坊主で、女子は両方に分けたお下げ髪である。

こゝで一番不思議に思ふのは、草花のない事だ。ソ聯人がいる以上、草花が有りそうなのに、私がウランバートル市在住中一度も見受けたことがない。唯見受けたのはアオイとツタ位であつた。

又物乞いのいるのを三個所を見た。いつもきまつた蒙古人だつた。この古い市場にも一人いた。第五消費組合の階段に腰かけて、通行人と消費組合に入入りする者に、念仏を唱えながら物乞ひしてゐる白髪の老人であつた。何処か変つた処が有るようで、物に動ぜず念仏を唱えてゐるさまには、一寸驚かされた。又通行人も、見ても見ない振りをして、素通りして行く。この風景は仲々意味の有る処である。

又この古い市場は、淫売の取引が行はれる場所でもある。又こそ泥の根城でもある。こゝにこれを取締るべき警察官の見えないのも、一つの不思議である。日本のような巡査派出所などは一つも見受けない。それだけに治安は悪く、夜毎夜毎に、又昼日中でも喧嘩、争論、窃盗騒ぎが繰り返される。

又ソ聯人がモルヒネ注射の交渉をやる為めに、華僑を小路に呼び込んで、会談後連れだつて何処かに消えて行く。私も一度そのソ連人に呼び止められて、小路に連れて行かれた時は、ドキッとした。小路に入つて人のいない処迄来ると、上衣のポケットからモルヒネ注射液を出して、一本注射しないかと話しかけられた事が有つた。私がいらないとすげなくことわると、かのソ聯人は恐ろしい目で私をにらめつけたので、私は恐ろしくてあわてゝ人通りの多い処にきびすを返した。この時からこのソ聯人の顔を覚えてしまい、後になつてもこの男が華僑と話し合つてゐる処や、連れだつて行く処を何回も見ることが出来た。

蒙古には阿片は絶対ない。麻薬の加工品としては医薬品より外にない。その為、華僑は薬局から、コカイン入り、

又はモルヒネ入りの薬剤を購入して、飲んでいる者が多かった。

この市場の往来では、鼻のない蒙古人の男女をたまたま見受ける。鼻のない処に穴が空いている、その醜い穴を隠すために、汚れた赤茶けた白布で鼻を覆っているさまは、特異な風情である。

中央デパート西側広場から、アムゴロン行き、カンピナート行き、マハカンピナート行き、ソ聯大使館行き等のバスが発着している。大型バスはソ聯大使館行きだけである。このバスの型は、日本の後、先のないバスと同型である。これも二台位しか無いようで、その他は小型の普通バスである。

料金はアムゴロン迄片道二トコロゴ、その他終点迄各一トコロゴである。

このバスの発着所あたりから西の方の古い市場にかけて、人の群で、ごつた返している。この中には、蒙古人は勿論、ソ聯人、華僑、カザヒ其他各種の民族が右往左往している。ある者は大きな箱を持ち運び、酒に酔ひ、若い男女が腕を組んで歩るき、飴をなめている者、えぞ松（黒松）の実を食べながら歩る者、ラクダに木材や肉を載せて売り歩る者、馬車をひくラバを追ひたてる華僑、ソリに荷物を載せて行く者、手製のホーキを売り歩る者、凍った大小便をラバ車に載んで運ぶ華僑、黒山のように露天商を閉んでいる者、喧嘩争論に集まっているヤシ馬、消費組合や華商に這入つたり出たりして見て歩る者、馬車のカン高い客呼びの声、ラジオの雑音、肉屋の前に押し合つて肉を買ひ求めようとしている者、綿入の支那服を着て腕組をしながら氣長がおしやべりしている老華僑たち、写真屋の前に貼り出されてある写真を見ている田舎から出て来た純蒙古人の男女、酔つた勢で女の手を無理矢理にひっぱっている者等、様々の往来の風景である。

私はあらゆる消費組合、華商、露天商を、私に最も緊急必要であるヤスリ、金鋸、ハンマー等を探してくまなく歩いたが、この古い市場では見付からなかつた。

私は人の往来の繁しい道路を南に向つて下つて行つた。道は修理した事もないような凹凸のはげしい、凍つた道である。馬車と人の群の往来がはげしい。これがシンザハと結ぶ一本の道路である。

(13)

古い市場における公営消費組合

其の他の状況

古い市場の見取図に従つて、公営事業の概要を述べて見よう。

番号順に従つて説明を加えていく。

- (1) バスの営業所であつて、各区間のキップ販買をしている。待合室もあつて仲々の盛況である。
- (2) こゝからアムゴロン、カンピナート、マハカンピナート、ソ聯大使館等に向つて発車している。
- (3) この営業所の隣りに、才三手工業協同組合（製靴）の出張修理所があり、工員二名が靴の修理にあたつてゐる。
- (4) 東向になつた、二坪位の箱式建物が二個所並んでいる。主に書籍、新聞、画像等が買われている。
- (5) 道路の角に人民映画劇場があつて、地下が入場券販売所とダンスホールになり、二階が映画室となつている。映画室の収客人員は五〇〇名余りと思はれ、料金は三トコロゴ、映画四トコロゴである。
- (6) ダンスは社交ダンスとして奨励され、土曜・日曜・祭日は行はれ、午後一時から十時頃迄で、二時間毎に切り換えられる。映画は土曜日、日曜、祭日はダンスの時間と同様で、その他の日は午後七時から開映される。殆んど一本建てで、一時間半から二時間位で映写が終り、切換えられる。映写されるものは殆んどソ連映画で、教化映画が多い。中には戦争ものとして、ソ連の革命当時のレーニン、スターリンの映画、十月革命映画、スフパートル革命家の映画、中共の解放戦争映画、朝鮮戦争映画等が映写されている。劇は行はれていない。
- (7) 公営理髪所。従業員十二、三名、すべて女子である。切符売場があつて、そこで前もつて理髪の代金を支払ひ、順番を待つて理髪が行われるようになつてゐる。幾部屋にも分れてゐるが、洗髪所もなければ、消毒器の設備もなく、理髪台も木製で不動のものである。
- (8) 国営レストランであつて、迎賓館に次いで大きいものである。
- (9) この建物は二階建の煉瓦造りである。階下は倉庫、従業員の仕度部屋、客の外套や帽子等の預り場所、便所等になつてゐる。階上がレストランになつてゐて、酒と食事が出る。お茶・紅茶・ミルク等の飲物は無い。従業員は主として女子で、調理人には華僑が多い。
- (10) 国営パン消費組合

このパン消費組合で販売されるのは主にパンであるが、菓子・飴・干あんず・干ブドウ・カンズメ等も売り出されている。毎日新しいパン

が、自動車で運ばれて、消化されて行く。何処の消費組合も値段段であるが、新しいので誰れもが購入すると言う状態にある。パンの種類も何処の消費組合も同じである。一疋、パン四一五トコロゴ魚型、パン三二二、三トコロゴ、丸パン二ヶ一トコロゴ、アンパン一のパン一トコロゴ等である。

(8) 手工業協同組合聯合会のクラブである。このクラブは収容人員三〇〇名程度のもので、建物は東西に長く出来ている。煉瓦造りであつて、舞台があり、映画、劇も出来るようになってゐる。各手工業協同組合、聯合会入等の会議、決算、予算報告、レクツ(社会教育)、劇、映画等に使用されている。私は第九アリテリ(手工業協同組合)にいたのでよくこゝに集合を命ぜられ、参加せしめられたものだった。このクラブには、組合員の教化を目的とした一つの演劇団がある。これは各手工業組合従業員の中から、歌、楽器、演劇の上手な組合員が集つまつて編成されている。毎週土曜、日曜、祭日に演劇が開催される。又会議報告会の終了後も演劇が行われる。この時は入場料は無料だが、土、日曜等に行われる演劇は、入場料として三トコロゴ徴収される。この入場料と聯合会の補助金で演劇団の経営が行われている。こゝに集る演劇団員は若い青年男女が主であつて、一つの社交場ともいえる。

(9) 野菜消費組合である。野菜、菓子、飴、ソーセイジ等迄売り従業員は華僑二人である。野菜は華商よりも幾分値段が安い、質が幾分落ちるようだ。

(10) 才九手工業協同組合であつて、鏡、玩具、木工、鍍金、鍍、鍛冶、オスノイコ(旋盤)、メツキ、鋳型(アルミ、鋼、真鍮等を熔解し之を型に流し込み製品を作る仕事)、時計修理(別な所にある)、浴場(同上)等の各班に分かれてゐる。私は、この鍍作り班の一工員として、中央移管迄勤務していたので、詳細は後述する。

(11) 皮膚、花柳病の子供だけの病院で、入院治療も出来るようになってゐる。
(12) 手工業協同組合聯合会直属の消費組合であつて、各アリテリ(手工業協同組合)で生産された製品が売

り出されている。
この消費組合から売出される商品は、殆ど国産品であるが、材料は主としてソ聯製である。商品はウランバートル市内各アリテリから提供されたもので、フェルト、フエルト靴、長靴、蒙古包の骨組、包の扉、バケツ、ストーブ、水桶、水タラヒ、シヨロ、錠、鏡、玩具、メツキした器物、メツキした指輪、煙草セツト、夏冬労働着、結襟りの上下、背広、ズボン、オーバー、シャツ、ズボン下、蒙古服、トランク、手提カバン、帽子、木箱等である。売子は男子で、カウンターは老婆であつた。

(13) 才九消費組合の衣料、鉄器、化粧品販売部である。従業員四、五名で既製衣類、綿布、毛織物、人絹、絹布等の必要な物をメートルで売つてゐる。この外に自動車、バケツ、洗面器、菜罐、その他も売つてゐる。これ等はすべてソ聯製で、国産品は販売されていない。

(14) 肉消費組合であつて、夏季は閉鎖される。
冬季間、羊肉、山羊肉、牛肉が売り出されてゐるがたまたま豚肉も売り出される事も有る。羊肉一疋骨付き八一十トコロゴ、山羊肉一疋三トコロゴ五トコロゴである。豚肉は一疋十二トコロゴで肉類の中で一番高い。その他野菜も売つてゐるが、葱、ニンニクに限られてゐる。従業員は一名で華僑。

(15) 才一アリテリの衣服修理洗濯部で、従業員二十余名。仕事に追われるらしく、好況を呈している。
(16) 手工業協同組合聯合会直属の子供用品販売消費組合である。子供の靴、衣服、帽子、玩具、毛糸の織物等で従業員は二名である。

(17) 才五消費組合の衣類綿布、毛織物、絹布、人絹類等の販売所であつて、其の他僅かの化粧品が陳列されている。従業員は女子で年輩の者が多い。二名の売子があり、その外に一名の小使がゐる。

(18) 才五消費組合で食糧、菓子、酒類、パン類、煙草等の各部に分かれてゐる。従業員は七、八名で、交替制らしい。この古い市場でも、消費組合は大きい方で、相当な客の出入りがある。その中で特に多いのは食糧品部である。白米一疋二、七トコロゴ、小米一疋一トコロゴ、一等白麵一疋一、一トコロゴ、二等麵一疋一トコロゴ、マカロニー、フフテンバター(乳児用の米)サクテンゴリラ(ツバ粉)、ボルスゴリラ(大麦粉)、砂糖、角砂糖等有る。何んと言つても大衆向きのものは、二等麵であつて、之に次ぐものは一等麵である。次に小米と言ふ処である。砂糖も一疋四トコロゴなので、売行きも良い。お茶は磚茶が主で大型一ヶ十トコロゴである。この外に粉茶一包(百グラム)十トコロゴ、紅茶のようなものが(四〇グラム)十五トコロゴである。菓子はシュウシヨ(油であげたドーナツのようなもの)、ペロシヨ(砂糖のついた饅頭のようなもの)、ピチエネー(ビスケットのようなもの)、その他飴類が最も多く売れる。一疋四一八トコロゴである。この外チャンカンス(干アンズ)一疋四一六トコロゴ、干ブドウ五一八トコロゴである。カンズメ類は果実類が多く、魚類、肉類のものは案外少ない。外蒙特産の山の灌木から採れる果実でつくつたジャムが有る。一ビン(六〇〇グラム入)が六トコロゴである。この消費組合の出入の階段には、よく物乞いの老人が坐つてゐるのを見受けた。

(19) 肉消費組合であつて、羊頭、山羊頭、牛頭、羊の腸内臓類が売られてゐる。その外肉カンピナートで出来る

化粧石鹼一コ、二トコロゴ、洗濯石鹼一コ、五トコロゴで売り出されている。

この石鹼の材料はすべて家畜の脂肪であるらしい。

(20) オ九アリテールの染色部であつて、以前は華僑個人のものであつた。このように買収されて、アリテールの下請け業をやつてゐる者が増えて来た。

今迄通つて来た道路中にも、以前は華僑の靴修理所であつたもので、現在はオ三アリテールの下請け修理所と變つたのが二、三あつた。

(21) オ九アリテールの理髪所である。従業員は八、九名居つて、みな女子である。内部は前にのべた通り設備が悪く、非衛生的である。従業員の働きに依つて俸給が支給されているので、早く調整して数多くすれば、それだけ俸給が多く貰えるようになってゐる。

(22) オ九アリテールの一部宿舎である。私が医師バルトンと別れ、移つて来たのがこの宿舎であつた。今もあの

当時の面影が目の前に浮かんて来る。乞食のような姿で寝具を運んでいつた当時自分が日本の故郷に帰れるとは夢にも思つていなかった。

(23) この宿舎はオ五アリテール所屬のものであつたが、アリテールの機構改革で一九五三年オ九アリテールに編入された。同時に宿舎も移管された。私も最初はオ五アリテールの鉄工班にいたがこの時やはりオ九アリテールに編入された。この建物は木造建ての二階と平屋の二棟になつてゐた。シベリヤ出兵後、日本の女が二、三人入り込み、夜の女として働いていたが、その後何処かへ行つてしまつたと言ふ事であつた。その後、中国の夜の女が来たが、革命と共になくなり、現在に至つていふ事である。相当古い建物なので、強風に会えば少し傾斜するのを感じる程である。このような木造建てでも二階と言ふのはこの家より外にないので相当有名な建物となつてゐる。昔はこの建物が民家の中で一番大きかつたと言ふ事であるが、屋根は泥屋根で現在は雨漏りがする。詳細は後述する。

(24) オ九アリテール入浴班である。

以前は華僑の所有であつたが、経営不能となつたので、之をオ九アリテールが買収して、公営浴場として開放した。初めは非常に調子が良かったようだが、採算がとれず閉鎖するに至つた。その後売りに出たが買ひ手が付かず、僅かにアリテール従業員宿舎として利用してゐる。設備の方はその儘にして他に売却する方針は

(25) しい。これ等もすべて泥屋根の支那式房子である。入浴料は一人四、五トコロゴである。

(26) 国営食堂で、食堂を兼ねたバアである。この建物は洋式の平屋で、内部には机が五、六個並べてあり、立飲み台と酒陳列棚がある。こゝは蒙古人の客が多く、女も入つて酒を飲んでいるのを見受ける。

(27) 穀類配給所

家畜の飼料となるオピヤース(燕麦)、小麦、豌豆等が並べてあり、その側に野菜と乳製品も置いてある。乳製品はセパレタにかけた脱脂乳から造つたホロート(水分を取つて乾燥したもの)、ウルム(牛乳をトロ火にかけてと上部に脂肪と炭白質が出来る)等が置いてある。

(28) オ六アリテールの衣類等の既製品販売所である。

労働服、シャツ、ズボン下、敷布、背広、支那布圍、シュウタン、外套、寝台用敷布圍、鏡、錠等である。この鏡、錠はオ九アリテールから委託されたものである。従業員は一名で、ごく小さい売場で間口一間奥行二間位の支那房子である。

(29) 野菜配給所で、臨時配給所的な小規模のものである。

(30) 古物委託販売組合である。この組合は、丁度日本の質屋のような組合であつて、一般住民に不必要な家財道具、衣服等を、手数料を取つて委託販売してやるのである。案外掘出物もあるので、出入の多い事は外の消費組合の比でない。

短波のラジオ一台六球式のものが四〇〇一六〇〇トコロゴである。このラジオを試験的にかけてゐるのを聞くと、相当遠い処からも入つて来る。中共は勿論、朝鮮、台湾、沖繩、香港、等はよく聞えた。モスコイは勿論であるがこれは中継されているのかも知れない。後になつて、私の友人となつた内蒙古人が一台五〇〇トコロゴ出して購入した。その時初めて日本の放送を聞く事が出来た。電波が波状的に来るのとはつきりした事が聞き取れなかつたが、しかし懐かしい思ひ出をたどりながら望郷の念にかられ、ラジオにしがみついて、ダイヤルを廻し、調節し乍ら聞こうとあせつたのだつた。これは他人のいない時だけ極く内密に聞いたのだが、今もその時の緊張した気持が思い出される。私はこの消費組合から、ある時毛皮付きの蒙古服を一着買ひ求めた事が有つた。値段は案外安く三〇〇トコロゴで一カ月の俸給に値した。毛皮はホロゴン(生れたばかりの子羊の毛皮)で作つたものであるために、普通の羊皮で作つたのより高かつた。新しいのになると六〇〇一、〇〇〇トコロゴ以上もする。

その外、時計にしても同様な事が言えた。懐中時計が、デパートでは一四〇トコロの処、ここでは一二〇トコロゴで買える事だ。しかし品質は保証出来ないようだった。

30 中央銀行の出張所で、消費組合等の売上金の収納、一般人の預入貯金、支払等が主である。これを利用する一般人は極く少いようで、何時見てもがらんとしていた。

実際蒙古人は貯蓄と言ふ事を利用しない。彼等は有れば皆んな使ってしまうというのが習慣であるからである。しかし華僑はこれを利用して様子だが、それも一部に過ぎないようだった。ここには女子事務員一名、男子事務員一名計二名がいる。この建物は屋根の底い支那式房子を利用しているので、一寸目に入らないで通り過ぎてしまう者が多い。

31 肉消費組合

この組合は羊頭、山羊頭、牛頭、山羊肉、羊肉の二等肉等で、一般に中以下の肉のある処である。たまたま家畜脂肪油が一疋十トコロゴで売り出されている事がある。従業員は蒙古人一名で、冬でもストーブを用ひない処に肉消費組合の特色がある。それだから肉でも頭でもかちかちに凍つたもので、これをマサカリでたき割つて売っている処は、一寸日本では見られない風景だ。たまたま閉鎖する事が有る。

32 オニ消費組合(デパート)

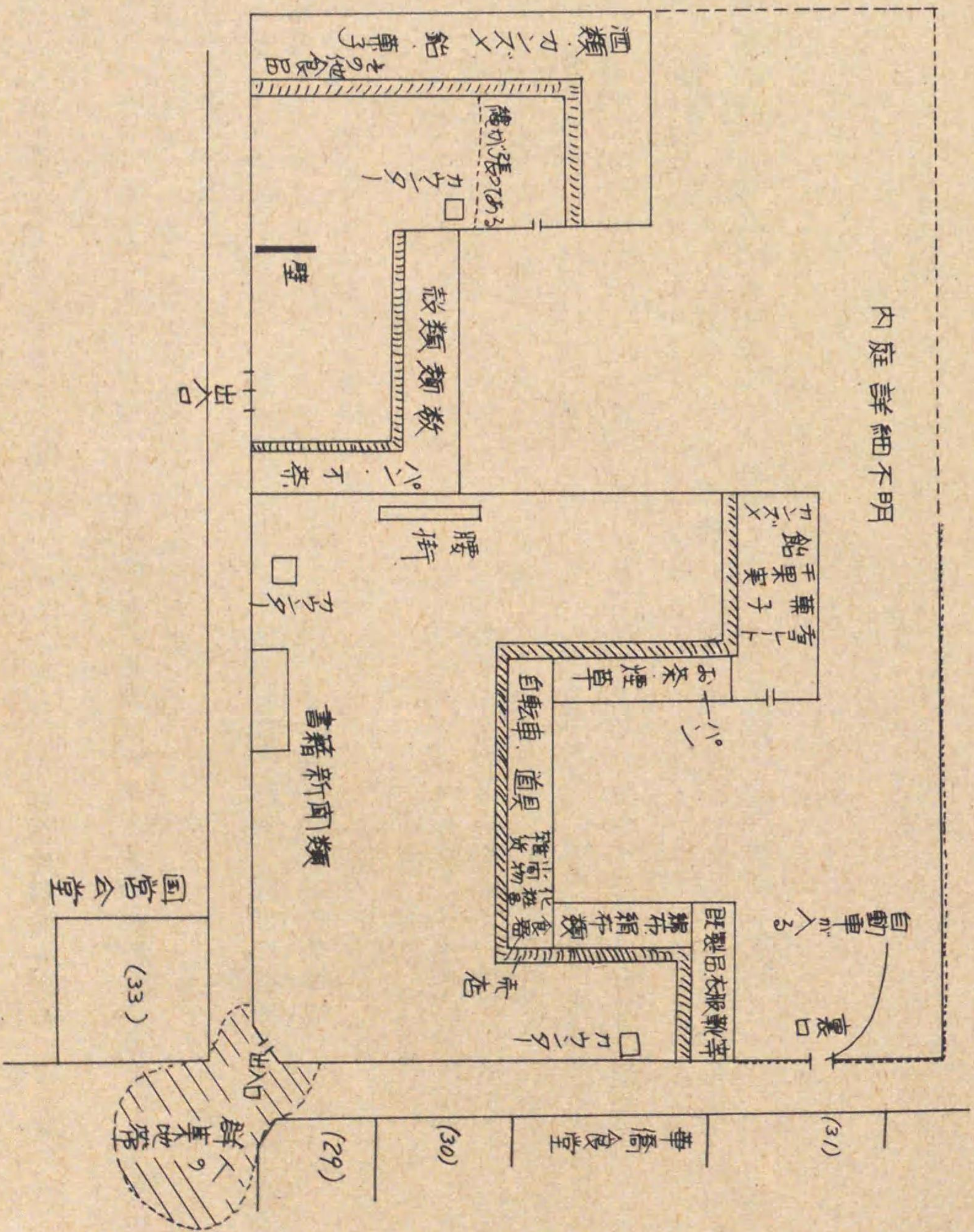
ウランバートル市内でも、中央デパートに次ぐ大きな消費組合と言える。

この建物は煉瓦造りで洋風である。窓も相当大きく採光がよく出来ている。天井に電気がつくようになっている。暖房装置がない処を見ると、火気に付いては充分警戒しているようだ。中央デパートも暖房装置がなかった。従業員は十四、五名で相当な年輩者のみである。ここが大体古い市場の中心地とも言えよう。往來する人々も必ずこの組合に一度入つてから分散して行く。出入口の附近は群衆が集まつてごつた返している。華僑がいつもここで一かたまりになつて話し合つているのも一つの情景である。

33 国营食堂

蒙古人の出入が多く、昼夜を分かつた飲んだくれが多い。夜は女子の奪い合いも行はれる。それだけに喧争が激しい。

34 オニアリの食堂である。従業員は女子であるが、調理人は華僑である。以前は華僑の個人経営の食堂



であつたが、オニアリテリに買収されたものである。

(35) 野菜消費組合

この組合は割合充実したもので、従業員も二名を数える。それ等に華僑が当つている。

(36) 肉消費組合

この組合は羊肉、牛肉が主で、品質も割合に適當である。たまたま豚肉が売り出される。この外ソーセイジ、

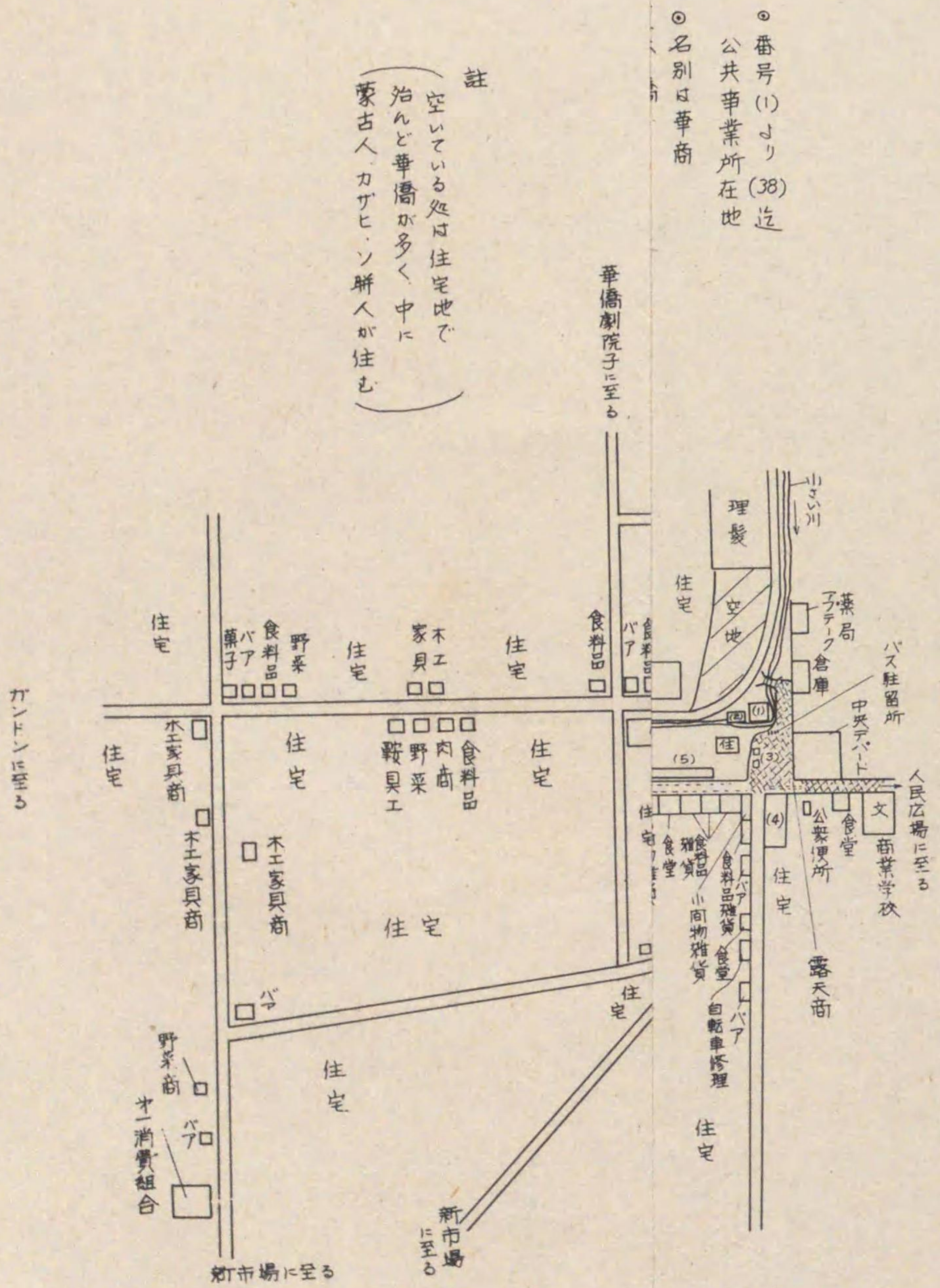
(37) 食糧雜貨下請販売所

一名の蒙古人が従事している。小麦粉、白米、小米、砂糖、菓子、飴、石鹼、靴下、塩、化粧品の一部、カ
ンズメ類の一部、干(ホシ)アンズ、干(ホシ)キブドウ、その他小間物類を売つている。

(38) オ九消費組合

この組合が古い市場のしんがりとなつていたので、この辺になると客足も大分少くなつて来る。従業員は
四、五名を数える。殆んど食品類が多い。こゝの売子として、中央監獄で一緒に服役していた蒙古人がいた。
以上公営事業の概要を記述して来たが、この通りがウランバートル市内でも最も賑やかなところと言える。
それ次に、経済機構の諸経営機関が密集している。尚以上の外に、道路の側に箱式売店、修理所等がある。こ
れ等は主に華僑の個人経営であつたが、段々政府の弾圧政策によつて買収され又は閉鎖するようになって来て
いる。

この古い市場も建設したもので、その根強さには、感心させられる。この古い市場と対照して、新しい市
場が出来た。それは何時の事かはつきり分明しないが、最近の事であるようだ。



シンザハ（新市場）

新しい市場は、鉄道と基幹道路の中間に当り、ウランバートル駅から一軒位の東北に位している。市場の直ぐ前は家畜、材木市場で、この広場の前が復線の鉄道になつてゐる、又商務省貿易局の倉庫に引込線が有つて、貨車の入れ換えが行はれてゐるのが見受けられる。

特によく見受けられるのは、材木を貨車から下している情景と、石油タンクの貨車が停止してゐる事である。

この市場と古い市場、カンピナート、食料品市場とを結ぶ間をマーチヨ（馬車）やタクシーが激しく通つてゐる、往来する人々も列をなして右往左往して賑わつてゐる、老若男女を分たず、いかにも忙しそうに、いかにも嬉しそうに、大騒ぎして行ききしてゐるさまは、丁度内蒙古のラマ庙会で見受ける騒々しい賑わいと同様である。

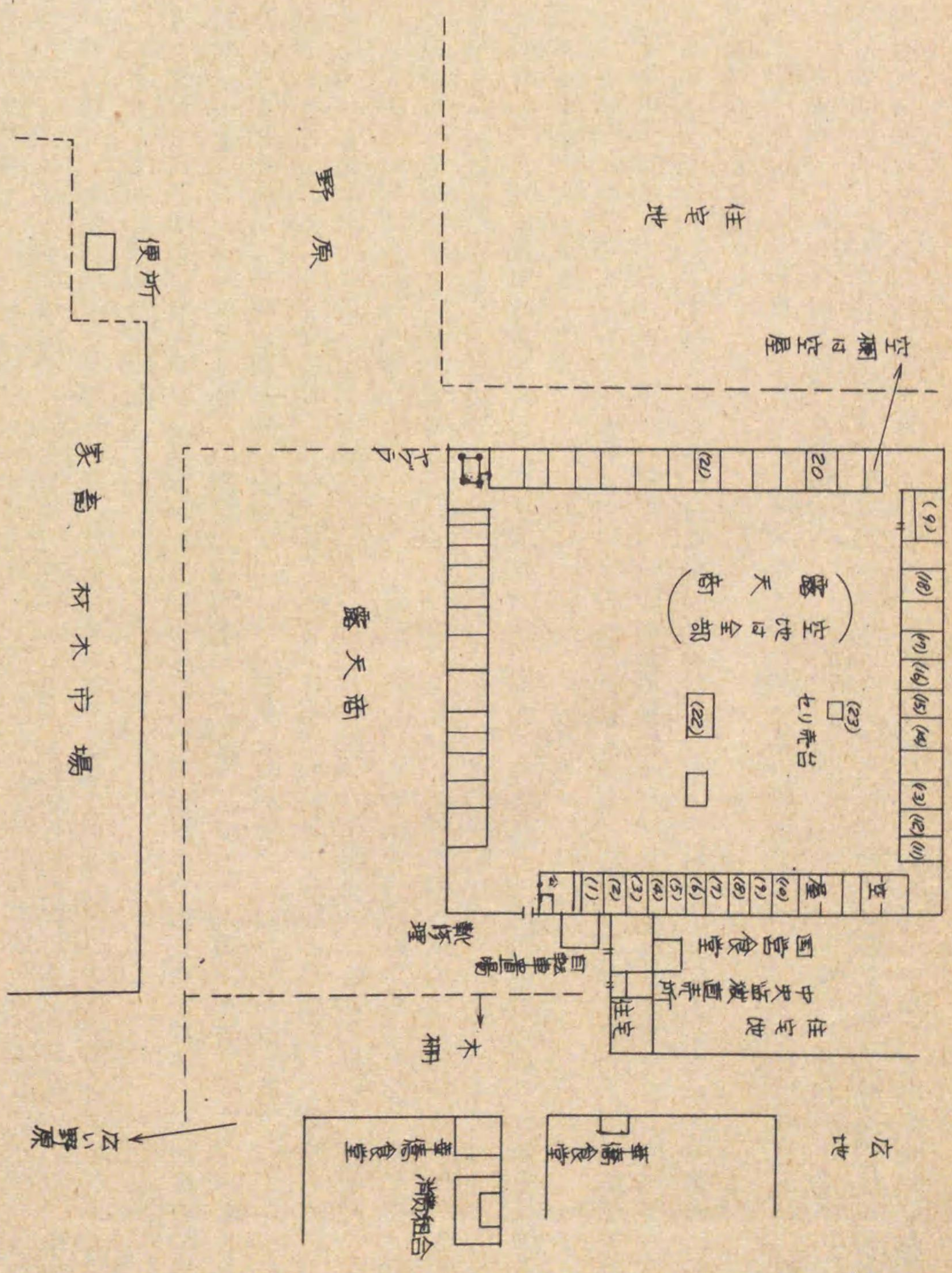
新しい市場の外庭は黒山のような群衆である、入口がせまいので、市場に入る事は仲々むづかしく、人の後にくつついて除々に押されて這入るより外ない位である、この人混みの中をかき分けながら、衣類、靴、帽子、時計、その他各種各様のものを持ち歩き、売り買いしてゐるのである、私はこれ等の群衆にもまれながら市場内を一巡することができた。場内の売物は殆んどが古物で、新しい製品はほんの僅かである。

ここにはあらゆる階級が集まつてくる、労働者は勿論、軍人、宮公吏、鉄道員、事務員、各種の技術者、牧畜業者、中には囚人迄が混つてゐる事も有る。

軍服や警察官の制服を着て売買行為を行つてゐるのも見受けられる、日曜、祭日は特に人出が多く、ソ聯人もこの日はこゝに集まつて来る者が多い、特にソ聯軍人の姿を多く見受けける。この市場で固定売場を持つてゐるのは、華僑商人とアリテールリ関係の直売所だけである、その他の空地は、蒙古人、華僑、ソ聯人、その他の復合民族から構成された露天商ばかりある。

これ等の露天商は、純粹の商人ではなく、一般住民が生活の為に露天にたつて、自分の家財道具、又は他人から委託された品物を売つてゐるのである、その中には、生活困窮の為安く売つても早く金に換えようとする関係で、よく掘り出し物がある、これを買つて又売りする者もある、このように市場内で品物を売買する者は市場事務所から登録許可書を貰い受ける、この許可書を貰うのに五トコロの手数料を納めねばならない、若しこの登録許可書がないと、没収罰金刑に処せられる。

しかし、この様にしても、素早く密売して、手数料も取られずに利益をむさぼる者が多い、このような状態なので



その騒然たる有様は一寸想像に余り有るものがある。

この露天で売買しているのは、手に衣類、時計、帽子、靴、小道具を持つて売り歩いている者、一定個所に地面に
じかに品物を並べて売っている者、蒙古包を建て、売っている者、草箒木を並べて売っている華僑、家財道具、衣類
外套、ジュータン、金具類、その他あらゆる古物を並べているものなど、一本の針、釘、古紙何んでも売られている、
特にソ聯人は、帰国しようとしている為か、酒を購入しようとする為か、寝台、ミシン、飾物、靴、クリスマス用品、
その他家財道具何でも自動車で運んで来て売り飛ばしている。

この市場の状態を一言で言いあらわせば、中国にある小盗児市場と寸分も変りないと言える。場内の個定商を順を
追つて、その概略を述べて見よう。

⊙ は、市場の事務所で、一つの窓口で登録許可書と納入金の取り引きが行はれ、中には四、五名の係員がいる。

(1)、(2)、(3) は華商で、毎日かさず商売している、この品物は靴、石鹼、帽子、組ヤズリ、針、ナイフ、金具類
の小さなものから、小間物、その他雑貨類で、殆んど新しい製品である。(4)、(5)、(6)、(7)、(8)も華商で、皮革、靴類
フェルト、靴、鞍、銀細工品、衣類等売っている、その他小間物も少しばかり置いてある。(9)、(10)は皮靴を主として
少しばかりの小間物が並らべてある、これ等も華商である、これ等の華商達はお互に横の連絡をよく取り、華僑の生
産品を委託販売しているし、又蒙古人等と闇取引を行つて消費組合からの配給数量の少ない品物をうまく手に入れて
売っている。(11)、(12)、(13)も皮靴が主で、錠、金具類が並べてある。錠はアリテリ、中央監獄、其の他鉄工場の労務
者達から密買したもので、この店舗では、堂々と五割増し位の高値で売られている、私は在監中も錠を作つて 外労
務囚又は門衛、守衛、監視等と結託して、委託販売を頼んだ事が何回も有つた、鉄工場の全員が同様な方法を取つて
いた、そして監獄での最低生活水準を、これに依つて補つて命をつないで来たのだ、それが今迄は何処に売られてい
たものか皆目分らなかつたが、今度初めてその正態をつかむ事が出来たのだつた。

アリテリアリテリの錠作り班の蒙古人達が私の在班中もこの市場に持ち運んで、華僑商に密売していたのだと知つた時は、
成る程裏には裏が有るものだと感心させられた。このようにしなければ生活がなり立つて行かぬとすれば、社会主義
国家でも、計画経済は仲々円滑に行かぬ筈だと思つた。

(14)、(15)、(16)は蒙古婦人の店舗である。多分婦人の影には華僑がついていよう、しかし品物は、小間物、雑貨等
で、小規模のものである。(17)は公共団体の中古品で、白綿布、青綿布、赤綿布、腰掛、机、その他雑多な器具が置か

れていた、市価より安く売るので買手も相当有るように見うけられた、(18)はラマ僧(僧侶)の生活消費組合である。これは外蒙で、ラマ僧の生計を補う特殊な消費組合であつて、品物はラマ僧達の生産品、中古になつた衣類等である、生産品と言つても、僅かに蒙古服、靴、帽子などに過ぎない、(19)は第六アリテールの直売所である、第六アリテール下、帽子、布団、布団カバー、ジュウタン等である。(20)、(21)もアリテールの直売所で衣類が多い、その中で一番人気を呼んでいるのは、フェルトと箱である。(22)は第二アリテール直売所である、この組合は木製品を製作する協同組合であつて、その製品の直売所である、品物は蒙古包の骨組、同上部分品、机、腰掛、箱、写真枠、鞍、木製寝台、子供用寝台、荷車の部分品、その他である。(23)は競売所である、こゝには二つの台があつて、台の上に人が立つて競売を行う、そのやり方は、大体日本と似ている、高い値のものに売り渡され、直ちに現金払いとなつていく、こゝの売出し物は家財道具、衣類、生活必需品、貴重品等に至つていく、ここでは、法に違反した者の財産が没収されて、国家の物として競売に附されているのである。

私が第九アリテールの宿舎に在る当時、同宿舎内にセンドウと言う蒙古人が居つた、この男が窃盗罪で逮捕され、未決監に收容された時、彼の宿舎内にあつた主な家財道具は(炊事道具、食糧除く)、封印されて手をつけることが出来なくなり、彼の判決後、妻女の懇請に依つて、同女の所有物だけは返されたが、センドウの所有物は全部没収されてしまつた。

このような品物が競売されるのであるから、仲々人の集りが多く、いつも黒山のような群衆の中で、またたく間に売りさばかれて行く、買つた者も直ぐ自分の物とせず、持ち歩いて又売りし、幾分の利益を得るのである。

この競売は大體日曜と祭日に行はれる。又その日時、場所、品名、等が各所に告示されるのである。この外の空地という空地には、露天商が無秩序にならび足の踏時もない程である。これ等の露天商は、前にのべた市場事務所から、一日間の許可証を貰つてゐるのである、買う者もこれで盗品でないと言う証拠になるので、安心して買うと言うわけである。

若し盗品を密売すれば、直ぐ足がつくようになってゐるが、實際は誠にルーズであると言へる、又ある者は、消費組合から配給された配給品を買ひ占め、それをこの市場で闇売りしてゐる、それが摘発された場合も、没収と罰金刑に処せられる、特に日曜、祭日にはこのような密売行為が横行する、たまたま発見されて没収と罰金刑に処せられる

者もあつた。

例えば、私がいた第九アリテールの労務者が、日曜日に毛織物と人絹布を持つて密売してゐる所を発見され、直ちに品物は没収されてしまつた上に居住証明書迄没収されてしまつた、その後警察処から呼び出しがあつて出頭した処罰金を納めなければ居住証明書を渡さぬとの事で、遂に罰金を納め居住証明書を貰つて帰つて来たのだつた。

私はこの市場に来て何を求めようとしていたかも知れてゐた。もう一度、買ひ求めようとするヤスリとハンマーを探し初めた、今度はひろげられた露天を片端しから詳細に調らべて見た、処が途中で、平ヤスリを二本持つて歩いている男にぶつかつた、そのヤスリを売ると尋ねた処、かの男は欲しければ譲つてやつても宜いと言ふのだ、一本いくらかと尋ねると十五トコロゴと言ふ、私は高いと思つたが、この際入毛しないと仕事が出来ない、早速三十トコロゴを出して二本買う事が出来た、このヤスリが消費組合では一本八トコロゴ位である、丁度倍額の値段となる。

このように必要な品物は早く売れ切れてしまふ、それが蒙古人の手に渡り、闇相場となつて一本二本と小出しに売りに出されるのだ、このように蒙古人は闇取引を行つて生計の足しとしてゐる、これを専門にやつてゐるブローカーも沢山いる。

このように消費組合では品切れであつても、この市場では求めようとする品物が、必ず何処かに潜在してゐるのである。

私はハンマーを見つけるために又歩き初めた、或る露店先で、四、五枚の額縁に絵を入れて売つてゐるのにぶつかつた、その中に、何うも見えぬ事のあるやうな地図らしいものが見える、私は立ち止つてじつと見てゐると、それが逆さまに入れてある日本の地図である事がわかつた。私は早速その絵だけ欲しいが売らないかと尋ねて見た、この売場の蒙古人は額縁共なら十五トコロゴだ、絵だけだつたら三トコロゴだと言ふのだ、私は何にげなく、「これは奇麗な絵だから、絵だけ欲しい、これを入れる額縁は丁度俺の処に有るから額縁はいらない、三トコロゴ懐から取り出して与え、引き換えに懐かしい日本の地図を手にする事が出来た。

私はこの小さな日本の地図が祖国の姿に出会つた如く、懐かしい故郷の山河に出会つた如く、日本の友達に出会つた如く、様々な思い出を胸いっぱいこみあげて来るのを覚えるのだつた。

私はこの小さな日本の地図を宿舎に持ち帰り、手帳の間にはさんで置いて、毎日眺めたが、それが故郷を離れて独り身で、而も自由にならない自分の、望郷の念をどれほど燃え上がらせた事であらう、よく見ると、東京、横浜、

大阪、京都、名古屋、仙台、門司、長崎、青森、等大都市だけは書き込まれている。鉄道は東海道、山陽、東北、山陰、北陸、等の本線だけで、大きければなものである、利根川、信濃川、木曾川、北上川、琵琶湖、等も名前なしに記入されている。

これ等が自分の故郷の如く、目に見えるように浮び上がつて来るのだつた。もう日本には帰れないとあきらめ乍もそれでも一度だけでいい、死ぬ前に日本の大地に踏み入れ、そこで死ねたら本望だと望郷の念に打たれるのだつた。この小さな日本の地図が何処を戸迷つて私の手に入つたものかわからないが、よくも幸運に恵まれたものだと思うのだつた、大体外装では、地図というものは絶対と言つてよい程見受けられない、外蒙古の一般教育地図にしろ、社会教育地図にしろ見た事がない、これも言わざる、見ざる、聞かざる式に、黒いカーテンで閉ざしている共産圏であつて見れば、致し方ない独裁政治の一端でもある。

私はウランバートル市街図を手に入れようと常に心掛けていた、しかしそれは夢であつた、只自分で見取図を作つては頭に書き込み、直ぐ焼き捨てるより外になかつた、それだけにこの小さな日本の地図が、日本人の私の手に入つたことは全く不思議な事である、蒙古人はこれを絵と思つて、額縁に逆さに入れていたのが助かる原因だつた、又外蒙古人はこれが日本という国であるとは、露程も知らずにいる処を見ると、彼等の文化教育程度がどの辺に有るかが想像出来ると思う。

新市場の前に広場がある、その広場は家畜市場と木材市場とになつてゐる、私は何んの関係もないのだつたが一通り見て歩いた。羊の群が彼方此方に四、五頭或は十頭余り散在しており、牛も一頭ずつ数個所に、ラクダも五、六頭間もなく売られるのを知らずに立ちすくんでいる、この中で持ち主と買主とが交渉している、皆んな手を振り合つている処を見ると中国人の様式を取つてゐるようだ。

羊の大きなのは、一二〇トコロゴから二〇〇トコロゴ、小さいのは八〇トコロゴ位である、牛は一頭四〇〇トコロゴから六〇〇トコロゴ、ラクダは三〇〇トコロゴから四五〇トコロゴである。

ラクダは案外安い、これは肉の質が落ちるのと、一般高級者達はこの肉を使用しないという処に原因が有るようだ。木材市場の方は、殆んどラクダの背に四、五本太い三米位の長さの木材を振り分けにして載せてゐる。

このようなラクダが十二、三頭位ずつ連なつて、数組買手のつくのを待つてゐる、買手がつくと、選ばれた木材はラクダと共に群から離されて持ち主と買主と連れだつて出て行く。

これ等のラクダ一頭分の木材が五〇トコロゴから八〇トコロゴで取引される。木材の種類は殆んど落葉松である。

ウランバートル市民への石炭配給は殆んどないと言つてよい、有るものは特殊権限のある宮公吏だけであつて、一部部の配給が工場関係の労働者に与えられる事もある、国营工場関係は優先的で、協同組合（アリテリ）関係はほんの一部配給となる、このようにナハラ炭鉱からの石炭だけでは、民需まで満たされない。火力発電所（サヒルガンカンピナート）と官庁関係の需要をみたすだけで、一般住民には行きわたらないのである。又鉄道は、ソ聯から輸送されて来る石炭に依つて賄われている、この配給は非常に豊富であるから半分は闇に流されて行く。

これ等は配給の倍の値段で取引される。一匹五〇—六〇トコロゴが一二〇—一三〇トコロゴになるのだから、一般住民が生活に追はれるのも無理ない事だろう。このように冬期間に於いて、一般住民は燃料と食肉に多大の金を使うこの必需品の販売は、十一月頃から初まり、四月頃迄継続される、これを補う為、家財道具、衣類が市場に持ち出され、一時凌ぎに売買が行はれる、それだけにこの新市場が旺盛を極めるのだ。

これに関連して、華僑は現金を握つてゐる。それだけ強味があるようだ、そのために生活にゆとりが有る、そこをねらつて蒙古婦人が五十才を越えた華僑の内妻として同棲し、混血児の繁殖に拍車をかけてゐる。

又私はよく、蒙古婦人が鉄道で輸送されて来た木材を却下した処で、木材に群がり集まつて皮をはいでゐるのを見受けた。又映画場、劇場、酒場、消費組合等の盛り場に、男を漁り歩く婦人の姿も見学した。このように生活にからんだ姿を見る時、それは外蒙の縮図を見るような気がした。

(15) パスポート発給

パスポート・ヘステンガザル（居住証明書発給所）に何回も通つたが、仲々発給に至らない、根気よく十日間以上通つたであらう。漸く発給されたのは十二月の中旬を過ぎていた。

発給された当日も、今日も又御断りかと断念して窓口で顔を出した処、何時も顔見知りの男が、今日に限つて笑みをたゞえながら、居住証明書発給通知を出して、現金収納係りに六〇トコロゴ納入の上、領収書を持参して来いと言ふのだつた、これは確かに許可が下りたなと思ひ乍ら、通知書を持つて収納係の処に行き、六〇トコロゴを添え提出した処、直ぐ領収書を呉れた、この領収書とパスポートを引換えに下附されたのだつた、下附された当日から一週間以内に、カシヤ（戸数四、五戸を囲した行政最下単位）のデブテル（居住台帳）に居住登録をせねばならぬ、若し遅延した場合は、罰金刑に処せられるから、早く手続きを取るように、又この居住証明書は破損しないよう、常時身

体につけており、半年毎に出頭して書き換えせねばならぬ。居住証明書手帳に注意事項が書いてあるから、よく読んで置くようにと注意を与えてくれた。

このパスポートは、丁度豆手帳より幾分大きい位で、表紙と裏紙は厚いボール紙に布を張つたもので、その中に八枚の紙が有つて記事事項が書き込めるようになっていた。

記事用紙の第一頁には、注意事項が書かれ、パスポートの保管、紛失時の届出手続き、書き換えの手続き等が新文字で印刷されていた。二頁、三頁には、私のウランバートル市に居住する事を許可証明する旨が書かれていた。すべて新文字を使い横書きである。

先ず居住証明書としてあり、次が原籍、現住地、民族名、氏名、年令である。

その下に居住を許可するとあり、更にその下に年月日と発給官庁、所長氏名印が捺印されていた。

左上に私の半身像の写真が貼られ、割印がしてある。

四、五、六、七頁はカシヤの居住登録欄で、転住、居住の際、登録して貰う。八、九、十、十一頁には半年毎に居住の書き換えをして貰う。前期半年は手数料一、五トコロゴ納入する。一年目には写真二葉と三〇トコロゴ納入して書き換えて貰う。これは毎年行われるが、内国系は少しちがう。パスポート発給の際一四トコロゴ納入すれば、何年でも継続有効である。只一年毎に書き換えの際、僅か一トコロゴ納入するだけで済む。内国系のパスポートは一枚の厚い紙で、両面に証明、兵役、転住、職業等が書き込まれるようになっていた。十二、十三、十四、十五頁は職業欄になつていて、就職・転職の場合届出て登録して貰うことになつていて、この外国系パスポートは、外国人として取扱われている者に対して発給されているもので、華僑を初め、ソ連人・朝鮮人・内蒙人、其の他各個人はすべてこれをもらうのだ。

(16) カシヤのデブテル(住民登録簿)

カシヤのデブテル住民登録簿に、居住・転住を登録して貰う事は非常に煩わしく、日時を浪費するので誰れしも放任してしまい、後で罰金刑に処せられて吐息をつく者が多い。

私は、居住証明書を下附されたのは良いが、このカシヤのデブテルに初めて居住登録せねばならぬ。まだ私は転住するのではないから、直接監獄から居住した場所に居住登録すれば良かった。前からいる者がする場合、必ず居住届けと一緒にないので、誰れしもがこの煩わしさを避ける為に転住を喜ばない。

私は早速同居者バルトンに頼んで、彼のカシヤのデブテルを持つて来るように依頼した。

彼の居住地は、実際は、第十一区の第九ホリン中央監獄職員宿舎のカシヤに有つた。それであるから、彼に頼んで持つて来て貰ふ事にしたのだ。処がこのカシヤのデブテルは、中央監獄職員が転住して行つたので、その人が持つて行つて保管者に返さしてない。それで私とバルトン二人は夜遅く迄かゝつてその蒙古人の家を訪ねて見た。処が又貸してそこにはない。仕方がないので貸した家の有りかを尋ねて行つたが、住所がわからない。只勤め先だけは、車輛免許状登録所だとわかり、某中佐だとの事だつた。

次の日バルトンは勤めに行くので、私一人で車輛登録所に出かけて行つた。

警察処の西側に大きな門が有り、その側に門衛が有る。私は守衛に来意を告げ、某中佐のいる場所を教わつた。某中佐のいる場所は奥まつた一棟の一番北側にあつて、二人でいるようだつた。

守衛が、私を少しも怪しまずに通してくれたばかりでなく、某中佐のいる場所迄教えてくれた。私は日本人として見破れない程、服装も蒙古服であり、言葉も華僑のように訛りも少ないので、蒙古人と間違えたのかも知れない。又某中佐という偉い人を尋ねたので、守衛も少しも怪しまずに許してくれたのかも知れない。

私は部屋の入口で相当時間待つた。その間人通りははげしかつた。一般人で免許状の下附願いか、登録に来た者等が入れ代りたち代りしている。私は退屈で仕方がないから廊下を行つたり来たりして暇をつぶした。通りかゝる幹部に、某中佐は何時頃来るかと尋ねて見た。彼等は同様に直ぐ来るだろうと返事をして、忙しそうに自分の部屋に入つて行くのだつた。十一頃になつて背の高い中佐がノソリ、ノソリとやつて来た。私は一目見てこれだなと感じた。私も続いて部屋に入り、彼の着席を待つた。其処へ二三人の幹部がやつて来て、彼の着席と同時に仕事の事で話し合つていく。私はその終るのを待つた。漸く終る所を見計らつて来意を告げ、カシヤのデブテルが有つたら私に渡してくれないかと請求すると、「そうだ、返そうと思つていた処だ。今日中に保管者に届けるから、暫く待つて貰い度い」との事だつた。私は、「お忙しいようだつたら私がお宅へ行つて持つて来ても宜しいが」と言ふと、彼は、「いやそれはいかん。俺から直接届けるようにする。若し間違ひでも起きると大変だからなあ。一と言ふのだつた。

「私も急ぐのだから早く届けて下さい」と言つて別れた。

その夕方、私は中央監獄職員宿舎のカシヤのデブテル保管者を訪ねた。この保管者は中央監獄の経理部長の中尉である。私は良く顔見知りであつた。彼の宿舎はまん中に有る蒙古包の大きいのであつた。

この中央監獄宿舍は、北側と西側に平屋の二棟があつて板壁で囲まれている。中庭に蒙古包が四、五個置いてあり、相当多勢の人が住んでいるようだ。

ある者は材木を小さく切つていたし、或る者は庭で遊んでいた。

私は経理部長の蒙古包にノックして入ると、中に婦人が一人いた。経理部長は寝そべつていた。私が挨拶すると経理部長もヤオラ起き上り、私の顔を見るなり、「オ、日本人が来た。良く来た。何んの用件かね。」

「私は今バルトンさんと一語に住んでいるんです。それでカシヤのデブテルを御借りして居住登録をしたいんです。今日車輛免許状発給登録所に勤めている某中佐を訪ね、カシヤのデブテルを返して下さいと請求した処、今日中に自分で届けると言つていました。それでも届けてありませんか」と存じ参上したのです。」

「そうかね。まだ届いていないよ。某中佐も持つて行つたきり一月も返さない処を見ると、ルーズな人間だなあ。これから借す時は絶対に約束を取つて借すんだなあ。もしお前も借りたら次の日返すように心掛けてくれよ。」

「それは大丈夫ですよ。登録すれば直ぐお返しします。二日とは借り受けませんよ。」

「どうか、酒を飲まんか。俺は今一寸飲んだので横になつていた処だ。」

「いや、私は酒は殆んど飲まないんです。明日御伺いしますが宜敷しく御願ひします。」

私はそこを出て宿舎に帰る途中、なんと煩わしい登録であろう、二日かかつてもまだ台帳も手に入らない。これが自分の国であつたら、幹部連中をやつつけてやるのに、民族がちがうのでそれも出来ない。心の中にじつと我慢せねばならぬ身のやるせなさを、必みじみと味うのだつた。

次の日、午前と午後二回、経理部長宅を訪ねたが、まだ届いていない。全くあきれてしまうより外ない。

夜遅くバルトンが帰つて来た。私はカシヤのデブテルの事について話した処、明日は俺が行つて持つて来てやるよ。若し何んだつたら車輛登録所に行つて某中佐を訪ね、そこから持つて来るから安心していろよ。」となだめてくれた。次の日、私はそれでも思つて経理部長の宅を訪ねると、「今しがた持つて来た処だ。全くあきれてしまいました。うんと文句を言つてやりましたよ。」と経理部長の妻君が言うのだつた。私にもこんな事のないように、早く返すようにと言ひ乍ら、カシヤのデブテルを渡してくれた。

このカシヤのデブテルは相当大きい。四十糎に三十糎位の大ききで、表紙は分厚いボール紙で出来ていて、「第十一区第九ホリン第十カシヤのデブテル」と記してある。

表紙の裏には、保管者の官職名、民族、年令、氏名と写真が一枚貼つてあり、パスポートヘステンガザルの捺印がしてある。

中の用紙はすべて登録用紙になつていて、居住転住者の氏名、年令、男女別、民族別、勤務先、職業、先住所、等に分れており、新文字で書くようになっていた。

このデブテルに登録した者が、他に転住する場合は、先住所のデブテルと転住先のデブテル二冊必要となる。転住した者の処は消印が捺印されてあつて、捺印のない者はそのカシヤに存住している者とみなされる。

約五十枚位の用紙が有つて、その中三分の一位しか使用されていなかった。

この台帳に新文字で記入事項を書き込み、明日ヘステン・カザルに届出れば、万事完了と言ふ事になると思ふと、何んとなく安堵の吐息が出るのだつた。

処が翌日出勤前八時半頃出かけて見ると、何んと順番の札がないと登録が出来ないという事が分り、慌て、経理部長の宅に起き、その理由を述べ一日延ばして貰う事にした。

この順番の札を貰うには、午前四時頃から、ヘステン・ガザルの外庭で待たねばならぬ事が分り、全くあきれてしまった。

翌朝四時前に起床し、真暗な近道を通つたが、犬が吠えながら近寄つて来るには、ほとほと困却した。道がデコボコで、氷つている、その上に、暗いと来ている。何回も足を滑らしたり、つまづいたりして漸くヘステン・ガザルに着いて見ると、もう先客が十五、六名来て二列に並んでいる。この寒い中を、吹きさらしの外庭で並んでいるとは、驚くより外なかつた。

この二列に並んだ人達は、押ししたり、押されたりで大騒ぎである。私はよくその人達を見ると婦人も混じつていて、無理もないと思つた。私は人の少い列の一番後に並んだ。暫くする中に私の後にも七、八名並んだようだ。そして来る者が、カシヤのデブテルは何処だとか、パスポート書き換えは何処だとか聞いてくる。私も何んとなく心細くなつて来た。どうも自分の並んでいる列はパスポート書き換えの列のようだ。私の前に居る蒙古人から、「この列はカシヤのデブテルに登録する列ではないのか」と尋ねると「違ふ向ふの列だ」という。私はへまな事をしてしまつたわいと思ひ、慌て、カシヤのデブテルの列に並ぶのだつた。

明け方前の午前五時か六時頃は、殊に痛い程寒さが身に必みる。穿いている防寒靴は凍つてしまつてカチカチである。

いた通りの初診者の列に並んだ。私はそれでも早い方で、玄関内に入つて並んでいる事が出来たが、大半は玄関から外で待たねばならぬ状態であつた。私は相当待たされた。午前七時頃になつて受付の事務員達が出動して来たので、少しはり合いも出て来て、活気を呈して来た。七時半頃、男子事務員が出て来て、われわれに対して、「今から社会教育を実施するから静粛にして聞くように」と前置きしながら、高台に上つて、三、四枚の原稿を片手に持ちながら読み初めた。その社会教育の内容は、一般常識でもわかるような衛生智識の普及工作であつた。

健康を保つには衛生に注意する。それには身体を清潔にし、常に着物を洗濯し、蚤や虱がいないように気をつける。夏季は蠅の撲滅をはかつて病菌の伝播を防ぐ。食事も暴飲・暴食しない事。皮膚病・伝染病・眼病等の患者の使用する物は共同使用しない事。そうしないと色々の病氣や伝染病にかかるから、注意が肝要であると、細々と読み始めた。終つたのが八時過ぎであつた。

それから受付が開始された。開始されると同時に、押すな押すなの大騒ぎが始まつた。若しこれが病人でもあつたら押しつぶされてしまふ。全く鳥合の衆と言つても過言ではない。病院の受付がこのような状態だから、その他の事も推して知るべしと思ふのだつた。

こうせねば診察の順番券が貰えないと思ふと、全く情け無くなつてしまふ。しかしこれは国家の成り立ちが悪いのか。行政責任者の人物如何にあるのか。それとも罪が一般住民にあるのか。私にはわからないが、何処かに欠陥があるからには相違ない。

私は押されながらも、漸く受け付けにしがみつき、一枚の診察順番カードを手にする事が出来た。私の順番は早い方で十四番であつた。まだ後にどの位あつたかわからないが、五十番位は有つただろう。歯科は割合診察の定数が少いように思われる。これは蒙古人の歯が非常に強いと言う証拠である。それも家畜の肉ばかりでなく、固い軟骨迄食へることに原因もあるであろう。私は暫くそこで立つて見ていた。氣の早い病人達は、毛皮の蒙古服を脱いで更衣に預け、男はシャツ、女はカンタン服という服装で、階段に廊下に、ウロウロする者、立ち話している者、全く色とりどりで、寒いに拘らず、あたかも真夏到来の感をいだかせるのだつた。

冬の真中だから、いくら防寒装置が完備している病院だからと言つても相当寒い。どうしてこうも薄い服装に変えねばならぬか。こうせねば診察を受けられぬのか。全くあきれてものも言えない。国営であるから診察代も治療代もい

らないが、余りにも形式的で強制的なやり方である。もつと親切的な立場から、合理的に考えられないものだろうか。私はほんやり玄関の人ごみの中で、この特異な風景を眺めていた。漸く受付も終つたようだ。私は再び受付口へ行つて、「歯科は何時から診察が始まるのか」と尋ねて見た。中の受付人は、事務的に「何処もみんな十時からです。」

「私の順番は十四番だが何時頃来たら適當か。」

「十時から始まるのだから、適當な時間を見計らつて来たらいだらう」と言うのだつた。私は帰つて朝食のパンでも食べて来て遅くはないだろうと思ひ、そこを出た。

私は朝食を済まして、十時半頃病院に戻つて来た。階段を昇り切つた所更衣室に外套と上衣を預け、シャツ一枚とズボン長靴という服装で、二階の歯科に行つて見た。階段を昇り切つた所の突き当りが、歯科の待合所になつていて、長椅子が一つ置いてある。患者が四、五人いた。

この患者達は、前にも書いたように、男はシャツ、女はカンタン服で寒そうに椅子に腰かけて待つていた。順番を聞くと、私の順番はまだ二、三番後であつた。皆んな順序よく、長椅子に腰掛けて並んでいた。私も椅子に腰かけて、そばの婦人達に治療の状況を聞くと、どの人も歯が痛くて一睡も出来なかつたから、抜いて貰うんだと言つていた。むし歯でもあるのかと聞いて見ると、そうではなく、唯神経が痛んでどうにもならないらしい。實際蒙古人の歯は実に立派である。彼等はむし歯というものを知らないものが多い。蒙古人はオシヤレだから歯を抜いて、そこに金歯を入れて得意になるのだ。

若い男女には、わざわざ立派な歯を削つて、金や銅をはめている者が十人中八、九人はあるだろう。銅を入れてある者は、毎朝磨かないと黒ずんだサビが出て非常に見た処が悪い。それを小布で一生涯懸命磨いているのをよく見受けたものだつた。私はそばの女達が歯を抜くと言ふ事が、そういう処に原因しているのではないかと推察した。

もう一つは後になつて分つたが、歯科医もノルマ制であるから、治療して長い日時をついやすより、簡単に歯を抜いてしまつた方が、ノルマが果たせるという個人主義から、治療するより、抜く方を喜ぶという事である。この両者相まつて、抜歯という事が盛んに行われているようだつた。

私の前の婦人が呼ばれる前に、ソ連婦人が洋装の儘階段を上つて来たかと思つたら、直ぐ歯科のドアをノックして開け、中にいる者と二言三言話したかと思ふと、するりと中に入つてしまつた。

中から治療の終つた蒙古婦人が、カンタン服の儘寒そうにして出て来た。その婦人の言うのには「ソ連婦人が今治療を受けているんだよ。ソ連婦人は順番を待たずに、医師の承諾で直ぐ治療出来るんだから楽だね。」と言いながら寒そうに階段を降りて行つた。

暫くするとソ連婦人が何か楽しい事でもあつたのか、笑いながらドアを押し開けて出て来た。そしてわれわれを見向きもしないで、サツソツとしてハイヒールの音高く階段を降りて行つた。

私はこの二つの様子を見せつけられて、蒙古人が可愛想になつてしまつた。ソ連人から見れば、蒙古人は被征服者だからだ。自分が現在このような場面にぶつかつて、日本もやはり戦敗者だ、きつとこのような状態に置かれていられるうと思つと、何にかしら望郷の念にとられるのだつた。

漸く私の番になり、呼ばれて這入つて行つた。

入口の側に机があつて、一人のソ連医師が診断書に何か盛んに書いている。一見する処二十七、八才の若者らしい。蒙古婦人の看護婦らしい者が三人いて、一人は器具を片付けており、一人は医者のおそばにいる。もう一人は箒を持つている婦人とオシヤベリの最中である。

こちらの看護婦(セストラ)は、日本のように白衣を着ていない。通勤服の上から白いエプロンをかけているだけだ。だから看護婦だか、炊事婦だか、一寸見分けにくい。しかし、ここにいる処を見れば看護婦であろう。

医師は書き終つたと見えて、私に通訳(そばにいた蒙古婦人、年令は二十二、三才位)を通じて、氏名、年令、民族等を聞くと、彼は目を丸くして、「ヤポンスキー? ヤポンスキー?」と連発していた。その度に私はうなずいて見せた。

彼は何にか真剣な顔付きで、

「どうして日本に帰らないのか。今年の春Sと言う日本人が歯の治療に幾日も来た。お前はその人を知っているか。」
 「私は最近刑期を完了して釈放され、社会人となつた。監獄にいる時、歯が折れたりむし歯になつてしまつた。ウランバートル市内で就職する前に、悪い歯を抜くか、治療してしまいたい。現在幾日もかゝると困るから、二、三日中に治して貰い度い。それには抜く方が簡単で良いと思うがどうか。S君とは監獄の中で良い友達だ。彼も貴方に治療して貰い、非常に喜んでゐる。現在監獄にはまだ日本人が三人いる。私と同じように歯が悪くて困つてゐる。」
 ソ連医師は通訳の話をよく聞いていた。そして非常に鄭重に頭を下げながら、うなずいて、好意を現はしているの

がわかるのだつた。

治療台に腰掛けるようにすすめた。治療台は一台おいてあり、それも日本で見受けるものと余り変りはなかつた。只上水道がないので、看護婦がコップに水を汲んで来て、台に置いてくれた。

医師が私の歯を、鏡と試験針を持つて丁寧に調べてくれた。

私は歯根の残つてゐる歯と、むし歯になつてゐる歯を抜いてくれるように頼んだ。又少し位のむし歯は直ぐ治療して貰い度いとも頼んだ。

かの医師は只一言、「よろしい、よく分つた」という如くうなずいていた。

かの医師は抜歯器を持つて来て、奥歯のむし歯にあてがひ、アットという間に抜き取つてしまつた。そしてコップを指さしていた。

私はまずい剤注射でもすると思つていたが、それもしないで抜き取つてしまつたのだから彼の荒療治には一寸肝をつぶされた。

私もこの際と思つて、

「何んでもないから歯根の残つてゐる歯も抜いてくれないか」と言つと、

「一度に抜いても大丈夫か」と尋ねるのだつた。

「大丈夫だ。抜いてくれ。」

かの医師は又抜歯器を取り出して来て、続けざまに二本抜いてくれた。

「まだ二三本抜くのが残つてゐる。二、三日過ぎてから抜こう。今日抜いたのが多いからその傷が治つてからでない駄目だ。」と言ふのだつた。

私はコップを取り上げ口を漱いで見たら、真赤な血である。二、三回洗つてもまだ出血する。出血止めの薬もつけてくれない。医師は入口の机に腰掛けて何にか書き込んでゐるようだ。私も何んだか気抜けしたやうになつていたが、元氣を出して、医師の背中へ、「エスパシバー・エスパシバー」と礼を述べた。医師も振り返つて、うなずいて見送つてくれた。

私は帰る途中、抜いた後が痛い。唾を吐いては、一滴の血液もおかしいという感念にとらわれ、唾をのみ下してゐた。抜いた後舌で探ぐつて見ると、大きな穴が一度に三つも出来てゐた。

日本の医師だつたら、こんな荒療治はしないだろうが、ソ連医師と来たらこんな思ひ切つた事を平気でする。肝玉のふといのにも驚ろくのだった。

かの医師が私に接する態度と、蒙古人に接する態度とは、大分ちがうようだった。それは恐らく、日本は戦争に敗けたとはいえ、彼等が見下げる事の出来ない大きな力があるからである。

中央監獄の病院長だつたソ連人の老医師もわれわれ日本人に対しては、特別の敬意をもつて接してくれた。この言動にくらべて蒙古人は、てんで問題にならぬ程粗雑な取扱ひを受けていた。

これ等を思ひ浮べて、蒙古人は余りにも無智であるが故にと、つくづく可愛想になるのだった。

二、三日して再び出かけて行くと、歯科は休診である。次の日出かけて行くと、かの医師も握手をもつて私を迎えて、「どうだもう傷は治つたか」と尋ねてくれた。

「お蔭様で傷は治つたようだ。固いものも自由に食べられるようになった。」

「それはよかつた。抜いた処に入歯すれば一個所三十トコロゴ位だから、暇が有つたら入れ歯をするがよい。」

「それは有難い。まだ就職もしていないから、就職でも確定したら入れて貰ひに来るから、その時は何分御願ひする。」

「いいとも」と言ひながら、残してあつた歯根とむし歯三本を抜いてくれた。

そしてあとの歯は、今の処何んでもないようだから、治療する必要はないというのだった。

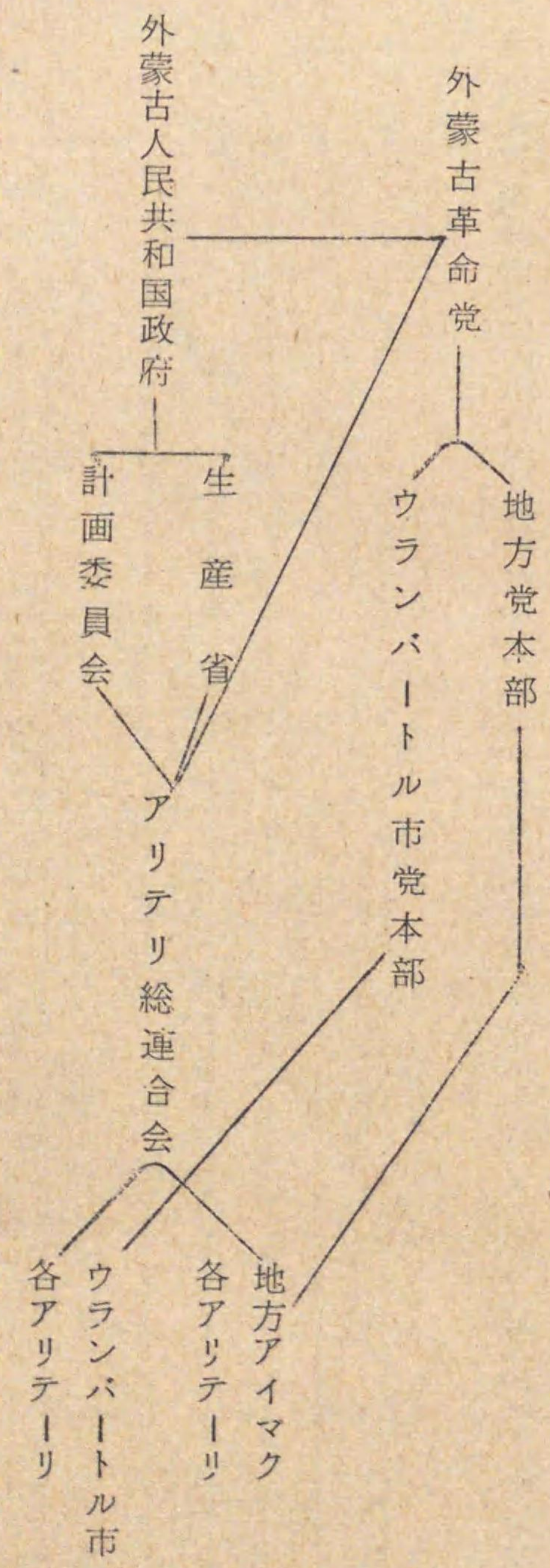
私はこれで歯痛の苦しみからのがれる事が出来た。気持も自然に爽快となつて晴々した。

就職してから入れ歯をと考えていたが、一度就職してしまふと仲々入れ歯をして貰ふ余暇がない。遂に何時か入れ歯をせねばならぬと考へている中に時が過ぎて、ウランバートル市からも、かの医師からも、おさらばせねばならなくなつたのだった。

ニ、 アリテリ（手工業協同組合）
 (1) アリテリの概要

外蒙古におけるアリテリ（手工業協同組合）は、ソ聯からの直輸入であつて、革命後三十有余年経過した今日漸く軌道にのりつゝあるものである。

ウランバートル市には、外蒙古アリテリ総連合会有つて、各アリテリの計画、指導、監督に當つているのである。



総連合会は地方及びウランバートル市の各アリテリを統括している。外蒙古革命党は政府各機関及び総連合会を指導監督する実権を握っている。

ウランバートル市には、第一アリテリから第九アリテリ迄あつて、手工業を主体とした協同組合組織になつて

○ ウランバートル市内のアリテリ

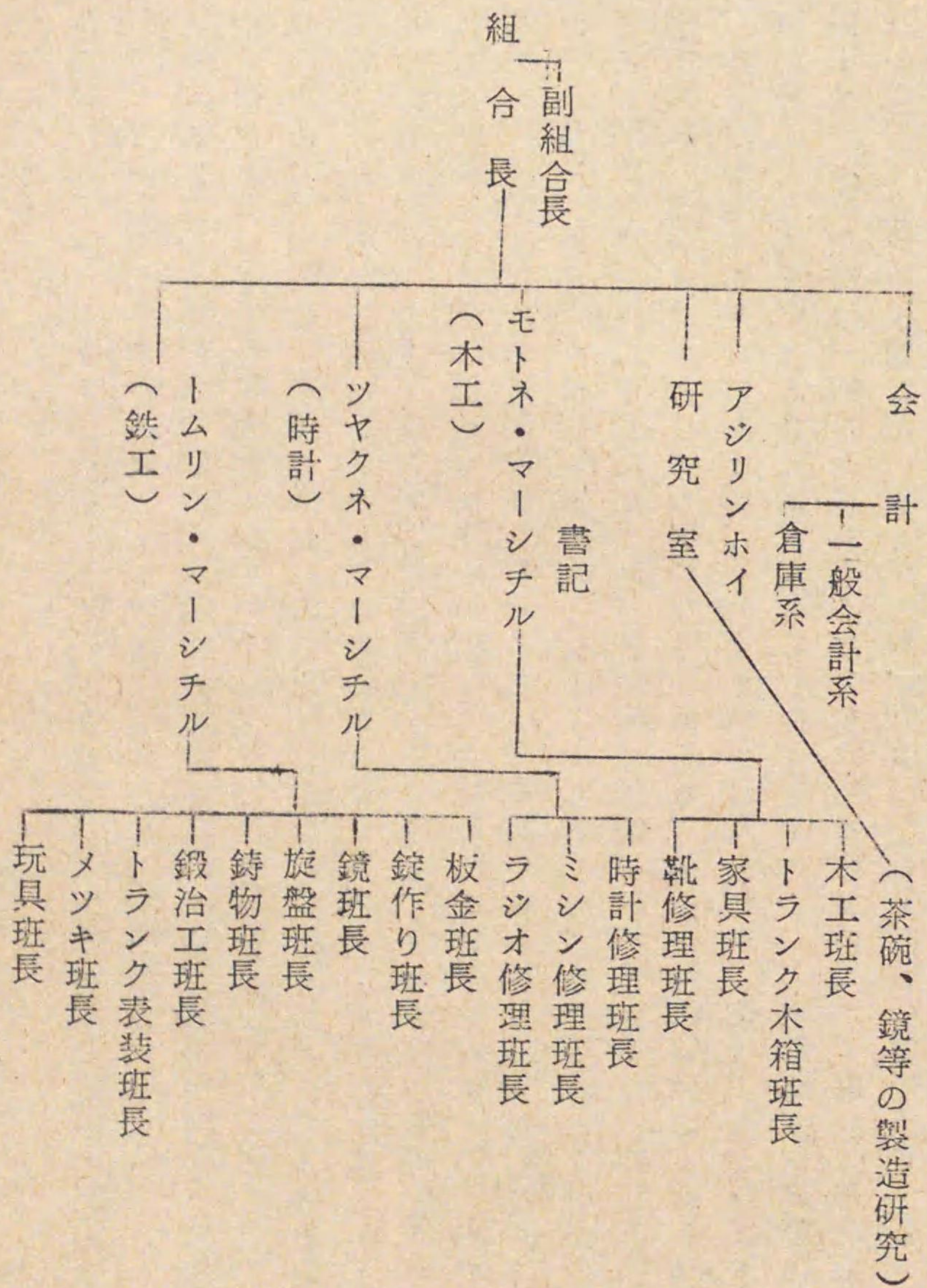
一覧表

名 称	場 所	業 種 の 内 容	労務者数(体)
第一アリテリ	ウランバートル市第二区	被服、フェルト、古衣洗濯、修理、フェルト靴、ジュウタン	二〇〇名内外
第二	ガンドン西南方一籽	木工、蒙古包の骨組、箱、机、樽、器具、靴加工、長靴、短靴、皮帯、その他皮類器具	一五〇名内外
第三	ガンドン南方一籽	靴加工、長靴、短靴、皮帯、その他皮類器具	二五〇名内外
第四	アムゴロン	ミシン加工、鉄工、木工、被服類加工	二〇〇名(?)
第五	中央広場北方二籽	ジュウタン、フェルト、理髪、フェルト靴、靴修理、建築、トピー	一五〇名内外
第六	中共大使館北方一籽	被服類加工、寝具、蒙古服、その他	四〇〇名内外
第七	カンビナート西南方一籽	牛皮のなめし、靴の加工	一二〇名内外
第八	ナライハラ	被服加工、木工、靴工業	一五〇名(?)
第九	中央デパート西方一籽	鉄工、板金、時計修理、オモチヤ、錠、鏡、トランク、木工、鍛冶、靴修理、メツキ	一五〇名内外

組合員の構成は正組合員と準組合員からなつていて、組合の幹部は正組合員である。組合員と副組合長は選挙に依つて任命される、しかし選挙の裏には革命党の推挙と工作が事前に行われて、正組合員の選挙を受けて任命されるのである。

その他の幹部、マーシチル、会計、アジホイ等の長の任命は、組合長の推薦と党の認可がなければ任命されない。正組合員になるには、準組合員の中から勤務成績優秀な者が、正組合員の賛同を得た後、党の認可を受けて正組合員となるのである、準組合員が正組合員になる場合は、財産の一部又は三カ月分の給料を平均割にした一カ月分を納入しなければならない、一カ年間の組合利益金は、正組合員の出資額と勤務年数割に依つて配当を受ける。準組合員は組合長の一存によつて採用され、又退職もする。アリテリリの退職は先づ、組合長、副組合長があり、その下に各マーシチル、アジホイ(材料供給、職員宿舎の監理割当、職員の生活必需物資の配給)、会計(予算決算

倉庫、用度、一般会計)等の幹部がある。
各マーシチルの下は、各種の班に分れているが、班長には準組合員でもなれる。班長の下には労務者がいる、ナミンダラガア(党支部長)は組合二、三個所を兼務して、その指導監督にあたつている。
第九アリテリリの組織



アリテリリの幹部級は殆ど党員であつて、男女の別はないが、殆どが男子で、女子でも二、三人副組合長になつて居る。